連載専門誌

対人援助学マガジン

Vol. 7 No. 4

第28号

対人援助学会

NO. ２８　M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介1	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-016
知的障害者の労働現場	千葉　晃央	017-021
臨床社会学の方法（16）	中村　正	022-032
ケアマネ　あの目　この目	木村　晃子	033-035
街場の就活論（28）	団　遊	036-039
カウンセリングのお作法	中島　弘美	040-045
コミュニティ心理学を考える	藤　信子	046-048
蟷螂の斧 「次の一歩」	団　士郎	049-055
学校臨床の新展開	浦田　雅夫	056-059
不登校経験を持つ若者たちのもう一つのキャリアパス	北村　真也	060-063
幼稚園の現場から（28）	鶴谷　主一	064-070
福祉系対人援助職養成の現場から	西川　友理	071-076
境界あれこれ	河岸　由里子	077-080
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	081-083
対人援助学＆心理学の縦横無尽（20）	サトウタツヤ	084-094
再開　高齢者とのドラマセラピー	尾上　明代	095-100
きもちは言葉をさがしている（27）	水野　スウ	101-107
七日参り	竹中　尚文	108-111
ノーサイド　禍害と被害を超えた論理の構築	中村　周平	112-113
それでも遍照金剛いうことにします	三野　宏治	114-120
男は痛い！	國友　万裕	121-127
ひとこまマンガ	三嶋　あゆみ	128-129
援助職のリカバリー	袴田　洋子	130-132
周旋家日記	乾　明紀	133-134
トランスジェンダーをいきる	牛若　孝治	135-139
役場の対人援助論	岡崎　正明	140-145
新版K式発達検査をめぐって	大谷　多加志	146-148
電脳援助	浅田　英輔	149-154
講演会＆ライブな日々	古川　秀明	155-160
養育里親～もうひとつの家族～	坂口　伊都	161-167
周辺からの記憶　―東日本大震災家族応援プロジェクトー（14）	村本　邦子	168-179
病児保育奮闘記	大石　仁美	180-182

新連載2　おじゃまします―精神科専門訪問看護日誌―	高垣　愉佳	183-185
知的発達障害の家族の日々	大谷　多加志	186-188
対人支援点描	小林　茂	189-191
「あ！萌え」の構造：序論	齋藤　清二	192-197
清武システムズ	しすてむ きよたけ	198-209
SV-羅針盤のない航海（4）	川崎　二三彦	210-214
精神科医のおもうこと	松村　奈奈子	215-219
おくのほそみち	奥野　景子	220-224
心理臨床と多文化共生	ガヴィニオ重利子	225-227
東成区の昭和　思い出ほろほろメモ	柳　たかを	228-235
お坊さんとケアマネさん（書簡型連載）	木村　vs　竹中	236-241
新連載2　介護福祉を巡る断章　2	臼井　正樹	242-246
新連載2　町家合宿　in　京都	山下　桂永子	247-255
再開2　そうだ、猫に聞いてみよう	小池　英梨子	256-276
復活2　先人の知恵	河岸　由里子	277-280
新連載　私の出会った人々	関谷　啓子	281-283
新連載　うたとかたりの対人援助学	鵜野　祐介	284-286
新連載　あぁ結婚	黒田　長宏	287-289
編集後記	編集長＆編集員	290-292

ハチドリの器　11

見野　大介

Mino Daisuke

左上：蒼天釉平盃
右上：幾何学豆皿
　右：蒼天釉組盃
　下：波紋豆皿

ψ ψ ψ ψ ψ ψ ψ

第28号 執筆者 @短信

関谷　啓子　新連載

月一回の読書会を始めて5年ほどになる。今は5人のメンバーだが、この人数がとても心地よい。思った事をおずおずと口にしても瞬時に分かり合える安心感がある。

本の好きな人の集まりであるのは当たり前だが各人が実に面白い。

デザインから絞り、彩色迄全工程を一人で仕上げる着物作家、元新聞記者、ベテラン図書館員、朗読者兼相談員そして私といったメンバー。年代もバラバラなら考え方もまるで違う。唯一の共通点は自分のブレない視点を大切にしている事、程よい距離を保ちつつ相手を尊敬している事、そしてお金に対する価値観がほとんど同じである事だ。

70年生きてやっとこのメンバーにたどり着いたなあ～という安堵感は今の私にとって何物にも換えがたい宝物だ。

最近読んだ本は以下のとおり。

シェルコレクター、うたうとはちいさないのち拾いあげ、イシ、私を離さないで、夕凪の街桜の国、マッチ売の少女、幸福の王子、仏菓を得ず、頭痛肩こり樋口一葉、クリスマスの木、月と六ペンス、罪と罰を読まない、切羽へ、悪童日記、歌集「介護日和」「瀬音」「葉脈」「原形」

全く脈絡の無い選定ではあるが、思いがけなく深い話になったり、作者にファンレターを出したりと十分に楽しんでいる。月に一回、一番贅沢な仲間と一番贅沢な時間を過ごしている。

鵜野祐介　新連載

今年（2017 年）3 月をもって応用研を離れ、文学研究科に戻ることになったので、応用研や対人援助学との縁が薄れていくことに一抹の寂しさを覚えていましたが、本誌への連載によってつながりが保てることになり、とても嬉しいです。

うたやおはなしが持つ、人を支え励まし慰める力や、人と人をつなぐ力について、毎回ひとつのうたまたはおはなしを取り上げて、歌い手や語り手や聞き手、さらには私自身のエピソード（体験談）に基づいて考えてみたいと思っています。読者の皆様の、そのうたやおはなし（今回は「食わず女房」です）にまつわるエピソードがあれば次のアドレスまでぜひお寄せください。

<Email: y-uno@fc.ritsumei.ac.jp>

どうぞよろしくお願いいたします。

黒田　長宏　新連載

はじめまして。ここ9年ばかり病院の薬剤部助手として、メッセンジャー業務という、病院内に入院患者さんごとにセットされた薬のボックスや、ナースステーションごとの書類などを配って行くという仕事をさせてもらってきました。医療関係者の手足と言うような、対人援助業の人の労力を減らすような仕事だと思います。

ですから慎重に行わなければならない面はあるとしても、薬剤師さんや看護師さんから比べれば単純であり最終決定もしません。病院内を歩く歩数は1万から1万5千歩にもなり、その間、本も読めず、まとまった文章を書いたり、ある部分での『勉強』は不可能です。

そんな時、もっと若い頃に方向性を持って勉強していれば、時間の過ごし方が違っていただろうになぁなんて思います。でも、私の作業が無かったら、他の人は大変だろうし、疲れるものな、と思う日々です。病院スタッフは穏和な人が多く、営業を主にしていた時代は長続きしなかったり、個性的に怒りだす人にぶつかったりしていたのに、比較的穏やかに過ごせてきましたから、今の職場に感謝しています。

こうして文章を書かせていただける機会は重要です。よろしくお願いします。

臼井　正樹　連載第二回

2016 年 7 月 26 日の相模原障害者施設殺傷事件の余波はまだ残っていて、その関係で複数のマスコミから取材を受けることになった。その一つに NHK があり 1 月 26 日朝のニュースで、ゼミの様子が紹介された。私は学生へのお茶入れ係として短時間だが登場している。そうした中で、障害者施設における支援の専門性がなかなか向上しない現実を改めて認識させられることがたびたびあった。

『介護福祉を巡る断章』というタイトルでこの連載を始めたばかりだが、書かなければならない内容が膨らんできている。次回は、介護福祉と外国人人材の関係についてより深く考えてみたい。

山下桂永子　連載第二回

前回、10 年続けている町家合宿について、初めて好き放題書かせて頂きました。書いた後になってみなさんのお目に触れることを想像し、あれがだめだったんじゃないか、これは伝わらないんじゃないか、誤解されるんじゃないかと、自意識過剰の猛反省の日々。恥ずかしくて反応が怖くてたまりませんでした。なので、しばらく周囲には、ネットで無料で読めるなんてことは内緒にしていました（団先生に怒られそうです）。ですが、そろそろ次の締め切りを

意識し始めたころに、ある会議でお会いした、顔見知りの同業者の方に、「山下さん、町家合宿やってるんだってね」とお声がけいただき、そう褒められたわけでもないのに、浮かれてしまいました。というわけで、今回も好き放題書かせて頂きました。10年前にこの町家合宿のことを修士論文にまとめていた時、指導していただいた中村先生や村本先生にもよく「君のは論文じゃない」とお叱りをいただきました。今もあまり変わっていません。乱筆乱文お許しください。

尾上明代　再開第一回

しばらくお休みしていたマガジン執筆を再開しました。以前は、「小さな怪獣たちとのドラマセラピー」（児童養護施設でのセッション）と、ドラマセラピーの手法シリーズを連載しましたが、今回からは高齢者施設での活動を発信します。

今年度は、普段の多忙な仕事と親の介護に加えて、マンション理事の仕事があり、いつにも増して目が回る日々でした。マンションに住んでいる以上、何年かに一回はどうしても回ってくるので仕方なく・・引き受けますが、やり始めると利点にも気づかされます。普段は会ったこともない住民の方々と交流できたり、よくもこんなにあるものだという「議題」の数々を話し合う中で、現代社会を反映する問題に多く接し、勉強にもなります。

具体的な仕事としては、私は「イベント・植栽」担当で、これまで草取り、植樹祭、避難訓練、クリスマスイルミネーション点灯式などの企画、ビンゴ大会の司会などをやってきました。避難訓練では、皆さんと一緒に仮説トイレを組み立てたり、消防署から起震車に来てもらい、震度7を初体験！　揺れることがわかっていて心身の準備をしてあっても非常に怖いことを実感しました。ビンゴ大会は、賞品のお菓子やおもちゃなどを目当てに来るお子さん相手のイベントです。「あれ、このマンションにこんなに多くの子どもがいたっけ？！」と思うほど子どもたちがあふれ返り、「マンション外のお友だち」も全部引き受けて、久々に子どもの大エネルギーに対応して元気をもらいました。4月の引き継ぎ後に、「お役御免」となりますが、今後もできることは貢献したいと思っています。

・・・ということで、現在の春休みは、自分自身のメンテナンス期間として、ある程度の仕事をしつつも、充実したリラックス時間を楽しんでいます。見たい映画はたくさんあるし、大好きな食べることにもますます意欲を燃やしています。近年、ちょっと食べ過ぎのきらいがあり、（私は見た目よりずっと大食い。）抑えようとしてみましたが、なかなか難しいので、食べる内容を再考し、甘いものを控えたり、野菜料理を多くいただくようにしています。最近のお薦めは、落合恵子さんのクレヨンハウスが経営する「オーガニックレストラン・広場」（東京・表参道）です。毎週月曜日は「ベジタリアンマンデイ」で、多種の新鮮な有機野菜のお料理が食べ放題。美味しくて動けないほど食べました！

それでは、またしばらく連載におつきあい下さい。よろしくお願い致します。

小池英梨子

2月、突然の不慮の事故で叔母が亡くなった。事故にあってから息を引き取るまでの1週間、お通夜やお葬式の時、大きな悲しみや悔しさが皆を覆いつくしていた。そんな中、11 月に生まれたばかりの赤ちゃん（叔母の孫）が空気を読まずに、大きな声で泣いたり笑ったりしてくれることで、場の空気が和んだ。どんなに涙を流していても、みんな赤ちゃんをのぞき込む顔には笑顔を作る。ただただ一生懸命生きている赤ちゃんに救われていた。

三野宏治

喉のポリープの摘出手術を受けた。7-8ミリの出来物をとるために2泊3日の入院をしたうえ、全身麻酔での手術という万全の態勢で臨んだ。万全の態勢は万全の態勢であり問題も少ないと考えていたが、実際はちがった。

2 泊の入院ではあまり眠れなかった。万全を期すため看護師さんが数時間ごとに巡回に来る。そして懐中電灯の光で目を覚ますのだが、万全を期すため「寝ています」というふりをする必要があった。術前は絶食・絶水であったためとてもお腹が空く。術後、安静が解けた後すぐにスナック菓子と杏仁豆腐と春雨ヌードルを問題なくたべた。ただ、病院食は万全を期すためきざみ食とおかゆであった。切ったところは痛みはあまりなかったが、手術時に施された酸素チューブが鼻の中や食道を気づ付けたようでそちらが痛く血がたまりつらかった。

万全を期すには様々な我慢が必要であることを知った手術だった。

松村奈奈子

今回は旅の話。今年の冬は、夫と3回目のポーランドの旅に。

旅では食事はとっても大切な楽しみ。ポーランドは隣国ドイツに似たお料理が多いですが、全体にドイツよりおいしくってお安いのも、ポーランドにハマっている理由のひとつです。もちろん、隣国ロシアやウクライナと同様、ボルシチも定番です。

最近は“トリップアドバイザー”のおかげで、“地球の歩き方”にも載らない小さな街を訪ねても、地元で美味しいお店に行きつく事ができます。地元の人に交じっての地元飯は最高です。

スマホのおかげで、海外旅行は飛躍的に楽になりました。見知らぬ街も、迷うことが少なくなりました。京都のタクシー運転手さんから“外国語を話せなくてもスマホ画面で指示されるので、どこに行けばいいかすぐわかるし、助かるわ”とよく聞きます。

ただ、京都の真ん中に住んでいるとよく海外からの旅人に道を聞かれます。“ニシキマーケット（錦市場）はどこか？”“キヨミズテンプル（清水寺）はこの道であってる？と聞かれて答えると、いつもとっても感謝されるので嬉しくなります。

なので私も、海外では困ったらいろんな人に聞いてみる事にしています。旅での

人との触れ合いはドキドキすることもあるけど、やっぱりあった方がいいかなって思います。

で、今回の旅の１番のお気に入りのメニューを紹介。

肉好きの私達はどのレストランに行っても牛生肉のタルタルを注文。日本ではなかなか食べられないので、毎日のように店を変えて食べていました。レストランで700円ほど。美味しい！

ガヴィニオ重利子

今月から、地元大学が提供する精神医療の訓練研修に参加し始めました。周産期と乳幼児のメンタルヘルスについて、アセスメント方法や発達理論など、多岐にわたる研修が2年間の予定で提供されます。講師には、医師だけでなく心理士や助産師、ソーシャルワーカーなども名を連ね、受講者もまた同様に多岐にわたっています。

日本では、このように異職種が共通の臨床テーマの元に集まる訓練研修をあまり聞いたことがなかったのですが。ディスカッションも事例検討も、それぞれの角度からの発言が聞けて、大変充実しています。最終的には論文を仕上げ、審査発表をするという課程があり、それには少々気が重いのですが。このような貴重な環境と機会から十分な学びを得ることができるよう 、まずはこれまた多岐にわたりずらりと課された文献に、恐る恐るあたってみようと思っている今日この頃です。

奥野景子

昨年末に大学時代のゼミの集まりが初めて開催され、それに参加してきた。今まで同窓会的なものに参加したことがない私だったが、なかなか会えなかった同期が何を考えて仕事をしているのかを知りたくて、行ってみたいと思い参加した。始めは人見知り全開だったものの、エンジンがかかると止まらない。ゼミの先生と同期の子と三人で、色々な話題で盛り上がった。周りにいた現役生は、きょとんとした顔をしていたが、そんなのお構いなしで話し続けた。

そして年明け、大学時代から仲良しの子のところに久々に遊びに行った。これまで、仕事に関する深い話をしたことがあまりなかったが、その日は、互いが今までにやってきたことや疑問などに関する話題で盛り上がった。

今までは、あまりこのようなことは起きなかった。自分がやっていることや考えていることは、近年のリハビリテーションの王道からは少し外れているように思い、それを話すことに抵抗があったからだと思う。今でも、その抵抗は消えていない。でも、「やっぱり大事やと思うもん！！」と、少し自信を持てるようになってきたのだと思う。そして、話してみるとわかろうとしてくれる人や通じる部分がある人もいることがわかったことも、私に自信を与えてくれている。まだまだと思う一方で、これからと思える年末年始になって良かったと思う。2017年になってそれなりに時間が経ったが、今年は、なんだかわくわくする一年になりそうな気がしている。

柳　たかを

マンガ「東成区の昭和・ホイラン」の第3回 目を寄稿させていただきました。この作品は、戦後間もない昭和20年代の大阪 市東成区が舞台で、8歳上の次兄の思い出話を下敷きにしています。

作中、夕焼け空の彼方から飛来するオニヤンマ（トンボ）の群れをB29にたとえて叫ぶシーンがありますが、次兄は2歳のときアメリカ軍のB29による大阪空襲を経験しています。

私は昭和24年生まれで、幼少の記憶があるの は4歳頃からです。当時の大阪市内はあちこちに野原の空き地があ りましたが、あれは空襲で木造長屋が焼けてしまったあとだったのでしょう。昭和40年代の高度成長前で小さな用水路や溜池も多く、流れる水 の水質も良くザリガニやメダカの棲家でした。初夏、近所の児童公園沿いの小川で蛍光色の光 を点滅させる蛍の群れを追いかけた記憶があります。

まだテレビはない時代で、当時の遊びは自然(昆虫や魚など)を 相手にしたものが多く、このマンガで描いたトンボを捕る遊びもトンボの習性を学び、より良い道具を自作し、捕獲方法も研究する ことで多く捕れる結果に結びつく楽しさがありました。

学校から帰ったあと、自由に遊べる時間が豊富 にあった時代の子供たちの話です。

齋藤　清二

嵐のような修論指導が終わって、春休みに入り、ほっと一息ということころである。昨年と今年の 2 年間修論指導に携わってみて、本マガジンで迷走しながらも私が連載を試みているテーマと、一部の人の修論のテーマとの間に、浅からぬ共通点があるのではないかということに気が付いた。つまりそれは、一言で言えば、「人間にとって、本当に大切だと感じられるものは、本当に大切なものなのではないか」というトートロジーである。

昨年指導させてもらった、「サブカルチャーを趣味にもつ娘」についての研究や、今年の「複数のアカウントを使いこなすツイッタラー」についての研究、さらには「ネールアートの持つ力」についての研究などは、そのような問題意識に始まり、「美しい」研究成果を導き出すことに成功しているように思われる。そのような研究からもヒントをもらいつつ、さらに連載を続けて行きたい（同時に学術研究を邪魔しないように気をつけます）。

石田佳子

今回は、スリランカへの旅行と日本への一時帰国が重なり、パソコンを使い難い環境に居たため、投稿をお休みさせていただきました。

スリランカは自然が豊かに残るとても美しい国です。その代わりに電気は貴重品のようで、都会に居ても夜の帳が下りる頃

には街全体が暗闇に包まれて行きます。街灯が少ないため夜の道は歩き難く、コンビニも自動販売機もない上早々に閉まる店が多いので不便でした。

しかし、普段「ある」のが当たり前で気にも留めなかったモノやことが、「ない」環境に放り込まれるのは、貴重な経験になると思います。（スリランカには一応ネットはありましたが）例えばスマホもネットもTV もラジオも…「ない」所では、風の音に耳をすませたり、風景にただ見入ったり、人や動植物と交流する時間が増えるでしょう。

それとは逆に、日本に帰って来ると、（母国語のせいもあり）情報量が爆発的に増えること、物事が迅速に的確に進むこと、人々が携帯ばかり見ていることなどに、最初は戸惑いますが直ぐに慣れて行きます。わざわざ自分で考えたり表現したりしなくとも、「誰か」が作り出した音や映像や言葉やイメージや意見が溢れるほどありますし、「誰か」が整えたシステムに沿うように動いていれば問題なく過ごせるのです。便利な生活は快適で手放し難いものですが、その代わりにいつの間にか受身的になり、主体的、自覚的に何かをする姿勢が薄まって行く危険があるのかもしれません。

しすてむ♪きよたけ

今回から、「清武システムズ」をクリックしていただくと、「SM クラブの受付」ではなく、「清シス・アピール」に変わっております！

いやーアピールって言ってもですね、何屋か決めて無いので、アピールのしようが無い・・・。ということで、東京の家、シェアハウスの住人に僕について、話してもらいました。なんか僕、いい人に恵まれているって自覚をしました！

どうやら、面白い出会いや会話が生まれ、何かよかったねーってなったみたい。そんな機能とか、欲してませんか？結構、僕いい人っすヨ！今最大限にできること。それは、自画自賛。

小林茂

年末、恒例の行事で北海道好きな親類が遊びに来るので、北海道案内を兼ねて旅行に同行します。しかし、案内といっても私自身が行ったことのないところの旅行計画を立て車に乗せて移動するというもので、厳密には案内になっていない。今回は、その旅行で周った 3 カ所の温泉を紹介します（入った温泉は他にもありますが…）。

くっちゃん温泉（ホテルようてい）…富士山のような羊蹄山が見渡せる源泉かけ流しの天然温泉。泉質は、ナトリウム・炭酸水素塩化物泉で透明なお湯です。アルカリ性の泉質なのかぬめりがあり、わずかに硫黄の香りもします。炭酸水素泉ということで泡の粒粒がつくかと思うのですが、微妙な感じ。宿についたのが遅い時間だったので羊蹄山は見えず、翌朝も雪雲に覆われ、雪の降る中、露天風呂を満喫してきました。

岬の湯しゃこたん…日帰り温泉のみ。積丹半島の岬近くにある温泉で、丘の上にあり、露天風呂から日本海をパノラマに一望できる温泉です。泉質は、ナトリウム－塩化物・炭酸水素塩泉ということで、くっちゃん温泉と同じ泉質？かというと、こちらはほとんど炭酸がつかない。海が直下にあるからという理由もないが、ずいぶん“しょっぱい”。アルカリ性で、中性高張性高温泉ということで、ぬめりがある泉質です。施設はきれいで、広々とした海の遠方を見ながら解放感いっぱいで、なんだか元気が出る温泉です。

盃温泉（潮香荘）…ニセコ・積丹・小樽海岸国定公園にある温泉。盃温泉郷のなかでは唯一海に面した温泉です。泉質は、石膏泉ということですが、見た目は無色透明の湯です。露天風呂から盃漁港を見下ろし、日本海の風景を一望できます。お風呂はきれいですが、宿泊施設はひなびた感じで昔ながらの温泉宿といったところです。

こんな感じで機会を見て、日ごろの支援の疲れを源泉かけ流しのお湯とともに流すようにしています。

水野スウ

「紅茶の時間」内の草かふぇで、「この世界の片隅に」の映画を見た人たちと感想おしゃべり会をしました。誰かと語りたい、って気持ちになる映画の時は、よくこんな場を作ります。

私自身、この映画好きで3回も見たけれど、見たあといつも少しもやっとするんです。すずさんの生き方にも少し、それ以上に、見た人たちの反応にもっともやもやしてるのかな、私。

すずさんの、けなげでひたむきなとこ、毎日こまやかに工夫して、家族になった人たちと必死に生きようとしてるとこ、暮らしをていねいにていねいに。そこ、いいなあ、大事だなあ、と思う一方で、すずさん、いとしい、めっちゃ切ない！泣いた～！戦争の場面がでてこないのがよかった、で終わらせてるみたいな感想もいっぱい見聞きして、その度、もやもやがふくらんでいたのかもしれません。

集まった人たちと、心に残った場面やせりふをいっぱい出しあいました。この時間がいつも好き。いくつものシーンがあざやかに目に浮かびます。同じもの見ても、感じるとこがこんなにも違う、それがおもしろい。

私のそれは、「おまえだけはふつうでおってくれ、まともでおってくれ」という哲さんのせりふ。海軍にはいり、戦うこともした哲さんは、自分の生きてる世界がまともじゃないと、もう知ってしまったんだと感じる場面です。

もう一つは、8月15日の玉音放送の後、すずさんが畑で大泣きしながら、「ぼーっとした、何も知らんうちのまんま死にたかったなあ」というところ。

あの時代、すずさんはあのように生きるしかなかった、大きな力に抗うことはできなかった。その通りだったとしても、今の私たちがこのせりふですますわけにはいかない、そのことびんびん感じながら見てたんだよ、とこの日のおしゃべり会で言えて、だいぶんすっきりしました。

社会とか政治とか世界とか、そんなめんどくさいこと、何も知りたくないし、関係なく

生きていたいよ。たとえそう思っても、それは無理、関係ない人はいない、ってすずさんが教えてくれてて、それを映画で見ている、入れ子状態の私たちなんだってことです。

今、この世界がどんどんまともでない方向につっこんでいってるから、余計にそう思えたのかもしれません。そういうことを感じさせ、考えさせてくれる、という意味でもあらためて、この映画、よかったです。

高垣愉佳

立命館で行われる研究会へと向かう道で、ふと梅の花の香りがしました。その瞬間、まだまだ寒いけれど、そうかもう春が来てるのだなと、春の訪れを感じました。見ると、道沿いの家の前のプランターに小さな梅の花が咲いていました。日本は地理的な条件で、四季がある場所です。が、気候的に四季があることと、日常生活で季節を感じる事がイコールではないという事を姫路に転居して気づきました。四季折々の花、梅も桜も沈丁花もツツジもアジサイも金木犀も銀杏も姫路ではほとんど見かけません。節分祭も地蔵盆も除夜の鐘も無く、駅前にはショッピングモールのテーマソングが、壊れたカセットテープのように年中エンドレスに流れています。寒さと暑さは感じますが、こういう場所に居ると季節を感じるということはありません。自然を壊して作った現代の街において、季節というのは、草花や行事を通じて、意識して日常生活に取り入れて初めて感じられるものになっているのだと気づきました。

中島弘美

対人援助学会研究会より

教育研究委員の中島です。これまでの研究会回数は 19 回、設立準備活動時期を含めると通算 43 回です。研究会の準備は、委員長千葉さんと事務局・立命館の山口さんと三人が担当し、開催については、講師をはじめ多くの方にご協力をいただいています。

このたび、会場の手配や当日の会場整備、配布資料づくり等に動いていただいた山口良子さんが、2016 年度末で立命館を退任されることになりました。ゲストスピーカーが話しやすいようなセッティングや、参加者の方にとって快適な環境をつくることに当初よりご尽力いただき、ありがとうございます。この場をお借りしてお礼申し上げます。山口さんは事務局を離れられますが、研究会はこれからも継続し、さらに磨きをかけていきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。

藤信子

ここしばらく「平家物語」を読んでいる。これは河出書房新社が出している，池澤夏樹＝個人編集の日本文学全集の中の1冊。古川日出男による現代語訳がリズムがよく読みやすい（少なくとも私には）。本屋で見かけて全集の装丁が明るくきれいで手にとってみたところ、面白そうだったので買うことにした．結構重い本でその時は，他に用もあり，持ち歩くのもできにくく、アマゾンで買ってしまった（ごめんなさい，本屋さん）。このごろ忙しくて本屋でぼんや見て回ることをしなくなったけれど、やっぱり本屋は行くべきだと思った。新しい出会いがあったし・・。こういう本は夜寝るときにしか読めないので、900 ページ近くあるのをまだ 200 ページしか読んでいないけれど、楽しみながら読んでいる。他所で泊まる時には持って行けないのが短所。でも平家物語を読んでいると、なんとなく今の日本も「末世だな」と思う。

中村周平

先日、京都府が行っている観光 UD(ユニバーサルデザイン)のモニタリングツアーに参加してきました。行き先は京丹後。普段からあまり外出することもなく、観光目的で出かけることは、ほぼほぼ無い生活を送っている私にとって「ツアー」に参加することは何か新鮮な感じがしました。京都に 4 台しかないリフト付きの観光バスに乗っていざ京丹後巡りへ・・・。赤れんがパークや、ふるるファーム(地産地消の食堂)いった舞鶴の観光地を周っていきました。個人的には、引揚げ記念館が非常に興味深かったです。戦後、シベリア抑留されていた方々を昭和 31 年まで受け入れていた港が舞鶴。京都にいながら全く知らない事実でした。そんな新しい学びもあったモニタリングツアー。たまには、ゆっくり過ごすのも良いのかな。

浅田英輔

今年の冬はほぼ東京で過ごしました。雪の心配がないうえ、天気がよい日が多いんですね。研修の中では、憲法とか行政法とか超高齢化とか人口減少とか地方創生とかそういう勉強をしています。なぜ第三次ベビーブームはこなかったのか。なぜ人は子どもを産まなくなったのか。結婚しなくなったのか。バブルがはじけたからなのか。不況だからなのか。得することがないからなのか。不安が高いからなのか。どれも当てはまるのだろうけれど、直接的に「子どもを育てたくなる政策」なんてのはないし、そもそも人口を今後も増やすことがいいことだとも言い難い。もうちょっとだけ、苦しい人が減った方がいいなぁとは思う。

中村正

最近の研修や講演の依頼先は多様になってきた。しかし、単発の、知識ベースの講座はお断りしている。楽しい研修会となるように考案し、提案しているのはその場の人たちが主体的に参加・参画できるような仕組みの構築や学びの動機づけに資することができるようなカタチである。持続的な自主的企画集団として自走できるようになるお手伝いをすることにしている。内容は理論的な事例検討となるように工夫している。一例として大阪府の介護支援課と連携した取り組みがある。家族療法・家族システムのアプローチをもとにして家族のライフストーリーに根ざし、社会的視野を組み込み、さらに男性性ジェンダー論の理解をとおして父親、息子、夫をきちんと位置づけること、それとの相関で、母性や女性性を理解すること、事例を客観視するために理論や概念をとおして社会構造を想定すること等に関する研修を3回程度受けてもらい、その後は二ヶ月に

一度集まり、高齢者の虐待を手がかりにした事例検討を実施するというカタチにした。登録しているケアマネジャーさんは 50 人程となっている。毎回、大阪梅田の立命館大学キャンパスで開催しているが、事例を虐待のみに焦点化せずにシステムとしてみることができること、業務とはまた異なる人たちと意見交換するので視野が拡大できること等を重視している。議論する姿は楽しそうだ。府内一円から集まる週末の梅田の夜を楽しみにしている。それにつきあう私もとても満足だ。よく似たカタチの勉強会が、出所者支援のグループ、保健所で活動する家族支援グループ、中学生・高校生教育にかかわる警察グループ、子ども虐待にかかわるグループ等とできてきた。

牛若孝治

白い杖を見かけたら、、、、、、

京都市内で毎年行われている「白杖安全デー」。私を含め、視覚に障碍のある人たちが、普段の日常生活において何に困っているかをシュプレヒコールしながら、京都市内をパレードしている。昨年50回目を迎えたこのパレード。時代とともにシュプレヒコールの文言も変わっていく。だが、そうしても替わらないシュプレヒコールの文言がある。それは、「白い杖を見かけたら声を掛けよう」だ。しかも、この文言が、毎年シュプレヒコールの1番目に登場する。はっきりいって私は、この文言が大嫌いである。これではまるで、「白杖を持っている人たちは可愛そうな人たちだから、お情けで声を掛けてあげよう」みたいな雰囲気に聴こえてならないからだ。

実際にそうだ。あるとき私は、声を掛けてきた人に聞いてみた。「あなたはなぜ私に声を掛けてきたのですか？」。相手はとても言いにくそうな様子。たまりかねた私はまたしても聞いてみる。「あなたは私が白杖を持っているから声を掛けたのですか？」。すると相手はしぶしぶながら「はい」と答える。そこで私は言う。「無理に声を掛ける必要ありませんよ。それよりもね、白杖を持っていても持っていなくても、「おはよう」・「こんにちは」・「こんばんは」など、気軽に挨拶できる社会を作っていかなあかんでしょう」。

袴田洋子

締め切りをまたもや数日過ぎてしまって、すみません。今日は、2 月 27 日。何のために書いているのか、まったくわからないのですが、こんなことを書く援助職が一人くらいいてもいいか、と思い、書いています。

団遊

アソブロックで、2017 年 4 月に入社する新卒学生を募るために続けていた「コンビ採用」。二人一組でエントリーしてもらい、二人一組に内定を出すという取り組みが、あちこちのメディアで取り上げられ、先日は日テレ系のバラエティ番組に取り上げられました。メイプル超合金というコンビで活躍する芸人のカズレーザーさんが、番組内でアソブロックをプレゼンしてくれていました。真面目に考えた結果の採用手法ですが、その真面目さの中身を伝えたところで、面白くはないなと思っていたら、ちゃんと「オチ」に使ってくれていて、その扱われ方がアソブロックらしくて嬉しかったです。こういう出来事があると、社会の注目も上がり、問い合わせなどが来たりします。アソブロック的採用ブランディング、ということになるのですが、今回本稿では「採用ブランディング」について書きました。

大石仁美

中井貴一　扮する雲霧仁左衛門　を見ています。私はこの手のドラマが好きで、よく見ます。御頭のありよう、物事を見極める冷静さ、知性と判断力、そしてなによりも、信念に基づく義と情の深さです。

盗賊と火付盗賊改めのやりとりも面白いのですが、どちらの御頭も魅力的。リーダーの風格とはこういうものかと、ほれぼれしてしまいます。そして、中井貴一も良い役者になったなぁとしみじみ思うのです。

このところのアメリカ大統領をめぐる状況はいろいろなことを教えてくれます。その器でないものが、場違いの場所におさまると、とんでもないことになるのですね。

大統領令をどんどん出して、サインしている姿がテレビに映し出されると、これはもう滑稽以外のなにものでもありません。でも、笑えないところが怖い。人類全体に及ぼす影響が、あまりにも大きいからです。

「今の時代は、あり得ないと思っていたことが、ある日、本当に起きてしまうという危険を常にもっている」そのことを心しておかなければいけないと思いました。

インターネット上で、あっという間に情報拡散する社会にあって、雲霧仁左衛門タイプのリーダーを求めることは、もはや時代錯誤なのでしょうか。

村本邦子

週1ペースの映画を自分に課している。結構いい感じだ。たとえばこんなふうに、自分自身の秩序を保持していくことができれば、組織で働くこともできるかもしれない。最近観た中で良かったのは、「エリザのために」「スノーデン」「未来を花束にして」。いずれも自由への闘争か。

國友万裕

先日、男性グループに関わっていた頃に、東京の方のグループで活動していた人と Facebook の友達になりました。彼とはもう 15 年以上会っていませんでした。彼は物書きとして活躍しています。

17 年くらい前、東京の彼の行きつけの飲み屋さんで2時間くらいたっぷり話して、その後ラーメンを食べに行ったことを思い出します。僕はあの当時男の友人を求めていて、だからこそグループに参加したのだけども、僕とは重ならない人ばかりでした。彼との東京での語らいが最も良い思い出です。

その男性グループは、中村正さんも参加なさっていたのですが、僕は2年間べったり参加しました。しかし、最終的には上手くいかなくなって、グループをやめた僕は、もう彼とも再びつながることはないだろうと思っていました。ところが、最近になって、彼が Facebook を始めたので、突然、「友達かも？」という表示が出ました。僕はグループと相容れなかったので、彼は僕のことを批判の目で見ていると思っていましたが、友達リクエストを送るとすぐに承認してくれました。

それからやり取りが始まりました。Facebook や SNS は嫌いだという人もいますが、僕は Facebook で相当多くの人と再会したり、繋がったりできました。今友達は 220 人。もうほとんど会うこともない人の方が多いのですが、繋がっておくといつか会える日が来たりします。新しい友情のツールです。

人間の人生って本当にわからない。そういえば、正さんとも最初は親しいわけではなくて、親しくなったのはこの 5 年くらい。その一方でもう一生修復することができない関係になってしまった人も何人かいます。

人間関係って面白い。良いと思っていた出会いに憎しみの残る別れが待っていたり、大して親しくならないだろうと思っていた人が重要な人になっていったり、本当にドラマです。一つ一つの出会いを大切に生きていきましょう。これからの人生、誰が僕の人生にやってくるのでしょうか。

北村真也

認定フリースクール「学びの森」代表。
（manabinomori.co.jp）

みなさんに長年にわたり親しんでいただいた「アウラ」「知誠館」の名を、2017 年より「学びの森」に変更しました。「学校」でも「塾」でもない「学びの森」という場に繰り広げられる変容のドラマを是非感じ取っていただければ幸いです。

古川秀明

シンガーソングカウンセラー

今回、講演会とライブは単に趣味や自己表現ではなく、何かの役割があるのだと信じることができたような意味深いものでした。そのことに気付けたのは、この対人援助学マガジンの原稿を書いたからだと思います。今回も書いてよかったと思いました。

西川友理

京都西山短期大学で講師をしつつ、色々と学生支援に関わる事をさせていただいています。

最近何かで「『～すべきだ』というのは自分の意見ではない」という一文を見て深く共感しました。先日、40 歳になりまして、やっとなんとなく、『～すべき』から距離を置ける時が時々出来てきました。と同時に、何を書くにしても、何を語るにしても、「実感のある言葉」「手触りのある言葉」を使いたいと思うようになりつつあります。

社会性のある言葉のお作法を学ぶという意味では、借り物の言葉をつかうことは無駄ではなかったと思うのです。ただ、思いを言葉にする方法を学ぶ機会は、幼いころや若いころに、もうちょっとあってもよかったかな。どうして自分の言葉の土壌を自ら育てたわけでもない花で埋め尽くすようなことをして、そのほうがいいなんて思っていたのでしょうか。たまに生えてきた雑草もわいて出たみみずもいじめてしまうような、まずしい畑を作っていたのでしょうか。このマガジンに書かせていただくことで、なんとなく、自分の言葉の耕し方が分かってきた気がします（7 年かけて、やっと！）

今からでも遅くはないと信じて、もうちょっと健康で素直な畑を作りたいと思っています。

坂口伊都

2 月に熊本の里親支援をしている NPO 法人優里の会にお招きいただいて「養育里親になって見えてきたこと」という内容で話をしてきました。優里の会の T さんとは、京都国際社会福祉センターで、団先生と早樫先生が担当している「対人援助職のための自己覚知―原家族と向き合う」でご一緒させていただいた時のご縁です。時間をかけて受講者一人ひとりの原家族ととことん向き合う形で、3 日間の濃い時間を共にしました。その時から T さんとは似た部分もあって、お互いに親しみを感じていたようです。何年かして、また再会できて素直に嬉しかったです。団先生には不思議な魔力があるようで、いろいろな人の繋がりを自分がいない場所でやってのけてしまうようです。きっと夜な夜な呪文を唱えているのでしょう（笑）

冗談はさて置き、人の関係とは不思議なもので自然に関係が続く縁があるのかなと思います。同性でも異性でもそれは変わらないような気がします。何気ない短い会話の中でも心地よさを感じられるといいですよね。人の縁の面白さを噛みしめました。

河岸由里子（臨床心理士）

北海道　かうんせりんぐるうむ　かかし主宰

段々年齢が上がってきて、後継者を育てなければと思う。自分の仕事を譲っていかなければとも考えている。今年度で二つの仕事を後輩に譲ろうと思ったら、結局一つしか譲れなかった。でもまあ一つ減ったと思ったら、仕事が二つ増えた。

マネージメントができていないと娘に注意され、我ながら情けないと反省。でももう受けてしまったものは断れない。今年度よりずっと忙しくなりそうだが、暇を持て余すより良いだろうと自分で自分を慰める。体もあちこちガタが出始めたし、そうそうユンケルの世話になってばかりもいられない。健康第一。さてさて次年度はどんな年になるのか？

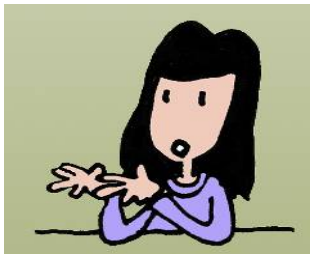
岡崎正明

先日「子ども落語会」というイベントに参加した。とはいっても、実際に舞台に立ったのは小１のうちのムスコである。去年偶然見つけた「落語塾」に月１で通い始め、初の本番を迎えたのだ。80人くらいは入っていたと思うが、本人は元々の性格か、

まだそういう感覚が育っていないだけなのか、まったく緊張しなかったとのこと。まあ才能があるかどうかはともかく、楽しめたのとちょっとした成功体験になったのは何よりだった。

ところでこの落語塾。入会から今日にいたるまで、運営が実にいい加減なのである。批判しているのではない。じつに「良い加減」なのだ。

問い合わせの段階から「いつでもどうぞー。見学で大丈夫ですよ」と、来るもの拒まず。で、行ったら「じゃあ今日は高座名（落語家としての名前）と演目を決めるよー」っていきなりで(笑)



入会金も会費も無し。高座名で呼び合うから子どもの本名すら聞かれない。唯一親の名前と電話番号を書いたくらいだ。会のルールを説明されたことも無い。親の方も後ろで子どもの練習を見守る程度で、何か特別お世話をするでもない。ただ古参の保護者の中でやれる人が自然に、世話人の方をフォローする程度。

先日の本番も、会場設営やら、ビラやパンフ・小道具の準備など、ほとんど世話人と師匠（落語を教える人。もちろんアマチュア）だけでやっていた。が、そこはやはりプロではないため、連絡ミスとかいろんなトラブルが起こる。それも結構な頻度(笑)。けど誰も責めない。「あの人に任せきりにしちゃダメだよ。ハッハッハ」で終わり。かといって仲間内だけの仲良しグループかと思えば、そんなに密着度も無い。去る者は追わない。基本「やりたい人がやればいい」というスタイルなのだ。

これがスポーツの集まりだったらこうはいかないかもなあ。まあなんにせよ、好きなことをやる集団ってこんな雰囲気でありたいなあと思う。

buimen0412@yahoo.co.jp

竹中尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

お寺の本堂で英会話教室をしている。対象は 5 歳から 12 歳の子供たちである。教えるのはイングランド出身の人である。彼はイギリスの大学で心理学を勉強したそうだが、今はインターネットでイギリスの大学院の英語教教育学を勉強している。彼は在日 10 年余りだが、これまで企業内で英語を教えてきた。子供に教えはじめて、英語教育学の勉強を始めた。キッズパワーが彼の生き方に変化をもたらせたのかもしれない。◆なぜ本堂で英会話かというと、子供のお寺離れである。かつてはお寺の境内は子供の遊び場だった。今、お寺から子供の遊び声が聞こえない。何とかしようと、言うことになった。老人たちは、自分たちはお寺でお経を習ったものだ、と言った。今、お経を教えますと言って、子供は来ない。そこで英会話教室と言うことになった。どうせなら、子供たちに本当の英語を聞かせてやりたいと、アルバイト教師を公募して、彼になった。◆企画運営は、専光寺キッズサンガという団体である。専光寺の門徒さんにボランティア活動を頼んだ。会長と住職でアルバイト教師の面接もした。キッズサンガの役員が雇用契約書を作ってくれた。みんなで知恵を出し合って生徒募集をして、子供たちがお寺に来るようになった。先生の給料が払えればいいというので月謝は破格の安さだ。会長と会計は、いつも赤字だと悩んでいる。40 代の多忙世代の人たちが、仕事の合間にボランティアで頑張ってくれる。◆税務署から、専光寺キッズサンガはどう言う団体であるかを尋ねられた。上記のような説明をした。理解をしてもらえたが、困ったと言う。宗教法人が営利活動をしているが、利益が出ていない。本来、宗教法人はその宗教行為に関しては非課税である。しかし、宗教法人であっても営利事業をすると課税対象であるし、普通の法人と同じことになる。営利を目的としない営利活動をしていることになって、非常にまれなケースだと言う。想定をしていなかったケースだそうだ。◆これからの社会の中で、お寺はどのように存続していくのだろう。お寺の将来の不安定さに対して、経済的基盤の確立を求めることが多い。その意味で、お寺はサイドビジネスと言うのか経営多角化に向かうようだ。兼業の宗教者も多い。サラリーマン兼職の坊さんなど珍しくない。兼職の神職も兼職の牧師もいる。その中で、もうけない英会話教室である。私は専光寺の英会話教室を次世代への投資だと思っている。次の時代にお寺を支えてくれる人たちを育てている。

サトウタツヤ

久しぶりに原稿出せました。本当なら今年の2月はデンマーク、3月はブラジルに行けたのに、、、と思いながら日本でバタバタしています。

川﨑二三彦

サイドストーリー

かつて児童相談所でスーパーバイザーの役割を担っていた頃のことを題材にして執筆する「SV・羅針盤のない航海」。連載を始めて早くも 1 年が経過したが、3 か月ごとに〆切がくるというのは、なかなか大変なことだ。というのは、書き始めた頃にはあまり深く考慮していなかった事情が険しい壁となって、これほど書きにくい原稿、書きにくい連載はかつてないといっていいのである。

それはさておき、現在私は、本連載と同様誰に頼まれたわけでもなく、某メーリングリストに、原則として週 1 回の連載を始めている。

タイトルは「研修講師舞台裏」。ここ数年、各地の研修で講師を依頼されることが多くなったのだけれど、考えてみると、講師の立場でどんな準備をし、どんな振り返りをしているのかといったことを書いている人を見かけることはあまりない。とはいえ、貴重な研修を少しでも有効なものにするには、研修主催者が検討するだけでなく、依頼された講師の側から、感じたこと、考えたことなどをいろいろ発信してもいいのではないかと思いついたのである。

本マガジンに連載している「SV・羅針盤のない航海」が、今後の対人援助に少しでも役立つようにと願って始めたものだとしたら、「研修講師舞台裏」も、目指すところは（主観的には）同じなのであり、だったら会員クローズドの ML に掲載したに過ぎないのだから、「SV」連載のサイドストーリーとして、本マガジンに転載、連載してもいいだろうし、両者が相俟って相乗効果を

期待することもできるのではないかという発想が生まれてきた。

ただし、「舞台裏」の連載は、研修があった週には常に執筆するようにしているので、2 か月あまりで早くも A4 用紙 15 ページの分量になっている。これでは、いかに自由とはいえ量も多く、だらだらしたものにならないかという心配がある。

それに、実は内容もはなはだ恣意的、趣味的なので、果たして対人援助に役立つものかどうかいかがわしい、元へ、疑わしい。

と、ここまで書いたので、そのうちの一部を披露しておこう。

（2017/02/25 記）

＊

以下は「研修講師舞台裏」第 10 号の抜粋である。

＊

「強烈な寒気が流れ込み、強い冬型の気圧配置になった影響で、山陰地方など日本海側は 11 日、記録的な大雪となった。この雪のため鳥取県では男性1人が死亡したほか、列車が足止めされて乗客 26 人が車内で一夜を過ごした」

こんな気象情報がトップニュースで流されるので、私は気が気でなかった。先週 13 日（月）は、鳥取県米子児童相談所主催の研修会が予定されていたからだ。事実、10 日に届いたメールには「本日の鳥取県内の研修、連絡会は延期、中止の状況です」と記されていた。

研修で用いるスライドは、通常、大まかな骨子や基本形を作った後、前日に最後の追い込みにかかることが多い。今回は月曜開催なので、「日曜に仕上げればいいや」と考えていたのだが、中止の可能性が浮かんだ途端、気もそぞろとなって力が入らず、漫然と時間が過ぎてゆく。と、

「予定どおり開催します！」

電話が入ったのは 18 時 32 分。慌てて気持ちを立て直す。

今回の企画は、前半 2 時間の講演と後半 2 時間のパネルディスカッション。講演部分を引き受けた私に与えられたテーマは、「日本の児童虐待重大事例」。「ううむ、タイトルが大き過ぎる」とたじろいだのだが、数年前、福村出版から「日本の児童虐待重大事件 2000－2010」という書籍を出していたので、主催者にはそれが念頭にあったのだろう。本書には社会的な反響の大きかった 25 の事例を載せているので、これら全てを紹介できればいいのだが、何しろ事例数が多い。沈思黙考、閃いたアイデアが、虐待死の類型ごとの事例紹介である。正直いうと、他に思いつくものが何もなかった。

死亡事例については、虹センターで、「親子心中」に関する研究を行ったほか、現在も「嬰児殺研究」を続けており、自治体が公表した 150 あまりの検証報告書の分析なども試みていた。その中で、虐待死のパターンによって防止策も違っていることが見えていたので、社会的な関心の高さではなく、これらの類型ごとに事例を紹介したほうが、実務上も役立つと考えたのである。とはいえ、私は現在ほぼ 10 パターンに分類しているので、各 1 例紹介するだけでも 10 事例が必要だ。かつて作成したものも利用しながら準備しているうちに、スライドはいつのまにか 120 枚を超えてしまった。福村出版の本に載せた代理によるミュンヒハウゼン症候群（MSBP）の事例を、「その他」に分類して紹介したことも影響していよう。というのも、後半のパネル討議で扱われる事例が、MSBP と聞いていたので、是非とも加えたかったのである。しかし、これでは到底 2 時間に収まらない。やむなく心中 2 事例をカットして完成させた。

雪もおさまり、研修会は無事開催できたのだが、講演後に司会者が、「今日の講演で、何がよかったかというと、なにはさておきジェノグラムです。ジェノグラムをこんなふうに順次描いていくと、家族のことや事例の理解が深まることがわかりました」と発言したのは予想外だった。とはいえ、たとえば、MSBP 事例のジェノグラム作成では、最初作ったアニメを動かしてみて、「これではわかりづらい」と考え直し、アニメーションの順序を一から入れ替えたりして、それだけでまる 1 日を費やしていたし、他の事例もほぼ全てジェノグラムを用いて説明したのである。内容への言及はなかったものの、一面では努力が報われたという気持ちになった。

さて、後半のパネル討議では、当該事例に関わった病院、児童相談所、乳児院、児童家庭支援センターの担当者が、関わった順にそれぞれの取り組みを報告する形をとっていた。こういうスタイルの発表は他県でも聞いたことがあり、「良好な連携があってこその方式だな」と思った記憶があるけれど、その印象は今回も変わらなかった。この事例でも、関係機関の距離はかなり近く、密な連携がとれていた。（以下略）　（2017.02.19 投稿）

荒木晃子

前回の対マガ刊行直後、ほぼ同時期に、弁護士への紹介が必要な相談を立て続けに受けた。離婚に伴う子どもの親権問題、離婚後の子どもとの面会交流、（法的には認められていない）生殖補助医療を利用した LGBT カップル関係の問題の 3 ケースである。いずれにもカップル関係及び子どもとの関係が絡んでおり、カウンセリングレベルでの解決が困難と判断した結果だった。

確かに、カウンセリングルームに来室するクライエントは、みな一人残らず“何かに困っている”。しかし、その“困った”が、果たして“心理カウンセリングレベルなのか否か”の確認を忘れてはならないと思う。クライエントの悲しみ、苦しみ、怒り、憤りなどの要因は、もしかすると加害者による犯罪行為が原因かもしれないからだ。一歩、見定めを誤ると、クライエントと共に、カウンセラーもまた、被害者にも加害者にもなり得ることを常に自分に言い聞かせきた。

過去にも、相談内容によっては、法的解決が必要なケースも担当したが、同時に 3 つのケースを受け持つのは初めての経験だった。また皮肉にも、ほぼ同時期に、自分自身も犯罪行為の被害に遭遇していたことが判明し、11 月後半から最近まで、気

が晴れる日はなかった。年末から何かと不調が続き、つい先日、やっと回復に向けて動きだしたところである。結果として、自分の問題が解決したわけではないのだが、少なくともクライエントたちはよい方向に向かっているので、これで良しとしようと思っている。

さて、いよいよ今年は還暦。まぁ、ぼちぼち行きましょうかね。

鶴谷圭一

年度末になると追われる仕事がある。写真作業だ。

専門に撮ってくれる写真屋さんもいなかったので、ずーっと前から僕が写真を撮ってきた。フイルム時代には、お泊まり保育や運動会で最高に撮ってフィルム 10 本、36 枚撮りで 360 枚だった。年間で 2,000 枚ぐらいだろうか、それでも整理は骨が折れた。

時代はデジカメに移り、最初こそフィルム時代より増えたなあ、と思っていたが、ここ数年は毎年1万枚ペースで増え、今年はすでに5万枚を超えている。園児は減っているのに枚数は膨らむ一方だ。

PCに入りきらないので1TBの外付けハードディスクに入れているけど作業を始めると、子どもたちの表情がかわいくて時間を忘れてしまう。

ハッと気づくと他の仕事が進んでいない！年度末で忙しいってのに･･･

何枚もシャッターを押した自分が恨めしいこの頃です。

原町幼稚園
http://www.haramachi-ki.jp
メール　osakana@haramachi-ki.jp
ツイッター　haramachikinder

木村晃子

新しい春に

節目の4月がもうすぐだ。節目の春。この時期、職場を去る人、新たに入ってくる人などがいる。それぞれの春の背景に、悩みが隠れていることも多い。

最近の若い人は･･･という定型句は昔からのつきものだ。私が思う、最近の若い人は、とてもお利口さんだ。仕事も一生懸命、愚痴の一つも言わずに働いている。でも･･･ここが災いしていることが多いと感じる。一人で悩み、一人で決断する。決めてしまう前に、たくさんの人の意見を聞いていたら、きっと、抱える悩みが、通り道の石ころや、少し長く感じる登り坂だということが見えたかもしれないのに、と。

最近の若い人は、で始まる否定文は、先を生きている人間の責任転嫁だ。新しい春、若い人の役に立てるように、少しお節介になってみようと、心に誓った。そして、悩んだり迷ったりして決断した道を、どうぞお大事に･･･と、祈りつつ。

乾明紀

短信は体の不調を書くことが恒例になっていますが、最近の不調は原稿を完成させるために予定していた 2 日間を風邪で寝込んでしまったことと、首と肩甲骨部分のハリです。前者は一過性のものですが、後者は慢性的なもので、もう何年もスッキリすることがありません。

ある整体師によると、その理由は背骨の歪みだったのですが、最近通院した整体師からはリックサックの重さを指摘されました。通勤途上の電車の中で仕事するためにパソコンや本、さらには愛妻弁当と水筒をリックサックに入れるため、結構な重さになっていました。ということで最近は、駅まで自転車で通うことも止め、キャスター付きのカバンで通勤するようにしました。

三嶋　あゆみ

友人も大好きな作曲家のコンサートを、京都芸術センターが主催するという情報をキャッチ！

友人を誘うために、ワクワクしてセンターに保育を問い合わせたところ、ないとの返事。市の施設なのに？と驚きました。働くこともアートに触れることも生活の一部なのに、子育てを理由に制限されるって本当にひどい。一緒に聴いた友人の感想、聞きたかったな！

見野　大介

気づけば2017年も2ヶ月が過ぎようとしてます。元旦以外の日は全部仕事してたような気が…。

１月は東京の三軒茶屋で豆皿展と、大阪のあべのハルカスでの3人展がありました。ハルカスでの3人展では同じ日程で隣の会場にて、水森亜土さんの個展が開催されてました。
水森亜土…正直どなたか分からず。サイン会もあったのでご本人も見たのですが、周りの人達の興奮ぶりに付いていけてない自分がいました（笑）
２月は東京の吉祥寺にて2人展があります。この原稿を提出した数日後には吉祥寺に出向いてます。色んな出会いが生まれることを願います。
３月は奈良の東大寺近くにて2人展、４月は京都の烏丸三条近くにて個展、５月は愛媛の松山にて個展、６月は東京の南青山にて個展と徳島にて蕎麦猪口展が控えてます。うーん…乗り越えられるんやろか、この日程（笑）

団士郎

現在（2 月末日）、京都国際漫画ミュージアムでFECO JAPAN マンガ展を開催中。3月14日までだが、その日から 19 日まで京都寺町御池の余花庵ギャラリーで恒例の「ぼむ」マンガ展が始まる。

同時並行的に今、香川県さぬき子どもの国とで「木陰の物語」マンガ展が開催中。そして3月末には、奈良・広陵町図書館で「木陰の物語」マンガ展。4月2日からは宮城県石巻市の石の森章太郎萬画館で「家族マンガ展」が開催される。何だか急に漫画家として売れっ子なのである。

とはいいながら、三月末にはポーランドに行こうと思っている。ずっとアウシュビッツの事が気になっていた。べつに調査したいとか、研究したいというのではない。例によって、この世界にあるもので、気になっているものは見ておこう･･･程度のことだ。

強制収容所のことは歴史的事実やスキャンダラスな人物、エピソードなど、山ほど耳目にしてきた。映画も文学も、ドキュメンタリーもたくさん見た。「夜と霧」はアラン・レネ監督の映画を、50年近く前、学生会館の上映で見たのが最初だ。フランクルの著作は後になって読んだ。

だからいつか行きたいとは思っていたが、なかなか機会は訪れなかった。旅行好きの私はその周辺(ドイツ、チェコ、ハンガリー)には出かけているのにポーランドが抜けている。

だからもう、機会があったらではなく、機会を作ることにした。とは言っても、一から計画、準備しては大変だ。そんなとき、格安のツアーを見つけた。ポーランド周遊8日間。「てるみくらぶ」という、新聞広告で近年話題の旅行会社。アウシュビッツは選択観光地の中に入っている。希望されない方はクラクフをゆっくりご散策くださいとある。

この会社、ヨーロッパ方面はどのツアーも、エミレーツ航空利用、関西空港発深夜便らしい。妻はこのところ飛行機NGなので、パッケージツアーへの一人参加を選んだ。大昔、「シルクロードの旅」に参加した時以来の形だ。

久々に一人旅も考えたが、準備時間のゆとりが全くなかった。このご時世、暇人元気高齢者ばかりのツアーじゃないの？と思っているが、また機会があれば報告します。

千葉晃央

伊丹空港(大阪国際空港)のある大阪豊中市で育った私は、住民による騒音公害の歴史に触れることが多かった。関空開港前のジャンボジェット機が飛び交う空の下では、冷房付き、2 重サッシの教室でなんとか子どもたちは授業を受けていた。

伊丹空港での大型ジェット機の運用をとりやめ、空港の利用時間を制限するのは都市に立地する空港の宿命ともいえる。秋田本社の会社に勤めていて、当時大阪支社にいた父は、伊丹空港から秋田へ飛行機でよく行っていた。伊丹空港から車で15 分のところに住んでいた私は、免許取得後、車で父を迎えに行くことも度々あった。関空開港後は多くの便が関空のみとなり、秋田行も伊丹空港発がほとんどないような時期もあったように思う。しかし現在はすべてが伊丹空港発である。先日、そんな父に言われたのが「最終便には乗らない」というセリフだった。

2 月某日、秋田から京都に帰る私はJAL の最終便を予約していた。入院中の父と、病院に付き添う母と一緒に過ごす時間が少しでもあるとよいと思ったからである。休みが少ない私には一泊で帰るのがスケジュール的に精一杯。17 時過ぎ秋田空港に着くと前便である ANA 伊丹行がすでに出発時間を過ぎているのに飛び立っていない。それどころか、飛行機が到着していない。

当日は春一番が吹いたといわれ、強風等で天候が荒れていた。秋田空港で待っていると JAL からアナウンス。伊丹空港には入港制限時間があるため、伊丹ではなく関空行に変更となること、そして前便のANAに振り替え可能でANAなら入港制限時間 21 時に間に合う可能性があるとのこと。伊丹空港に車を置いていた私は伊丹に戻らねばならない！当然 ANA に振り替える。19 時過ぎに秋田空港を離陸。機内から外を見ると雷が鳴り続けている。プロペラ機、強風、夜間の飛行ルート制限にも

引っかかり、上空で伊丹行から関空行に変更…。いつもなら 1 時間 40 分程度で秋田から大阪には到着する。結局、その日は 21 時 55 分に関空に到着。約 3 時間のフライト…。長すぎ。

ANA は関空から伊丹空港までの交通費 2000 円を乗客に配布。それをいただいて、関空から伊丹行のリムジンバスに乗るためにチケットを買って並ぶ。当日は同じようなことがあちこちの便で起きていたため長蛇の列。外国人の姿も多い。けれども私の 10 人ほど前でバスがいっぱいになり、乗れないことに、そしてそれが最終便であると知る…。あわててバスチケットの払い戻しに向かうが、人が並び、その窓口にも人影がない。あきらめて別の窓口を見つけてやっと払い戻し。電車に変更。南海電鉄と JR、どちらにしよう。南海は難波までしかいかない。夜中まで電車が走っているのは JR！というイメージで JR 関空快速で天王寺駅、環状線で大阪駅に。時間はすでに 24 時。阪急宝塚線の最終普通「雲雀ヶ丘花屋敷行」になんとか乗車。

この終電、豊中在住時代に何度かお世話になった。そして各駅停車で蛍池駅に到着。すでに深夜 1 時。蛍池駅から伊丹空港へはモノレールで一駅。当然ないので歩く！過去に空港まで歩いたのは 20 数年前。土地勘があってよかった！何とか真っ暗な伊丹空港に着き、車で京都へ。秋田の実家を出てすでに10時間がたっていた…。京都から秋田に行くときは 4 時間で着いたのに！深夜に働く人々、仕事帰りの乗客、緊急時に対応する方々の姿が焼き付いた深夜のヒヤヒヤな長旅。翌日は朝 9 時から仕事。「最終便には乗らない」できるだけそうします、父上！

大谷多加志

14 年前、今の職場に就職してすぐの頃、話の流れで四柱推命の占いをしてもらったことがありました。結果の紙には色々なことが書かれてあって、納得することも、「へー」と他人事のように感じることもありましたが、1つ記憶に残っている一文があります。『兼業に向きます』。就職したての新人にはどう受け取っていいかわからず、職場に対してもなんとなく不義理(？)なような気もした記憶があります。

今の職場は、人の数より部署の数の方が多いところがあるので、基本色々な業務を兼持ちすることになります。そんな働き方が嫌いではなかったので、それが兼業に向くということなのだろうと思っていました。

昨年はさらに職場外でも仕事の機会を頂いて、人生初の確定申告をすることになりました。一応、名実ともに兼業人になったということでしょうか。軸足はしっかりおかせてもらっている安心感と、好きにさせてもらっている自由もあるというのは、恵まれていると思います。

この対人援助学マガジンでも、自由な場を与えて頂いて、ダブル連載という兼業（？）を 2 年半にわたってさせて頂きました。19 号から始めた「知的発達障害の家族の日々」は 10 回目を迎えた今回で、いったん区切りにすることとしました。「K 式発達検査をめぐって」は続きますので、ひきつづきよろしくお願いします。　　。

馬渡徳子

今回、投稿をお休みさせていただきます。「ギックリさん(三度目のギックリ腰なので、ちょっとチャーミングに呼んでます)」になり、自分を労わってやらないといけない事態に追い込まれました。

二月当初より、同時期に、家族の手術、入院が重なり、睡眠時間も食生活も無茶苦茶になっていたことも誘引。 駆け込んだ
かかりつけ医師に一喝！「痩せなさい。何か運動してる？」私「はい。平和運動と社会保障改善運動と労働運動と･･･ニコッ(笑)」ムッとした医師にマジで叱られ、「ギックリ腰で来たのに･･･」という陰の声は伏せて、ここは大人しく、管理栄養士と理学療法士による生活指導を受けることに。

しゅんとして、おりこうさんにしていると、同居の姑が元気になり、別居家族の優しいこと優しいこと。「私は、年を重ねる毎に、ちょっとずつ、しおれていく方がいいなあ」と、厚生労働省の施策に、ちょいと反論したくなりました。

皆さんも、「お世話され上手」になりましょう。

浦田雅夫

学生に締め切りを守るように言いながら、守れていない我が身にブーメラン。見通しを立てて計画的にやらないと周りに大きな迷惑だと反省です。

3 月 19 日(日)東山にある京都府家庭支援総合センターにて、午後、社会的養護後の支援についてのシンポ(進路の課題)を行います！ご興味のある方はぜひお越しください！

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場

28：　音

千葉　晃央

都市設計の弱点

人生の半分を京都で暮らしています。京都では 3 世代にわたって京都で暮らさないと京都人とは言わないとききます。そういう意味ではまだまだ 20 年程度です。他にも、こんなことを先日は聞きました。「京都」という都市の設計についてです。京都の気候を表現するときに「夏は暑く、冬は寒い」とよく言われています。けれども、京都は冬に関しては都市設計、住宅文化において無策に近いという見方をきいたのです。たしかに、年 3 回は京都市内でも雪が積もり、交通状況が乱れます。今年も市内の北部では数十センチの単位で積雪した日もありました。車がノーマルタイヤでスリップをして、西大路通りの緩やかな坂が上れない光景もこれまで複数回見ています。では、なぜ冬に無策になったのかは京都の夏を語らなければなりません。京都の夏は酷暑です。特に湿度が高い。そして、その暑さをしのぐために、エアコンがない時代から様々な工夫をしてきた歴史があります。「京都の冬は底冷え」ともよく評されますが、その所以は、暑さ対策の方に気を取られているからではないかという話でした。確かに京都の夏は暑い。大阪で育った私が暑いと感じます。今日もひどい暑さでした！というニュースを見るとコンスタントに全国で 4 番目ぐらいには常に京都が入っている感じがします。そのため、床、川床、打ち水など様々な方法で暑さをしのいだり、暑さを楽しんだりする文化が根付いています。

現代では、夏の京都での生活は当然エアコンの冷房に頼り切っています。空調が天井に設置されているというのが京都の建物ではよくあります。そうすると冷気が下に降りるので夏の冷房がよく効きます。逆に、冬のエアコンはなかなか効きにくいです。暖かい空気は天井に設置されたエアコンから噴出されても、上にとどまったままになっていると感じることも多いです。そのため家庭の多くでは灯油やガスによる暖房も用いています。

京都の夏は基本的にエアコン、フル稼働！2016 年猛暑日日数ランキングでも京都は全国 4 位。熱帯夜も多く、朝も冷えることはありません。当然、私の現場でも朝から終業まで冷房は使用することになります。京都の夏は、夏休みの観光客も多く、観光産業関係のお土産もの、お菓子関係の仕事が忙しくなる時期でもあります。それ

は逆にいうと稼ぎ時です。そのため、残業をしてでも何とか乗りきろうということも起こる時期でもあります。

酷暑による騒音問題

残業をしていた職員が冷房の電源を切るのを忘れて、帰宅してしまったことがありました。電気代が無駄になったのはもちろん、一日中、夜中から早朝までエアコンの室外機が作動する音が問題になりました。都市部に立地したその施設は、隣の住宅とも近く、今でこそ、熱中症対策で朝も昼もエアコンを入れっぱなしにすることが推奨されるようになりましたが、少し前までは、夜はエアコンを切る方が体にもいいし、節電にもなる（電力制限もありましたよね）といわれていました。翌朝、住民の方から施設の建物に張り紙がされていました。そこにはマジック太字で音に対する苦情が書かれていました。音だけでなく、火災などの危険も当然ついてくるため、このようなお叱りを受けるのは当然です。謝罪に伺うことから翌日の勤務は始まりました。90 年代までよく話題になったのは、山の中に福祉施設がつくられるのはおかしい！地域からの隔絶である！それまで暮らしてきた都市部にも福祉施設があることがノーマルで利用者の生活の質を守る上でとても大事だという施設立地の偏りの話題でした。そして、都市部での施設ができ始めると、施設建設反対運動に始まり、できた後も窓から見えないようにして欲しい、作業の時に使う工作機械の音を何時までにして欲しい、朝のラジオ体操はうるさいからやめて欲しい…そのような声を頂戴することが起こりました。こうした地域の方々のご理解も求めて運営していくのが、知的障害者の労働現場の使命となっています。地域での清掃活動、地域のイベントへの参加、近隣商店を消費者として利用すること等、様々な住民の方々との共通の経験も大切にしながら地域で同じ時代を一緒に歩んでいます。

施設を狙うドロボウ

ある施設では作業時間終了後の掃除の時間に、音楽をかけています。その音楽は、その日の日直の利用者さん、もしくは職員が選曲をしています。その施設には、職員の日直、利用者さんの日直があり、それぞれに役割がありました。利用者さんの日直の役割は、朝の朝礼に向けての放送、朝礼の司会、昼食時の「いただきます」、「ごちそうさま」、昼からの作業開始を知らせる放送、そして掃除時間の音楽、終礼の司会等です。

一方で職員の日直の仕事の中でも大事なことの一つが戸締りでした。日直ができるだけ最後に職場を後にし、なおかつその時には一人では夜も遅くなると危険なので、できるだけ複数で戸締りをして退勤をするよう職員相互に協力をしていました。

これまで、福祉施設だけを狙った泥棒も出没してきました。福祉施設は比較的警備が厳重ではないと目をつけられ、複数の福祉施設が狙われ、被害にあってきました。事務所の机の中のお金やパソコン、デジカメなどが盗まれています。また数年前は複数の福祉施設のエアコンの室外機が狙われ

た時もありました。昨年の相模原の事件以降、防犯カメラの設置などの動きが少しずつ広まってきています。これまでも高齢者施設領域ではこうした動きがすでに進んでいました。障害者施設は今回の事件をきっかけにした防犯カメラ設置が広がる動きを感じています。現場ができることはカメラの設置、施錠の強化（二重施錠、机、棚の施錠）などで、できるところからやっていくしかないというのが実感です。

ヘビーローテーションで踊れます

掃除の時間の話に戻りますと、掃除の時間にかかる音楽は、利用者さんが持って来てくれた曲で様々なジャンルがありました。地元関西の阪神タイガース応援歌『六甲おろし』、光 GENJI の『勇気 100%』（今もジャニーズの後輩たちが歌っていて NHK アニメの主題歌で現役ですね）、スマップの『世界に一つだけの花』（24 時間テレビの主題歌だったので人気絶頂のアイドルスマップが同番組に出演したので利用者さんに大人気でした）、慎吾ママの『おはロック』（アイドルはやっぱり人気）などテレビではやったものや、以前の施設の行事でみんなで歌ったり、踊ったりした歌もよく掃除時間にオンエアされました。利用者さんといく行事でのカラオケでも、このようなみんなの思い出になっている曲は人気があります。そして、私自身もそうした思い出になっていることをうれしく思っています。AKB48『ヘビーローテーション』も、サザンオールスターズの曲も（熱烈なファンの方がいらっしゃいます）、私には利用者さんとの思い出でもあります。私が日直の時に、なじみがあるかなと思いレンタルで仕入れたアニメの主題歌をかけたこともありますが、「千葉君はアニメおたく？」というツッコミを受けたり、冷静に考えると成人の利用者が働く施設なのにアニメの歌ばかりが聞こえてくるのもどうなのか？取引先の一般企業の方が来られた時にどう感じるだろう？とか、利用者の方が盛り上がり過ぎて疲れてしまうこともあって、そういう選曲の偏りはすぐやめました。

音や歌を聴いた人も影響を受けます。作業中には好きな歌をうたいながら仕事をする方もおられます。隣で作業をしていて、その一人で歌う声を嫌がる方もいますし、時には一緒に歌う方もいます。嫌がる方とは作業場の配置や作業部屋の配属で調整が必要になることもあります。聴覚過敏のような特徴もお持ちの方も一定おられます。作業の中で労働哀歌のようなものが生まれることもあります。「どっこいしょ」「あいよ」「あらよっと」「へいへいほー」「はい、これ食べて！」「もういいって」などの掛け声等も、仕事に追われている状況で心が和むこともあります。そういった掛け合いのやり取りをしながら、仕事をしている自分たちを鼓舞しているようなところもあります。仕事にはリズムも雰囲気もとても重要なときがあります。

マイクを前に緊張

放送やマイクには興味を持たれる方も多いです。そういった機器はデリケートで故障もつきものです。先ほどの日直の仕事で

は施設内に放送をします。「作業が始まります。準備をして作業場に集まってください」このような放送をするかどうかも議論があるところです。「放送がなくても自律的に動こう、放送はいらない」という意見、「動くきっかけ、日直の役割として放送がある方がいい」という意見、両方があります。各施設が実情に合わせて選択しているように思います。マイクや音響設備は職員事務室にあることが多く、電源をオフにし忘れると事務所の会話がまる聴こえになります。こうした切り忘れがないか確認をすることも日常の業務です。

日直の利用者さんがマイクで「おはようございます。朝礼をしますので集まってください」「作業開始 10 分前です。準備をして作業場に集まってください」等言う時は、いつもは饒舌な方も、多くの人に聞こえると思うと緊張されたり、日直という役割を意識してはっきりとした口調で話されたり。複数の利用者さんが当番として、日直をしているときは、一方の日直の方がマイクで先に話してしまって、慌てて私も！とマイクのある事務室に駆け込んできて放送をされることもあります。こうした職務を貫徹しようする姿勢に脱帽することも多いです。休み時間には自分で持ってきた CD を聞いて過ごしたい利用者の方もおられます。施設にある CD ラジカセを使う方もおられるのですが、台数が限られているため、譲り合いが必要になることもあります。図書館で借りてきた CD をかける方、長年決まった曲をかけるのを楽しみにされている方もいて、それぞれが昼休みを音楽を聴いて楽しく過ごされています。

1.17～3.11

施設での音について取り上げました。最後に触れるのは、学生時代から聞いていたバンド、ニューエスト・モデルの中川敬さんが阪神淡路大震災でみた光景を歌った『満月の夕』と書いて「まんげつのゆうべ」と読む歌（作詞　中川敬、作曲 中川敬 & 山口洋）です。東日本大震災でもこの歌が再度注目をされ、中川敬さんもソウル・フラワー・ユニオンとして現地を訪れて演奏をされています。お世話になった先輩が日直の時はこの曲をかけておられました。利用者さんもこの曲のファンになって、口ずさみながら掃除をしている光景もよくありました。今でもこの曲を聴くと私もうたいますし、当時の利用者の方々、先輩の姿を思い出す曲です。私が、この仕事を始める前年に阪神淡路大震災があり、15 年目に東日本大震災がありました。2011 年 3 月 11 日は京都の施設で利用者の方々と一緒に揺れを感じました。こうした記憶も、曲の思い出も、施設の歴史経過とともに、利用者さんや職員に共有されながら時間は刻まれているのです。下記は私が聴いたときの印象に基づいた表記です。本来の歌詞の表記は異なります。

風が吹く港の方から、
焼け跡を包むようにおどす風。
悲しくてすべてを笑う、乾く冬の夕べ。

時を超え、国境線から
幾千里のがれきの町に立つ。
この胸の振り子は鳴らす、

“今”を刻むため。

飼い主をなくした柴が
同胞とじゃれながら車道（みち）をゆく。
解き放たれすべてを笑う、
乾く冬の夕べ。

ヤサホーヤ。
唄がきこえる。眠らずに朝まで踊る。
ヤサホーヤ。
焚火を囲む。吐く息の白さが踊る。
解き放て！いのちで笑え！
満月の夕べ。

星が降る、満月が笑う。
焼け跡を包むようにおどす風。
解き放たれ、すべてを笑う。
乾く冬の夕べ。

ヤサホーヤ。
唄がきこえる。眠らずに朝まで踊る。
ヤサホーヤ。
三線鳴らす。吐く息の白さが踊る。
解き放て！いのちで笑え！満月の夕べ。
：
：

BACK ISSUES

救世主になりたい援助職 27　2017 年 3 月
事件について 26　2016 年 9 月
クルマ社会と福祉政策 25　2016 年 6 月
施設が求める「障害者像」はあるのか？　24
2016 年 3 月
連絡帳 23　2015 年 12 月
におい 22　2015 年 9 月
作業着 21　2015 年 6 月
食べる 20　2015 年 3 月
通勤 19　2014 年 12 月
クスリの作用、人の作用 18　2014 年 9 月
倫理観でかたづけられる暴力 17　2014 年 6 月
触れる 16　2014 年 3 月
対談企画　「教育と福祉の連携を模索する」2014 年 3 月
情報の格差 15　2013 年 12 月
20 年前のノートから 14　2013 年 9 月
そうじのねらい 13　2013 年 6 月
個別化の暗部 12　2013 年 3 月
グループワークの視点 11　2012 年 12 月
実習生がやってきた！10　2012 年 9 月
月曜日のせいやな 9　2012 年 6 月
所得を決める福祉職？82012 年 3 月
世界とつながる社会福祉現場 7　2011 年 12 月
この現場へのたどり着き方 6　2011 年 9 月
障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会
2011 年 9 月
旅行がない！5　2011 年 6 月
職員の脳内回路 4　2011 年 3 月
たかがガムテープ、されどガムテープ 3
2010 年 12 月
利用者が仕事上の戦友 2　2010 年 9 月
障害者自立支援法で不景気に！？1　2010 年 6 月

臨床社会学の方法

(16)治療的司法

中村正

１．治療的司法について

前回（第 27 号）は、嗜癖・嗜虐行動からの回復を支援するネットワークの構築プロジェクトの紹介をし、その背景にある考え方のいろいろについて記した。今回は、それを解決するための司法と連携した対人援助、治療的司法と呼ばれていることについて検討してみる。

北米や欧州には、薬物裁判所、DV 裁判所、メンタルヘルス裁判所、先住民のための裁判所等がある。問題解決型裁判所とも呼ばれている。それらを支える概念を問題解決型司法 problem solving justice、治療的司法 therapeutic jurisprudence という。さらに問題解決を担う場を回復ユニットや治療共同体 therapeutic community という。

これらを治療法学や司法臨床論が牽引している。その始祖は、David Wexler と Bruce Winick である。1980 年代後半、両氏が米国のメンタルヘルス法に関して提案したとされる。その後も徐々に拡大し、世界各国において応用されている。

また、学校の安全、家族法、刑事事件、民事法、労働者への補償に関する問題、体罰問題等にも応用され、問題解決型司法に組み込まれている。

治療的司法は、現実の危険の縮減に貢献する司法とそれ以外の連携を担うものとして位置づけられている。

そして、治療的司法は手続きを大切にする。たとえば、児童への性的虐待事案では加害者更生（リハビリ）を刑罰に接ぎ木し、広い意味での治療的な場に加害者を参加させる。

こうした治療的司法を展開するためには、法的手続きの明確化に加えて、人間科学との連携、ケースコンサルテーションが重要となる。学問的には、心理学、精神医学、人類学、犯罪学、公衆衛生学、社会福祉学・ソーシャルワーク論、紛争解決学が関連している。さらに、修復的正義の理論と実践とも近接している。

手続きの重要性は、加害者の動機形成と関連している。人々は手続き遵守をとおして問題解決のための自己のあり方を理解するように機能してはじめて効果をもつ。つまり、権威をもった司法が加害者に改善と更生を命令し、指示する「強制的権力 coercive power」ではないことが鍵である。問題解決の主体はあくまでも加害当事者、行為者本人であり、

そこに向けて自己を再構成していく過程を重視する。そこへの内的関与度を高めていくために手続きがある。内発的な動機付けである。それを促進させるのが治療的司法というわけである。自己決定による行動改善の機会を提供する制度ともいえる。したがって、強制的権力をもとにして変化を枠付けるパターナリズムは治療的司法と相反するものとなる(David Wexler, *Therapeutic Jurisprisudence: The Law as a Therapeutic Agent* (1990).,David B Wexler and Bruce Winick,*Essays in Therapeutic Jurisprudence* (1991)。

２．治療的司法が対象とする問題行動

この治療的司法は、前回述べたような嗜虐と嗜癖の行動、つまり刑罰では問題解決に向かうわけではない触法行為を対象にする。対象としては、薬物使用への依存（違法薬物への依存)、アルコールやギャンブルへの依存（これら自身は違法ではないがその結果としての盗みや暴力がある場合)、クレプトマニア（盗癖）等である。これらはすべて嗜癖行為である。

さらに、性犯罪・性問題行動、DV や虐待、いじめ、体罰等の対人暴力がある。これらは嗜虐性という要素をもち、単発的な暴力ではなく一定期間、持続し反復する習慣化された行動である。暴力を振るうことをとおしてコントロール感や満足感という快楽を得る、あるいは何らかの否定的な感情を取り除こうとする行為群である。

治療的司法は、こうした問題行動のために用意されたプログラムを受ける機会を提供する。しかしそれは強制ではないことが条件となるので、被疑者・被告人、加害者等、当事者の同意と承諾を重視する。

一般に、刑事裁判は、起訴して刑罰を求める検察官、被告人と弁護人という対立する対審構造を構成し、過去の事実を確定し、法に基づき罪と罰を裁判官が中立公平に判断をする。

治療的司法は、二度と同じような過ちをしないためにはどうしたらいいか、法制度、あるいはその他の社会的なリソース、医療や福祉等の社会的資源に橋渡しをする。治療的司法は積極的な問題解決を意図しているので、法の網の目の拡大、つまりネットワイドニングという面もある。動機づけのこともあり、刑罰の一環としての治療命令としてではなく動機形成を確保するためには、刑罰とは異なるものとして位置づけられる必要がある。

治療的司法は、犯罪に至る経過を重視し、そこからみえてくる問題に応じた解決を実施するための司法である。再犯防止のために抑止機能を期待して刑罰を加えることが伝統的な刑事罰であることに比べると、治療的司法は、犯罪へと至る経過にある人間的ニーズを重視して、そのことの欠落こそが人を問題行動へと駆り立てると考える。従来、情状として考慮されるだけだったものを前景化させ、足りていなかった人間的ニーズの充足をめざす。

社会臨床的な観点としての治療的司法が、発達の過程にある少年、障害者、高齢者、心

理的に問題のある人、マイノリティ等の社会的に脆弱な立場に置かれやすい人々の触法行為への、刑罰以外による対応を軸に動いてきた経過をみれば理解できる。

たとえば、法務省法務総合研究所の報告書によると、2012 年に知的障害者（その疑いを含む）の受刑者 548 人を調べたところ、入所回数は平均 3.8 回（受刑者全体は同 3.13 回）だった。65 歳以上では「5 回以上」が 68.56%（全体では 43.9%）で多い。療育手帳所持率は知的障害者で 46.6%、障害の疑いは 11.9%で、多くは福祉的支援から漏れていた可能性が高い。

こうした調査をうけ、各地に地域生活定着支援センターが開設され、刑務所出所後の生活のサポートをすることになった。それらを体系化するようにして「再犯の防止等の推進に関する法律」（2016 年）が制定され、社会復帰という概念へと統合されていく。

この法律は、「犯罪をした者等の多くが、定職・住居を確保できない等のため、社会復帰が困難なことを踏まえ、犯罪をした者等が社会において孤立することなく、国民の理解と協力を得て再び社会を構成する一員となることを支援する」と目的を定めた。

そのために、犯罪をした者等が、その特性に応じ、矯正施設に収容されている間のみならず、社会復帰後も途切れることなく、必要な指導及び支援を受けられるようにするとし、そのための施策として、①再犯の防止等に向けた教育・職業訓練の充実、②犯罪をした者等の社会における職業・住居の確保、保健医療・福祉サービスの利用に係る支援、③矯正施設における収容・処遇、保護観察に関する体制の整備、⑤その他再犯の防止等に関する施策の推進を図るとしている。再犯防止という文脈で人間的ニーズが①から⑤までの諸点において実現されることが大切だという意味では、治療的司法に資する施策ともなりうる。

さらに、常習的な窃盗犯が摂食障害を抱えていることに視点をあて、事実上の治療的司法として位置づく取り組みがある。クレプトマニア（嗜癖的な盗癖）への治療を試みる赤城高原ホスピタル院長の竹村さんの実践である（『彼女たちはなぜ万引きがやめられないのか？―窃盗癖という病』河村重実・竹村道夫、飛鳥新社である）。

竹村さんは「これまでの人生で、自分に責任があるとは思われない、割に合わない役割を背負わされた体験者」として当人たちを位置づけ、刑罰を加えるのではない治療的司法こそが望まれているという。竹村医師は、高い比率でみられる過食嘔吐型の摂食障害と窃盗癖とのクロス・アディクション（多重嗜癖〈しへき〉）を治療的司法の対象にしている。この嗜癖は自身を蝕（むしば）むだけでなく、盗みという犯罪行為なので被害者がいる。他者に被害を及ぼす。だからそれへの対応も必要で、有害性の縮減 harm reduction と本人への治療アプローチの統合が大切となる。

なお、『季刊刑事弁護』（87 号、現代人文社（2016 年）で「各地で息づく『治療的司法』の実践」という特集が組まれている。内容は「治療的司法とは何か（指宿信）、事例報告１―性犯罪の刑事弁護（笠原麻央）、事例報告２―クレプトマニア（窃盗癖）の刑事弁護（林

大悟)、事例報告３―福祉的支援を必要とする人の刑事弁護（山田恵太)、暴力臨床の実践と理論−男性・父親の暴力をなくす男親塾の取組み（中村正)、少年司法と治療的司法（後藤弘子)、奈良少年刑務所における性犯罪再犯防止移動（犬塚貴浩)」であり、治療的司法の制度が構築されていないなかで実質的にその機能を果たしている先駆的事例が紹介されている。

３．すでに日本社会にある二つの治療的司法
―少年法と医療観察法―

3-1. 少年法について

こうして事実上、現場の必要性をもとにしたクライアント対応により、実質的に治療的司法のように機能している分野が散見されるので、それを日本型の治療的司法としてカテゴリー化していくことは意味がある。この意味ではすでに日本では二つの領域での経験があり、今後の日本型治療的司法の構築にあたっては配慮がいる。それは少年法の領域と医療観察の領域である。

少年非行に対応する司法福祉の理論と実践は、罪を犯した少年に対して、処罰よりも保護と立ち直りに貢献してきた。

しかし、1997 年に神戸市で起きた連続児童殺傷事件をきっかけに厳罰化が進む。残忍な事件だったが、当時 14 歳だった少年は医療少年院送致となり、2005 年には退院している。ひたすら厳罰化へと歩み続ける少年法は、刑事罰の対象を 16 歳以上から 14 歳以上とした。さらに少年院送致の下限が 14 歳から「おおむね 12 歳」となった。有期刑の上限を 15 年から 20 年に引き上げる一方、国費で弁護士をつけられる事件の対象を拡大した。成人なら死刑に相当するとして無期懲役の判決を言い渡した判決もある（強盗殺人罪などに問われた犯行当時 17 歳だった金沢での事件)。

厳罰化を強める少年法は、パターナリズムに陥りやすく、自発的な問題解決を尊重するというよりは強制的な審判による改善指導なので、純粋な意味での治療的司法ではないとしても、教育的福祉的に対応する制度という点では治療的司法の発想に近い。少年に罰を与えるだけが目的ではないからだ。

少年は発達途上にあり、立ち直る可能性が大きいので、過ちを犯さないように保護し、再教育すべきという考え方を重視している。人格的に未熟であり、生育環境に問題があることもあり、それを改善することで立ち直る可能性が高いという点では治療的司法のバリエーションといえるだろう。

3-2. 治療を強制する司法としての医療観察法

医療観察法（「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律」、2003 年成立）は、罪を犯した精神障害者を特別の治療施設に隔離して特別に治療し、再び罪を犯すことのないようにするための法律である。「罪を犯した精神障害者」とは重大な罪を犯し、犯行時に心神喪失または心神耗弱の状態にあった精神障害者である。

刑法第 39 条は、心神喪失者の行為は罰せず心神耗弱者の行為は刑を減軽すると定める。精神障害の症状（たとえば幻覚や妄想など）のために善悪を判断する能力がなくなっているか、あるいは判断に従って行動する能力が

なくなっている場合は罪を科さず、この能力が減弱している場合は減刑する。医療観察法における「重大な他害行為」とは、殺人、強盗、傷害、傷害致死、強姦・強制猥褻、放火の６つである。

「医療および観察」とは「指定医療機関」という特別の精神科病院と精神科外来において一定の期間強制的な入院治療および通院治療を受ける。強制的な入院治療については、精神保健福祉法に定められた措置入院や、医療保護入院などの仕組みはあるが、さらに触法精神障害者に対するこの特別の法律が制定されたことになる。この法律制定の直接の契機は、2001 年 6 月に発生した大阪教育大付属池田小学校児童殺傷事件である。学校に乱入した男性が児童と教師の 23 人を殺傷した事件である。犯人に精神科治療歴があったことも加わり、「危険な」精神障害者に対して医療が治療責任を果たすことを目的として制定された。

しかしこの経過には矛盾があった。法廷は責任能力を認め、死刑を宣告したのである。死刑は異例の早さで執行された。つまり裁判では、犯人の犯行時における心神喪失も心神耗弱も認めなかった。特別な治療が必要だとして事件後に成立した医療観察法が適用されないという矛盾に陥った。すでに死刑となったので、触法精神障害者への治療的司法のあり方を検証できなくなったが、いずれにしても治療を強制することになるのでこれは正当な意味での治療的司法とはいえない。

この二つの領域は、治療的司法における必要性と動機づけ、パターナリズム的な教育と福祉になりやすいこと、自発性と教育のバランス、あるいは強制性と自発性のバランス等の諸点から治療的司法論の文脈からの位置づけの検討がいる領域である。

４．治療的司法のグラデーション

嗜癖と嗜虐の行動を対象とする治療的司法は、刑事罰との関連では新しく法化されてきた領域にある行為群である。嗜癖、つまり物質や行為へのアディクション（薬物、アルコール、ギャンブル等）と、嗜虐、つまり DV、子ども虐待、高齢者虐待、いじめ、体罰、ハラスメント等の対人暴力は、犯罪としての位置づけの違いを含みつつ、治療的司法における連続体を成しているといえる。

もちろんそれらのすべてが犯罪化されているのではない。対人暴力があったとしても犯罪化されていないのだから、なおさら治療的司法が接ぎ木されるべきである。児童福祉や高齢者福祉の行政上の措置、接近禁止や保護等の命令、配置転換や研修命令を出すこと等の非刑罰的な対応が圧倒的に多いので、そこに接続することになる。

さらに刑事以外の領域の典型事例として離婚調停制度への治療的司法や修復的正義の組み込みが考えられる。離婚調停は「対話的正義」をとおして合意を高め、慰謝料、養育費、面会交流等の取り決めをしていくことになるが、高い葛藤状態にある関係での離婚調停は、治療やカウンセリングとは異なるが一種の関係性の治療的修復的な役割を果たすことがある。双方が合意を形成していく対話的実践な

ので、治療的司法や修復的正義の一画と重なるという意味である。

物質や行為へのアディクションは「被害者なき犯罪」として、治療的司法の対象に馴染みやすい。さらに対人暴力は被害者が明確に存在するので「ハームリダクション（有害性の除去)」をめざす罰や介入は必要である。その後に治療的司法が接ぎ木されるべきである。

こうした対人暴力の多くの領域は、一定の関係性のなかで発生する（親子、夫婦、男女、師弟等)。これまで刑罰によるこうした関係性への介入は消極的であった。だから十分には犯罪化されてこなかった。

しかも、行為群としても有形力の行使による身体的な暴力ではなく、モラルハラスメント、コントロールを軸とした関係性の病理という面があり、刑事罰には馴染まなかった。したがって、治療的司法において解決すべき課題という面もあり、ますますその必要性が指摘されるようになった。

加害者臨床として、脱暴力に向かう機会をつくり、そこに参加をし、自らをつくりかえていく更生に資するような治療的司法が期待されている。

５．情状弁護のその先に

治療的司法が解決をめざす人間的ニーズは刑事弁護では、情状として把握されてきたものに近い。被告人の反省の程度、被害感情、更生可能性、犯罪原因の内容、年齢や人格的要素、育ちの経過等を勘案することになる。

殺人の場合は背景に強い怨恨の感情があり、捻れた人間関係が影響することもある。これら背景にある事項は、心理的なものから、育った家族の事情や社会問題に起因する幅の広いものである。直接の犯罪原因ではないにしろ、犯行時の人間的ニーズの充足が十分でなく、心理的不全感も強いことがほとんどである。情状弁護の展開に際しては、治療や回復にかかわる課題があることを重視し、その改善や修復へと橋渡しすることが望まれる。

情状弁護が完結するためには、調査や審理をとおして見えてきた加害者の心理、対人関係、コミュニケーション、生活能力の多方面にわたる問題を解決する広義の治療的アプローチを接ぎ木される必要がある。犯罪者の人格、意識、態度、心理にかかわり未解決の問題解決にアプローチすることになる。当事者個人の事情だけではなく、関係性や相互作用の仕方も視野に入れた方がよく、いわゆるソーシャルキャピタルの貧しさが浮かび上がるので、それへの対応も要請される。社会的に孤立し、家族からの排除があり、不全感が適切に整理されずに蓄積していることが多い犯罪者・逸脱者たちである。何らかの病気や障害が存する場合は特にそうであるが、広い意味での治療、回復、修復のための更生計画が接ぎ木されるべきであろう。

こうした意味では、刑罰にくわえて、刑罰に替えて、刑罰を避けて、問題解決に向かう制度をきちんと創設することがないと治療的司法は作動しない。治療的司法の観点がないとこれらの諸課題は更生支援としてつながらないともいえる。そうした治療、回復・修復がそこに連続していれば情状弁護は格段にその本領を発揮することになる。情状弁護のた

めにも治療的司法の考え方の確立、そして治療と回復の機会と場所の提供が要請されている。

６．心理-社会的問題を扱うことで当事者の物語を再構成する

治療的司法は当事者の意味づけを斟酌する。贖罪のためにも判決が加害者の固有の物語を認めるべきだと思った一例がある。

京都で 25 歳の飲食店員が殺害された事件である。犯行当時 19 歳だった加害少年は逆送され、強盗殺人の罪で第１審では無期懲役となった。仲のよい兄弟のような関係にあったという。高裁までいったがそのまま刑が確定し、西日本のある刑務所で刑に服している。この少年の加害の情状について担当の弁護士から依頼があり、意見書を書いた。殺人の背景になった深い恨みと怒りについて考慮すべき事項があり、強盗殺人ではない別の物語を可視化させるべきだと考えたからである。更生に資するためには彼の深い恨みの感情を裁判の物語化ではきちんと認知するべきであった。彼自身も加害の物語を言語化できていなかった。だから行動化した。拘置所で話をきき、供述調書を丁寧に読みかえし、弁護士との手紙を彼の許可をもらって吟味し、裁判では潜在化した彼の物語の全容を浮かび上がらせる必要性を指摘し、正式な心理鑑定を訴えた。

その怨恨の感情が了解できるものであることを前提にして、しかし適切な感情の処理の仕方を誤ったことを指摘した。更生の動機形成にむけ、裁判が彼の語る加害の物語を斟酌するかどうかで更生の動機付けが違ってくると考えたからである。

しかし彼の加害の物語は判決では残念ながら脇に追いやられていた。強盗殺人の物語となっていった。実際は彼の尊厳に関わる被害があり、そのことに由来する強い怨恨の感情が駆動したという物語化が必要だったと思った。相当に根深い現代社会の、男性同士のもつ関係性や仲のよかった二人の育ちにかかわる社会病理が反映していたからだ。そうした本来の物語は微細な事項として一蹴されてしまった。

治療的司法は、罪を犯した人がもつ、本来的に解決すべき人間的な課題に直面化させるためのものである。人によってはそちらの方が困難でもある。心理的問題に取り組むことが不得意だからこそ行動化としての犯罪に至ったとすると、直面化は回避したいと考えても不思議ではない。きちんと加害者になることをめざす対話は相当に難易度の高い臨床的課題である。治療的司法はここをめざす。自ら人生のやり直しへと再スタートする支援をめざす。独力では成し遂げがたく、やり直しの体力や資源も乏しいはずなので、回復支援者や機会の情報を提供する。

７．犯罪をとおして実現させようとしたニーズを見極める

盗みをくり返す背景にある障害や病気への対応、痴漢や性問題行動に駆り立てられる性癖の改善、慢性化している DV、虐待、体罰の対人暴力、薬物やアルコールへの依存とともにある暴力や逸脱、認知症、発達障害、精

神障害が背景にある逸脱行動等には司法と連携した治療的司法と治療・回復のための社会資源への接続が連携しなければならない。それを媒介する更生組織も要る。

更生に向かう意欲と行動を引き出すためには、犯罪の原因となるニーズに根ざしたリスク管理だけではないほうがよいと犯罪心理学は教える。

リスク重視の再犯防止は、犯罪を誘発する要因をなくそうとする。たとえば、①反社会的なパーソナリティや否定的な気分・感情、②反社会的な態度や認知、③犯罪のための社会的支援があること、④物質依存、⑤不適切な養育、⑥学校や仕事での問題、⑦貧しい自己統制力、⑧向社会的行動の欠如である。これらは直接に犯罪を誘発すると考えられ、コントロールの対象とされる。

さらにその背景には「犯罪とは直接には結びつかないニーズ」Non-Criminogenic Needs がある。①漠然とした不全感、②貧しい自尊心、③疎外感や排除されている感覚、④身体的な運動をしない、⑤何らかの被害体験、⑥幻覚、不安、ストレスがあること、⑦解体されたコミュニティ、⑧希望をもてないことである（*The Psychology of Criminal Conduct*, D.A.Andrews & James Bonita,1994, Lexis-Nexis）。これらは直接的な犯罪の動因ではないが犯罪や逸脱行動の背景となっている個人的心理的課題である。犯罪をとおして実現させようとしたこと、あるいは除去しようとした不快感を成していると考える。

治療的司法は前者に対応しつつも後者のニーズに応じようとする。同じような考え方であるがニュージーランドの司法臨床心理学者のトニー・ウォードらが主張する「善き生モデル（Good Lives Model）」がリスクコントロールを重視するモデルと対比されて活用されている。リスクをコントロールするだけではなく人間にとっての善なること Good の実現をとおして犯罪から遠ざかることを支援しようとする考え方である。仕事、遊び、対人関係等、人間的に生きるためのニーズが指摘され、治療と回復のための個人別の更生支援計画がやり直しを支える。

たとえば性犯罪や性問題行動を考えてみよう。性犯罪・性問題行動は、単純に性欲を満たすための犯罪ではなく、彼のもつ心理的不全感をもとにした「非性的ニーズ」を満たそうとする行動であるとレイプ研究は指摘する（たとえば、ティモシー・ベイネケ著『レイプ・男からの発言』ちくま文庫、1993 年）。

直接の行動は擬似性的行動である。女性への態度や意識、性についての勝手な枠づけ、男らしさの信念、強姦神話のような恣意的な解釈等の独特な認知の仕方をもとにして性犯罪が実行される。意に反する性行動の強制は、強盗、暴行、誘拐、殺人の暴力に付随しておこる。「精神的ストレス–精神症状のひとつ–性衝動–性的逸脱–性欲を男性はコントロールできない」という思考の連鎖ができ、男性中心の性犯罪の説明がなされる。この見方は、被害者非難の物語を誘発することもあり、男性中心の、支配的な（ドミナント）物語であるという。さらに「彼は何故個人的な暴力に訴えるのか、どうしてレイプを選択するのか」とベイネケは問う。

「レイプすることで女性への怒りを感じやすくなる。レイピストは、相手の女性に卑しめられて腹がたったからレイプする」、「自分が貶められたと感じるので、自分より劣った存在をレイプする。優位をとりもどす。女性が選ばれるのは性的な欲求不満からではなく、怒りを向ける対象として都合がよいからだ」と指摘している。

私はこれを「男性の性欲神話」だと考えている。それは男性加害者の言い訳にも使われるし、供述の際の検察の側のストーリーラインにもなっている（ある事例をもとにしてこの男性の性欲神話が分析されているものとして、牧野雅子著『刑事司法とジェンダー』、2013 年、インパクト出版会がある）。

８．問題解決のための司法には問題解決のための支援が多様に必要となる

さらに親密な関係性における対人暴力としての DV、虐待、体罰においても、その暴力をとおして満たそうとしていたことは何だったのかの確定が必要となる。何を治療と回復の対象にするのかを見極め（アセスメント）なければ意味がないからだ。諸外国ではそれを対象にして受講命令制度が組まれていく。刑罰だけではないアプローチをも可能にする治療的司法のアプローチが DV 裁判所とともに構築されている。もちろん何らかのプログラムがあればよいのではなく、被害者ケアや社会全体の暴力防止と加害者臨床の連続が大切である。司法に管理された一連のケースワークである。

対人暴力の研究者であるエバン・スタークは治療的司法をとおして修正すべき対人暴力の特性を「coercive control」として把握している。スタークは、①威嚇（脅す）、②孤立させる、③コントロールするという３つの要素を重視した暴力を「関係コントロール型暴力」の特徴としている。DV や虐待だけではなく誘拐、ハラスメント、ストーキング、カルト支配にも見られるという（Evans Stark, *Coercive Control: The Entrapment of Women in Personal Life*, Oxford University Press,2007）。

この理論にもとづき心理的感情的な暴力として定義してきたものを犯罪化するという法律が英国で具体化されていた。「Serious Crime Act」の 2015 年改正で、Domestic abuse（家庭内虐待）の項に「76　Controlling or coercive behaviour in an intimate or family relationship（親密なあるいは家族関係においてコントロールするあるいは強いる行動）」が追記された。

その例示的内容は「友人や家族から孤立させる、基本的ニーズを与えない、時間を管理する、デジタルを用いて監視する、日常生活を統制する（どこにいくか、誰と会うか、着るもの、寝る時間等）、病院に行かせない、お前は価値の無い奴だと繰り返して言う、辱める行為、自己非難を相手に強いる、警察にいかせない、経済的に追い詰める、殺すぞと脅す、プライバシーを明かすと脅す」行為があげられており、そうした行為は犯罪化される。最高５年の刑が可能となっている。対人暴力をとおして満たしている加害者のニーズに関係コントロール欲求があるという観点で

ある。

９．治療的司法の対象にとっての男性性ジェンダー臨床

さらに筆者は治療的司法とジェンダーの関連を重視している。男性性と暴力の関連である。たとえば次のようなメタ研究がある（ Meta-Analysis of the Relationship between conformity to masculine norms and mental health related outcomes, in *Journal of Counseling Psychology*, 2016. Nov.21, Y. Joel Wong, Moon-Ho Ringo Ho, Shu-Yi Wang, and I. S. Keino Miller）。

人々が素朴にそう考える内容を確定して 11 個の男らしさの規範を取り出した心理学的な尺度がある。素朴理論・素人理論という。それは、①勝つことへの欲望、②感情的なコントロールの必要性、③リスクテイキング、④暴力、⑤支配、⑥プレイボーイ（性的に奔放である）、⑦自立的である（援助を求めない）、⑧仕事が優先、⑨女性への権力的な態度、⑩同性愛の嫌悪、⑪地位の追求である。

こうした男らしさ規範への個人の適合度と彼の心理的健康をクロスさせた。相関させた指標は、①メンタルヘルスの悪さ（うつ傾向にあるかどうか）、②肯定的なメンタルヘルス（満足している生活かどうか）、③他者に助けを求めることができるかどうか（カウンセリングを受けているかどうか）である。

そうすると、上記の男らしさ規範のなかでは、⑥プレイボーイ、⑦自立傾向にある（助けを求めない）、⑨女性への権力的な態度の三つが心理的な不健康に相関していた。

一般化すると、性的放逸さ、女性支配の傾向、自信過剰さ（援助を求めない）の三項目が心理的な不健康と相関しているというメタ分析となると結論づけている。素朴理論として社会に流通している男らしさ規範への同調は男性自らの心理的健康を害することになる。とりわけ性的な奔放さと女性への権力的態度は性差別的な意識と重なる。

この研究はセクシズムが社会正義の問題というだけではなく、男性の心理的健康を害しているということを指摘している（この研究は、78 の調査研究のメタ分析をしたもので、19,453 人分のデータを扱っている）。

10．治療的司法は人間的ニーズを充足させる枠をつくる

治療的司法の目的は、犯罪を誘発する直接の原因としてのリスクを無くすことに力点を置くだけではなく、基本となっている人間的ニーズが充足されていないことを重視する。内発的に脱暴力を図りたいという意思を重視するからである。それを解決するための資源へとつなぐ司法をめざす。逸脱する者の満たされていない不全感は主観的なものだが、竹村医師の指摘どおり、それがリストカット、摂食障害、自殺企図等の自罰であれ、対人暴力となる他罰であれ、更生のための支援がいるので、刑罰以外のニーズに応答することをめざす。

治療的司法はこれまでの行動様式を自己変容させる「脱学習」の過程を重視するものであると筆者は把握している。言語化しえないから行動化し、処罰による自己抑止よりも優

先度の高い逸脱行為を選択しければならないほどに当人は切迫している。

それはどちらかというと、安逸な快楽だけではなく、問題解決の回避でもあり、苦痛の消去でもある。相談できる他者もいないほどに孤立しているともいえる。

解決できることをひとつひとつ接ぎ木していくことで治療的司法は可能となる、単なる刑事政策ではないトータルな社会政策が要請されている。

そして何よりも、当人だけに社会的適応を求める社会復帰というよりも、復帰したいと思う社会へとつくりかえていく努力もいる。社会もまた変容しなければならないという意味で、社会臨床的アプローチを位置づけている。

なかむら ただし
（社会病理学、臨床社会学、社会臨床論）

2017 年 2 月 28 日受理

ケアマネ　あの目　この目

誌上　ひとりスーパービジョン！

指定居宅介護支援事業所　あったかプランとうべつ

ケアマネジャー　木村　晃子

ある事例検討会から

ケアマネジャーが集まる事例検討の場面があった。事例そのものの検討というよりも、検討メンバーによる、ピアスーパービジョンを意識しての内容である。経験のあるケアマネジャーのグループであり、出される事例を検討する上でも、「その情報は持っている。」「そのアクションは既に試み済み。」などという感じだ。それぞれが、そのケースを担当することになったとしたら、それぞれに悩ましい状況を持ち合わせることへの想像と共感は高まった。ピアスーパービジョンの良さの一つでもある。

限りのある中の検討であったため、ディスカッションは終了時間を迎えた。その後、ひとりスーパービジョンのつもりで、検討内容を振り返りながら、もう一度事例を考察してみた。

ひとりスーパービジョン

事例のタイトル：ある家族への支援について、いつまでも課題解決しない事例

事例の選定理由：ケアマネジャーとして関わったある家族の事例。ケアマネジャーとして支援対象者の権利擁護の立場から、家族内のある課題を発見。課題解決機関への情報提供と支援について依頼したが、課題発見から、１年近く経つにも関わらず、支援が終結しない。ケアマネジャーが直接担当する利用者への権利擁護が守られていないことへの、ジレンマ、担当機関への不満と葛藤があったため。打開策を見つけたいと考えた。

事例の概要：ケアマネジャーとして、高齢者の支援に関わっていた。家族内に、高齢者の権利擁護が守られない状況を発見。適切な権利擁護の為に、対応の主担当である機関へ情報提供、支援要請した。１年近くが経過するが、状況に変化が見られない。

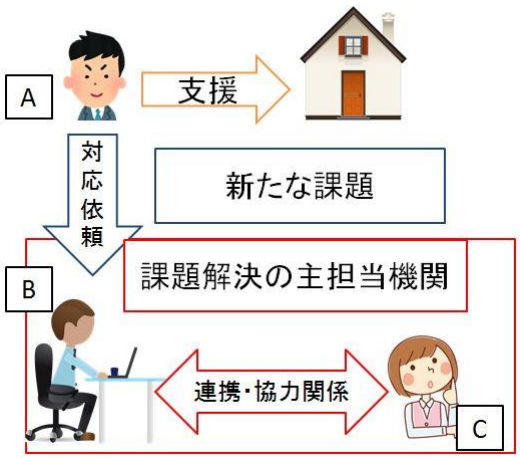


図１

事例概要は、図１のようになる。ケアマネジャーが発見した、家族の新たな課題に対する主担当は、B 機関となる。B 機関はこの課題解決のため、C 機関と連携・協力を行う必要がある。連携・協力はされているはずであるが、適切に課題解決に向かっていない。

ひとりスーパービジョン　考察ポイント１

１　課題解決の主担当機関は適切か

２　主担当との連携・協力機関は適切か

以上の２点に関しては、法律上に照らしても相違ないことを確認した。

図１に登場する機関と担当者の役割は以下の通り。

A 機関担当者：この家族の中の契約をした高齢者に対する、ケアマネジメント支援。

B 機関担当者：この家族の新たな課題についての担当責任機関。

C 機関担当者：B 機関に連携して、新たな課題が速やかに解決に向かう役割。

ひとりスーパービジョン考察ポイント２

ポイント１を踏まえ、現実的には、役割が十分に機能していないことを理解すると、各機関の担当者の置かれている状況をアセスメントしてみる。

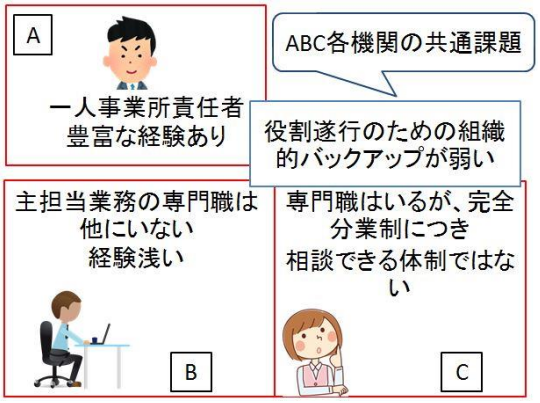


図２

図２の通り、この家族の新たな課題を解決する担当者は、それぞれの機関において単独の業務となっている。

A 機関は、経験豊富な担当者ではあるが、そもそも、この新たな課題に対応する責任の機関ではない。**→課題解決機能を担う役割ではない。**

B 機関は、課題に対応する責任機関ではあるが、十分な経験値がなく、組織内にそのことについて経験のある者もいないため、組織内で相談できる人がいない。**→対応策がわからず身動きがとれない。**

C 機関は、この課題解決に対して担当者以外にも専門職がおり、知見を有すると思われるが、組織内での課題共有に難がある。担当者が組織内責任者やその他の担当者に相談でき

る状況にはない。**→B 機関の決定に基づいて行動することしかできないため、B 機関のあり方に影響を受ける。**

ひとりスーパービジョン　考察ポイント３

考察ポイント１、２を踏まえ、事例提供者の葛藤、ジレンマに戻ってみる。

事例提供者は、そもそも、B 機関及び C 機関の果たすべき機能が果たされていないことへの不満があったが、各機関の担当者の置かれている状況を俯瞰すると、それぞれの担当者が、所属組織内のバックアップ機能がないまま、役割を遂行しているということが理解できる。

家族の抱える新たな課題は、そもそも難しい課題である。課題解決に向かうためには、担当者だけでなく、担当者を支持する機能が十分果たされていることが必要不可欠である。援助場面におけるパラレルプロセスを考えてみると更に納得できるはずだ。

ひとりスーパービジョン　考察ゴール！

私たちの仕事は、その内容に関わらず、「私は誰で、誰に対して、何をする人間（役割）か。」ということを理解しておく必要がある。社会の側から求められる役割に基づく業務と、その業務を超える範疇であるかもしれないが、必要なこともあるだろう。いわゆる、業務の枠組みを超える範囲、グレーゾーンなどと言うこともある。グレーゾーンは誰でも手をつけられることではない。本来業務が十分に発揮されないままに、良心依存でグレーゾーンに手を出すことで、関係する人への不利益を生じる危険さえある。

支援においては、先ず、自分の果たすべき役割、自分の所属機関の果たすべき役割を認識し、その上で、その範囲を超える部分が生じた際にどのように対応していくべきか、ということについても、組織的なバックアップを得る必要があるだろう。

この事例においては、担当する各機関の担当者が、自分の置かれている状況と自分の果たすべき役割を認識していることが出発点である。その上で、組織内バックアップを抜きに担当者だけで担える事案ではないことを、組織的に理解する必要がある。組織内に、課題に対応できる必要な知見を有する者がいない場合には、外部コンサル等の活用も視野にバックアップ体制を整えていくことが必要だと考える。

手始めに、自身の所属機関の長に上記を理解してもらうところから開始していくことができる。

以上、ひとりスーパービジョンの成果としてまとめを終了する。

街場の就活論 vol.28

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

だん　あそぶ
団　遊

「採用ブランディング」の周辺で展開される物語の断片

“ある限られた人たちの中ではとても有名”というモノやコトがあります。業界有名人、業界用語、なんかもそうでしょう。同じように、就職活動生の中だけでとても有名、という会社があります。例えばワークスアプリケーションズや Plan・Do・See といった会社は、皆さん、ほとんど耳にしたことがないのではないかと思うのですが、会社のアーリーステージから採用活動に特別に力を入れてきた結果、就活生の中では高い知名度を誇っています。

このように、就職や転職を考える人たちの中での知名度を上げていく活動を「採用ブランディング」と呼びます。採用ブランディングに成功すると、

・思っていた以上の人材と出会うことができ、うっかり採用までできるかもしれない
・採用に関するコストを段階的に下げていくことができる

という二つのいいことがあります。コストが下がる理由は、「ビスコ」や「チョコボール」は特に宣伝をしなくても売れ続けるのと同じ理由です。さらに、採用ブランディングに成功すると、その企業の求人や出展が就活生の参加動機になるため、リクナビやマイナビといった就職メディアの掲載料が割安になったり、就活イベントへの出展料が無料になったりします。

▼　▼　▼

友人の K 氏は大学卒業後、人材会社に入社しました。20 年ほど前のことです。当時はまだ

採用ブランディングなどといった言葉はありませんでした。彼の仕事は、企業の採用を包括的にお手伝いすること。入社案内をつくったり、説明会を企画したり、面接などの選考プロセスの管理を請け負ったり。採用戦略立案のパートナーとしての役割を求められることもあり、そのときは今でいう採用ブランディングの企画と実行を担当していました。クライアントは大企業が中心で、彼の役割も、採用コンサルタントという肩書きで語られるようなものが増えていきました。

しかし、仕事にのめり込むうちに、彼はその仕事が誰のためになっているのかよくわからなくなりました。サポートした会社で、若年層の早期辞職などが相次ぐと、心が痛みます。「3年後、半分残れば御の字だ」と言われても、どうしても立ち去った残りの半分が気になります。「お客さまは誰か？」という自問に、答えを出せなくなったのです。悩んだ彼は辞職し、しばらくは暇つぶしにブログを書いて過ごし、家族で海外に移住することに決めました。しかし人材領域の仕事には愛着があり、今後の仕事のスタイルを模索する毎日でした。

先日あった時に久しぶりに仕事の話をすると、彼はこれから目指すべき仕事のスタイルにようやく出会えたと笑っていました。社員数が百名くらいまでの中小企業の採用ブランディングを手掛けていきたいのだと言います。中小企業の人事部に、採用ブランディングの重要性を理解させ、自分たち自身でブランディングをしてもらう。本当に手伝う価値がある会社かどうか、選定に時間をかけて、その会社の成長に、人事部員を育てるという形でとことん付き合う。彼はコンサルティングをしたいのではなく、その取り組みに寄り添うコーチであり続けたいのだと言いました。

▼　▼　▼

就活生が選ぶ人気企業ランキング、という統計データが毎年、関係者の間だけで注目を浴びます。そもそも「一度も社会人として働いたことがない人の人気企業ランキング」に何の意味があるのかがよくわかりません。「ラーメンを食べたことのない人の人気店ランキング」と同じだからです。そのため、結果も実に不思議なもので、やたらと旅行関係の会社が上位にランキングされます。就活が終わったら卒業旅行でお世話になることを見越して、息抜きにパンフレットを見まくっているからなのでしょうか。

しかし、これを採用ブランディングの参考資料と捉える企業も多く、特に例年上位にランキングされる企業の人事部は、気にしないフリをしながら、結果がとても気になるデータです。

ある年、大手の損害保険会社がこのランキング順位を一気に落としたことがありました。原因はわかりません。特にメディアを賑わすようなマイナスな事件があったわけでもありません。しかし、このランキング結果は学生のエントリー数に影響を与えることもあり（上位企業はとりあえずエントリーだけ、という人も含め確実に増える）、経営陣は危機感を覚えたらしく、翌年、上位奪還を掲げ、けた違いの予算を投下するコンペが開かれました。色めきだった制作会社が、我先にとドッと押し寄せたと聞きます。

▼　▼　▼

「プロ学生」や「イノベーター新卒生」とラベルされるような就活生が人気です。学生の間では「意識高い系」とくくられるような存在で、入社した会社に何らかの新風を吹き込んでくれることを期待される人材です。

これまでの延長にこの先のビジネスは存在しない、と言われる時代に、一から道を切り開いていける、いい意味で破壊志向のある就活生が、求めてられています。しかし一方で、そのような人材は、採用しても定着が難しいという声もよく聞きます。

採用ブランディングに予算をかけ、いい意味で尖った人材に内定を出し、苦労して入社させるもののすぐに退職してしまう。これは育成プランの精度が低いためではないかと思います。「これまでの延長にこの先のビジネスが存在しない」ということは、「これまでの経験に裏打ちされたアドバイスはほとんど通用しない」ということでもあります。このジレンマに良き打ち手がなく、入社後、想像の範囲内でのクリエイティブ研修や、オン・ザ・ジョブトレーニングを重ねていくことで、本人のモチベーションはどんどん下がっていきます。その結果、尖った人材は早期離職し、柔軟性のある人材は風土に馴染み、やがて「若者に元気がない」という、お決まりのセリフが社内で飛びかいます。

▼　▼　▼

2017 年 3 月 1 日。今年もまた、大学生の企業エントリー解禁日を迎えました。就職メディアを見ていると、各社が知恵を絞った「採用キャッチフレーズ」や「他社との差別化ポイント」が求人広告内に踊ります。

一方で、「プロ学生」や「イノベーター新卒生」はこんなものは見ていない、と割り切り、就職メディアを使わない採用活動にシフトしようとする企業もあらわれ始めました。その流れを受けて、偏差値上位校の在校生や卒業生が、自校の学生に登録を促し、人材紹介ビジネスに乗り出すケースが増えてきたように思います。この「新卒紹介」のビジネスは、

大学生のデータベースを持ったところが優位に立ちますから、ほかにも続く企業が出てきそうです。現在の就職メディアは、「大学 3 年生に、自ら登録してもらわないといけない」ことが、弱みです。今は「登録しないと仕方ない」からしているのであって、できればこんな面倒なことは避けたいのが本音。そこに、つけ入る隙があるというわけです。戦いは続きます。

文／だん・あそぶ
「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開している。

カウンセリングのお作法　第十回

CON(こん)カウンセリンオフィス中島　中島(なかじま)みずとり弘美

家族を支援する具体的なスキル　家族へのメッセージ

家族へのメッセージ

カウンセラーは、支援を必要としている家族をどうやって元気にしていくのでしょうか。

そんなシンプルな疑問があります。

カウンセリングにやってきた家族が、カウンセラーの問いかけに応じながら現状のさまざまを語ります。そのあと、カウンセラーがどのようなことをしているのでしょう。

今回は、カウンセリング技法についての話です。

魔法の言葉？

カウンセラーは、だれもが元気になる魔法のような言葉を知っていると、思われているようです。とにかく、何か特別なことを伝えているイメージがあります。

魔法ではないのだけれど、カウンセラーが持っている技術があるとすれば、それは家族が問題だとか大変だとかを表現している状態に対してさまざまな角度からとらえる、柔軟なものの見方です。

その上で、家族へメッセージを伝えることになりますが、その前に大切なことは、話をきいて理解したことをていねいに確認することが欠かせません。

理解したことを伝える

「いま、お話しされたことは、〇〇〇ということですね」

と把握した事実を言葉にして、聞きもらしはないか、聞き違いはないか、お互いに確認します。

今日、カウンセリングに来られたのは、息子さんのことで、学校を休んでいること、家にいるときは、元気だけれど、朝になったら登校できない。これまで、話し合いをして特に思いあたることはない。そのことで大変お困りになっていることがわかりました。

家族の話した言葉をつかって、総まとめをします。

しっかりと聴いていないと行き違いが起こり、信頼関係を築くことができません。

家族が何を伝えようとしているのかを正確に受け止めてまとめます。

家族へのメッセージ

理解したことを伝える

はてな子さん　カウンセリング初学者

ＣＯＮ子さん　心理カウンセラー

カウンセラーは面接のときにどんなことを家族に伝えているのですか？

カウンセラーの言葉で、気持ちがとても楽になったり、安心したりすると思うのです。魔法の言葉のような、何か特別なメッセージがあるとしたら、学んでみたいです。

どのようなメッセージを家族に伝えているのかに興味があるのですね。

だれでもすぐに元気になるような魔法の言葉があるわけではないのですが、家族が問題だとか大変だとか表現している状態に対して、柔軟なものの見方を持つことが求められます。

その上で、家族へメッセージを伝えることになります。たとえば肯定的意味づけです。

何か、新しいことを伝えるよりも、まずはカウンセラーが家族の話を聴いて、理解したことやわかったことを伝えるのが大切なのですね。

それと、なにより、柔軟なものの見方を持っておくことですね。

メッセージが、ときには、家族にフィットしない場合もあります。

私たちのことをわかっていないと信頼関係まで危うくなります。

家族が何を伝えたがっているのかを想像しながら、言葉そのものを大切に聴き、今日のお話では〇〇ということがわかりましたと、家族について理解したことを確認しながら伝えることが欠かせません。

家族を支援する具体的なスキル

リフレイミング　リラベリング　ポジティヴコノテーション

リフレイミング肯定的な意味づけ

さまざまな面接場面で用いられている技法のひとつにリフレイミングがあります。よく似た技法にリラベリングやポジティヴコノテーションがあります。

リフレイミングとは、現在問題だと感じられている課題や症状、行動や状況について、これまでとは異なる見方、新たな枠組みをつけることです。

同じ事象でも、ラベルを貼り直すことで、新たな意味を見い出す＝これをリラベリングといいます。ラベルの張り替えです。

クライエントご本人や家族が納得して、受け止められるような肯定的な意味をつける＝ポジティヴコノテーションといい、ものの見方を転換することで、行動変化につながることをねらいとします。

これらの技法の中で現在、もっとも用いられている名称は、リフレイミングですが、目的とするところは、三つとも同じです。

例をあげて考えてみましょう。

不登校状態にある子どもが、家族と話し合いをして、終業式だけは行ってみようと決心しました。しかし、目標とする登校日が近づくにつれて落ち着かない様子です。

「あんなに神経質になっているからいろんな事が出来ないのだ」

と家族が語ったとしたら、あなたがカウンセラーならどう対応しますか？

神経質になっているように感じるのですね。と家族が話した言葉を受けとめながら、これは登校を真剣に考えている証拠ですと、伝えます。家族の反応を確かめながら、ほかに登校に向けて子どもさんなりに、真剣に考えていると感じられることは何かありませんかと？問いかけます。

神経質　↓　真剣に考える

どのようなメッセージが家族に最もフィットするかを考えつつ変化につながるようにかかわります。家族に受けとめられるか見極めがむずかしいところですが、大切なのは、ものの見方の柔軟性です。

リフレイミング　肯定的な意味に置き換える表現

リフレイミング reframing 再び枠組をつける	ポジティヴコノテーション positive connotation 肯定的意味づけ
家族の中で、問題とされる課題や症状、行動や状況について、これまでとは異なる枠組みを新たにつけなおし、同じ事象に対して異なる見方を示すこと **リラベリング relabeling** =再びラベルを貼るという言い方もある	現在、家族が問題だと感じて抱えている課題や症状、行動や状況に対する受け入れがたい思いに対して、カウンセラーが肯定的な意味づけを行うことで、家族それぞれのものの見方に変化をもたらそうとすること ネガティヴからポジティヴへ

家族を支援する具体的なスキル

柔軟なものの見方　メッセージを伝えるときの注意

メッセージは聴くことよりも大切？

カウンセリングを学びはじめたころは、クライエントさんの話をしっかり聴く重要さよりも、カウンセラーが何をクライエントに伝えるのかに関心が向きがちです。

技法を知るとすぐにそれを用いるのは問題があるかもしれません。

今回、リフレイミングを学んだ途端に、試してみたくなるのかもしれませんが、メッセージはときに、家族にフィットしない場合があり、そのときは、信頼関係が危うくなることもあります。

届かないメッセージ

ものごとを前向きに考えましょう

最近は、折に触れてそのようにいわれていますが、前向きにとらえられないからこそ、回復できないといった場合もあります。

困っているご本人や家族にとって安心ができ、納得できるメッセージがもとめられます。

私たち家族のことをわかっていない

信頼関係を築くのは積み重ねが必要ですが、関係が崩れるときは一瞬です。

大きな意味を持つメッセージは、影響が大きいからこそ効果的ですが、マイナス面があることも心得ておく必要があります。

子どものことを心配しているから神経質だといったけれど、話したことを否定されているがしたとか、子どものことを一番よくわかっているのは、親なのに、批判されたという対立感情がわくなど、家族が受け止められない場合もあります。

家族の表現を重視

リフレイミングは頻繁に使いすぎると意味が薄れます。また、言い換えばかりしていると、家族が気付くチャンスを逃すかもしれないので、家族の後からそっとついていくぐらいのペースが適切です。

面接のときはできるだけ家族の使う表現を重視することです。

あなたが入院することになったら、どんな心境？

さまざまな角度から入院を考えてみましょう

リフレイミングの例

生活習慣を見直す機会

全集読破できる特別休暇

家族へ改めて感謝

コミュニティ心理学を考える

3

― Martin-Baro 基金 ―

藤 信子

1989 年 11 月 Martin-Baro 達がエルサルヴァドル政府軍によって惨殺されたが、翌年の 1990 年に彼の同僚や友人達によって、中断された彼の仕事を継続する授業として「精神保健と人権のための Ignacio Martin-Baro 基金」（以下，基金とする）が設立されたことは前回の最後に書いた。今回はこの基金について、成立から２５年間の交付金の記録を見ることで、精神保健と人権に関する Martin-Baro の解放の心理学の考え方と、それが引き継がれている例を紹介している文献（Lykes, M. B. & Sibley, E. 2014）を概観することで、心的外傷（トラウマ）の問題は個人の治療というアプローチに終わるものではなく、コミュニティ全体と関連するものであるということを確かめたい。

Martin-Baro の解放の心理学の考え方は、心的外傷の再概念化によく表れていると言え

るだろう。トラウマはひどい人権侵害の文脈において生じるという彼の再概念化は、戦闘から生じる状況にも寄与した。それまでの周辺化された人々の無力感を緩和する最も効果的な方法は「現実を変えるように人々に自信を持たせること」であると言う考えによく表れていると言える。なぜなら「権力の無い人々が常に犠牲者は生まれつきの欠陥があると指摘することによる結果として生じる精神病理学を説明する権力のある経済的な集団」というところの心理学を批判していたからである。そして市民権を剥奪され周辺化された人々の個人の責任にする論考の中で，彼らの抑圧に寄与している構造的要因を分析する中で、心理社会的外傷への個人的アプローチに代わるプロセスを進めた。

基金は組織的暴力、圧制、そして社会的不正義によって影響を受けたコミュニティでの心理学的福利、社会的意識、そして積極的な抵抗を促進するプログラムを支援しようと努めている。特にコミュニティが彼らが周辺化された基礎にある構造的原因を分析し、暴力の影響を癒やすことを目指すための蓄積された細心な計画が生じることを支援する。小規模の，草の根のコミュニティを基盤としたもので、その多くはアメリカ合衆国の外部のものを支援した。アメリカ合衆国はエルサルヴァドルの人々に対する野蛮な攻撃に加担し、Martin-Baro とその同僚の神父達、家政婦屠その娘を暗殺したので、基金は合衆国の政治的、軍事的政策とその実践に同じように悪影響を与えられている人たちのコミュニティを優先させている。この言及を見たときに、だとしたら沖縄でのプロジェクトを立ち上げて基金に応募できるのではないかと思った。少なくとも今までは、日本のプロジェクトが基金をもらったことはない。アジアで基金を多く受け取っている国はフィリピンである。２５年間に 23 件のプロジェクトが支援を受けている。この数はグアテマラの 29 件、エルサルヴァドルの 27 件に続いている。あと目立つのはメキシコの 18 件、アメリカ合衆国の 13 件、ペルーの９件、パキスタン６件。アフリカ、アジア（フィリピン、韓国)、南アジア（インド、パキスタン）東南アジア（カンボジア、タイ)、ヨーロッパ、中東、北アメリカ、中央アメリカ、カリブ諸国、南アメリカの 32 カ国に広がっている。

供給者（調達者、プロバイダーをどういえばいいだろう）は訓練されたその地方のファシリテーターが多く、続くのはソーシャルワーカー、サイコロジストなどである。どのような人口統計上の集団が目標として設定されたかは、女性・少女、子どもあるいは青年、大人、囚人などとなっている。サバイバーの種類としては、戦争に関連する心的外傷、経済的抑圧と暴力、性的暴力、災害などのよるもの。

問題は、武装闘争、極端な貧困、政治的問題、コミュニティの崩壊、自尊心の低さ、差

別、恐怖、レイプ、ドメスティック・バイオレンス、拷問、罪悪感/恥辱、アルコールあるいは物質依存、飢え、うつ、児童虐待、記憶/真実を語ること、などとなっている。活動の様式は、グループ活動、参加型のワークショップが 80%を超える率であり、個人を対象、政治的アドヴォカシーと組織化などが続く。援助や資源のタイプは、健康の推進者やコミュニティのファシリテーターのトレーニング、グループあるいは家族カウンセリング、精神保健のワークショップ、コミュニティの組織化、個人カウンセリング、教育・ヘルスケア・法律の援助へのアクセスを助ける、子どもあるいは青年の教育やレクリエーションの援助、アート（ドラマ、文化的催し物，音楽），人権侵害の文書による証拠固め、政治的アドヴァカシー、農業のトレーニング、基本的な物質とニーズ、平和と和解のプログラム、少額融資（マイクロクレジット）プログラム、記念式/モニュメントなどがある。

期待される結果あるいは目標は、精神保健の促進、エンパワメント/自尊心の改善、人権/女性〉の〉問題への認識を高める、治癒、コミュニティの組織化､具体的なスキルの発達、リーダーシップのスキルの発展、歴史的/ 文化的な理解の発展、平和の文化の推進、健康な子どもの発達を助成する、正義を求める、自己理解の展開、過去を思い出す、真実を語る文書､モニュメントあるいは他の記念物(博物館など)。

こうして見ると，人々が自信を持ち、健康で，人権を守られて生きることは、個人を対象とする問題ではなく、コミュニティを基礎として、そこで生きる人、そのために働く人を育てるというイメージが見えてくる。

文献

Lykes, M. B. & Sibley, E. (2014) Liberation Psychology and Pragmatic Solidarity: North – South Collaboration Through The Ignacio Matin-Baro Fund. *Jurnal of Peace Psychology.* 20(3), 209-226.

蟷螂の斧

次の一歩

社会システムを変える

第４回

ユーモアエクスプレスｋ．ｋ．　＆　ぼむ

団　士郎

「小さな変化」が悩ましいのは、結果が必ずしもその後の事態に影響力が強くないからである。千里の道も一歩から等と慰めてはみても、千里に一歩はあまりにも小さい。それでも一歩は,システム論的には大きな一歩であると思おうとする。システム論的に考えるとは、そういうことだからだ。

この世界には、いくら事実を突きつけられようと、信念を変える気がない人がいる。事実をものともしない信念、主観的見解を変える気がない人にはどう立ち向かえばいいのだろうと思ってしまう。だがこれからの変化は、そこにこそ処方されなければならない。正しい事実で、他人の誤った信念を上書きできると考えるのはもう、ほどほどにしておかなければならない。そんなものは、「屁理屈は負けない」の言葉通り、その人の前では無力だ。

より適切な次の一歩に踏み出せた道筋だけが、良き道だと自覚することが大切である。これをリアリズムと呼ぼう。とはいえ、現実に対してあまりにも無力な事態が続くと、手のひらを返したように効果、効力を求めたくなるのは人の常だ。その結果、浮き足立ったように証拠や結果を出すことに世の中が傾斜してゆく。すると、当然のごとく、その成果や証拠が愚にもつかない事ばかりで･･･と言う状況が登場する。

この傾向を当然だと論ずるのではなく、私達はなぜ結果の出ないことにこんなにも弱いのだろうと考えてみることは大切だ。エビデンスを喧伝する心情は、こういった意識からの派生物で、それほど合理科学的でもない。大昔から言うではないか、桃栗三年、柿八年。結実にはそれなりの時間がかかるものだ。

*

とはいえ、最近の社会事象を見渡せば、2 万人超えとまだまだ多いが、自殺者数は順調に減少に転じているから、取り組みの是を証明している。交通事故死者も10年前と比べると、確実に減少している。

一方、不登校は、専門職はどんどん増えているのに、不登校児童数も増えているので非だ。児童虐待も、死亡実数ではなく、通報数などを数えて増やして,騒いでいる限り非である。目に見える事実にはもっと謙虚に軌道修正すべきである。

悪しき成果主義とは別に、費用対効果の合理性は一定論じられなければならない。全体に目を閉じてしまった各論の原理主義者のような専門性主張には、この世界への貢献度は期待できない。そして用心しておかなければならないが、実はその現状こそが手に入れたかった到達点だという業界もある。新薬は売れないと困る。そのためには該当する病人の確保が必須だ。売れ行き好調な医薬品はよく効くからだけではなく、マーケットが拡大していることも表している。

会社を創る

ユーモアエクスプレスk.k.は 1998 年、漫画家7人と税理士で起こした漫画配信サービスの会社である。イメージは漫画版「共同通信社」。米国ではオリオンプレス c.等が有名だった。

主旨としては、我々の描くヒトコマ漫画原稿を、小さなメディアでもいいから掲載の機会を増やす。そして少額でも原稿料をいただく。自分たちで漫画家としての仕事を開拓するという主旨のものだった。

世界はいつもそうだが、あとから参入する者にとって既存システムは壁に囲われたゾーンである。その中に受け入れられるか、はねられるかで、自分たちの人生が決まってしまうところもある。

漫画家のように個性、才能といった曖昧なものが基準の世界では、編集者の誰かに気に入られるか、そうではないかによって決まってしまう事も少なくない。

「本当に才能のある人は、そんなことをせずとも必ず芽を出す。そうでない者など、所詮二流なのだ！」、なんて評論家的言いぐさもあるが、それは小さな才能の者を蹴散らす以上に、何の役にも立ちはしない。こういう意地の悪い言いぐさは、これまでたくさんの芽を踏みつぶしてきたし、とても権威主義的だと私は思っている。

漫画家として、もう少し主体性を持って仕事をしたいと考えたのは、それ程思い上がったことではなかっただろう。しかし確立した業界はちょっとやそっとでは変化しない。ごく一部の者に門戸を開き、多数の希望者には閉じることで既存システムを維持にかかる。

そこには日本の出版システムという、漫画作品とは関係のない「業界」の現実が広がっていた。

大手出版社、漫画雑誌業界、大手新聞社から地方紙、雑誌メディアと様々に媒体は存在したが、新たにそこに参入したいと願う多数の若い漫画家に対して、ルールはあきれるくらい昔から同じだった。

*

ここで一言、最近の状況を。

私の時代は確かにそうだったが、現在は少しマンガを取り巻く状況が異なっている。コミケ（コミック　マーケット）の拡大だ。このマンガ同人誌の一大イベントの動員力はすごいらしく、マンガ好き（オタク達？）が制作し、販売し、ファンを作り、マーケットを作っている。

当然表現に関する自由度も高く、細かいことは知らないオヤジ世代から見て、様変わりの印象はある。少なくとも出版文化のヒエラルキーの中で下位に位置づけられていた「マンガ」からは解放されている。一部の大ヒットコミックスが商品になるのに並行して、地産地消のような自主制作マーケットも拓かれたのは好ましい。

今回ここで述べる私たちのとは全く違った展開が、マンガ市場において花開いたことに驚きは隠せない。

また、大ヒット漫画「ブラックジャックによろしく」の作者は、自分でもっと自由にネットによるマーケット開拓をしようとし、出版社とぶつかって苦労した顛末を書いて出版している。

詳細を正確に把握しているわけではないが、漫画家に対する日本社会の扱いも、明らかに世界標準からずれている。あちこちの国を旅して驚くことの一つが、どこの国にも日本の漫画が翻訳されて出版されていることだ。コスプレや日本ブームなども合わさった広がりや価値を、諸外国から教えられている始末だ。これって、本当に変わらないパターンだ。

プロ漫画家へ

初めて新聞に自分の漫画が掲載され、原稿料を受け取ったのは、大学四年の7月頃だった。

その頃、私は就職活動の健康診断で胸に影があると言われ、断層写真撮影の結果、結核と診断された。結核はもう治る病気になっていたので、病そのものの不安などはなかった。しかし結果、まず半年の治療と安静の生活を強いられた。

想像もしないことだったが、身近なところで父が、結核の診断を受け堺市の病院に入院中だった。4 人家族だった一家の男二人に、結核の診断がくだった。妹は高校を卒業後銀行に勤務。母は専業主婦だった。

それまでも好きで描いていたマンガだったし、高校、大学とマンガ研究会にも属していた。しかし漫画家になろう等という気はさらさらなく、楽しんで青焼きコピー誌を作成したりしていた。

漫画家の卵などと称される、絵のうまい友人、知人は山ほどいた。中にはデビューして漫画家として活躍していった人もあった。

四十年以上前の話だが、大阪新聞のヒトコママンガ連載を、篠原ユキオと三人で交代に担当していて、しょっちゅう作品原稿を見ていたのは、たしか「バイトくん」を描く直前の関大生「いしいひさいち」さんだ。

偉そうに私達は、「彼はヒトコマは向いていないよね」等と言っていた。（これは蛇足の自慢話）

きっかけ

始まりは産経新聞の投稿マンガコーナー欄。病気安静時間の退屈しのぎに投稿してみたら思いがけず直ぐ掲載された。2222 円（手取り 2000 円）の原稿料が郵便為替で送られてきて、それを換金すると、自宅で安静にしていてバイト料が入ってくる感じだった。（当時、工場で一日バイトすると、おおむね 1800 円くらいもらえた）

味をしめて毎週投稿したが毎回掲載されるわけではなかった。でも、それが励みになって数ヶ月続けていると、秋も終わり頃、新聞社から連絡があった。

「一度、編集部に来てください」という。何だか分からない期待に、結核患者ではあるのだが、見た目に分かることもないので、堂々と大阪梅田の産経新聞本社ビルに出向いた。

そこで、学生マンガ作家達と共同の連載をやらないかと打診された。自信があったわけではないが、大喜びで引き受けたのが、プロ漫画家としてのスタートだった。

ここで長い長いつきあいになる漫画家（現・京都精華大学漫画学科教授）の篠原ユキオと出会った。

それ以降ずっと、産経新聞、朝日新聞、タブロイド紙、業界紙、タウン誌やミニコミ誌、社内誌等に様々な企画で描かせて貰った。子供服のデザイン画として、シリーズ商品がスーパーの衣料品売り場に並んだこともあった。

しかしこれらすべては、先方から打診があって、企画会議を経て、連載、掲載、制作にこぎつけたものである。一定期間が過ぎると何かの理由で終了する。

無論ごく一握りの漫画家は、何十年にもわたって新聞の 4 コマ漫画や週刊誌の連載をする。しかし多くの漫画家の仕事は、始まってやがて終了する。そして編集担当者は人事異動で出世したり退職したりする。新しい担当者は独自色を出したくなって、前任者の人脈の作家や漫画家は一新されたりする。

この担当編集者はサラリーマンである。私は心理職地方公務員と漫画家の二足わらじの期間が長かったから、このあたりのアヤが両面から分かる。自由業のマンガ家にとって、サラリーマン編集者はしばしば、慇懃無礼な権力者だった。

ユーモア エクスプレス K. K.

自分の漫画を掲載する場を、自分で開拓する。これはいわゆる売り込みとは一線を画している。あちこちに自分の漫画原稿を持ち込むだけだったら、一般の営業活動と差はない。

ここで考えてチャレンジしたことが、この連載「社会システムの変化」志向と重なっている。

私が考えていたのは、この時点で形成されていた日本の漫画家業界仕事の枠組みを、隙間産業的に少し開拓することだった。

限られた掲載機会の誌面、紙面を多数の漫画家が取り合うのではなく、新たな市場を切り拓こうと考えた。この発想の源に、よく知っていたわけではないが、アメリカの配信社システムがあった。

近年、凋落の一途だと聞くが、アメリカの新聞発行部数は元々、読売、朝日等の日本の新聞のように500万部、600万部発行なんてことはないらしい。

日本の二倍の国民を抱える米国で、トップファイブにはいる NY タイムスだって200万部程度。広いアメリカ各地に存在する地方紙の発行部数は何十万部、もっと小規模なエリア新聞も数多く、全土に散在している。（現在はネットニュースに押されて凋落の一

途らしいが）

しかし地元紙だって紙面には著名コラムも欲しいし、マンガも欲しい。ローカルだからと、地元ネタ、地元民しか登場しないというわけにはいかない。全国ニュースも掲載しなければ、新聞とはいえない。そこで、通信社システムが発達する。

通信社が配信する原稿を、アメリカ全土のあちこちのメディアが掲載契約で購入する。

昔の日本の雑誌、漫画誌（マンガ読本）などにも、一コマ漫画はアメリカのオリオンプレス c.等と明示されたものをよく見かけた。

こんなことを書いているが、今にして思うと、正確に米国の配信システムを調べたわけでも、参考にしたわけでもなかったことに思い至る。しかしあの頃は、思いついたアイデアに惚れ込んでしまっていた。

この仕組みを日本で展開すれば、朝日、読売、毎日、日経、サンケイなどの大新聞や、マガジン、サンデー，チャンピオンなどの少年週刊誌の連載を競い合うようなことをしなくて良い。

一方、中小メディアの側は、時事漫画、風刺漫画などを、比較的安価にオリジナルで掲載することが出来る。一誌の原稿料は安くとも、掲載紙・誌が増えれば、一枚の原稿で一定額の収入が見込める。この着想はなかなか理に適ったものだと考えた。

しかし実際は、なかなかこの発想は日本社会に受け入れてもらえなかった。いや、興味すら持ってもらえなかった。当時流行していたタウン誌にDMを作って、売り込みをかけたことがあったが、全く関心も持ってもらえなかった。DMは3パーセント反応があれば上出来だと聞かされた。100送って三つレスポンスがあれば上出来。それと契約に結びつくのとは別である。実際、あまりにも反応がないので、「ミニコミのくせに、大出版社きどりか！」と心の中で悪態をついていた。

一緒にマンガを描き続けているグループ「ぼむ」のメンバーにこの話をしてを口説くと、了解度はともかく、みんなで会社を設立するのは面白そうだと賛同してくれた。そして全員が出資者・役員の、ユーモアエクスプレス k.k.が発足した。

だが、それまでにない仕組みを作って、仕事に結実させて、発展させていくだけの動きを我々は持たなかった。意図を理解して営業活動する者が誰もなかったのだ。所詮皆、漫画家、作家であった。

だからユーモアエクスプレス k.k.は名前だけの株式会社で、僅かな連載契約と決算が主な仕事の会社だった。（やがて商法改正などのあおりも受けて、有限会社に縮小し、篠原ユキオの個人会社になった）

ぼむ

マンガ家集団ぼむのことを説明しておかなければならない。このグループは先述した産経新聞ヤング面の連載をきっかけに生まれた。

新聞にヒトコマ漫画を連載することになったメンバーが集まって、漫画同人を創ろうと話し合った。大阪.阪急東通り商店街にあった喫茶店Nuでその集まりはスタートした。そこでグループに名前をつけようと思案した中からきまった「ぼむ」に、特に意味はなかった。

最初の活動としてヒトコマ漫画紙「ぼむ」の発行（たしか1970年のことだ）と、パネル漫画展を京都北白川のギャラリー喫茶店、同志社大学学生会館ギャラリー、そして大阪梅田の ASAHI ビヤホール展示壁でおこなった。

篠原ユキオ、山口博史、安芸ヒロシと私。皆就職していて、私だけが病気留年していたため、実働部隊は一人だった。

それから今日（2017年）に至るまで、大阪現代画廊で「ぼむ」展を30年以上、一旦終えたパネル漫画展がまた京都で再開した。月例ミーティングは40年以上、現在も継続している。

篠原ユキオ、国府弘昌、外村晋一郎、柳たかを、ののぐちさとる、カワキタカズヒロ、桂べかこ（後に南光）が、長期継続メンバーで現在に至る。

木陰の物語　連載

時期は前後するのだが、当時すでに連載していたものを、新会社を通して受注することで、一定額の会社への留保もおこない、営業活動もしようとはしていた。しかしメンバーの仕事が増えていくことはなく、細々と会社

を維持してゆく感じだった。
「木陰の物語」は大阪/少年補導協会の機関誌「少年補導」（その後、誌名変更で「少年育成」）誌に連載していた「子ども旅」の連載が完結する頃に、珍しく新企画として編集者に持込んだものである。
それまで 2 ページ見開きで連載していたものを、4 ページの一話読み切り作品にしたいと提案した。当時の松宮編集長の回答は原稿料据え置きで良ければ、ページ拡大は可能だとのこと。ここから今に至る連載がスタートした。現在第 205 話。月刊誌だから 17 年目になる。このコンテンツがその後、様々な条件の変化の中で発展していくことになった。

連載漫画の成り立ち方

よほど恵まれた条件が整わないと、長期連載は叶わない。まず読者の支持がないと当然だめだ。「ワンピース」や「サザエさん」、「こち亀」、「ゴルゴ13」のような作品は希である。多くの作品が年度末、紙面刷新、編集長交代、休刊など、様々な理由で連載を終える。
ありがたいことに「木陰の物語」にそれはなかった。松宮編集長が退職になった時も、次の編集長から「引き続き、よろしく」と挨拶があった。
しかし思いがけない要因でこの連載は終了することになった。2010年度末（2011 年 3 月号）をもって雑誌そのものが休刊されたのである。
社会システムとはこういうものだという典型にも見えたので、そのエピソードを書いておく。
休刊(実際は廃刊)やむなしに至る原因の一つが総会屋対策の法律制定に関わっていたと聞いた。（裏はとっていないので、噂話）
「少年補導」誌（後に「少年育成」と改題）は大阪少年補導協会が発行する業界の小さな雑誌である。出版社が出す商業誌とは異なって、書店に並ぶことは少なく、もっぱら関係機関や業界公所における定期購読が販売基盤だった。
これと相似形の業態を形成していたのが総会屋である。「業界＊＊ジャーナル」などとタイトルした機関誌を名前だけ発行して、その定期購読料の名目で金銭を大手企業から受け取っていた。
企業の側は、あらぬ事(あることでも内密のこと)を書かれるくらいなら、定額を株主総会対策費として「購読料」の名目で納めていた方がベターという判断が働いていた。
総会屋に関わった不正や犯罪が表面化した時、この資金源を断つというので、この種の定期購読費の見直しが厳しく行われた。
そしてこれに類する多くの定期購読が廃止された。その余波を食らったのが「少年育成」誌だった。もともとそんなに発行数の多くはない月刊誌は、このあおりで幕を引くことになったと聞いた。そして私の連載も終えることになった。

連載終了≠執筆終了

この時、世間一般の連載終了＝執筆終了という事態を私に避けさせたのは、ユーモアエクスプレス方式であった。数は少なかったが、他でも「木陰の物語」を連載していたのである。原稿料はないに等しかったが、定期的に掲載され、それを楽しみにしてくれている人がいた。
それが私立幼稚園の園便りへの連載である。複数園で、一園あたりせいぜい100人～200人くらいの在園児が持ち帰るお便り。そこに掲載されている作品を読んでくれる読者があった。それがあるので、毎月描くことをやめようとは思わなかった。
各幼稚園と契約して、園誌に合わせたレイアウトで提供し、その手数料はエージェントに受け取ってもらう。そんな約束をしていた。だからミニコミ（園だより）に掲載されるものを私自身が目にすることはほぼない状態で2011年は連載が続いた。
（ユーモアエクスプレスkkもこれを目指していたのだが、この時点ではもう解散していた。そしてこの業態は、私の息子の会社の一部、ホンブロックkkが「木陰の物語」に関して展開中である）
振り返ってみると、このときの園誌連載は、必ずしも新作がいつも掲載されたのではない。私は描きたいものを描いていた。だから、幼稚園の保護者向けではないと言われる作品(たとえば、高齢者問題、障害者問題）も多

数あった。
　幼稚園の連載だから、幼稚園児が登場する話を、という考え方に私は賛同していない。家族は様々な構成メンバーがいる。幼児のいる家におばあちゃんも居ていろんな悩みを抱えているものだ。
　だが園によっては、それまでに描いていた150話以上の中から、幼稚園向きだと思える作品を選んで掲載することを希望したところもあって、それは承知した。
　2010年度末、つまり2011年3月というと、東日本大震災・津波・原発事故被災と時を同じくしていた。この大災害に向けた支援プログラムに、「木陰の物語」が絡んでくるのは、この直後の事である。
　そんな中、2011年の秋、東京の「ほんの森出版」の編集者からメールがあった。「少年育成」に連載されていた「木陰の物語」のファンだったが、読めなくなって残念に思っている。あの連載を私のところの月刊誌で再開できないかという打診だった。
　うれしい話だし、なかなかそんな機会はあるものではないので快諾した。そして翌年4月号から「月刊　学校教育相談」誌で連載が再開された。
　この時の契約も一誌独占掲載ではなく、競合しない他紙誌併載の可能性を了承してもらった。だから原稿料は安い。そして現在、「木陰の物語」が連載されている媒体は数多い。
　先ず、どこの書店でも手にすることのできるメジャーなものは、季刊「かぞくのじかん」婦人之友社。毎回二話掲載で二年目に入った。
　業界誌では「月刊　学校教育相談」が五年、「月刊　福祉」が三年、いずれも連載中。
　他に通販会社のPR紙で一社。
　そして、私立幼稚園の園便りへの連載。各園在籍園児数ほどの発行で、月刊のものが多い。これが七〇誌以上で掲載中である。子どもが持ち帰るものゆえ、保護者もかなりよく読んでくださっている。

配信連載多数

　このように最初にユーモア・エクスプレス構想で持ったイメージが、ほぼ実現されて今に至っている。しかし、こんな連載形式は日本のマンガ家では希だと思う。理にかなっていて、多くの人に読んでもらえる機会拡大になっていても、なかなか真似る人はいない。
　作品の善し悪しは読者が決めるし、長期連載になるかどうかを決めているのも読者だ。その一方で編集者が決めている面も確かにある。でも本当のところは、作家自身が決めるのだと思う。
　売れる、売れない、受ける、受けないを作者が決めることはできないが、継続しつづける根拠は作者自身の中にある。ある決意を持って作品を描き続けることだけが、そのものの社会的意味を醸成するのだと思う。

システム　リ・クリエーター

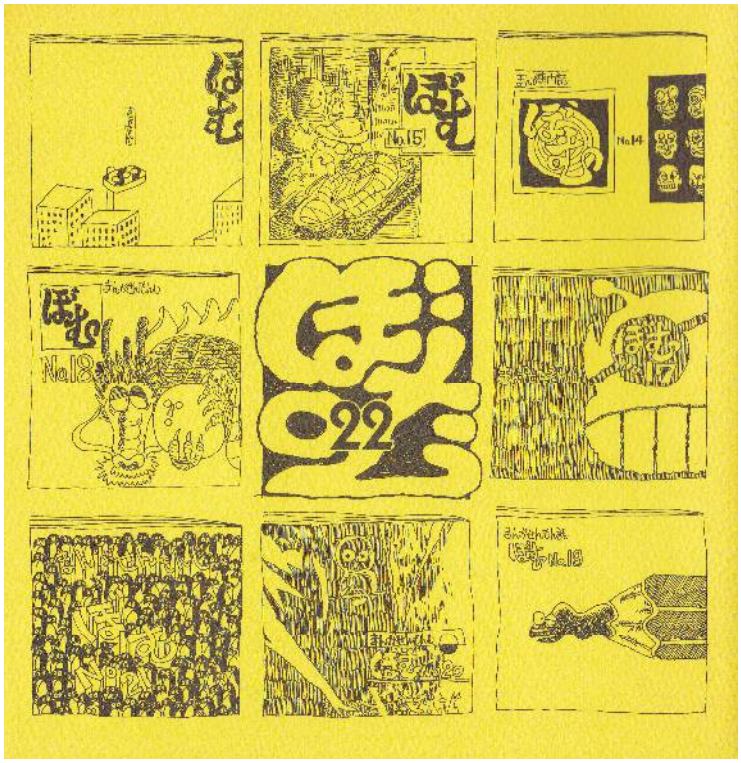
　こうして描き続けてきた作品が現在、世の中に広く届く。その突破口になったのは、私の息子の会社Asoblock　k.k.の仕事である。彼が運営する会社の中の一出版部門honblock　k.k.で、業務を担当してくれるスタッフがいる。
　そのおかげで、「家族の練習問題」（現在発行数第一巻1万5千部、第二巻1万部、第三巻以降5千部）～第六巻まで、継続発刊中だ。
　また、同じ第一巻が編集を加えて、ゴマブックス「新版　家族の練習問題」、講談社α文庫「家族の練習問題」としてメジャー発行もされている。
　一方、東日本大震災復興支援の一環として、2011年秋以来、毎年一万冊、非売品「木陰の物語」をN0.1～2016年No.6まで発行し、届けるプロジェクトも継続中である。同時に、福島、宮城、岩手、青森の被災地において、「木陰の物語・パネル漫画展を2011年から各地で毎年継続開催中である。
　被災者に向けたマンガの発信がどんな意味を持ち得るのかはわからない。こんな形で復興支援が出来ているのかどうか。それをマンガ家や漫画出版業界が決めることは出来ない。
　更に2017年2月には、大阪・地域生活定着支援センター発行で、刑務所を出所した高齢者、障害者を支援する人達のための冊子として、同じ出版方式のモノが作成された。

おわりに

日本社会における漫画の発行形式に少しチャレンジしてきた。それがマンガが果たせる役割を開拓するという、想定以上の一歩を刻んでくれている気がするこの頃だ。もっとも、これとて私の自己満足、自画自賛だと言われれば、そうではないと証拠立てるものはない。

ただ、売れてるかどうかだけ、依頼されるかどうかだけに漫画を描くことをゆだねないのは、私のメンタルヘルスにはきわめて良い。

マンガを描き続けるかどうかは、私が決めることであって、誰かが決めることではない。



学校臨床の新展開 27

― チーム学校？　チーム児童相談所？ ―

浦田　雅夫

京都造形芸術大学

チーム学校？

近頃、「チーム学校」という言葉を聞くことが多くありませんか？　コンビニやゲームセンターにたむろする若者がかつて「チーマー」とよばれていたのですが、学校で徒党を組む生徒のことをいうのではありません。

2015（平成 27）年 12 月に出された中央教育審議会「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」でのキーワードです。

少し長いですが、引用しておきます。

「近年，グローバル化や情報化が急速に進展し，社会が大きく変化し続ける中で，複雑化・困難化した課題に的確に対応するため，多くの組織では，組織外の人材や資源を活用しつつ，組織の力を高める取組が進んでいる。こうした中で，学校においても，子供を取り巻く状況の変化や複雑化・困難化した課題に向き合うため，教職員に加え，多様な背景を有する人材が各々の専門性に応じて，学校運営に参画することにより，学校の教育力・組織力を，より効果的に高めていくことがこれからの時代には不可欠である。現在，学習指導要領改訂の議論も進められているが，学校という場において子供が成長していく上で，教員に加えて，多様な価値観や経験を持った大人と接したり，議論したりすることは，より厚みのある経験を積むことができ，本当の意味での「生きる力」を定着させることにつながる。そのためにも，「チームとしての学校」が求められている。本答申は，そのような現状認識に基づき，今後の在るべき姿としての「チームとしての学校」と，それを実現していくための改善方策について示したものであり，その実現のために，国，教育委員会も「チームとして」取り組み，学校や校長を支援することが求められている。」

また「学校が，より困難度を増している生徒指導上の課題に対応していくためには，教職員が心理や福祉等の専門家や関係機関，地域と連携し，チームとして課題解決に取り組むことが必要である。例えば，子供たちの問題行動の背景には，多くの場合，子供たちの心の問題とともに，家庭，友人関

係，地域，学校など子供たちの置かれている環境の問題があり，子供たちの問題と環境の問題は複雑に絡み合っていることから，単に子供たちの問題行動のみに着目して対応するだけでは，問題はなかなか解決できない。学校現場で，より効果的に対応してことが重要である。さらに，いじめなど，子供たちの生命・身体や教育を受ける権利を脅かすような重大事案においては，校内の情報共有や，専門機関との連携が不足し，子供たちのＳＯＳが見過ごされていることいくためには，教員に加えて，心理の専門家であるカウンセラーや福祉の専門家であるソーシャルワーカーを活用し，子供たちの様々な情報を整理統合し，アセスメントやプランニングをした上で，教職員がチームで，問題を抱えた子供たちの支援を行うがある。校長のリーダーシップの下，チームを構成する個々人がそれぞれの立場や役割を認識しつつ，情報を共有し，課題に対応していく必要がある。」としています。

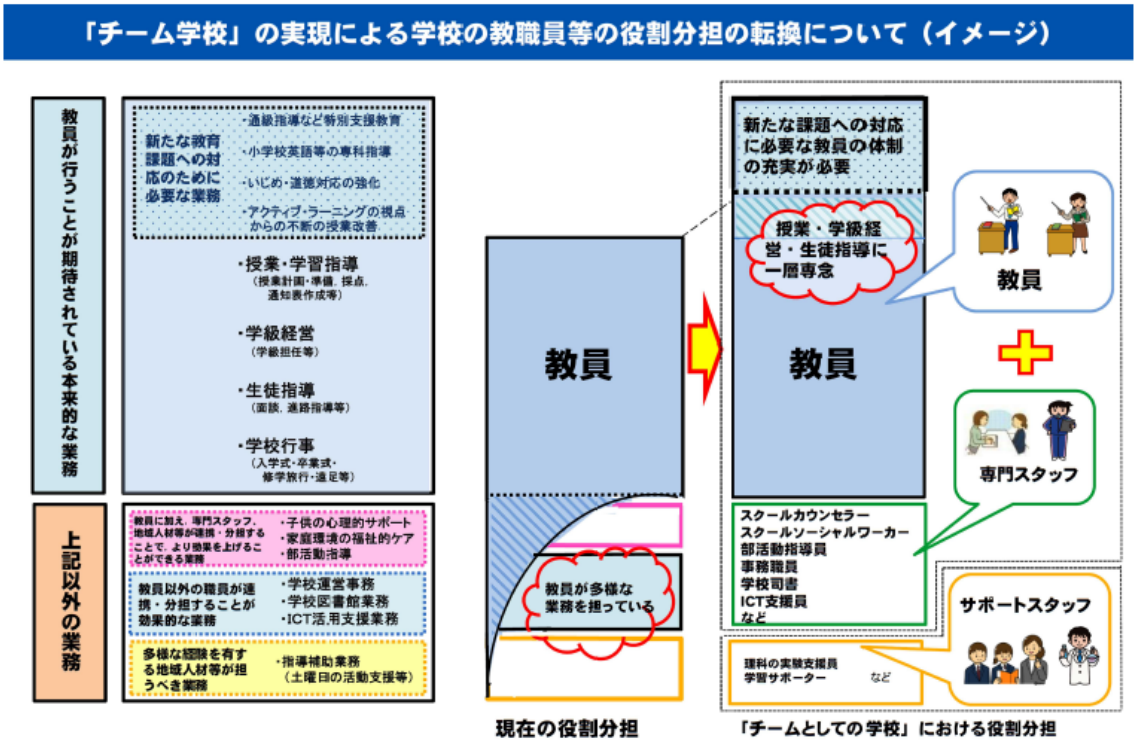


図１：チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（中教審答申）、2015（平成 27）年 12 月より引用

つまり、従来から日本では他国と比べて、教員の担うべき業務が多すぎるなか、近年、特に困難な生徒指導上の事象が多く発生し、教員は心理や福祉の専門職、関係機関や地域と協働して、「チームとして」事象の解決に向けて、取り組んでいかなければならないという指摘である。なお、この答申の前年 2014（平成 26）年には、「子どもの貧困対策に関する大綱」のなかで、学校は全ての子どもたちが集う場であるため、「プラットフォーム」として貧困問題等の発見、支援の拠点であると位置づけもされています。

さて、この連載では長年にわたり「学校臨床の新展開」として特にスクールソーシャルワーカーの導入について、述べてきましたが、もはや新しい展開ではなく、浸透しつつありますが、あらためて、スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーの違いをみたいと思います。

スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーの役割等

名称	スクールカウンセラー	スクールソーシャルワーカー
人材	児童生徒の臨床心理に関して高度に専門的な知識･経験を有する者	教育分野に関する知識に加えて、社会福祉等の専門的な知識や経験を有する者
主な資格等	臨床心理士、精神科医等	社会福祉士、精神保健福祉士等
手法	カウンセリング（子供の心のケア）	ソーシャルワーク（子供が置かれた環境（家庭、友人関係等）への働き掛け
配置	学校、教育委員会　等	教育委員会、学校　等
主な職務内容	①個々の児童生徒へのカウンセリング ②児童生徒への対応に関し、保護者･教職員への助言 ③事件･事故等の緊急対応における児童生徒等の心のケア ④教職員等に対する児童生徒へのカウンセリングマインドに関する研修活動 ⑤教員との協力の下、子供の心理的問題への予防的対応（ストレスチェック等）	①家庭環境や地域ボランティア団体への働き掛け ②個別ケースにおける福祉等の関係機関との連携･調整 ③要保護児童対策地域協議会や市町村の福祉相談体制との協働 ④教職員等への福祉制度の仕組みや活用等に関する研修活動 23

表 1：文部科学省初等中等教育局児童生徒課「学校における教育相談に関する資料」2015（平成 27）年より引用

2014（平成 26）年度のスクールカウンセラー配置校調査によりますと、7,344 人のスクールカウンセラーのうち 6,153 人（83.7%）が「臨床心理士」となっています。一方、スクールソーシャルワーカーは、近年、有資格者が増えましたとはいえ、「社会福祉士」が 47%、「精神保健福祉士」が 25.1%であり、依然として教員免許や心理職の資格のみという者も少なくありません。

また、スクールカウンセラーは「臨床心理士」の独占業務のようになっていますが、近年、心理職の国家資格化が決まり、関係諸団体も国家試験受験資格を得るための動きやスクールカウンセラーの任用要件を求める動きが盛んに行われており、今後は、多様な専門的資格を有する者がスクールカウンセラーに登用されることになるでしょう。

チーム児童相談所？

他の専門職の力を借りなければならない状況は児童相談所も同じです。年々、児童虐待対応件数は増加の一途ですが、法的手続きを迅速に求められる事案も多くなっています。そこで、2016（平成 28）年の児童福祉法改正を受け、児童相談所には弁護士の配置が進んでいます。しかし、常勤か非常勤かの規定はなく、「配置」に準ずる形も認められており、自治体の財政的な側面や力点にも差が出ています。

さて、学校に入ったスクールソーシャルワーカーと児童相談所に入った弁護士。福祉的、法的といった専門性の違いはありますが、どちらも共通して、子どもの最善の利益を問い、子どもの権利を擁護しアドボケイターとしての役割も担っています。子どもの立場に立ちきるワーカーや弁護士との出会いが、子どもたちの明日を拓く第一歩の転機になればと願っています。

（参考文献）

・文部科学省　中央教育審議会　「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」、2015（平成 27）年
・文部科学省初等中等教育局児童生徒課「学校における教育相談に関する資料」、2015（平成 27）年

不登校経験を持つ若者たちの
もう一つのキャリアパス

北村真也

第１章　キャリアって何？

2. 若者たちのキャリアプラン

3 年間のひきこもり生活から脱出した若者がいました。ほんの 2 年前まで毎日死ぬことしか考えていなかったという彼は、高校課程の学び直しということを通して、失いかけていた自分自身を再び取り戻し始めました。そして、知誠館の体験活動で毎年お世話になっている製菓教室の先生との出会いを通して、次第に自分もパティシエになることを決意するようになっていったのです。やがて彼は、昼間はホテルの製菓部で働きながら夜間に製菓専門学校へ通うという進路を選択しました。専門学校の学費も早朝からスーパーで働き、自分で工面していったといいます。わずか 2 年間という時間軸の中で、毎日死ぬことしか考えなかった彼の内面に生じた変化が、将来への可能性を一変させたのです。

また知誠館に通う生徒の中には、複数の学校を途中でやめた若者も少なくありません。ある生徒は、対人関係の緊張から教室に入れず、中学校は不登校、高校は 2 校を中途退学し、自宅のトイレにひきこもって自分の髪の毛を大量に抜くという行為を繰り返していました。そんな彼女も今年で知誠館を卒業し、管理栄養士をめざしていきます。20 歳になった彼女は、車の免許を取得し毎日休まず知誠館に通っているのです。あの毎日暗い顔をして蚊のなくような声でしか話せなかった彼女は、もうどこにもいなくなりました。

「2 年前の私に言ってやりたい。“あんたの 2 年後はこんな風になってるんやから、何をくよくよしてるんや”ってね」

そう笑顔で話す彼女の表情に、もはや昔の面影はありませんでした。

入口と出口。知誠館にやってきた若者と巣立っていく若者は、同じ人物とは思えないほどの違いがあります。そこが若者たちの変容の可能性なのです。だから若者たちのキャリア支援を考える時、そこに変容ののびしろを見ておくことはとても大事なことだと思います。毎日死ぬことばかり考えていた若者のキャリアプランと、パティシエになることを心から望んでいる若者のキャリアプランは、全く別人のようなものになっていくからです。それは、「2 年前の自分に言ってやりたい」と言っていたあの対人不安に苦しんでいた女の子や、不登校になることで自分の絵の才能を開花させてい

った女の子にもよく当てはまることなのです。

「キャリアプラン」という概念に「変容」という概念を重ねる時、そこに「学び」の概念が浮かび上がってきます。学びというものは、本来自分のキャリアへの可能性を拓くものです。知誠館に学ぶ若者たちは、ここで能動的な学びの世界を手に入れることで、自らのキャリア形成の方法を手に入れているのかもしれません。繰り返しになりますが、若者たちのキャリア支援の現場を考える時、目の前にいる現時点での若者の姿を想定して描くキャリアプランに果たしてどの程度の意味があるのかということを、一方では考えないといけないように思います。彼らの変容の可能性を絶えず考慮しながら、そのキャリアプランそのものも更新されるべきではないかと思うのです。固定されたキャリアプランに当事者たちの現状を当てはめていくのではなく、本人の変容に応じて自己更新できるような腰を据えたキャリアプランの構築が必要になってくると思うのです。

3. 誰のための支援なの？

大学在学中の就職活動でうまく企業の内定をもらえなかったアキラは、卒業と同時に市が主催する就労支援プログラムに参加していました。そしてプログラム終了後、どこにも就職することなく、大学院へと進学していったのです。そんなアキラは自分が受けてきた就労支援プログラムをこんな風に振り返ります。

「僕は半年間、このプログラムに参加しました。履歴書の書き方から、挨拶のしかた、面接のしかた、自己アピールのしかたと、次から次へといろんなプログラムがあったんですけど、最終的には、とりあえずどこかへ就職してください的な、そんなプレッシャーがあるんですね。とにかくどこかへ、どこでもいいし落ち着かせたいという意志が前面にでてくるんです。それがしんどくて、僕は最終的にはどこにも就職しなかったんですよ…」

研修を終えたアキラにとって、この研修はいったい誰のものだったのかということが、大きな問いとして残ったそうです。みんな言われるままに、次から次へといろんなプログラムに参加したそうですが、最後の方になってくると「どうして就職しようとしないのか？」という問いかけばかりで、就職への強いプレッシャーを感じたといいます。

このことを裏付ける話は、厚生労働省の委託事業である若者就労サポートセンターを運営する NPO 団体の関係者からも聞いたことがありました。そこには、行政による評価（アセスメント）の問題が存在しま

す。それによると半年間でこの NPO 自体がどの程度成果を出したかを相談者の就労数の実績で評価されるというのです。そしてそれが、翌年の助成を受ける際の審査の判断材料となるため、みんな一生懸命になって若者たちを就労させようとするのです。ただここで問題になるのは、そのことが必ず当事者である若者たちの意にかなうものとは限らなくなってしまうということです。例えば他の就労支援プログラムに参加しても評価のポイントになるし、高校中退者であればとりあえずどこかの通信制高校へ入学させる、これもまた実績としてカウントされていくそうです。つまり支援側は、当事者の意向よりも、評価のポイントになるキャリアを優先させてしまう危険性が出てしまうということになりかねないのです。

またこんな話も聞いたことがあります。このような評価の仕組みがあるため、NPO には、すぐに就労できる可能性を持った比較的問題の程度が軽い若者たちにきてほしいという意識が生まれてしまいます。このことは、逆に本当に支援が必要で、就労までに長い時間がかかりそうな若者たちが敬遠される危険性を含んでしまうということでもあるのです。そうなると今度は、いったい誰のための支援かということがわからなくなります。つまり当事者である若者たちのための支援なのか、あるいは、その NPO で働く人たちのための支援なのかという境界があいまいになってしまうのです。ある NPO の関係者は、NPO で働く職員には元当事者の若者たちも多くいるため、組織そのものが就労支援の受け皿になっているという事実をあげてこのことの正当性を主張するのですが、それではこの事業の本来の目的が曖昧になってしまうように思えます。

評価というものは怖いもので、こんな風に事業そのものの意味を喪失させてしまうような危険性を含んでしまいます。これは資金的な権限を行政が握っているため、ある意味で社会のパターナリズムが機能してしまっているケースともいえます。つまり社会そのものが NPO を管理し、その NPO が当事者たちを管理するという構造です。これでは、個人が社会に影響を与え、社会を動かしていくという相補的なダイナミズムが一向に生じないため、自動的に社会のパターナリズムが強化されてしまいます。大きな社会の力の中では、常に個人から社会と向かうベクトルを意識しないと、気がつけば個人、特に社会的弱者と呼ばれるような人たちが取り残されてしまうように思うのです。

ポスト近代は、家族や地域といった小さな社会が失われ、また、社会的なつながりが脆弱化し不安定になっていくイメージを持っています。言い換えるとそれは、社会の中にある空間と文化が一致できずに断片化されていく状況を作り出していると表現できるかもしれません。アンソニー・ギデンズが再帰的社会と呼んでいるように、社会への問いそのものが社会へと再帰していくので、その答えが大変不確実なものとなっていくのです。だからさまざまなものが予定調和に運ばなくなっていく危険性が高くなってしまうのです。

答えがない時代、その言い方は正確ではないかもしれません。その時々の答えは存在するのかもしれませんが、それが一定である保証がない時代、と言えるでしょうか。そんな時代だからこそ、若者たちが自分でそのキャリアを更新していけるような生き方が求められているように思うのです。定型的な与えられたキャリアを生きるのではなく、自分で自分の人生の文脈を描いていくようなキャリア形成が必要となっているのではないでしょうか。

『幼稚園の現場から』
28・月刊園だより

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

幼稚園からは保護者宛に年間100通以上お手紙が発行されます。　ちょっとした連絡や、急な連絡はメールが一般的になっていますが、いまだに園から発行する印刷物の量は減りません。そのため幼稚園にはプリンターやコピー機だけでなく印刷機は必須、人数の多い園は紙切り機や紙折り機も揃え、紙揃えや製本までしてくれるソーターまで備えている園もあります。

今回紹介するのは、園にある印刷機器を駆使して発行する「月刊園便り（冊子）」です。原町幼稚園では2000年から始めて2017年３月号で204号、通算17年続けてきました。毎月１冊を仕上げていくのは、原稿の〆切や製本作業などほんとにタイヘンなことも多いですが、苦労するだけの成果はあると実感しています。

どんな組織でも会報などを発行しますが、園で発行しているところは思ったよりも少ないという印象です。これからやってみたいとお考えの幼稚園、保育園、福祉施設の先生方にもヒントになれば幸いです。

◆冊子タイプに出会って始めるまで

この冊子タイプの園便りに出会ったのは20年ほど前だったと思います。熱心に教育活動を行っている園に見学に伺ったときに見せていただき、園の活動が良く伝わる内容を拝見して「やってみたい！」と思ったものでした。

思ったのはいいけど、いちばんの難関は、実際に記事を書いてもらう教職員にどう理解してやってもらうか、という問題でした。

園長が他園でやっていることを見聞きしてきて、ポンと見本を見せられ「やってくれ！」と言ったところで、すぐにできるものではありません。

- 何を書いたらいいのか？
- 他のクラスと比較されやしないか？
- 書くのに時間がかかる
- 文章も絵も苦手・・・
- 印刷の量がハンパじゃない
- 帳合いをする時間もかかる
- 他クラスの子どもの情報は必要か？・・・

などなど、やらない理由を考えればいくらでも出てくるもんですが、嫌々書いてもらって読み手に楽しさが伝わらないと意味がありません。なんとかみんなのやる気を出してもらうことと、自分たちの園便りだ、という気持ちも持ってもらいたくて、案を出したり、冊子のタイトルを決めてもらったりしてきて了解を得てきたことを思い出します。

◆最初は季刊から

最初はハードルを下げて、季刊（年4回）でいこうと決め、投票とジャンケンで決着した『おもちゃばこ』というタイトルで1998年秋号発行に至りました。クラス便りを書くことには慣れている教員たちでしたから、クラス便りをアレンジして「私のクラスの紹介・クラスで流行っている遊び」をメインに１枚書いてもらいました。それだけではつまらないので、当時使い勝手が良くなってきたデジカメとプリンターを使ってカラーページで担任のプライベートなひと言など“あそび心”を加えて13ページの内容に画用紙に印刷した表紙をかぶせる方法で製作しました。（B5サイズ）

結局『おもちゃばこ』は99年夏号、2000年の新春号の３巻で終了し、2000年４月号か

ら「はらっぱ」という今に繋がる園マガジンがスタートしました。

◆『はらっぱ』のコンセプト

- 読みたくなる、見たくなる見る園便り
- クラスの楽しい様子が伝わる
- 自分の子どもだけでなく友だちのことも
- 園の教育方針が伝わる
- 職員や園長の人となり・考えが伝わる
- 大切なところもつい読んじゃう
- なるほど感がある
- 大人だけでなく子どもも楽しみにする

◆はらっぱの目的

☆親しみ感UPのツールとして

自分の子どもと一緒に育つクラスの友だちはもちろん、学年が違う子どもたちのことも知ってもらい親しみを持ってほしいという思いがありますが、それをさりげなく伝えるツールとして有効です。

また、紙面から先生の人となりやプライベートがちょっと見えて親しみを持ってもらうことは、園と保護者、保護者同士の距離感のとり方に関わってくると思います。人間的な繋がりが活発にできているとトラブルも大きくならずに収まったり、お互いさまという感覚も生まれてきて園運営がスムーズになるのです。

☆園の活動・主旨を伝える

ペーパー１枚だと、紛失したりゴミ箱にポイッと入れられたりして、読み返してもらう確率は減りますが、その月に行う活動の要綱やねらいなどを冊子に入れることで、読み込んだり、読み返したりしてもらえる。我が子のページを読むついでにペラペラと大切なところも読んでもらうのです。

加えて、子育ての情報発信など、保護者に伝えたいことをさりげなくページに入れ込むことができるのもメリットです。

2000年に発行した第１号は21ページでしたが、最近のはらっぱは、50～60ページのボリュームです。面白い紙面を目指していくうちに執筆者も職員だけでなく外部の方にもお願いするようになりました。対人援助学マガジン団士郎編集長のマンガ「木陰のものがたり」も2007年５月からスタートしています。（現在はホンブロック社を通じて園便り掲載用に契約園に配信されています。 http://www.honblock.net/）

◆はらっぱ作成手順

印刷屋に出す園もありますが、そんなにコストをかけられない原町幼稚園では完全手作業で作っています。具体的な製作手順を紹介します。

◆年度初めの作業

新年度、クラスの担任は自分のはらっぱ用のクラスタイトルを考え、規程のサイズでデザインを作ります。これをコピーしておき原稿に貼って使います。

教務主任ははらっぱ発行計画を立てて、〆切日と製作作業日を決めて職員と外部執筆者に知らせます。それを受けて各々年間計画をざっと立てます。

2016年度　≪はらっぱ・特集号≫　発行計画　外部用

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
原稿締切日	4/19	5/11	5/27	6/27	7/15	8/30	9/26	10/25	11/25	1/13	2/13	3/3
誕生時紹介	学年 A4×2	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
クラスのページ	担任 A4×2	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
あそびっこ	A4×2	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
おやこんぼ	福水 A4×2	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
月の歌	町田 A4×3	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
体操のページ	大島 A4×2	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
リトルスターのページ	A4×1	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
絵本のページ	木村 A4×2	町田 A4×2	大川 A4×2	杉山 A4×2	真野 A4×2	小林 A4×2	伊藤 A4×2	福水 A4×2	酒 A4×2	羽切 A4×2	大内 A4×2	鎖谷 A4×2
みねとも通信	こどものとも社 A4×1	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
ポンチ	川口 A4×2	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
親子でリトミック	原林 A4×1	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
武井牧場です！！	A4×1	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
ぱんだのつぶやき	山本 A4×1	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
木陰の物語	団士郎 A4×2	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
保護者のページ	A4×	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
月間ﾍﾞさん	A4×2	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
おひさま	A4×1	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
ﾁｬｲﾙﾄﾞｳｵｯﾁﾝｸﾞ	高橋 A4×1	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
ｽｸﾗﾌﾞﾙｰﾑ	町田 A4×2	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
ｶﾗｰﾍﾟｰｼﾞ	鎖谷	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

◆毎月の作業

①原稿をつくる

各クラスのページは、子どもたちの写真が主になります。担任は各自支給されたデジカメで撮影したクラスの様子をカラープリントし、切り貼りしてコメントを手書きで入れて仕上げていきます。

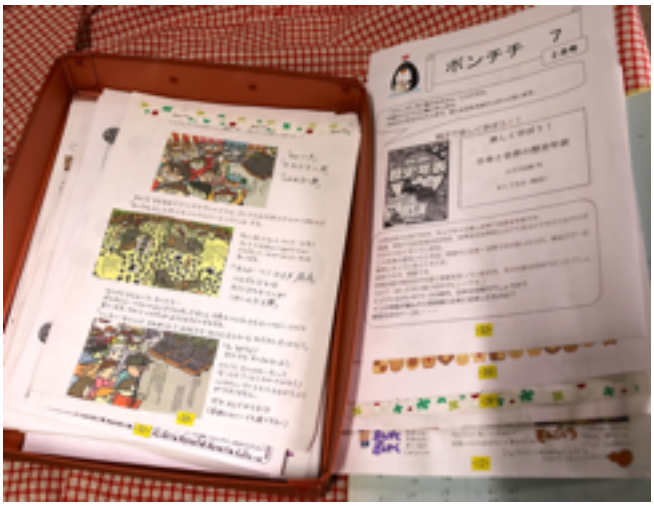
連絡事項はクラス便り等で発行するので、ここではなるべく単文にします。

クラス全員を掲載するという縛りがありますので、欠席が続いて写真が撮れなかったときはことわり文を入れたり、前の月の写真を入れたりします。

担任以外はそれぞれ受け持っているページを作成します。外部の執筆者からはメール添付で原稿を受け取り園でプリントします。

②ページをつける

集まった原稿にシールでページをつけていきます。クラスのページ以外は「休載」自由なので、毎月ページ構成が若干変わります。最後のページが埋まらないときのネタを持っておくと臨機応変に対応できますが休載ＯＫにしておくことも長続きする秘訣です。



※集まった原稿にネームランドで作ったページを貼ります

③印刷をする

ページ付けからここまでは、主に教務主任と園長の仕事です。印刷は複数でやるとうまくいかないので教務主任一人で担当しています。インクが完全に乾いたほうが印刷がスムーズなので２日かけて片面ずつ印刷します。

原稿毎に版を取って200枚ほど刷るので、A4サイズで片面ずつ取れば簡単なんですが、時間とコスト節約のためA3サイズで一度に片面２ページ取ります。それを両面印刷して４ページ出来上がります。次の表に従って原稿を取って印刷していかなくてはなりませんので、この表が無いとあたまがこんがらがっちゃいます。

◀両面印刷で４ページ/枚　の原稿配置

印刷	製版	原稿見て左	原稿見て右
表１回目	版１	1ページ	3ページ
裏１回目	版２	4ページ	2ページ
表２回目	版３	5ページ	7ページ
裏２回目	版４	8ページ	6ページ
表３回目	版５	9ページ	11ページ
裏４回目	版６	12ページ	10ページ

※実際は60ページまでの表が作ってある。
原稿左とは、原稿を表に持って左側という意味。
製版するときはひっくり返すので逆になる。
表は１日目、裏は翌日に印刷するとインクが乾きスムーズに印刷できる。

※せまい印刷室にこもってひたすら印刷！

④両面印刷した紙を機械で二つに切る

※上に紙をセットして、下からカットされて出てきます
　機種名：デュースリッター（Dupro製）

※刷ってカットし上がったページ

⑤表紙を二つに折る

　表紙は厚紙なので紙折り機ではうまく折れない場合が多いので手作業で丁寧に折ります。ついでに園児名のゴム印を押しておくこともあります。

　表紙は子どもたちが楽しめるように毎月テーマを決めてイラストを描き下ろしてもらっています。絵の得意な職員が描いてもいいね。

※２月号の表紙はシロクマの親子

※折った表紙に園児名のゴム印を押しています

⑥帳合い１

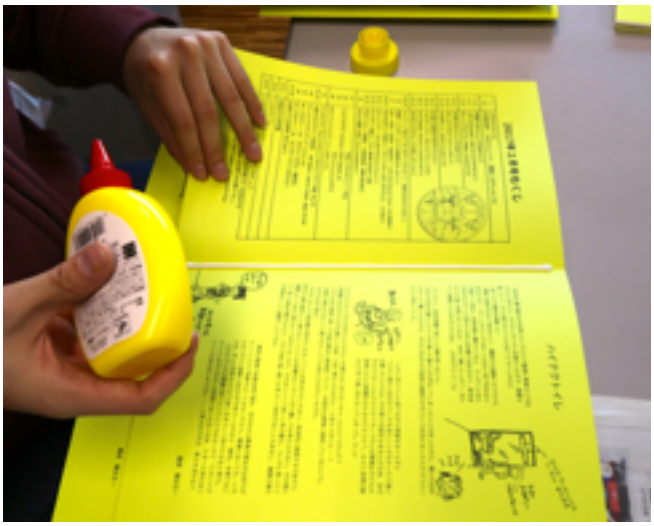
　保育終了後に送迎バスや掃除が終了した職員が集まり、作業が始まります。まずはページを順番に組んでいき、中のページをホチキスで留めます。

※ページをチェックしながらまとめます

※ホチキスで留めていきます

⑦帳合い２

ページ落ちや、汚れをチェックして、表紙の背に木工ボンドを塗って、挟み込んで完成です。



※木工ボンド、わりとたっぷり

※背表紙に挟み込んでギュッとボンドにつけます

《はらっぱデータ》

表紙：マーメイド（四六判160ｋ）
　　色=ミモザ（色は毎年チェンジ）
サイズ：Ａ３+（297×428ミリ）
　　A3より横8ミリ長く紙問屋で裁断
　　四六判100枚を購入してカットしてもらうので余った分はＡ４やＢ５サイズにしてもらって他で活用すると無駄になりません。
中：上質紙90ｋ厚　※インク吸収の良い紙
印刷機：Ａ３サイズまでのモノクロ
カラーコピー機：カラーページ出力用
裁断機：デュースリッター（Dupro製）
ホチキス：PLUSフラット60　針№3U/8ミリ
その他：木工ボンド速乾

※歴代のはらっぱ。年度によって色、絵は毎月違います

◆はらっぱの構成例

全てオリジナルでなく、こどものページはクイズや迷路などの本から引用したりします。
子育てに有用な情報は雑誌や新聞等からの引用掲載も行います。
ニコニコ大作戦と称して、幼稚園関係者の関わるお店のＰＲやイベントの案内なども依頼があれば掲載することも可能です。

◆最近は、

月刊園便り先駆者の幼稚園では、最近はオールカラーだったり、印刷屋さんに発注して素晴らしい出来映えのものを見かけるようになりました。

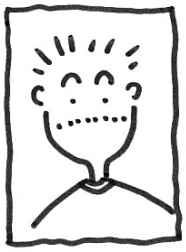
地方の幼稚園ではそんなコストはかけられないため、モノクロ印刷で発行するのがやっとですが、子どもたちの写真やカラフルなマスキングテープでレイアウトされた原稿はカラーなので、もったいないなあ、このカラーを見せたいなあ、と思っておりました。

対人援助学マガジンのようにネットを使えば良いのですが、園のホームページの整備も追いつかずに、あれこれ探しているうちに良いアプリにめぐり合いました。

それはリクルート社が無料で運営するキッズリーというアプリです。１月号からこのシステムを使い園児保護者（登録者）にPDFで読み込んだはらっぱを配信することが可能になりました。https://kidsly.jp/index.html

毎月〆切に追われながら（このマガジンもそうです(T-T)）製作していますが、なんといっても、大切なクラスのページに一度も原稿落ちが無いことは、職員の責任感、そして製作時のチームワークと作業の正確さ、速さのおかげだなあと感謝しています。

※園マガジンに興味をお持ちの方は、メールを頂ければバックナンバーを郵送します。遠慮無くどうぞ！



原町幼稚園　園長　鶴谷主一
HP：http://www.haramachi-ki.jp/
MAIL：osakana@haramachi-ki.jp
Twitter：@haramachikinder

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「幼稚園の現場から」ラインナップ
第１号　エピソード
第２号　園児募集の時期
第３号　幼保一体化第
第４号　障害児の入園について
第５号　幼稚園の求活
第６号　幼稚園の夏休み
第７号　怪我の対応
第８号　どうする保護者会？
第９号　おやこんぼ
第10号　これは、いじめ？
第11号　イブニング保育
第12号　ことばのカリキュラム
第13号　日除けの作り方
第14号　避難訓練
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について
第17号　自由参観
第18号　保護者アナログゲーム大会
第19号　こんな誕生会はいかが？
第20号　ＩＴと幼児教育
第21号　楽しく運動能力アップ
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く
第24号　お話あそび会（その１・発表会の意味）
第25号　お話あそび会（その２・取り組み実践）
第26号　お話あそび会（その３・保護者へ伝える）
第27号　おもちゃのかえっこ

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

福祉系対人援助職養成の現場から㉘

西川 友理

こんなふうに習ったのに！

学童保育のボランティアから帰ってきたAさんが私に憮然と言いました。

「先生、Iメッセージを言っても、子どもに伝わらなかったですよ。」

Iメッセージは、簡単に言うと「主語を自分にして、自分の思いを素直に相手に伝える」手法です（この連載の第20回目に、Iメッセージについて詳しく書きましたので、参考にしてください）。

「伝わらないって？」と私。

「だから、子どもがちっとも言うこと聞いてくれなかったっていうこと！」

暴言を吐いてくる子どもに、「そんなん言われたら、お姉ちゃん悲しいわ。」と言ったところ、「あっそ！」と返され、無視され、さらに暴言が続いた、ということらしいのです。

「うーん、子どもに『子どもに言うこと聞いてほしい』と思ってたのに、『悲しいわ』って言ったのだったら、それってIメッセージじゃないんじゃない？」

「べっ、別に言うこと聞かそうと思っていったわけじゃ……」

「『言うこと聞いてくれへん』って言う

たよ、今。」
「そ、そんな子どもの主体性を無視するようなこと…考えてたわけでは…。そ、そもそも先生、悲しかったら『悲しい』って言うたらええって言うたやん！私悲しかったもん！」
Ａさんは私を攻撃してきました。
「そうやねぇ、私そう言ったね。でもね、小手先の技術で『悲しいと言う』んじゃなくてさ。多分、自分がどういう思いをしているのかという事をきちんと把握する必要があるんやないかなぁ…。」
「？？…よくわかりません！」

相談援助に関する授業では、よくロールプレイをします。
「傾聴」について講義していた時の事です。「相手の話をしっかり聴くことが大事」ということを講義し、まずは自分なりに「相手の話をしっかり聴く」という態度をとってみよう、とロールプレイをしました。
Ｂ君は、腕組みをして、顎を引き、眼光鋭く練習相手をぐっと見て、話を聞こうとしました。
「こわーっ、そんな顔して見んといて！」
「それ、なんかで見たことあるわ、えーっと、あれや、ラーメン屋の店主の写真！」
と周りの学生に言われて、Ｂ君は戸惑います。
「えー…だって、相手の話をしっかり聞こうと思ったら、こうなるもん。先生、僕おかしいですか？」
「うーんそうやね、怖がってるね、みんな。」
「ええ…じゃあ僕のやり方はダメなんですね…。」
「ダメっていうかさ、どこがマズいのか考えようよ。」
と言っても、落ち込むＢ君です。

ＡさんもＢ君も、授業で言われたことを真面目に守って、うまくいかなかったとジレンマを感じています。
「そうね、確かに私は授業でそう言ったね。だけど、それってどういうことなのか、一緒に考えましょう。」
という授業展開は、個人的に大好きです。

「正しいはずの事」に対する違和感

実習が終わった直後、実習先で出会った経験を、皆で話し合う授業をしました。こんな支援を見た、あれが素晴らしかった、これが勉強になった…と一人ずつ楽しそうに語る学生達。
そんな中、児童養護施設で実習をしてきたＣさんは、静かに話し始めました。
「実習先で、ある子どもがなかなか宿題をしてくれなかったんです。」
「現場の先生に聞いたら、『ああ、あの子が言うことを聞かない時には“〇〇先生に言って、叱ってもらおう！”って言うたらいいよ』と言われました。」
「だからそう言ってみたら、本当に一生懸命やりはじめたんです。…すごいなぁ、と思って。」
「…一人一人の特性をよく見て、言葉かけをするのが大事なんだなぁ、と、思い、ました…。」
と、ぽつぽつ途切れながら語るＣさんは、

なんだか浮かない顔。
「…C さん、それ、勉強になったなぁって、本当に思ってる…？なんだか、納得してないって顔をしてるように見える。」
と私が言うと、C さんは突然ぽろっと涙をこぼしました。
「なんか…確かに、言うことは聞いてくれたんですけど、言うこと聞かせただけ、っていうか、結局、何をやったんやろう私、って思って…」
他の学生は、静かに C さんを包むように話を聞いています。
「大事なことは何やってんやろうね。言う事聞かせる事やったんやろうか。」
と私が言うと、聞いていた学生の一人がぽつりと
「えー…何かそれって…違うやん…。」
と言いました。皆で、考え込みました。

教科書で習った理念、制度。学校や実習先の先生が教えて下さった技術、技法。
それらは「正しいもの」として学生に提示されます。
しかしそれらをいざ実践してみると、上記のように、なんだかおかしい、どうもしっくりしない、と感じることがあります。「正しいもの」として提示されたものに違和感を持つのは、なんだか少し不安があります。

違和感について

自分の行動に対して、違和感を持ったと誰かから指摘された時に、その発言そのものを事実として受け止めることが、正直に言うと私は苦手です。日本の文化で育った人は、私と同じように、苦手な人が多いように感じています。学生たちの間にも、冒頭のA さんやB君のように、その場の空気や関係する人を否定する感情を持ったり、自分自身を否定しすぎたりということがよくあるように見受けられます。
また、C さんは、違和感を持ったことを口にする事を躊躇し、いざ口にした時には涙が出てしまいました。
私もやはり、違和感を持ったことを口にする事に、少しだけ勇気が要ります。その場の空気や関係する人を否定しすぎたりしないか、そしてさらに言えば、違和感を持った相手に指摘することで、相手に憎まれてしまわないか、「正しいもの」に反旗を掲げることになって、意図せず何かと戦わねばならない事態にならないか、と軽い緊張が走ります。年を重ねるにつれ、少しずつ気にしなくなりましたし、そこから始まる展開にむしろ面白さを感じるようにはなりましたが、それでもやはり、相手に何かを指摘をする時には何かしら気が引き締まります。
「知っている」「わかる」「なんとなくそうだよね」と言わなくても通じるような空気と予定調和を大切にするウチ的な日本文化において、安心安全な生活を送っていると、自分が「おかしい」と言われる事を受け止める力、疑問を持って「なんだか変だ」と口にする勇気が、育ちにくいように思います。
さらに言えば、違和感を取り扱う力や技術が育っていないと、そもそも違和感そのものを感じ取る力が弱くなるよう

にも感じます。つまり、「これはこういうもの」「こうあるべきもの」という状況を受け入れざるを得ない生活文化の中ですごしていると、違和感の感受性が弱っていくように感じるのです。

ごま塩のレシピ

時々見る料理サイトに、ごま塩の作り方が掲載されていました。

ごま塩にレシピがあるなんて！ごま塩なんて、ごまと塩を混ぜるだけ、と思っていました。そういえば、市販されているごま塩の塩は白い顆粒状になっていたり、ゴマ自体に塩味がついて白っぽいゴマだったりします。単純に、黒ごまと塩を混ぜただけのものではないようです。興味を持ってレシピを探しますと、黒ゴマをしっかり炒る、水で塩を溶かしてゴマと混ぜる等、作り方には結構コツがいるようです。

「そうか、ごま塩も立派な料理なんだ。」今まで気づきませんでした。ごま塩を作ってみたくなりました。

人間や法律、支援技術について、知っている、わかっている、これはこういうもの、こうあるべきもの。そのような思い込みや常識が、なんと様々なものを見えなくしているのか、と思います。

しかしその一方で私は、「この業界ではこれが正しいとされ、こうあるべきだとされているのだから、これを覚えなさい」と、学生に伝える仕事をしています。

上記のごま塩の例でいえば、「ごま塩は、ごまと塩からできています」と言えば、授業は事足りるのです。しかし、「おいしいごま塩とはどういうものなのか」「実際にどうやって作るのか」「ごま塩づくりのコツはなにか」等がわかっていないと、おいしいごま塩は作れません。それらを学生に伝えるには、世の中にはあまりにたくさんのレシピがありすぎる。又私もそれらのレシピを全て熟知しているわけではない。必然的に「正しいこと」の枠組みを伝える授業が続きます。

「枠組みだけを伝える授業でいいのかなぁ。かといって伝えられる内容には限界があるよなぁ。」

そう悩んだこともありました。

正しいとされている事を知って、さて、どうするか

私には、大変尊敬する保育の専門家のD先生という方がいます。D先生の講義は大変勉強になり、気付きもあります。困った時、迷った時に相談をすると、明快で的確なアドバイスがいただけます。

「そんなん、こうやったらええやんか。」

なるほどなぁと思い、D先生に感謝を伝え、実際にやってみます。

ところが、どうもうまくいかないのです。D先生が言うとおりにしているのに。

そんなことが２度あり、３度目に私はアドバイスを参考に、じっくり考えた上で、全く別の手法をとりました。

「そうだ、私はD先生ではないんだもの。D先生と同じ教育は出来ないよ。D先生のおっしゃっている事の、大事な部分は何だろう。そこを、私だったらどう行動

する？」
そう考えて行動した結果、大変うまくいきました。

正しいとされていることを鵜呑みにせず、それを基に考え、行動するという、当たり前のことに気付くのに、少し時間がかかりました。

そして今は、学生に対しても「自分で気づく時に、自分で気付く形で、違和感に気付いてもらえばいい」と思います。

そのために、いつでも安心して違和感を表現してもいいという環境づくりが大切だと思うのです。

正しさに違和感を覚える大切さ

ある精神科医の方がラジオで『歎異抄』について語っておられるのを聞き、また人から勧められたこともあって、興味が沸いて読んでみました。

この書物は、浄土真宗の宗祖といわれている親鸞の亡き後、その教えの数々が誤解されて広まっていることに危惧を覚えた門弟の一人、唯円が著したと言われています。親鸞本人からの伝え聞きと、それにまつわる解釈が書かれています。

この書物の第 9 章は、
「阿弥陀様の御名を唱えても躍り上がるように喜べないし、正直言って喜び勇んで浄土に行きたいとも思わないんですよ、どうしたものでしょう」
と、唯円が親鸞に問うたという一節からはじまります。これに対し、親鸞は
「実は私もそう思っていたんだよ、唯円も同じ気持ちだったのだね。」
と答えます。そして
「でもね、喜べないし、死ぬのが怖い、でいいじゃない。そういう煩悩に生きている我々だし、そんな煩悩まみれだからこそなおさら確実に救われるんだろうな、と思うよ。」
と続きます（だいぶ意訳しております。詳しくは歎異抄をご覧ください）。

この部分を読んだ時にはひっくり返りました。
「親鸞さま、自分も喜べないって認めてしまうんですか！」と。

親鸞も「そう思っていた」のか、「そう思っている」のか、という解釈には実はいろんな説があるようなのですが、いずれにせよ、仏教の尊いとされる教えを受けても、なんだか違うなあ、と感じた唯円に対して、師である親鸞が、
「その違和感、分かるよ！」
と答えたという点に注目です。普段から、そんな話が出来るような関係性と環境だったのだなと感じます。

何かに違和感を持ってもいい、またそれを口にしてもよい、と信じられる環境が身の回りにある事の大切さ、それによって新しい理解への道が開かれることを強く感じました。

最近では小学校や中学校の授業でも、ひとりひとりのオリジナリティのある答えを大切にしようという授業展開が見られます。しかし、そのオリジナリティは「当該担当教員の想定している範囲内」でのみ許されるものであり、「先生の想定される範囲内でのオリジナリティのある答え」＝「先生ウケがよい答え」を書くというお作法を知らず知らずに

学んできています。

日頃、そんな教育を受けてきた大学生の「先生ウケ」のよい答えを耳にしたり、目にすることがあります。その度に、「違和感を持っていいし、それを表現していいんだよ、それはとても大切なことだよ」と、自分に対しても、学生に対しても思うのです。

養成校教員としての姿勢

教科書、テキスト、今正しいとされている理論、うまくいくとされている手法、経験者のアドバイス。まずは正しいとされるやり方を知り、型どおりにやってみることが必要だと思います。それを教えるのが私たち養成校教員です。

しかし、その正しいとされるやり方が上手くいかないときがあります。自分の目と耳と勘が、違和感を自らに教えてくれる時です。なんだかおかしい、どうもしっくりしない、うまい方法だとは思えない。そう感じた時に、その違和感を放っておかずに向き合える環境を整えておきたいと思っています。

「なぜこんな違和感があるのだろうか？」

「もしかしてこの方法は間違えているのか？」

「別の方法をとるべきなのか？」

「それとも、根本的に自分の解釈が間違えているのか？」

これらの考察を踏まえて「だから、どうしていくべきなのか」を考える。

その違和感は、大きな成長の種です。そうして、世の中で正しいとされていることは絶対ではない、と気付き、正しいとされていることを踏まえつつも自分なりの方法を見つけていくことが大切だと思います。

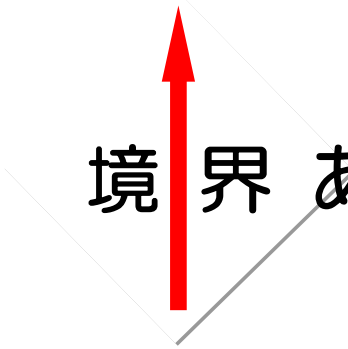
違和感の入り口に学生が立てるように、まず基本的に正しいとされていることを提示する事。

違和感の入り口に学生が立った時に、学生自ら答えを探すことを後押しする事。

「今正しいとされていることは、こういうことです。ここから先は、自分で学んで自分で得ていきましょう。可能であれば逆に私にも教えて下さい。私も気付いたことを伝えますよ。そうして、お互いに学びあうことが、より新しい理解につながる道だと思うんだよ」

これが、養成校教員が出来る事だと思います。

そうして、学生と共に学びを深めていく事は、何とも言えず楽しい事なのです。



境界あれこれ

3

～　大人と子どもの境界　～

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸 由 里 子

はじめに

最近の若者は幼い、高校生も下手すれば小学生レベルだと聞く。民間会社で働いていたときも、先輩は後輩を「甘い」とか「大人になっていない」などと言っているのを聞いたし、自分たちと比較して後輩の気持ち、仕事への向かい方などに対し、「緩い」「甘い」感じがしたのは私も例外ではなかった。年々人生が長くなってきた中で、我々は何を基準に大人と子どもの境界を設けているのか、今一度、現状に照らし合わせながら考えてみようと思う。

法的な境界

法律上、大人と子どもの境界はどこにあるかと言えば、契約や刑法の観点では 20 歳という年齢になる。20 歳になれば、様々な契約ができる。つまり、社会的な責任を負える年齢という判断がなされると言うことだろう。犯罪を犯せば実名報道されるのも 20 歳以上だ。

一方、婚姻の観点では、男性が 18 歳、女性が 16 歳以上である。女性と男性で年齢差があるのは、日本の文化に由来する。元々明治憲法で定められた 17 歳と 15 歳が、戦後 18 歳と 16 歳とされたが、この 2−3 歳の差というのは、昔からそのくらいの差で婚姻が繰り返され

てきた結果である。女性の方が成熟が早く、子を埋める年齢を考慮し、男性は家を支える役割を担える年齢を考え、こんな差が生まれたようだ。もし婚姻年齢を 18 歳にするのであれば、前述の考慮からすれば男女差は必要なくなるだろう。

また、運転免許証は 18 歳以上であり、これは男女の差はないし、昨年から選挙権も 18 歳以上となった。被選挙権はまだ 25 歳以上のままである。一方飲酒は 20 歳以上である。離婚に伴う養育費の支払いは、子が 18 歳までが一般的だったが、最近は 20 歳までとする人が多い。それは、大学や専門学校に子どもたちが進学するようになったこととも関係がある。

このように、大人と子どもの境界は、法律上でも、まちまちであるが、取りまとめれば、16、18，20、25 歳の 4 通りである。

すべて、同じ年齢にすればわかりやすいだろうにと思うのだが、なぜこんなにバラバラなのか。

世界ではどうなのか、調べてみると殆どの先進国が 18 歳に統一しており、その他では、成人と認める年齢を 18−21 歳の間に設定し、選挙権や婚姻年齢も 16−21 歳になっている。流れを見ると、最初に選挙権を引き下げ、その後それに合わせて結婚の年齢も下げている。裁判所や保護者の許可の元 16 歳から結婚できるところもあるし、アメリカなどでは州法によって異なるが、おおむね 18 歳である。

ある調査の結果から、なぜ選挙権を引き下げたのかという理由を見てみると、学生運動や戦争の影響が第一にあり、加えて若者の成熟度や情報量などを鑑みて引き下げたとしている国が多かった。また学生運動や戦争の影響は、主に 1960 年代から 70 年代が多く、変更もその時期で最近の話ではない。

成熟度や情報量については、最近のことで、諸外国では若者がより成長していると捉えているようだ。しかしアイスランドだけは、若者の成熟度が遅くなったとして、1997 年に 16 歳だったものを 18 歳に上げている。主な理由として、若者が 20 歳になるまで実家に住み、両親から扶養を受けることも珍しくないことが挙げられていた。

さて、それでは日本ではどうだろう？多くの若者が実家から仕事に通っている。扶養には入っていなくても、例え食費として幾らか実家に入れているとしても、自立した大人と考えるのは難しくないだろうか。アイスランドと状況は似ているがそれでもきっと、日本も諸外国に倣って、法律上 18 歳に統一していくのではと思われる。わかりやすくなると言う意味では賛成できるが、実情に合っているかと言うと疑問が残る。

様々な社会の大人への儀式

大人になるための儀式というのが、様々な社会・文化で見られる。

日本でいえば、古くは元服（げんぶく）がある。奈良時代からあるこの儀式は、男児が数えで 12 から 16 歳になると氏神にお参りして、服装や髪型を変える。余談だが、この時に髪を整えることを「理髪」と呼び、今の理髪店につながる。武家では烏帽子をかぶり、名前も幼名を変え元服名になるなど、世間的にも見た目にも大きく変わった。したがって本人にも大人になった意識が持てただろう。この儀式は江戸時代も続いた。女性では江戸時代になって元服と称し、18 歳から 20 歳くらいで地味な着物に変え、髪型を丸髷（まるまげ）などにし、厚化粧やお歯黒・引き眉など見た目にもわかる変化があった。他にも褌を付けて性に関する知識を授かる褌祝（ふんどしいわい、へこいわい）と呼ばれる儀式もあった。

今も残る日本の元服儀式としては、近江八幡祭りの「左義長（さぎちょう）」（17 歳の男子を「元服若衆」と呼び、左義長に火をつける役目を命じられるが、火のついた藁苞を持った元服若衆が左義長に近づくのを他の若衆が邪魔をすることで至難を与え、左義長に火がつくまで続けられる）や栃木県、

石川県、愛媛県、宮崎県、熊本県、その他一部の地域にある中学校では中学２年または３年になると学校行事として「**立志式**」（りっししき）、「**立春式**」（りっしゅんしき）、「**少年式**」（しょうねんしき）、「**元服式**」（げんぷくしき）を行なっている。この式は単に校長先生からの祝辞や、子どもたちの代表から答辞など、一般的な行事で、いわゆる儀式という色合いは薄くなっている。

外国でも様々な儀式があり、アフリカや東南アジアではその内容は激しい。

＜バヌアツのバンジージャンプ＞

今ではあちこちで行われているバンジージャンプの元祖である。バヌアツ共和国では成人の儀式として、ペンテコステ島に高さ約 30 メートルのやぐらを組み、ヤムイモのツルを使ってバンジージャンプをする。ヤマイモのツルは頑丈と言っても切れることもある。けがをしたり命を落とすこともあるので、大変勇気がいる。これに挑戦し、成功することで、立派な大人の男として認められるのである。

＜バンナ族のブルジャンピング＞

エチオピアの少数民族のバンナ族では、男子が成人するとブルジャンピングという儀式を行う。これは牛を１０頭ほど並べ、成人になった男性がそその牛の背中を４往復するもので、成功して初めて大人として認められる。

＜毒アリが入った手袋に腕を突っ込む儀式＞

アマゾンの流域に住むサテレ・マウェ族の男子は、世界一の毒を持つといわれるアリが一杯入った袋に両腕を突っ込むことを成人の儀式としている。アリに噛まれ、その痛さに悶絶し、耐え抜くことで一人前の男と認められる。

＜2m の石を飛び越える儀式＞

スマトラ島近海にあるニアス島の原住民は 2m もある石の跳び箱を激走して飛び越え、それができると成人の仲間入りができる。

こんな風に、大怪我をするか、最悪死ぬかもしれないほどの身の危険があると知っていながらそれにチャレンジし、成功することで、大人として認められる地域文化もある。これはとても分かりやすいし、だれもがその人を子どもではないと認められる。そこまで大げさではなくても、キルギスなどでは羊を一頭ナイフで処理できるようになって初めて一人前と認められると言う話もある。勇気、力、技量などを成人の基準としてそれを試すというやり方は分かりやすい。

一般的に先進諸国では 18 歳や 20 歳の誕生日を盛大にお祝いして、大人になったことを本人にも周りの人にも認めてもらうなどしている。

以前アメリカにいたとき、社交界デビューのパーティーに呼ばれたことがあった。同級生がデビューしたのだが、それはそれは盛大なパーティーであった。上流階級ではデビューパーティーが成人したと周知し、本人にも意識を持たせる機会となっている。

我が家では、20 歳の誕生日に今まで預かっていた子ども名義の預金通帳と印鑑を渡した。大した額ではないが、印鑑と通帳を自分で持つと、少し大人を意識できるのではと思ってのことである。

それぞれの家のやり方で成人になったことを祝っていると思う。そうした儀式は少しは本人の意識を高める役割を果たしているとは思う。現在行われている日本の成人式も、「今日から大人である」との認識を持たせる上では役に立っているのだろう。しかし、選挙権や結婚年齢が 18 歳などとなっていると 20 歳で大人と言うこととの統一感のなさから、大人になったという実感が薄れる可能性もあり、何か中途半端な感じが否めない。きっと今後は成人式も 18 歳で行うようになるのかもしれない。それが一番すっきりするだろう。

現状から見た大人

しかし、たとえ日本で 18 歳に統一したとして現実、18 歳になれば皆大人だといえるだろうか？

大人と子どもの境界を成長面で考えたとき、何を基準にするかと言えば、身体面の成長ではなく「自立」ではないかと考える。精神的にも経済的にも親から自立し、働き、税金を納め、社会性をもって、自らの行動に責任を持ち、自活していることが、先ず大人の条件ではないだろうか？それを基準とすると、年齢に関係なく自立できていない人が沢山いる。誰かに依存している人も、引きこもりも自立してはいない。引きこもりでは 40 代 50 代の人口が一番多いと言われている日本において、年齢だけで大人と子どもを分けることは現実にそぐわない。

「子どもっぽい大人」「大人っぽい子ども」などの表現もあるように、大人であっても子どもっぽいところがあるし、子どもも妙に大人びることもある。その時々でも様々な表情を見せ、行動上もばらつくのが「人」である。大人と子どもの境界をはっきり分けることは個体差も大きく、結局できないのかもしれない。しかし、せめて子どもたちに対しては、子どもであることを守ってあげたいと思う。

世界全体がスピーディーになり、情報過多の中で、子どもたちが大人の世界に巻き込まれ、大人と子どもの境界がより曖昧になって、子どもの時代を早く終えさせられているように感じている。

子どもでいられる時間は短い。その時間をしっかり保障してあげることで、子どもは大人になることを望み、成長していくだろう。大人が大人らしく、子どもの見本となるように生きていくことが、大人と子どもの境界をはっきりさせていくことに繋がるのではないかと改めて思った。

対人援助学マガジン第 28 号
生殖医療と家族援助

家族形成のための支援カウンセリング⑬

～卵子ドナーカップル①～

荒木晃子

妻が「卵子ドナーになる」ということ

初回面接は予想通り、予定を 30 分ほど超過して終了した。面接が終わる直前、「カウンセラーの個人的な考えを知りたい」と問われた質問に回答するための時間だった。

彼女は真剣なまなざしで私の目を見つめ、「生殖医療をよく知るひとりの女性として、卵子ドナーになることをどう思いますか？卵子提供で生まれた子どもでも、幸せになれるのでしょうか？」と問うた。隣席の夫も、無言で同方向を直視している。向けられた４つの視線には、何かしら覚悟を決めた“強い意思”が込められていた。「このままでは、終われない」。私は、そう、直感した。

面接に至るまで、共通の知り合いを介してカウンセラーにアクセスし、事前にメールで相談主旨を送ったのも、当日、面接室に先に入室したのもＤ子さんの夫、つまりパートナーである。入室直後、彼は、カウンセラー席とテーブルを挟んで対面に設置している 2～3 人掛けの椅子の真正面（カウンセラーに最も近い距離）に、まるで闘いを挑むかのように背筋を伸ばし着席した。面接時間内には、妻であるＤ子さんのからだを案じつつ、夫としての様々な意見を述べている。しかし、さすがに終了直前、妻が唐突に発した最後の質問にだけは、口を挟むことはしなかった。おそらく彼も、妻と同じことを確認したかったに違いないと、あとになって気が付いた。

確かに、卵子ドナーは妻である。しかし、今回のクライエントは、卵子ドナー個人ではなく、（妻が）卵子ドナーになることを相談するために来室したカップルであるのは明らかだった。

カップルカウンセリング

個人面接にもあるように、カップルカウンセリングや家族面接の際には特に、複数のクライエントがカウンセリングルームに入室する時点から注意深く観察する必要がある。入室の順番、姿勢や表情、自らの意思で入室しているか否か、入室をためらうものはいないか、強制されたようすはないかなど、その視点は多岐に渡る。面接開始までに、その家族の「ちから関係」や、「個人が持つ問題意識の有無」、さらには、面接に積極的な姿勢がみられるか否かなど、家族の全体像を垣間見ることができる。

今回のケースの場合、卵子を提供するドナーは妻D子さんであるが、申し込みメール文章など、面接に至るまで直接対応していたのは夫である。また、面接当日、最初に入室したのも、カウンセラーの至近距離に着席したのも、また、夫である。以上の情報からは、あたかも夫が「妻のことを相談する」ために、妻を伴い来室したかのように捉えがちであるが、実際はそうでもない。入室時、ふたりは距離を開けず足並みをそろえて入室し、3 人並んで座ることができる椅子に袖が触れ合うほどの至近距離で着席した。面接中は、両者とも互いの意見を遮ることなく、息の合った会話を展開し、双方の言い分を否定することなしに耳を傾け、同時に、自分の主張や疑問、不安などは、しっかり言葉にしていたように思う。おそらく、普段、日常的に会話を交わす機会が多いカップルなのであろう。カップル間の意思疎通に問題のない、良好なコミュニケーション関係を確認した。このようなカップル面接には、初対面のカウンセラーという第三者が介入した場合でも、ラポールの構築はさほど困難ではない。カップル間の円滑なコミュニケーションは、クライエント双方の意思を確認し、そこに生じた齟齬を浮かび上がらせ、カップルが抱える問題の明確化をはかる一連の作業の時間短縮につながる。おそらく、面前のカップルも、ここに至るまでに時間をかけ十分な対話を重ねてきたのだろう。その結果、専門的な知識を持つ第三者に相談の必要を感じたに違いない、そう推察する。

面接の導入はいつものように、①挨拶、②自己紹介（どちらからでも結構です、と前置きして）、③先に届いた相談の主旨を両者にあたらめて確認し、④「面接はどちらが希望したのか」をたずねることから始まった。面接日までに準備していた本ケースの“見立て”を視野に入れつつ、その一つ一つを確認する対話から、今回の面接概要を記述し、次回の面接に生かすことにした。この作業は、クライエントカップルがこれから臨もうとする新たなチャレンジに、そして、彼らの援助を担う自身の自己分析に役立つに違いない。精子提供、卵子提供、代理出産、子宮移植といった、不妊当事者カップル以外にも、第三者の当事者が介在する生殖医療分野の支援に、新たな対人援助の足跡を残すことにもつながるだろう。自分には、その責務があるように思えてならない。

初回面接を振り返る

やはり、である。内心覚悟はしていたものの、いきなり初回面接で突き付けられた課題に、すぐさま「次の面接で共に考えてみませんか？」と即答すると、不安げな D 子さんの頬が緩み、柔らかな笑顔を取り戻した。

通常、カウンセラー自ら、次回の予約を推奨することは稀である。ただし、例外として、①クライエントとのラポールを築き、共通の目標に向かいカウンセラーが共に伴走していることを（クライエントに）確認できた場合、②希死概念を払拭できないと判断した場合、③精神疾患患者の治療に伴い、主治医からカウンセリング継続の指示がある場合などは除く。他にも、今回のように、初回面接終了間際に、カウンセラーへ課題を投げかけることがある。おそらく理由は、もっと/他にも話したいことがある、時間が足りないと感じたなど、さまざまであろう。また、カップルや家族面接といった、2 者以上の家族で来室した場合、他者がいると話しにくい、他者に知られたくない、といった理由で、次回は個人面接に切り替えるクライエントも存在する。なかでも、生殖医療に関する相談業務には、その性別に係らず、性/生殖に関する内容が含まれることが多いため、パートナー/親子関係であるがゆえに“話したくない/知られたくない”という理由が生じることも稀ではない。普段、生殖医療現場で面接業務を続けていると、「性」と「生殖」は決して切り離すことのできない大切な家族のテーマであることを思い知らされることが多い。なかでも、カップル面接で「性」と「生殖」に関して展開する対話には、家族関係のなかでふたりが矢面に立つ深刻な問題として扱われやすいという生活背景には留意すべきである。

今回の面接概要は、事前のメールにあるように、「妻は卵子ドナーになることを望んでいるが、夫としてはまだ納得できていない。卵子提供に関するさまざまな疑問や、治療内容、（妻の卵子で）生まれた子どもに関する法的ルール、卵子を必要とするレシピエントカップルのことなどを事前に知りたい。」といった内容であった。

その前提で、カウンセラーが事前に準備した“仮の見立て”の各に対して、面接で確認した項目を記録していこうと思う。また、面接では、こちらが想定していなかったクライエントカップルの大きな課題も浮かび上がった。すでに彼らは“卵子を提供した結果、生まれるであろう子ども“のことを想っていた、という点である。この課題は、事前メールで届いた相談主旨からは、見立てることができなかった重要なキーワードである。

面接が終わり退室する際、クライエントカップルは、まるで示し合わせたかのように互いにアイコンタクトを取り、「ありがとうございました」と言いながら、こちらに向かって深々と頭を下げた。一呼吸置き、次にこちらに向けた視線はまぎれもなく、“子どもの幸せをこころから願う親”のまなざしだったと思う。ふたりはにこやかに笑みをたたえ、「先生と話せてよかったです。次は〇日△時にまた来ます。」と言葉を添えて退室した。

面接を終え、ふたりから預かった大切なキーワードを即刻書き留めることにした。

（次号に続く）

対人援助学&心理学の縦横無尽

（２０）

TEA（複線径路等至性アプローチ）、世界を駆ける（４）

2016年7月横浜ICP、9月ポーランド、10月イタリア、11月ノルウェー

サトウタツヤ（総合心理学部）

1　前口上

TEA（複線径路等至性アプローチ）、世界を駆けるというシリーズはこれまで３回、不定期に発表させてもらってきた。

「世界を駆ける（１）」は2012年のイタリア、ブラジルであった。「世界を駆ける（２）」は、2013年の活動報告でイタリア、デンマーク、イギリスでの活動であった。「世界を駆ける（３）」は、ブラジル、デンマーク、オランダ・デンマークでの活動であった。いずれも主題はTEA（複線径路等至性アプローチ）である。

複線径路等至性アプローチとは、システム論に基づく質的研究法の一種である。おかげさまで国内外から関心をもってもらうことができおり、本誌でも既に３回関連した活動記録を掲載させてもらっているのでご参照いただきたい。

2012 年１月イタリア、３月ブラジル

http://www.humanservices.jp/magazine/vol8/16.pdf

2013年３月イタリア、デンマーク、５月イギリス

http://www.humanservices.jp/magazine/vol13/17.pdf

2014 年３ 月ブラジル、４ 月デンマーク、 ８月オランダ、デンマーク

http://humanservices.jp/magazine/vol18/17.pdf

2015年度はなぜきちんとした活動ができていなかったのか、ということについては個人的にも内心では忸怩（じくじ）たる思いがある。しかし、それは置いておいて、2016年度の活動をまとめておきたい。

2　2016年７月横浜ICP

2016年7月24-29日、パシフィコ横浜で第31回国際心理学会(ICP)が開催された(大会委員長・繁桝算男帝京大学教授）。日本では1972年に引き続いて2度目の開催である。

７／25、イタリアのセルジオ・サルバトーレ教授が企画した「Cultural differences and social development」においてコメンテーターを務めた。

７／２６には、デンマークのヤーン・ヴァルシナー教授が企画したThematic Session「Development of qualitative psychology in Japan: What can we contribute to the world?」において、「Trajectory

Equifinality Approach (TEA)」について発表した（実は、どうしても抜けられない事情があり、関西大学・木戸彩恵准教授に代読してもらった）。

なお、時間は前後するが、ICP の直前 7 月 22 日（金）に立命館大学 OIC において【総合心理学部開設記念セミナー・文化心理学の新展開；デンマーク・オールボー大学ヴァルシナー教授を迎えて】が開催された。デンマーク・オールボー大学 Jaan Valsiner 教授やイタリア・サレント大学 Sergio Salvatore 教授を迎えての記念シンポジウムである（ちなみに両教授ともかつて立命館大学の特別招聘教授として大学院の授業を受け持ったことがあり、立命館大学への親近感も多大なものがある）。これに対して立命館大学総合心理学部は安田裕子准教授が司会を務め、サトウタツヤ教授（私です）が解説を行い、森岡正芳教授、齋藤清二教授がコメントをするという布陣。この他にも川野健治教授や衣笠総合研究機構のやまだようこ教授、政策科学部の稲葉光行教授、教育推進機構の山口洋典准教授が参加した。

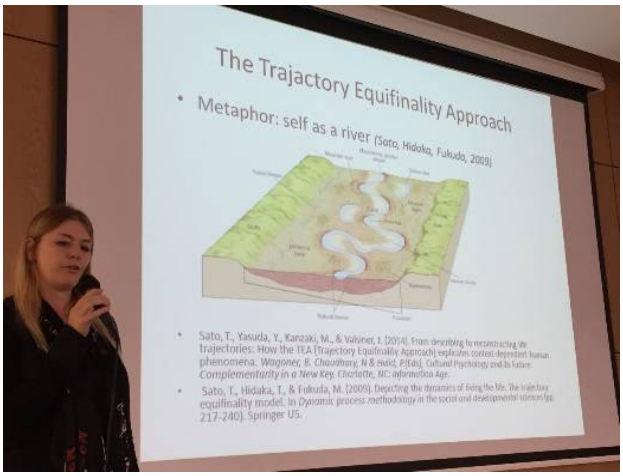
懇親会は、佐藤隆夫学部長による挨拶で始まった。総合心理学部の 1 回生数名もシンポジウム・懇親会に参加してくれたことは特筆に値する。

３ ９月ポーランド・国際対話的自己学会

この国際学会は 2 年に 1 度開かれるもので、今回はポーランドで開催された。対話的自己理論の創始者であるハーマンス先生がウェルカムスピーチをするのが一種の名物である。

さて、この学会では、招待シンポジウムを企画するという栄誉に恵まれた（単に名誉であるだけでなく、参加費も半額にディスカウントされている)。

このシンポジウムではアグニエスツカ・コノプカさんが独自の解釈で、川メタファーとしての TEA（複線径路等至性アプローチ）という説明をしてくれた。西洋の理論は一般に何かを積み上げていくようなものが多いが、コノプカさんは川メタファーでうまく TEA（複線径路等至性アプローチ）を説明してくれた。



さて、ポーランドの学会ということもあり、学会会場がある Lublin の近くのマイダネク収容所を訪ねることにした。第二次世界大戦時のドイツのユダヤ人収容所としては、アウシュビッツが有名だがマイダネクもなかなかの収容所であったようだ。

人類の負の遺産を身近に感じた私たちにできることは何なのか、色々と考えさせられた。

4　10 月イタリア　Idiographic Approach to Health

10 月はナポリ。イタリア・サレント大学のセルジオ・サルバトーレ教授に誘われて「健康への個性記述的アプローチ」という研究集会に参加した。

「See Naple and Die(ナポリを見て死ね)」、という程の風光明媚な土地なのだが、天候に恵まれなかった。

ゴチック様式の教会。

天井はこんな感じ。そしてピザ！でかい！

学会は University of Naples Federico II で行われた。歴史を感じさせる非常に重厚な大学であった。初日はあるセッションの司会と指定討論を任された。

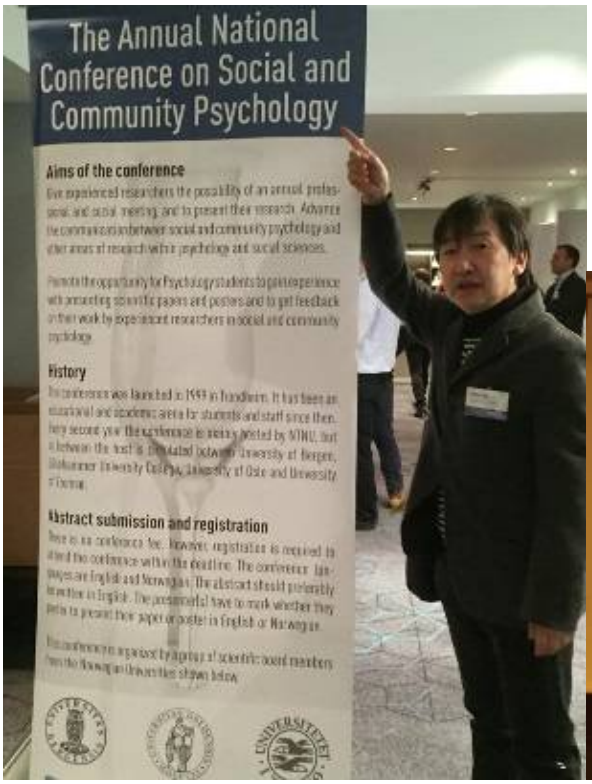
二日目は講義室のようなところに場所を移し講演。私は研究発表をした。東京電力福島第一原発事故によって避難を余儀なくされた方の話を交えながら健康への個性記述的アプローチについて発表した。

そして、その日はある教授のお宅でパーティ。

院生さん達（彼女達はほぼタバコを吸っていた）と一緒に記念写真。

5　11 月ノルウェー　社会＆コミュニティ学会

トロンハイムにあるノルウェー科学技術大学（Norwegian University of Science and Technology;NTNU）で行われた。トロンハイムはノルウェー中部に位置するノルウェー第 3 の都市で、ノルウェー王国最初の首都である。この学会は国内学会でありながら、様々な国の研究者が発表するし、学部生も発表したりする不思議な学会であった。私は記号と文化心理学について講演した。

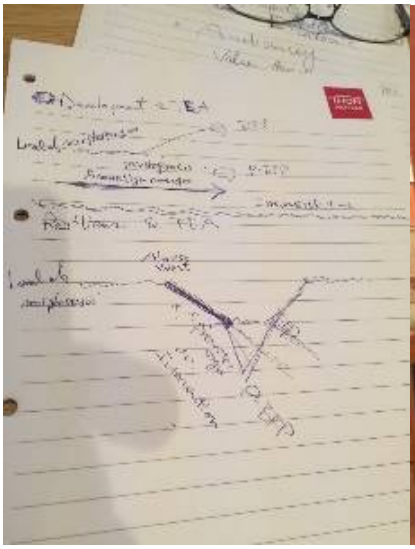


初日の懇親会はピザパーティ。しかもアメリカンピザの店、そしてアルコール抜き！パレスチナからの研究者と知り合いになったのは、大きな出来事でした。

ロシアからの研究者たちとも仲良くなりました。ノルウェーの院生たちとも仲良くなりました。

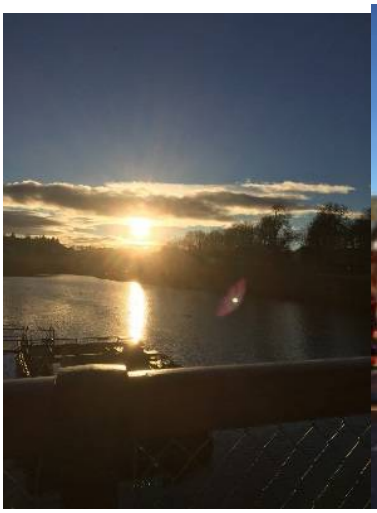
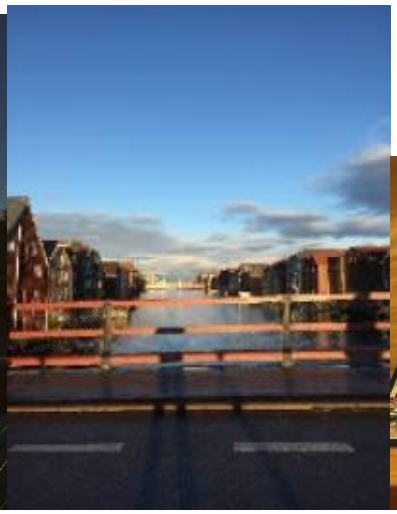
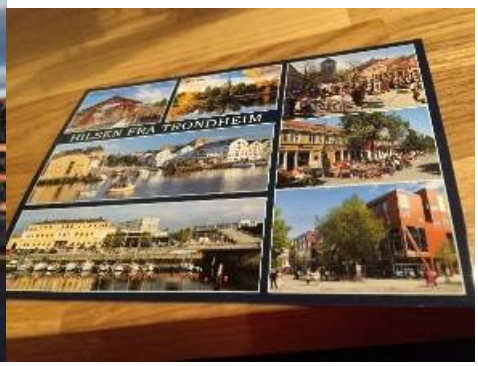
口が油っぽすぎて、ワインでも飲まずにはいられない！ということでホテルに戻ってきてからロビーで二次会。ワインを一杯。私の対面にいる女性はコペンハーゲン大学准教授の村上享子さん。
二日目の夜は、Hroar・Klempe 教授のご自宅でホームパーティ。ノルウェーの伝統料理であるスープ料理一品というシンプルなパーティでしたが、ビールは沢山あり、大いに盛り上がりました。

このパーティで、とある人と一緒にレジリエンスとは何か、ということについて考えました。メモの写真を載せておくが、この図のポイントはＶ字回復モデルでなくていいという点。そして、分岐点を設定することができれば他の事例における介入のモデルとなるだというということである。今後考えていきたい点である。



最後に記念写真！

　帰国の日、ちょっと周辺散歩。ノルウェーは緯度が高いので午後１時過ぎであるにもかかわらず、太陽はこれくらい低い。

６ まとめに代えて　文化的道具と記号

ノルウェーで見つけたこれは何？

卵立てなのである。私たちは私たちの周りの事物をそのものとして見るよりは記号を介して見ているものなのだ、というのが文化心理学の基本的考え方である。そしてこの考えは、ロシアの心理学者・ヴィゴーツキーの考えに基礎を持っている。目の前の物質がどのような道具なのか、ということは記号の働きによるものであり、記号の働きを共有することが文化なのである。

7 蛇足

なお、2016 年度の非常に大きな出来事として、TEA（複線径路等至性アプローチ）に関する英語の著書が刊行されたので紹介しておこう。

Sato, Mori and Valsiner (2016). Making of the Future: The Trajectory Equifinality Approach in Cultural Psychology. Information Age Publishing.

http://www.infoagepub.com/products/Making-of-The-Future

初めて TEA（複線径路等至性アプローチ）に関する研究を行ったのが 2014 年 1 月 25 日。

英語で本を出すようになるとは思いもよらなかったが、心理学や人間科学の方法論に 1 つの可能性を提唱することができて、率直に嬉しく感じている。

この日のシンポジウムについては下記を参照されたい。

http://www.ritsumei.ac.jp/mng/gl/koho/headline/topics/2004/01/ningenkagaku.htm

蛇足の蛇足ながら TEA のサイトもリニューアルされているので参照されたい。

https://sites.google.com/site/kokorotem/whatistem

高齢者とのドラマセラピー

尾上 明代

1　一期一会

高齢者施設は私がドラマセラピーを行っている場所の一つである。シリーズ１回目の今号では、数年前に実施したクローズド（固定メンバー）グループのセッション（週１回で１０回連続の第９回）を紹介する。私にとって初めての（超）高齢者（多くが８０歳台）のグループだった。「ドラマを演じるなんて生まれて初めて！」という方がほとんどであったが、回を重ねていく中でだんだん慣れて、後半には「もう、何でも演じられる！」というぐらいになっていた。このようなことが可能になるのは、ドラマセラピストが、相互交流を高めるゲームやドラマ的な遊びなどを行って、参加者の即興力・想像力・創造力を徐々に引き出していくからだ。私は（高齢者に限らず、すべての対象者グループで）特にこの漸進的な作業を入念に行い、楽しんでもらいながら演じる力をつけ、同時に安全・安心なグループを作っていく。それがセッションの成否を決めるからだ。

このグループも、皆で笑ってばかりのセッションが続いた。架空のドラマ創りなどを重ね、最終回も近づいた９回目のセッションで、実人生の題材を使うことにした。一般的に言って、高齢者の方々に良いと思われるのは、たとえば、

人生を振り返り、ドラマで「体感」して思い出してもらうワークである。NADTA（北米ドラマセラピー学会）は、高齢者に役立つことの一つとして「未完のことがらを適切に終了させる」という項目を掲げているので、この日私は、「昔、誰かに言いたかったのに言えなかったことを電話で伝えるドラマ」を提案した。

戦争に行ったＫ男さん

とてもおしとやかで気品のあるＦ子さん（８７歳）は、まさに良妻賢母タイプ。セッション中、「何だか楽しくて」と、いつもたくさん笑っている方だ。彼女が、まだ十代のころ、お兄さんの友人だった男性にどうしても伝えたかったことがあると言う。私はその男性（K 男さん）の役になった。事前の情報として上記のことしか聞かなかったので、どのような事情が展開するのか、どのような返答をしたらＦ子さんの気持ちが満たされるのかは全くわからないので、とにかく注意深く傾聴しながら、ベストと思える受け答えを即興で選択していく。

Ｆ子：　　もしもし、K男さんですか？　今、天国にいらっしゃるのね？
K男（尾上）：はい、K男です。そう。天国ですよ。どなたかな？
Ｆ子：　　〇〇（結婚前の名字）Ｆ子です。
K男（尾上）：えっ、Ｆ子さん！？　おお、久しぶりだなあ。お元気ですか？
Ｆ子：　　はい、おかげさまで元気にしております。
　　実は、長い間、どうしてもお伝えしたいことがあったんです。
K男（尾上）：何でしょう、Ｆ子さん。
Ｆ子：　　貴方は、私を好きだと言ってくださったでしょう。
　　貴方が戦争にいらっしゃるとき、お見送りに行って・・・
　　あのとき私、貴方への思いを告げられませんでした。
K男（尾上）：君も僕のことを！？　いやあ、それは知らなかった。
　　今まで僕の片思いだとばかり思ってた。
　　嬉しい、ありがとう！話してくれて。

観客たち（他のメンバーと施設のワーカー）が、にわかにざわつき、ほのぼのとした甘酸っぱい初恋の雰囲気が漂う。

Ｆ子：　　でもね、貴方が戦争に行らしたあと、戦死の知らせがきて・・・
　　兄の薦めで別の方と・・・結局その人と結婚したんです。

一転、悲恋のヒロインＦ子さんに対して、観客たちは同情の思いを抱くのであった。

Ｋ男（尾上）：いやなのに結婚したの？？
Ｆ子：　　いえ。その人も素敵な人で。
　　ごめんなさい。お許し願います。

観客一同、ズッコケ、笑い！
Ｆ子さんは、いたずらっぽい笑顔で「モテモテだった」その頃をリアルに感じ、思い出していたのか、まるで少女のように見える。
Ｋ男もズッコケていたが、気を取り直し―

Ｋ男（尾上）：いや、いいんですよ。君が幸せな人生を送ったと聞けて、
　　僕もこんなに嬉しいことはありません。
Ｆ子：　　はい、幸せな結婚生活でした。
Ｋ男（尾上）：旦那さんは？
Ｆ子：　　亡くなりました。そちらにいると思います。
Ｋ男（尾上）：あ、もしかして・・・！
　　その人なら、僕、ここで会ったことありますよ。友だちです。
　　彼もこっちで元気にしていますよ。
Ｆ子：　　そうでしたか。よかったですわ。
Ｋ男（尾上）：では、お元気で。本当に電話ありがとう！
　　天国から君のこと、ずっと見守っていますからね。

　とても後味の良い、素敵なシーンだった。「良妻賢母」のイメージと少しだけ違う、愛すべきＦ子さんのドラマ。観客は、ほのぼのと楽しい気分になり、ご本人も大満足の様子だった。

漸次的な進行の重要性と創造性の開発

　このようなドラマが可能になったのは、それまでの８回で、固定メンバーでの相互交流を深め、ドラマゲームや架空ドラマを楽しく演じることに慣れてもらうプロセスを創って来たからである。９回目のこの日も、いきなり上記のド

ラマをしたのではなく、実は以下のようなメニューを実施し、少しずつウォームアップをしていた。

このときは冬だったので、まず最初に「冬」から連想するイメージ・思い出をひとこと言ってもらった。その答えとして出たのは、ゆず、鍋、孫とスキーに行ったことなどが多かったが、F 子さんだけは、「吹雪の中、恋人に会いに行く」とユニークな発言をした。そこで私は、F 子さん自身の本当の思い出の可能性が高いと感じ、そのことを心にとどめた。

次に、公園のベンチで新聞を読んでいる人に、何か働きかけをして、その新聞を手放させるゲームをした。

私が新聞を読む人になり、メンバーがそれぞれ何とか工夫して発案し、私に話しかけるなどする。その結果、私の手から新聞が離れれば成功というゲームだ。例えば、私が何かに驚き、思わず新聞を落とすとか、何かを頼まれて新聞をその人にあげる・貸すなど、何でも良い。

施設のワーカーも含めて、すでに全員のプレイフルネス（良質なユーモア、遊び心）や創造性が開発されているので、多くのアイディアが出た。現実的ではない案も推奨している。現実の範疇にとどまるようなことは、全員毎日生きている中で嫌と言うほどやっているので、少しでも現実離れしたアイディアを実行できることが重要である。その積み重ねで発想力がつき、現実でのさまざまな行動や対処が豊かに変容するのだ。このことは、私が多くのクライエントとの経験の中で確証を得ていることであり、セッションをリードする中で非常に大事にしていることの一つである。

さて、この日の皆さんの成功例をいくつか紹介すると、「すみません、ちょっとこの荷物持っていていただけないですか」と私に頼むパターンや、「そこにムカデがいます！」とか「地震だ！」と言って、驚かせる手法があった。特に「手をあげろ！！」と迫られたときは、私は思わず両手をホールドアップし、新聞は一も二もなく手から落ちた。

次に、新聞をもつ人を今度は参加者から募集すると、F 子さんが手をあげた。ここで私たちは、今までに見たことのない彼女の一面を見ることとなる。あるメンバーが「火事だ！」「あなたに火がついてますよ！」と言っても F 子さんは私のようには動じず、新聞を握りしめている。

実は、私が新聞の持ち手のときは、セラピストとして当然ながら、どんなアイディアも受け入れて新聞を手離すが、参加者に新聞を預けた場合は、その人自身の感情を表現する機会となり、手放させようとした人のほうが不成功に終わって、がっかりすることがある。

このときの F 子さんは強者だった。相手の言うなりにはならない、という頑固なまでの強い意志が見て取れた。良いアイディアが出ても、それを成功させ

たくないという、ちょっと「意地悪な」感情も感じられた。これは、それまでのデイサービスでの様子からは想像もつかないものだった。セッションでは、一度だけ、家族にいろいろ指示されることに対して、「うんっもう！」ということばとともにイライラする感情をパントマイムゲームで表したことがあったが、そのような負の感情を「新聞を離さない」という行動の中で表現していたように感じる。このような架空の楽しい枠組みで、思い切り本心を露わにする人は多いし、それこそがドラマセラピーの本来の意図の一つである。

その後「孫の合格発表が、その新聞に載っているんですが見せて頂けませんか？」と話しかけられたときは、「私の大事な新聞だからだめよ。」と言って、やはりその手には乗らなかった。次に私が手放させる案を出す番になった。冬のイメージのとき、「吹雪の中、恋人に会いに行く」と言っていたので、私は「恋人との再会」を試みた。「F 子さん、僕はあなたに会いに来ました。」と言って近づくと私たちは抱擁し合い、感動的な再会ができた。しかし何とその間も、新聞が身体から離れないように、小脇にしっかり抱えていた！この徹底した抵抗振りに、皆から拍手が沸いたほどだ。その後、上記で紹介した昔言えなかったことを誰かに伝えるあのドラマとなったのである。

「睦みあう」

このグループに、俳句創りがとてもお得意なM子さんという８２歳の方がいて、デイサービスで俳句の日には、先生役としても活躍されていた。その彼女が最終回のときに、すてきな一句を読んで下さった。

「冬陽(ふゆひ)入れ　ドラマセラピー　睦みあう」

セッションをしていた部屋には、冬の太陽の陽が差し込んできていた。そんな暖かな部屋で、楽しいドラマの数々を皆で演じあっている様子を「睦みあう」ということばで表現して下さったのだ。今まで私は、いろいろな表現を使ってドラマセラピーを説明してきたが、「睦みあう」というのは初めてで、そのように感じていることを俳句で伝えてもらって有り難く嬉しかった。

このM子さんは、思い残したことを言うドラマのとき、たった１人の妹さんに伝えたいことがあると語った。

「昔、父さんが私にだけ素敵な帽子を買ってきてくれてごめんね。あんたには、昔世話になったのに、腰を痛めて入院しているのに見舞いにも行けないで

申し訳ないと思います。私は、そんなにいい帽子じゃなくてもいいから、父さんに、２人に買ってきて欲しかった。身体に気をつけてね。」

なぜお父さんが、M子さんにだけ買ってきたのかわからないが、彼女は、そのことがずっととても気になっていたと言う。ご存命の妹さんに実際に伝えることはできないとのことで、ここで長年の思いを表現できて、本当に肩の荷がおりたと喜んで下さった。

一期一会のグループ

今回、紹介したグループセッションは、もともと認知機能にほとんど問題がなく、また意欲の高い方々が集められて始まったものだった。ゆえに「高齢者」グループと言っても、（単に年齢が高いだけで）ドラマを演じる、即興で物語りを創る、そこから洞察が得られるなどの能力があり、一般のグループとほとんど変わらないワークが可能な方々だった。このグループ終了後、施設と話し合った結果、認知症の症状が出ている方々も対象にすることとなった。ドラマセラピーは、仲間やセラピストとの交流がしやすいこと、また感情表現や記憶を扱うので、認知症の症状にも効果があり、全体的にＱＯＬを向上させることに役立つからだ。つまり、その後のセッション実施は、かなりチャレンジングな仕事になっていったのである。現在も、私の挑戦は続いている。

この最初のグループの参加者で、今もその施設のデイサービスに通っている方は一人しかいない。Ｆ子さんは別の施設に移り、そして「睦みあう」俳句を創って下さったM子さんは、天国に行かれた。今振り返ると、この最初の１０回が、どれだけ上手くいったグループだったか、どれだけ稀で尊い交流の時間だったかを思い知らされる。まさに一期一会であった。

（次号に続く）

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第 27 話

水野　ス ウ

「草かふぇ」その後

去年の夏、わが家の「紅茶の時間」で毎週3時から4時までの1時間だけ、「草かふぇ」をはじめます！と一人で宣言したこと、マガジン26号で少し書きました。

以来、とくべつ紅茶など特別な催しのある日をのぞいて、ほぼ毎週、ごくこじんまりながら、この「草かふぇ」――今の憲法と自民党のつくった改憲草案を、自分の目で見て確かめて、どう違うのか知ろう、わからないこと知らないことは、遠慮せずに何でも訊いて、少しでも憲法をわたしごとにしていこう、まわりに何気なく憲法のこと語れる自分になっていこう、そのための練習の場――を続けています。

やり方が決まっているわけでも、教科書があるわけでもない、草かふぇという新しい試み。最初のころは毎週、条文を一つとりあげて、声にだして読みあい、自分の感覚を頼りに今の憲法と草案の違いを感じ、言葉にしていく、そんな作業を重ねていきました。

ただそれだけの作業が、実際にやってみると思いの外、おもしろいのです。週ごとに微妙にいれかわる参加者さんと、とっつきにくい憲法の日本語を、自分たち流に読み解いていくのですから、さながら先生のいない、国語と歴史と社会の実験教室。もちろんかたわらに、専門家や作家、弁護士さんの書いた本を何冊も並べて、困った時はいつもそれらを参考書がわり、おおいに助けてもらっていますが。一人で読んだ時は見過ごしていたいろいろな気づきが、草かふぇの中で次つぎに生まれていきました。

これまで草かふぇでは、前文、13条、12条、21条、24条、9条、最高法規の第10章、そして、草案で新たに追加された「緊急事態条項」をみんなで読みあってきました。今回は、その中から、前文と10章・最高法規のミニ草かふぇ実況中継

をお送りしようと思います。皆さんも、自分だったらどんな発見をするかな？と探しながら読んでいただけたら何よりです。

前文くらべ

今の憲法前文と草案前文の読みくらべをした時の様子、お伝えしましょう。この日は井上ひさしさんの『子どもにつたえる日本国憲法』（講談社）をテキストブックにつかって、今の憲法の前文を一区切りごと読んでいきました。

「日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し……」と始まる前文は一見、難しそうだったけれど、一つひとつ自分たちの言葉に置きかえてみると、主権が私たちにあるとはっきりうたっていることや、誰もが平和のうちに生きる権利があることなど、前文の深い理念が身体にしみこんでくる感じがしました。

そして、前文には、どうやらこういうことが書いてあるらしい、と、私たちなりにこんな風に解釈してみました。

「私たちは、私たちと私たちの子孫のために、固く心にきめました。すべての国々と平和的にちからをあわせて仲よくしよう。それによる実りと自由の恵みを、この国のすみずみにまで行き渡らせよう。政府のひきおこした戦争によって、私たちはとてもつらく、悲しく、ひどい経験をしたけれども、もう二度とそういうことがおきないようにしよう。

そのために、この国のかたちを決めるのは、政府ではなく私たちである、としなければなりません。この国の主権者は私たち国民です、と、ここにたからかに宣言して、この国のかたちを憲法にまとめることとします。私たちはこの憲法に違反する一切のきまりごとをうけいれません、また、これに違反する法にも従いません。

どんな国の人も、怖い思いやひもじい思いをせずに、おだやかな気持ちで生きる権利があります。どの国も、自分の国のことだけ考えて、他の国を無視したり、ないがしろにしたりしてはいけない。これはどんな時にも守らなければならない決まりごとです。

私たちは、この憲法に書きこんだ気高い理想を、私たちの名誉にかけ、ありったけの力でもって実現していくことを、ここに誓います」

草案の前文は

この文章にたどり着くまでかかった時間は、約40分でした。残り時間は20分。草案前文を声に出して読んでみます。どうやら文章は短くて、読みやすそうです。

日本国は、長い歴史と固有の文化を持ち、国民統合の象徴である天皇を戴く国家であって、国民主権の下、立法、行政及び司法の三権分立に基づいて統治される。

我が国は、先の大戦による荒廃や幾多の大災害を乗り越えて発展し、今や国際社会において重要な地位を占めており、平和主義の下、諸外国との友好関係を増進し、世界の平和と繁栄に貢献する。

日本国民は、国と郷土を誇りと気概を持って自ら守り、基本的人権を尊重するとともに、和を尊び、家族や社会全体が互いに助け合って国家を形成する。

我々は、自由と規律を重んじ、美しい国土と自然環境を守りつつ、教育や科学技術を振興し、活力ある経済活動を通じて国を成長させる。

日本国民は、良き伝統と我々の国家を末永く子孫に継承するため、ここに、この憲法を制定する。

読み終わるなり、この日の草かふぇ参加者さんたちから活発に声があがりました。

・あれ？　最初の主語が日本国民じゃなくて、日本国になってる。
・歴史と伝統、っていうのがこの国ではよほど大

事らしい。
・天皇を戴く国家、って、なんだかうやうやしい感じだねえ。
・戦争と災害が同じレベルになってる、ってことは、政府の責任はここでは問われていないんだ。
・戦争や災害をのりこえて発展してきたすごい国である、ってなんか自画自賛しているみたい。
・国民自らがこの国を守る、この国を経済成長発展させる、とも書いてあるよ。憲法っていうよりも、社訓みたいだなあ。
・国を発展させるために働け、って言われてる気がする。
・家族助けあって国家をつくる、って、こういうこと憲法に書くのに違和感がある。
・この憲法をつくる目的が何なのか、最後に書いてあるね。良き伝統と国家を子孫に継承するため、なんだって。
・国家があって、国民がある。今の憲法と真逆だね。

今の前文をじっくり時間をかけて読みこんだことで、みんな草案との違いがよくわかったみたいです。そして、参加しているひとたちの言葉によって、草案の目指す国のかたちがよりくっきり浮かびあがってきた気がします。 草かふぇには、これが正解、という答えはありません。それぞれが感じたことを自由に言葉にしながら、一緒に憲法を発見していく場。そのことがとてもリアルに感じられる、前文くらべの草かふぇとなりました。

第10章「最高法規」

日本国憲法の第10章は、「最高法規」の章。そのタイトル通り、ここには、この憲法が最高法規であることの根拠が書かれています。わかりやすくいうと、この章は、憲法が自分のことを自己紹介している章です。収められているのは97、98、99条の3つだけ。

さて、ここで草かふぇからちょっと寄り道します。私が憲法のおはなし出前に行って、まずみなさんにご協力いただく、けんぽう折り紙アンケートのこと、少し説明させてくださいね。

アンケートの1問目はこんな感じ。「私たち一人一人に日本国憲法を守る義務がある。そう思う方は、折り紙のきれいな色の方を私に向けてください。 違う、と思う方は、折り紙の裏側、つまり白い方を私に見せてくださいな」

そう尋ねると、どの会場でもたいてい8,9割の方が、折り紙のきれいな色の方を私に見せてくれます。つまり、憲法を守る義務は、国民である私たちにあるのだと。

そこで、プリントアウトしてあった99条を、誰かに声に出して読んでもらって答えあわせをします。

99条
天皇又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員は、この憲法を尊重し擁護する義務を負ふ。

あれれ？って、けげんそうな顔がたくさん見えます。国民である「私」は含まれていないの？

そうなんです、憲法も法律と同じように、てっきり自分が守らねばいけないものと思っている人が多いけれど、実は憲法を守る義務があるのは、権力を持っている側の人たちなんです。なんでかって？　長い歴史の中で、人間は権力を持ってしまうと、ついその力をふりかざして、人々の自由や権利を奪ったり制限したりと、自分勝手なことをしてしまいたくなる生き物だということが証明されてきたから。

つまり、私たち一人ひとりの自由が大切にされるためには憲法という道具で権力をしばる必要がある、だから、権力を持つ人たちに憲法を守る義務がある、というわけです。

ここが、どこの出前にいってもかならず押さえておかなければならない、けんぽう基本のきの要（かなめ）です。

けんぽう基本のきでは、あわせて98条にもふれます。憲法と法律はどちらが強い？という質問をしてから、98条を誰かに読んでもらいます。

98条
1　この憲法は、国の最高法規であつて、その条規に反する法律、命令、詔勅及び国務に関するその他の行為の全部又は一部は、その効力を有しない。

「この憲法は国の最高法規。これに違反する法律に効力はありません」憲法にそう書いてあるにもかかわらず、政府は2015年の夏、憲法学者の8割が憲法９条違反とした法律を国会でむりやり通しました。国会前にあふれたコールは、憲法に違反する集団的自衛権に対する反対もあったろうし、憲法を守るべき立場の総理大臣や国会議員が、数のちからで憲法違反の法律を作ったことへの反発でもあったろう、と思います。

どうして最高法規なの？

憲法が自己紹介をしている「最高法規」の章には、97条から99条までの３つの条文が入っていると先に書きました。98条では「私はこの国の最高法規です」と、99条では「私の中に書いてあることを守る義務があるのは権力をもっている人たちです」と、憲法は言っています。それじゃあ、97条はどんな自己紹介なんでしょう？

97条
この憲法が日本国民に保障する基本的人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であつて、これらの権利は、過去幾多の試錬に堪へ、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として信託されたものである。

実は、ここに登場している「基本的人権」というワードは11条にも出てきています。だけど、基本的人権の保障をここまではっきり謳っている97条が「最高法規」の章に収められているということが、この憲法が最高法規たりうる根拠となっている、と弁護士さんから教えていただきました。

つまり、「私は、何よりも大切なあなたの人権を守るために存在しています。そして、あなたの人権が何よりも大切なものだからこそ、それを守るための私が最高法規であると言えるんですよ」ということを97条は示しているのです。

個人的にも大好きな97条を、『わたしとあなたの・けんぽうBOOK』という本のなかで、私はこう訳しています。

「この憲法は、日本の私たちに、ひととしての基本的な権利を保障するもの。それは、自由を求める世界中の人たちが長い長い時をかけ、苦しい試練にたえぬいて、ようやっと手に入れることができた実り。それはどんな時にも侵すことのできない永久の権利として、今といのちの未来へ、信頼にもとづいて手渡されます」

原文とこの訳文をもとに、草かふぇで語りあいました。

・今、私に与えられている人権って、決して当たり前にあるものじゃないんだ。私の生まれるずーっと前から、人権、なんていう概念も言葉もなかった時代から、数えきれないほどの人たちが、自分を押しつぶそうとする力とたたかって、血を流して勝ちとってきてくれたもの。
・自分たちは人間だ、人間らしく生きる権利があるんだ、って、気の遠くなるような時間をかけて努力した人たちがいたってことだよね。
・やっと手にすることができた人権、って考えると、ものすごく貴重に思える。これを得るためにたたかった、過去の人たちからの贈り物なんだ。
・私の自由や権利を守ってくれているこの基本的人権、私のためだけにあるんじゃない。この贈り物を受けとった以上、次は未来の人たちにちゃ

んとバトンタッチしていかないと。

・うん、「侵すことのできない永久の権利として信託されたもの」ってところ、ずしんとくる。この権利は大勢が寄ってたかって奪おうとしても奪えないもの、それがこの私を信頼して手渡された、ってとこに責任を感じるな。

・弁護士さんが、97条は中味で、98条99条が外味、って言ってたよね。97条で保障されている人権という中味を守るために、98と99という外側の条文もあわせて必要なんだ、ってこと、あらためてわかった。中と外は性質が違う条文だけど、最高法規の章でこの3つが1セット、ってとこがミソなんだね。

97条、草案では

ところがなんと、草案ではこの97条がまるごと、削除されているんだよ、と言ったとたん、草かふぇの人たちから驚きの声。

え〜〜、なんでなんで、こんなにすてきな条文がどうしてなくなっちゃうの？　理由は、似たような条項が他にもあるから、重ねてまたここで言う必要はない、ということらしいよ、と説明しても誰も納得しません。

・だって、基本的人権を大切にするこの条文が、最高法規の章に収められていることにこそ意味がある、って言ってたじゃない。この憲法は人権を大切にする憲法です、と憲法が自己紹介してる章だ、って。

・この章から97条がなくなるって、人権をこれまでみたいには尊重しない憲法にする、と言ってるように思えちゃう。

・それじゃまるで、黄味のない卵だよ。

・ダルマに目がないのと同じ。

・具のないサンドイッチみたいだ。

草かふぇメンバーの感性と表現力に、思わず拍手！　「黄味のない卵」「ダルマに目がない」「具のないサンドイッチ」どれも言い得て妙、なんてわかりやすいたとえでしょう。

こんな発見があるたび、草かふぇやっててよかった！と思えるのです。参加している人たちの自由な発想から、私自身が一番勉強させてもらっています。

矢印が逆向き

ちなみに、憲法を守る義務を記した99条は、草案では102条に引っ越しています。しかもその1項に、この憲法を尊重する義務はまず国民にある、と記されているのです。

102条
1　全て国民は、この憲法を尊重しなければならない。
2　国会議員、国務大臣、裁判官その他の公務員は、この憲法を擁護する義務を負う。

2項で、総理大臣や国務大臣、裁判官や公務員に憲法を守る義務ありと書かれてはいますが（なぜか天皇はここに含まれていません）、これは憲法の「名宛て人」、つまり、憲法の矢印が誰に向けられているかが、これまでと逆になってしまうことを意味しています。

六法全書に、憲法とは「人々の自由と権利を実現させるために国家権力を拘束する法」と書かれているけど、草案通りの私たちをしばる憲法になったら、この言葉がもうあてはまらなくなってしまいます。

この自民党草案に関しては、立憲主義を否定するもの、憲法の体をなしていない、といった厳しい批判が、学者や弁護士、知識人、市民からも数多く寄せられました。2016年10月、自民党は国会の憲法審査会において、この草案を議論のたたき台にはしないと発表しましたが、草案を撤回はしていないので、自民党の目指したい国のかたち

がこれで大きく変わるわけではないでしょう。だからこれからも草かふぇで、草案をテキストに憲法を学んでいく意味は、十分あると思っています。

草かふぇのテーマ

毎週の紅茶の時間がはやっていないのをいいことに、昨夏から突然はじめた草かふぇ。当初はその名前の通り、草案の条文を1つずつテーマにしていたけれど、回を重ねるうち、あ、草かふぇ、と名づけたからといって、かならずしも憲法や草案の条文だけを学ぶ場に限らなくっていいのかも、と思えてきました。

たとえば、暮らしと憲法を取りあげたEテレの番組を見たり（14条に男女平等を、24条に家族条項での個人の尊厳をかきこんでくれたベアテさんが登場）、クローズアップ現代プラスの「声をあげる若者たち」の録画を見たり（日本のSEALDsや、世界各地で起きている若者たちの動きを紹介）、時には時間枠をひろげて「不思議なクニの憲法」のミニ上映会をしたり。そんなふうに臨機応変、この場のみんなと一緒に見たい、考えたいものをテーマに、言葉にしあっていく、というスタイルだってありなのかもしれないと。

なぜって、女性の生き方を考えることも、子育てや介護や、家族のあり方を語りあうことも、子どもの権利や子ども食堂や奨学金について考えることも、自分の自由についてしゃべりあうことも、自分を大切にして生きようと思うことも、貧困も差別も格差も、戦争と平和のことも、――つまり私たちがいま生きているこの社会について考えることすべてが、気づけばみんなみんな、根っこの部分で憲法とつながっている！　そのことを、私自身が頭ではなく心で感じるようになったからです。そしてきっとそれは、週に一度ほんの一時間ではあるけれど、仲間と一緒に自分たちの心と言葉でくり返し憲法に触れてきた、その時間のおかげなのでしょう。

暮らしの中のどんなことも草かふぇのテーマになるんだ、と思ったらとても気が楽になって、草かふぇの可能性がまた、ぐんと広がった気がします。日々アンテナを立てて、ていねいに自分らしく生きることが、同時に、世界を見る目、日本を見る目、自分の生き方、自分のいま手にしている権利と自由、などについて深く考えることの幅を、少しずつ広げてくれる。12条で私たちに求められている「不断の努力」とは、文字通り、日々普段からの暮らしの中で積み重ねられていくもの、そのことを今いっそう強く感じています。

12条
この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によつて、これを保持しなければならない。又、国民は、これを濫用してはならないのであつて、常に公共の福祉のためにこれを利用する責任を負ふ。

近々、草かふぇで「この世界の片隅に」という映画を見た人たちと感想を語りあう時間を持つことにしていますが、映画のヒロイン、すずさんについて語ることも、映画の舞台になった呉を語ることも、あの時代と今について語ることも、まさしく草かふぇのテーマにふさわしいな、と思っています。

13条の後追い発見

草かふぇは、いつも同じメンバーなわけではなくて、ふらりと飛び入りで初参加する人もいるので、おのずと憲法の中の核心と言われている13条について語る機会がふえました。

13条
すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする。

あなたは、ほかの誰ともとりかえのきかない存在で、あなたはあなた個人として尊重される、と言ってくれている13条。あなたがそうであるように、それは私にも、あの人にもあの子にも、あてはまることで、だからお互いの大切さは行ったり来たり。他人のしあわせを邪魔しないかぎり、どんな人もその人らしくしあわせを追い求めて生きていっていいんだよ。そう憲法に書いてあるって、うれしいことだよね、という話を、これまでに私は何度くり返し語ってきたことでしょう。

13条をテーマにした草かふぇでは、「個人として尊重される」から“個”という文字が消えて「人として尊重」になった草案を読んで、「今の13条に“個”があることで、一人ひとり違っていていいんだ、ってことが認められていると思う」と言ってくれた人もいました。

そういう場面を草かふぇで何度か経た後に、ある時急に、あ！と気づいたんです。草かふぇの土台になっている紅茶の時間って、なんて13条的な場なんだろう！と。

あなたもわたしも、かけがえのない存在。一人ひとりが身の丈で認められること、受け入れられること、どの人の言葉もきちんと聴かれること、みんなと同じ意見でなくてもいいこと、互いのいいところを言葉にして伝えあっていること、誰もワンマンショーをしないこと、などなど。33年間、紅茶を続ける中で大切にしてきたことを、思いつくまま並べてみた時、あらためてどれもみな、13条だ、と感じたのです。

このことを紅茶仲間に話すと、ええ〜、スウさん、今ごろ気づいたの？私たち、ずっと前から紅茶って13条だなあ、と思っていたよ、とみんなに笑われました。

こんなふうに、自分のしていることの意味がわかるのは、私の場合、いつもかなり後になってから。でもきっと、それでいいんです。

だってね、そういうことが最初からはっきりわかっていたとして、「紅茶の時間はあなたの基本的人権の13条を大切にする場所です」だなんて標語が玄関に仰々しく貼り出されていたら、ふらりと紅茶にやってきた人が、何気にドア押してはいりづらくなっちゃいますもんね（笑）

紅茶の時間のことも、草かふぇのことも、もしかしたら今はまだ気づいていない、あんなことやこんなことも、自分の今していることは、いつも自分からはよく見えない、わからない。

だいぶん時間がたってからのこんな後追い発見が、私にはなおよいこと、すてきなことのように思えてなりません。その分、予期せぬおつりが一緒についてくるようでね。

2017.2.20

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になり、大切な人の死が縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。それは、悲しみを断ち切る生き方ではなく、内に深く悲しみを包み込んだ人として生きることだと思っています。

四十九日(七七日)

1. どう生きていくのか

今回で、七日参りの最終回です。大切な方が亡くなって 49 日が過ぎる頃は、悲しみがさらに深まるように感じます。かつて仏教学の碩学であった長尾雅人先生が、奥様を亡くされて四十九日の頃、「悲しくて、悲しくて、やりきれない」とおっしゃっていました。

仏教というのは、悲しみを忘れさせてくれる教えでもなく、悲しみを乗り越えて行く教えでもありません。その悲しみの中で、真実に出会い、それによって人生の本質に気付いて生きてほしいと思います。その真実とは本願であろうと思います。それは亀井勝一郎氏の言う邂逅(かいこう・であいの意)と謝念(しゃねん・ありがとうの意)だと思います。

（この言葉は亀井氏の言葉だったように思いますが、どこに出ていたか忘れてしまいました。）

2. 本願

本願についてお話をしましょう。菩薩は願をおこして、その願が完成して仏に成るのです。願を立てたとき、それが完成しなければ仏に成らないと誓うので、誓願ともいいます。法蔵菩薩という菩薩は、人々を必ず救いとる、すなわち仏にするという願をたてて、その完成によって阿弥陀仏となったのです。この願を本願といいます。

この本願に遇うのは、信心いただくことです。阿弥陀仏が私を必ず救ってくれるという映像もなければ、契約書もありません。しかし、必ず救ってくれるのだと思えるところに、信心があるのです。そこに「ありがとう」という言葉が出るのです。それが邂逅と謝念ということだと思います。

ここで少し、触れておきたいのが本願に「遇う」と書きました。会うではないのです。遇うと言うのは、私の意思で会うのでは、ないのです。

3. 秋雄さんの死

本願に遇うと言うことについて、具体的な例で話を進めたいと思います。

昨年のお盆に、秋雄さんが 85 歳で亡くなりました。枕経の依頼の電話がありましたが、私はお盆参りの最中でした。少し遅れて、枕経をあげに駆けつけました。私は枕経をあげるとき、「この人はどんな思いで息を引き取られたのだろうか？」とか「どんな思いで人生を生きてこられたのだろうか？」と思います。

秋雄さんの場合、「これで長男さんに会えるな」と思いました。息子さんは30年程前に亡くなりました。冬の信州の山での遭難でした。ご両親は力の限り捜されました。いろんな方に頭を下げて捜索して貰いました。ずいぶんと親身になって探して下さった方も多かったそうです。きっとご両親の悲しみに触れての行動であったように思います。しかし、遺体が発見されるのは、春の雪解けを待たねばなりませんでした。ご両親は、長く厳しい冬を過ごされました。私は過ごしたと言いましたが、ご両親には時間の経過の記憶もないかもしれません。人はあまりに深い悲しみにいる時、時間の経過に対する意識がないように見えます。

それ以来、この夫婦は信州の山にたびたび足を運ばれました。次男さ

んも一緒だったり、次男さんの家族も一緒だったりしました。

それから十年ほどが過ぎた頃に、この秋雄さんは脳梗塞に罹りました。命は助かりましたが、言語と運動機能が不自由になりました。言語訓練の一環で、歌を歌うことを薦められました。秋雄さんは歌が不得意でした。しかし、『正信偈(しょうしんげ)』をあげられるようになりたいと、懸命に練習をされたそうです。そして『正信偈』をあげられるようになりました。次は、仏壇の前まで歩いて行って、座って『正信偈』をあげたいと、歩行訓練に取り組みました。秋雄さんは仏壇の前に座れるようになりました。

私がお参りに行くと、秋雄さんは静かな笑みを浮かべて迎えてくれます。もう信州の山には登れなくなりました。息子さんの祥月命日のお参りの折に、私が信州の山に行ってお経をあげてこようかと提案しました。ご夫婦で喜んで同意して下さいました。

私は信州の山に足を運びました。地図に印をつけてもらった場所に到着して、リュックサックから法衣を取り出して、身にまといお経をあげるべく、崖の上から下を見下ろしました。すぐにお経の声が出ませんでした。

ざっと 3〜400 メートルはあろうかという崖です。息子さんは、ここを滑落したのでしょう。雪庇を踏み抜いて、雪ともに落ちたのかもしれません。どんな最後だったのでしょう。彼はどんな思いをめぐらせたのでしょう。この崖を見下ろしたご両親は、どんな気持ちだったのでしょう。私は、しばらくお経の声が出ませんでした。

このような経緯があって、私はこの秋雄さんの枕経で「息子に会える」と思ったのでした。ところが、七日参りを重ねるうちに、私の思いは変わりました。秋雄さんは「ありがとう」と言って往かれたようにおもいました。この私の思いを話すと、奥様は微笑んでしっかりとうなずかれました。

4. 本願に遇う

秋雄さんは既に本願に遇っている自分に気付いていたと思います。決して本願に会いたいと思って人生を歩んでいらっしゃったのではありません。最も望まなかった長男

の死に遭遇してしまったことで、本願に遇われたのです。お仏壇の前で『正信偈』をあげていたのは、極楽浄土に居る息子を思っていたのでしょう。極楽浄土で仏と成った息子を思うことができたのでしょう。そのことを確信されていたように思います。極楽浄土での再会は必然のことでありますから、臨終のときに再会を思わなくてもいいでしょう。

そうすると、臨終のときにはこれまでの人生での奥様への感謝の気持を思われたのではないでしょうか。次男さんへの感謝、次男さんの奥様への感謝、お孫さん達への感謝であったと思います。秋雄さんは、決して饒舌な方ではありませんでした。生前、みんなに「ありがとう」と言って回ったのではないかもしれません。しかし、この感謝の念は家族全員に伝わっていたように思います。

一般的に、家族の個々はそれぞれ異なった方向を見ているものです。しかし、心の奥底で繋がっていればいいのだと思います。秋雄さんの家族は、仏と成った長男が全員を結びつけていてくれたのだと思います。「みんな家族でいてくれて、ありがとう」と言ってこの人生を終えていくのは、ありがたいことです。

5. 「七日参り」の終わりに

大切な人の死に立ち会ったとき、「どうして死んでしまったの？」、「何故死んでしまったの？」と言う問いかけを耳にします。この問いかけは、すごいことだなと思っています。死の意味を問うているのです。背面にあるのは、自分の生きる意味であろうかと思います。

人は、日常生活の中で生死の意味を問うことは少ないと思います。とても大切な人の死は、私の生きる意味を問う機会を作ってくれたように思います。それが「ご縁」だと思います。「ご縁」というのは始まりです。「七日参り」の連載はこれで終わりますが、これからが自分の人生の意味を問う心の旅の始まりです。仏法に耳を傾けて下さい。すぐに明確な答えが出るかどうか分かりませんが、それぞれの私の人生を終えるときに、あのご縁のおかげで意味ある人生を過ごせたと思われるように願っています。

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（２４）

中村周平

これまで私が事故について触れてきたこと・・・それは、これまでの自身の経験に基づく「感覚」に近いようなものでした。学校側やチームと話し合っていく中での自身の感情の変化や、時間の経過と共に変化してきた事故への思い。自分の目に映ったもの、その時々の感情を言葉にしてきました。つまり、自分を主人公とした物語を綴ってきたのだと思います。それが間違いだったということではなく、なぜ事故後にそういったことに至ったかということを心情的なところを出発点とすることで考えることが私の持っている唯一の術でした。

また、講演などで想いを情報発信していく中で相手への伝わりやすさを重視するあまり、自分自身が「原因究明の困難さ」、「補償制度の不備」という単一的な視点でこのスポーツ事故による紛争を捉えていたことも、論文作成の過程で改めて気付くことになりました。

「既存の制度における補償額が少ない」→「経済的に困窮する」→「裁判という手段しか残っていない」→「訴訟」

という決めつけに近い一連の流れが私の中に出来上がっていました。そして、その過程において大切なことが抜け落ちていることに考えが及んでいませんでした。スポーツ事故における「責任の所在」を明確にできていなかったのです。ラグビーが危険だということをある程度は把握しながら当該スポーツに参加していたプレイヤー側。事故というリスクが付いてまわるスポーツだということを認識しながら指導に当たっていたチームや学校側。そのどちらか、もしくは双方だけで事故のやり取りや責任について考えていくことに疑問を抱かずにはいられませんでした。しかし、そういった疑問を持ちながらも学術的なものはもちろんですが、明確な答えというものを出せずにいたことも事実でした。おそらく、「誰か」という特定の人間や関係者だけに責任がいくことに心のどこかで違和感を覚えても、その違和感を凌ぐだけの説得力のある答えを自分の中に持っていなかったんだと思います。

「事故を防ぐことができない以上、誰か個人が責任を負わなければ・・・この現状は避けて通ることができないのか」

その違和感に正面から向き合ってくれたのが、同志社大学での学びでした。論文作成の過程で担当教員の川井先生が重視されていたことの一つに、海外における取り組みを把握することがありました。日

本で起きていることの多くは海外でも起きている。その現状に対して海外ではどのような取り組みがあるのか。興味の大きさとは裏腹に、私のみでそれを調べるだけの度量も知識もありませんでした。川井先生は海外で研究員として活動されていた経験もあり、海外の研究者の方々と共同研究という形で著書や論文を複数発表されていました。どうすれば最新の海外の動向が把握できるのか、知りたい情報を検索する方法は。一つひとつ指導していただきながら、地道に情報を模索していきました。また、海外の方が持つスポーツ事故に対する社会的認識(自己責任論や報道の在り方など)といった、論文や資料では把握できない「肌感覚」の様子を共同研究者の方からヒアリングしていただくことができました。

「英語は高校以来。英語のサイトなんて検索したこともなかった。それこそ、単語を一つひとつ調べへんと全然わからへん。でも、やればやるほどこれまでモヤモヤしてたことが晴れていくみたいや。」

　アメリカやニュージーランド、オーストラリアといったスポーツ先進国の情報を調べていく中で明らかとなったこと。一つは、海外でも日本と同様にスポーツ事故は起きていたということでした。とくに、２０１２年にアメリカで起きた NFL に対する集団訴訟をきっかけに、脳震盪については様々な論文や報道が出ていまし、少しアメリカのスポーツ界がその問題に対して非常に神経質になっているような印象も受けました。ラグビーにおいては、年間事故数の違いこそ把握することはできませんでしたが、スクラムやタックル時に深刻な重症事故が起きていることが明記されていました。そして、もう一つはその事故のリスクを「分散」する仕組みが構築されているという事実でした。

それでも「遍照金剛言う」ことにします

第１４回

脱精神科病院「わが国の脱精神科病院⑥」

三野 宏治

はじめに

1965 年の精神衛生法改正で通院医療費の公費負担が制度化されたことは、精神医療・保健福祉領域に携わる者であれば知っている事柄だ。現在でも通院費公費負担制度は障害者総合支援法の自立支援医療として継続しており利用する人も多い。ただ、前回に述べた通り当該制度は通院医療費に対する補助であり入院医療費に対しては適応されない。1950 年代中ごろ以降、向精神薬が登場し臨床場面でも治療に使われる。このことも入院ではなく通院で治療をより積極的に可能にしたといえる。その結果、診療所・精神科デイ・ケアは増加した。

そして現在、精神科・心療内科を標榜した診療所は多く存在している。では、この増加した精神科・心療内科診療所、つまり外来治療は精神科病院（入院治療）にとってかわったのか。データを見ると精神科病床数はピーク時に比べ微減した程度である。それはどうしてだろうか。

外来患者数の推移

1964 年のライシャワー事件を契機とした精神衛生法改正で「精神科通院医療費公費負担」が訪問指導とともに導入された。それは（訪問指導も関係したうえでの）通院医療利用の増大を「社会防衛」と連結させたものだ。「精神衛生対策補助金等」における通院医療費公費負担分は著しく増加している。国庫における通院医療費公費負担分について 1976 年の 3.792.876 千円から 6.118.051 千円（1981 年度予算）に増加しているi。

1966 年の『わが国の精神衛生』では通院医療について「向精神薬の開発等精神医学の発達により、精神障害の程度の如何によつては必ずしも入院治療を要せず、かえつて通院による医療を施すことがきわめて効果的となった事情にかんがみて新たに法改正により、精神障害者の通院に要する医療費の二分の一の公費負担制度が設けられた」（厚生省公衆衛生局精神衛生課 1966:24）とある。外来患者が増加した要因が向精神薬の効果によると述べ

たが、それ以外には精神科病院の外来にくわえ外来専門の精神科診療所が開設・増加したことも考えられる[ii]。表-1 にまとめた外来患者年間延数をみると、薬物療法が精神病の治療法として導入され始めた 1950 年代の半ば以降、外来患者の数が増加している。

表-1

年　次	外来患者年間延数	年　次	外来患者年間延数
1955 年	521,000	1967 年	3,570,000
1956 年	621,000	1968 年	4,205,000
1957 年	756,000	1969 年	4,558,000
1958 年	856,000	1970 年	4,978,000
1959 年	1,082,000	1967 年	3,570,000
1960 年	1,394,000	1971 年	5,164,000
1961 年	1,620,000	1972 年	5,488,000
1962 年	1,889,000	1973 年	5,962,000
1963 年	2,226,000	1974 年	6,361,000　＊2
1964 年	2,512,000	1975 年	6,576,000
1965 年	2,761,000　＊1	1976 年	6,868,000
1966 年	3,138,000	1977 年	6,978,000

＊1　精神障害者通院医療費公費負担制度

＊2　精神科デイ・ケア認可

薬物療法が外来患者の増加の一因であることは述べたが、精神科デイ・ケアが認可されたことも関係があるだろう。そして、薬物療法や精神科デイ・ケアという治療法と治療の場の拡充とともに、患者の通院費用軽減策という要因も外来患者像に大きく影響を及ぼしている。65 年改正が社会防衛的意味合いの強いものであるなら、その一線機関は精神科診療所や精神科デイ・ケア等の地域精神医療である。しかし治療にあたる精神科医たちにそのような意識は無いだろう。それは当然であり、精神科病院の精神科医がそうであったように患者を懸命に治療する。精神科病院の精神科医が治療の結果を退院とするのであれば、地域精神科治療に携わる精神科医たちは再発と再入院を防ごうとするだろう。

再発・再入院の防止という目的で始まった取り組みに精神科デイ・ケアがある。現在の精神科デイ・ケアはソーシャルクラブのような取り組みや、復職プログラムを実施するリワークデイ・ケアなどその活動は一様ではない。ただ当初、精神科デイ・ケアは退院後のアフターケアを目的としていた。では次に精神科デイ・ケアとはいったいどのような治療なのか、また精神科デイ・ケアが精神病／障害者の生活に与えた影響を考える。

精神科デイ・ケア

精神科デイ・ケアの起源は 1946 年にロンドンとモントリオールでそれぞれ個別に同時に始められたというiii。日本では国立精神衛生研究所の加藤正明らが 1959 年から 1 年ほど週 2 日程度の頻度で開始し、1963 年加藤らによって本格的な研究が始まった。1974 年には医療点数化され、翌 1975 年には保健所デイ・ケアivが開始された。当初、精神科デイ・ケアの目的は精神科病院からの退院後のアフターケアであった。1974 年度に「デイ・ケア施設」が予算化され、社会保険診療報酬が新設される。その後。1986 年には「ナイト・ケア」vが社会保険診療報酬として認められ、1988 年には「小規模デイ・ケア」料が新設される。この「小規模デイ・ケア」料が新設されると小規模の精神科診療所でも実施することが可能となり、精神科デイ・ケア実施機関数が増加していく。さらに 1996 年に「デイナイトケア」が認可される。「デイナイトケア」は精神障害者の社会生活機能の回復を目的として行うものであり、実施される内容の種類にかかわらず、その実施時間は患者一人当たり一日につき１０時間を標準とする。という規定からも相当な時間を医療機関での治療に充てる。2008 年の調査でこれらの施設の数と月の延べ利用人数は表-2 ようになっている（原 2011 をもとにから作成)。

表-2

種　類	病院が実施	診療所が実施	合計	月延べ利用人数
大規模デイ・ケア	663	187	850	341.414
小規模デイ・ケア	435	273	708	95.529
デイナイト・ケア	277	113	390	115.262
合　　計	1.375	573	1.948 *1	552.205*2

*1　ショート・ケア、ナイト・ケアを含めた総施設数は 3.132 施設

*2　ショート・ケア、ナイト・ケアを含めた月の総延べ利用人数は 59.0330 件

秋元は精神科デイ・ケアについて以下のように説明している。

> デイホスピタルは「部分入院 partial hospitalization」とも呼ばれるように、昼間の一定時間、集団療法、作業療法、あるいは生活技能訓練 SST などの行動療法を行って、地域で自立して生活ができるように援助する仕組みで、昼間だけの入院である。（秋元 2002:330）

この秋元の言説からは、退院後、院外で生活を送るために治療やトレーニングを施し徐々に「部分入院」の割合を減らしていくという精神科デイ・ケアの性質がわかる。では、精神科デイ・ケアを実践している担当者はどのように考えているのか。厚生労働省ホームページにあるデータを表-3 にまとめた。

デイ・ケア利用の目標（担当者による評価）複数回答可　表-3

デイ・ケア利用の目標	病院（N＝4.056）	診療所（N＝1.007）

再発・再入院予防	93.７%	84.0%
慢性期患者の居場所	72.1%	60.４%
薬剤処方についての相談・調整	58.4%	59.７%
回復期リハビリテーション	53.0%	57.8%
就労支援	31.0%	41.6%
在宅急性期医療の一環	13.7%	7.3%
復職支援	8.4%	15.5%
その他	8.9%	14.0%

精神科デイ・ケアの目標を「再発・再入院予防」「薬剤処方についての相談・調整」や「在宅急性期医療の一環」としている点で秋元の言説「再発・再入院予防」のように位置づけていることがわかる。他方、「慢性期患者の居場所」「就労支援」や「復職支援」という積極的な治療的とはいえない回答もみられ、この点では秋元の指摘に直接結びつかない。尾崎はこれらを「治療デイ・ケア」と「ソーシャルクラブ」と区別する考え方を紹介し、その多面性、曖昧性を「さまざまな方向や質をもつメンバーの回復に幅広く対応することを可能とし、メンバーの選択の幅を広げる」として評価している。

さて、精神科デイ・ケアの目的の多様さや実施機関の増加、また精神科デイナイトケアという長時間の活動時間は「さまざまな方向や質をもつメンバーの回復に幅広く対応することを可能と」するが、同時に多くの精神病／障害者がデイ・ケア施設にとどまり続ける可能性も否定できない。デイ・ケア利用の目標として「慢性患者の居場所」がある。（表ー3）地域生活を行う際に「居場所」は必要であろうが、その居場所が精神科デイ・ケアである必要はない。精神科デイ・ケア以外に対応する場がないとの主張は可能だ。しかしその主張は精神科病院以外に精神病／障害者に対応する場がないので入院継続やむなしという主張と同質だろう。

原は精神科病院・診療所や精神科デイ・ケア、社会復帰施設といった施設中心の活動には限界があり、常にインスティチューショナリズム（institutionalism：施設症）の危険性にさらされているとしたうえで「精神科デイ・ケアの活動がデイ・ケア施設の中にとどまっていては、インスティチューショナリズムを生み出すことになる」（原 2011）と指摘している。

更に精神科病院敷地近くにグループホームを作りそこに退院させるといったことが行われる。退院後、夜間はグループホームで過ごすが日中～夜間を精神科デイナイト・ケアで過ごす。このような事例は珍しいことではない。これをもって「退院生活」であるとする点を批判する主張がある[vi]。正論であると筆者は考える。では、アパート等から診療所併設のデイ・ケアであればよいのか。家族の元からであれば問題はないのだろうか。

外来精神科医療の利用患者は増加したがそのことにより、「新たなインスティテチューショナリズムを生み出す危険性」、つまり精神科病院入院と同根の問題が生じていることは述

べた通りだ。しかし精神科病院を退院し地域で暮らす際の医療的支援を外来精神医療や精神科デイ・ケアに求めた場合、は「新たなインスティテチューショナリズムを生み出す危険性」だけではない。

外来治療と精神科病院

岡田は外来治療が増加してきたことについて以下のように記す。

> 精神科における外来医療の伸びはおおきい。外来医療が経済的に保障されるようになったのは、“精神科カウンセリング”という奇妙なものが診療報酬の対象になったときからである。精神科における無形の技術が認められたのはよい。しかし、〃カウンセリング“という、ほとんどの精神科医が実行していなかったものが、精神科外来診療費の中心になったことは、診療報酬なんて適当に請求すりゃいい、という見本をしめしたのではないだろうか。外来医療がのびることで病院医療に本質的変化がもたらされただろうか。精神科病院はかわったが，おおきくはかわっていないようである。（岡田 2002:236-237）

ここで岡田は外来医療の精神科カウンセリングという治療についての危惧を発する。さらに外来医療が病院医療にさほど景況を与えていないことについて言及する。大熊一夫は台東区の社会福祉施設「あさがお」で精神保健福祉士・サービス管理責任者である斎藤潤子の言葉を次のように記す。

> 区内にできた多くのクリニックにしても、統合失調症相手ではなくて、働く人々のためのメンタルヘルスに取り組んでいる、というのが実情です。（大熊 2009:201）

精神科病院と新たにできた精神科診療所はその対象者がちがうという。1995 年、筆者は精神保健福祉領域で仕事を始めた。職場は精神病／障害者を対象とした作業所であった。の当時、仕事に就いた市は人口 30 万人ほどの市であったが、精神科診療所は市内に 2 か所ほどであった。そのうちの一つは精神科デイ・ケアを併設し統合失調所の患者が多く通院していた。この診療所の精神科医や精神保健福祉士たちとは勉強会や患者支援を通して連絡を取りあった。診療所から紹介を受け作業所利用する人も多くいた。その後、駅前を中心に精神科・心療内科を標榜する診療所が多くできた。それらの新しい診療所は通勤・通学帰りに立ち寄れる場所にあり規模もそれほど多くなかった。気分障害（うつ病）などを患いながら通勤・通学している者を主な患者としているそれらの診療所とは、仕事上も勉強会などの交流を持つ機会はなかった。具体的にどのような人が通院しているのかさえ知らなかった。精神科デイ・ケアについても「リワーク（復職）プログラム」をその主な活動にするところが目立つようになる。復職支援のため対象は、精神疾患で休職・離職した者が多くなる。（片桐 2010） そして参加者の目的は明確だ。疾病予後も統合失調症に比べるとよい人が多い。

先ほど筆者が新しくできた診療所とのやり取りがなかったことを紹介したが、その要因が疾病種別とその予後の関係だろう。統合失調症の人たちは長期間にわたり症状に苦しむ。そして全く支援がなく暮らしていくことが困難な人も少なくない。そこで診療所から作業所などに紹介される。前項で述べたような「デイ・ケア内の滞留」がおこり「新たなインスティテチューショナリズムを生み出す危険性」が指摘される。他方、復職支援を行うデイ・ケアや通勤・通学をおこなえる人たちを対象とする診療所ではどうか。患者によっては「デイ・ケア内の滞留」が起こることはあるだろう。それは従来のデイ・ケアと比べて多いだろうか。また、通勤・通学している患者はどうか。回復に時間がかかり長期間にわたり通院するもののいるだろうが、通院先以外にも所属する場はある。これら新しい診療所や精神科デイ・ケアは精神科病院を退院した後の医療的な「受け皿」になり得るだろうか。岡田は先ほどの記述の後、次のように述べる。

> また，わかい精神科医がどんどん開業にながれて病院にいつかず，病院の医師は高齢化し，病院医療が活気をうしないあるいは空洞化しつつあるという声もきく。歴史ある公立病院でも医師の欠員がうまらないという事態も生じてきている。外来医療にかぎらず，院外医療（あるいは医療にかぎらぬので処遇というべきか，extramural treatment である）は多様化し，拡大されている。だが，それら院外医療・処遇は，病院医療にいわば接ぎ本された形にとどまっている。かつて医療の傘のもとに”の旗印があった。生活保護法による低価の政策が精神科医療を侵食しようとしたときに，この旗印は有効であった。だが今は，“医療の傘のそとに”の旗印が必要であろう。外国の多くで，リハビリテーション施設は精神科病院からひきはなして，それから独立して設置されなくてならないとされている。だが日本では，病院医療の延長としてそれらが設置されることがおおい。“医療の傘のそとに”の理念を，このあたりで確認するべきだろう。また，それらリハビリテーション施設の多くは，職員の熱意と低賃金とによりささえられているようで，それらがいつまでつづけられるのか，気がかりである。（岡田 2002:237）

外来治療や精神科デイ・ケアは精神科病院で実施することは可能であり、事実多くの精神科病院が実践している。地域移行後の医療的「受け皿」となり得る診療所や精神科デイ・ケアは存在する。ただ、外来患者や診療所やデイ・ケアの増加をそのまま「受け皿」の数とはいえない。病院の近くにグループホームを作り、そこに退院させ日中精神科デイ・ケアを利用する。これらのことを考えると岡田の「リハビリテーション等、様々な実践が精神科病院に接ぎ木された形で成されている」が理解しやすい。

まとめ――外来治療は入院治療に対置されない

「精神科病院に接ぎ木された形で成されている」とは次のような事態を指すのではないか。診療所で「入院治療の必要」とされた場合、精神科病院に「連携」という名目で紹介され、非常に速やかに入院となる。苦痛によって本人がそれを望む場合、問題がないのだろうが、本人非同意の場合はどうか。政府が精神医学に求めた機能を十分に発揮したこと

になる。
つまり、外来治療は入院治療に対置されていないということだ。

岡田はさらに「リハビリテーション等、様々な実践」を“医療の傘のそとに”あることを目指すべきだとする。それはリハビリテーションや福祉等の実践が「医療に近いところ」でなされることは、看板はリハビリ・福祉であるがかつて（現在も）批判されている入院を中心とした精神科医療と何ら変わらないという警鐘である。では、精神科病院で行われた入院治療のどこに批判が集まったのか。

当初、精神科デイ・ケアはデイホスピタルと呼ばれた。その発想は次の通りだ。療養入院中の患者が治療を受ける時間は一日あたりわずかな時間であり、その大半は生活である。では、退院後のアフターケアがあれば生活は地域で行うことが可能ではないとの考えから始まった取り組みが精神科デイ・ケアであった。

この入院患者の大半の時間が生活であることに着目し、「その生活を管理し指導する」ことで多くの時間を治療時間とする。その結果、回復を目指す取り生活療法という取り組みが行われた。他方、その取り組みを批判し生活の時間は病院外で過ごしてもかまわないとし、回復を目指す開放処遇（第 2 次）という取り組みも見られた。第 2 次開放処遇は生活療法の生活の管理や指導を批判したが、第 2 次開放処遇と生活療法双方が精神科病院という枠で実践され治療の一環として行われた。次回は精神科病院の管理・監視について、生活療法とそれへの批判、開放処遇を紹介することで考察していく。

---

[i] 1974 年に精神科デイ・ケアが健康保険の資料報酬に新設されている。原は「1985 年 11 月には全国 68 か所でデイ・ケアが実施されていた」（原 2011）と書いている。

[ii] 日本精神神経科診療所協会が平成 22 年 11 月に実施した会員基礎調査報告書「開設年ごとの件数」では、1955 年に 1 箇所 1959 年に 1 箇所が開設している。その後、61 年に 1 箇所、63 年に 2 か所、65 年に 3 か所が開設されその後、毎年新設がみられる。

[iii] 1927 年ソ連（当時）のハリコフではじめられたというが、どのような考えではじめられたか不明であるとしている。（加藤 1974：15-16）

[iii] 精神障害者の社会機能の回復を目的として行うものであり、その開始時間は午後 4 時以降とし、実施される内容の種類にかかわらず、その実施時間は患者一人当たり一日につき 4 時間を標準とする。

[vi] （山本 2006） http://jinken.s3.valueserver.jp/wordpress/wp-content/uploads/tiikiikougatahome.pdf 2014 年 11 月 25 日閲覧

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第22回

『恋妻家宮本』

1．　九州が怖い！

「たまには帰りなさい。1 日帰るだけでいいんだから。私はもう来年で満 80 歳なのよ。いつまでも生きているわけじゃないんだから」電話口で母が言った。母には感謝している。弟にも感謝している。その感謝を伝えるために母の誕生日、弟の誕生日、法事の日などには必ず甘い物を送っている。電話も毎日かけている。しかし、母としては顔を見たいのだろう。

「80 になったら、京都に来なよ。ちゃんと介護してあげるから」と俺は返事する。行きつけだった食堂の女性も秋田からお母さんを京都に呼ばれた。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、どうやって私が 80 になって、何も知らない町で暮らすのよ」と母。

「まだ強迫症が抜けないんだよ。家をあけると、その間に泥棒が入るんじゃないかとか思ってしまうんだ」

「でも、東京にはちょくちょく行くじゃないの」

「東京は仕事で行っているんだよ。仕方がないから」

　俺は九州に帰るのが怖い。九州に連れ戻されるのが怖い。勿論誰もつれ戻す人なんていない。しかし、俺は何らかの運命のいたずらで、九州に戻る運命になるのをひたすら恐れているのだ。

　俺の中の葛藤は今でも理不尽に俺の中を巡り巡っている。九州にいた頃は理不尽なことが次々に起きた。九州のせいじゃない。たまたま巡り合わせが悪かっただけのことだ。し

かし、俺は自分を許すことができない。なぜ、俺だけがあんな目に！　俺は、この理不尽な思いを九州のせいにしたいのである。

3年ほど前についた30代の女性カウンセラーは言った。

「ジェンダーの人は社会のせいにしようとする。でも、精神分析は自分の問題として捉えるんです」

その考えはおかしい１？　そういう返され方をするから俺は不登校になったのだ。例の裸授業が始まってから俺の心は雪崩のように崩れていったのだった。もし、あの時に授業中に裸にさせられることがどうしても抵抗があるんだと周りに話していたら、俺は不登校にはならなかったかもしれない。常識から考えても冬場に半裸で授業させるなんて、行き過ぎである。あそこまで極端な男根教育をする先生は滅多にいるものではないだろう。

「同じ気持ちを分かち合える人がいないんです」と俺が言うと、「その時一緒に脱がされた子がいるじゃないですか」と彼女は返してきた。

「脱がされる。。。」この言葉に俺はキレた。女の子を脱がせたりしたら、それこそ大問題だ。セクハラ教師として訴えられ、懲戒免職だろう。女優さんが自分から「脱ぐ」ことはあっても、監督に無理矢理に「脱がされる」なんてことになったら大問題だ。女の子だから胸を見せるわけにはいかないと思うかもしれないけど、上半身裸と言ったら水着と一緒。女の子をプールの時間でもないのに水着にしたら、これまた大問題。なぜ、この女はひたすらジェンダーを肯定しようとするのか、俺のトラウマを否定しようとするのか、そんなのが精神分析なわけ？　カウンセラーだったら相手の気持ちを受容するのが役目なのでは？？？　俺がカウンセリング講座に通っていた時、相手と話す時には、Yes, and（わかります。それで・・・）という調子で話さなくてはならないんだと教わったものだった。しかし、彼女は一貫して、No, but（でも、。。。。。）だった。彼女は自分の常識で相手を見て、自分の理解できないことは大した悩みじゃないんだと思っている。人間って、一種類じゃない。人とは違う悩みであればあるほど、当事者は余計に苦しい。だからこそ、カウンセラーが必要になってくるのだ。

不登校の走りだった俺は辛酸を舐めるような体験をした。今だったら、不登校への理解も、学校や先生の問題も、子供の人権も社会的に認知されているが、あの頃は理解がなかったが故に、ただでさえズタズタに傷ついている俺の心はさらに破壊されていくことになったのだった。「あんたの言っていることは、不登校の子に向かって、『学校が好きな子もいるじゃないですか？』と言っているようなものなんだよ！　そんなこと言ったら不登校の子は余計に追い詰めるだろう！　あんたなんかが京都でカウンセラーやっていけると思っているわけ！！　九州に戻って、顔を洗って出直してこい！！！」と言いたいところだった。

俺たちが学生の頃に『ふぞろいの林檎たち』という山田太一原作のドラマがあって、このドラマでは時任三郎と手塚理美が恋人同士なのだが、時任は彼女に結婚したら仕事を辞めてほしいと思っている、これに対して絶対に仕事を続けたい手塚は次のように返す。

「じゃあ、あなたは結婚したからって、仕事辞められる？」

「男と女じゃ別だよ」と時任。

「一緒よ」と手塚。

これと同じ議論が俺とこのカウンセラーの間に起きようとしていた。

「じゃあ、あなたは、脱がされることに抵抗がないの？」と俺は問いかけたいと思った。彼女は、男と女は別。女が脱がされるのは大問題だけど、男が脱がされるのは問題にするべきことでもないと思い込んでいるのだ。

俺が彼女のカウンセリングを受けようと思った一つの理由は、彼女が九州から出てきたばかりのカウンセラーで、九州の女性に憎しみを抱いている俺には九州の女性から自分を理解してもらうことが回復へつながることになるのではと思ったからだった。しかし、それどころか、「やはり、九州の女は」という偏見が俺の中に強まってしまった。「九州の人は社会を受け入れようとする、関西の人は社会を変えようとする」、それが俺がずっと抱いてきた偏見だった。俺みたいな社会に文句をつけるやつのことは平気で白眼視して、村八分にしようとする。それが九州の連中だとずっと思ってきた。

九州にはやはり帰らない。帰れない。ある映画で、「人は異質のものを憎む」という台詞があった。俺は思えばみにくいアヒルの子だったのだろう。クラスの中で浮いている異質の存在だった。今でもその時の惨めさは拭えない、恐怖は終わらない、俺は人と付き合うときにいつだって自分の方が付き合ってもらっているという意識で生きてきた。相手が誘っている時であっても、俺の本当の姿を知れば嫌いになるという気持ちで生きてきた。九州にいた 19 年間、俺はジェンダーの呪縛を受け続け、そこから立ち直るのに膨大な年月がかかったのだ。

俺が女嫌いになったのも、あまりにも辛い少年時代のせいなのだ。毎日学校で女子たちから「気持ち悪い」といわれる日々。それが 3 年も続いた。俺は自分のどこがどう気持ち悪いのかがわからず、女は怖いという感情は日に日に募っていった。結果、高校に入るのと同時に心は壊れたのだった。

２．　同化できる人を求めて。

俺の九州への思いは確かに偏見だろう。俺は京都に来てからはいわゆるインテリ系の人としか付き合っていない。全然、勉強ができないようなやつはそもそも大学になんかいかない。まして大学院になんて行かない。大学の先生になんかならない。京都は大学がたくさんあるから、インテリが多い街で、急進派の左翼の人も多いのだが、一般の庶民たちはそこまでリベラルではないだろう。一方、九州にいた頃は、市内でも最も柄の悪い、ほとんど少年院のような中学に通っていたのだ。一般に柄の悪いところは悪い意味で男性的になる。これは前に問題を抱えた少年たちの指導員の男性が言っていた。勉強もできず、家庭的にも恵まれず、お小遣いも満足にもらえなくて、イライラしている彼らには、人を威圧する力しかない。虚勢をはる力しかない。弱い奴をいじめる能力しかない。

俺は京都に来てからそういう層のやつらと付き合っていない。前に専門学校の学生たちに、今の中学生は皆、制服だっておしゃれだし、おっとりしているよねと話した。俺は電車やバスで中学生たちを見かけるといつもそう感じていたのだ。すると学生たちからは、

「電車に乗っているような中学生は私立の中学の子ですよ。ああいう子を基準にして考えるのは違っていますよ」と言われたものだった。

俺はもう 20 年以上も心療内科に通っている。俺の周りの人たちは、それくらいは気にしていない。この頃は鬱の人や強迫症の人は大勢いる。しかし、最初についたカウンセラーの先生はうっかり口を滑らして、慌てたものだ。「とんでもないですよ。まだきちがいだという偏見で見る人はたくさんいるんですよ」

そうなのだ。俺は大学で生活をし、インテリさんたちに囲まれ、近所付き合いもなく、電車で通う私立学校の生徒ばかりを見て生きてきたのだ。京都という町のほんの一部しか知らない。したがって、九州が悪で、京都が善だと判断を下すのは明らかに俺の偏見なのだ。しかし偏見だとわかっていながらも、すべて悪いのは九州のせいにして、俺は京都を自分の居場所にしようと頑張ってきたのだ。俺にはそうするしか生きることができなかった。

専門学校で教えていた頃のことだ。専門学校は 1 クラスが 20 人弱なのだが、その 20 人の中でも山が 4 つくらいに分かれる。やんちゃ系の男子、ギャル系の女子、真面目系の女子、そしてどのグループにも属さない孤島組。

俺の目から見ればやんちゃ系の子であっても根は悪い子じゃないし、もう皆 18 歳は過ぎているから、度を越したことをするわけではない。しかし、そういう子達を放任していると、真面目系の女の子たちが教務にクレームを言いに行く。学生たちは些細な性格の違いであっても不快に感じる。同じ日本人、同じ年代であっても、人によって文化は違っているのだ。どちらの文化にも馴染める柔軟性のある人間ばかりではないのだ。女子学生たちの告げ口には本当に悩まされたが、俺だって若い頃は周りに同化できない子だったから、怒るわけにもいかず、ジレンマに悩まされたものだ。

俺の人生は、自分が同化できる人を探し続ける旅だった。理屈ではなく俺は本能的にそういう奴を求めていたのだ。俺が親しくしている男友達は中学くらいから私立のところに通っていたようなお坊ちゃんが大半である。そういうやつだったら、極端なマッチョ教育は受けていないだろう。暴力教師や人のことをきもいという女子生徒もいないわけではないだろうが、俺の行っていた中学に比べれば、はるかに風紀は良いことは事実のはずだ。親だって、しっかりしているだろう。過酷な環境を生き延びてきたような雑草のような連中には俺は親しみを感じない。俺が私立のところに行っていたら、男子校に行っていたら、彼らのような環境で生きてきたら、俺の人生はあんなことにはならなかったかもしれない。そういう思いを抱かせてくれるから俺はお坊ちゃんに親近感を抱くのだった。

俺はかれこれ今住んでいる界隈に 27 年以上住んでいる。その間、近所にはシネコンができ、スポーツクラブもでき、立命館や佛大のキャンパスもできた。俺は見慣れた風景を毎日見ながら生きてきた。しかし、俺は京都の一部しか知らない。インテリしか知らない。

5 年くらい前のこと、「國友さん、自転車で独り言言いながら走っているということ有名みたいですよ。お客さんが言っていた」と整骨院の威勢のいいお兄さんから言われたもの

だった。思えば、これだけ長くこの界隈で生きているから、近所の人たちは皆俺の姿を見たことがあって、俺が自転車で独り言を言っていることも気に留めていたのだろう。近所の噂の笑いものだったのかもしれない。

１年ほど前に二条駅の近くのカレー屋さんが閉店になったのだが、その閉店の１ヶ月ほど前にそのお店に行くと、「来てくださってよかった。一番長く来てくださっていましたものね」と店の人から言われた。俺はこの店が好きで、時々行ってはいたけど、店の人たちと友達だったわけではない。しかし、店の人たちは俺の顔をきちっと覚えていて、一番長いお客さんだとある種の特別な目で見てくれていたのだった。

俺は京都で長く暮らしてきたとは言っても、こういう市井に生きる人たちと生活を共にしてきたわけではない。ずっとマンション暮らしだ。隣の部屋の人の顔すら知らない。やはり、九州のせいにはできない。でも、俺は九州のせいにしてしまいたい。心が壊れた責任を…。俺は社会全体から踏みつけにされた。理不尽に傷つけられた。しかし、社会はそれを理解してくれなかったのだった。

思えば、外国に行った方が良かったのかもしれないと思うことが度々ある。外国だったらどっちにしろ外人だ、違った文化の人という前提で見てもらえる。外人だからある程度のことは大目に見てくれるだろう。しかし、日本人でありながら、普通の日本人の主流とは違った文化を生きてきた俺はずっと孤独な生活を余儀なくされたのである。

この喪失感は、いつまでたっても消えてはいかない。あと 27 年たったら、俺は 80 歳だ。もう死んでいるかもしれないなあー。それまでに、この思いにどうにか決着をつけてしまいたい。

俺は運が悪かったのだ。しかし、俺が心が壊れて、高校に行かれなかったという事実は消すことができないのだった。俺は一生消すことのできない烙印を押されてしまったのだった。

３. 自信について

専門学校をやめる年、「もっと自信を持って授業をしてください」と授業アンケートで書かれた。大学の方ではこんなことは言われないのだが、専門学校と大学では学生が先生に求める資質が違ってくる。専門学校の場合は予備校に近いので、予備校系の先生のような人が多いし、実際学生もそれを求めている。

権威を持つということ、断定的な口調で話し曖昧な言い方は避けるということ、また授業の予習をしていない時であってもたっぷり準備をしてきたんだというフリをして授業を進めるということが専門学校で授業を進める上でのポイントだった。俺はいつだって自信がなさそうな態度をとるので、学生たちは不安になる。これから編入や就職があるのに、こんな先生について行って大丈夫なのかという気持ちになる。ハッタリをきかすのも一つの技術なのである。

「先生、なんでそれだけ知識があるのに堂々としないの？」と学生からも言われたこともあった。しかし、俺は自信家にはなれないし、なりたくなかった。これまでの人生、俺を貶め、傷つけてきたやつはことごとく自信家だった。自分が正しいと信じ込むことは暴力や確執を生み出していくのである。

自信を持つと学生が付いてくるのは事実かもしれない。しかし、これじゃあ、ヤンキーと一緒。「ヤンキーなんて、一番上に親分肌のやつがいて、下のやつはそれに追従しているだけのことだ」と友人から言われたこともあった。そんなのが良いわけ？？？？？ もちろん、そういう教育が有効である場合もあることは認めるけども、そうでない先生もいていいんじゃないの？　人によって文化は違うのだから、先生も色々だよ。事実、俺の価値を認めてくれる学生も大勢いたのだ。今でもFacebookでつながり、一緒に食事や温泉やプールまで付き合ってくれる学生が専門学校時代の教え子の中に何人もいるのである。

4. ネタバレ注意（笑）

『恋妻家宮本』（遊川和彦監督・2017）

この原稿を書いている最中にまるでシンクロのようにこの映画に出会った。まさに神様が与えてくれたような映画だった。

阿部寛の主演である。彼が演じる50男は教師なのだが、自分に自信がないタイプで優柔不断、生徒からもいい人だけど頼りないという目で見られている。阿部寛は、昔のモデル時代からシャイで情けない奴というイメージはあったけれど、それが今は彼の持ち味になっていて、なかなかに良いのである。

この映画で彼が演じる男は学生時代に彼女を孕ませてしまったため、そのまま結婚し、すでに27歳の息子がいる。この息子の名前をつけるときに、「正」と「優人」、どっちにしようかと彼が迷う場面が出てくる。

これは内輪ネタだけど、中村正先生が以前、ある講座で、「なぜ、こんな名前、僕につけたの？」と親を責めたことがあるとおっしゃっていたことを思い出して、思わず笑ってしまった。

結局、主人公は息子に「正」という名前をつけることになる。そして、この映画ではこの名前が話の一つの鍵を握っている。「正」と「優人」、全くニュアンスの違う名前なのだが、これはこの主人公の葛藤を物語っているのだ。この映画、正しさと優しさの相克のドラマなのである。

すなわち、正しいことをしようとしながらも、優しさ故に迷わざるをえない主人公の性格を物語っているのである。彼が自信がないのは、常に相手のことを考えているため、自分が正しいと思うことを他人に押し付けることができないのである。「正しさは戦争を起こすこともある。しかし、優しさは…」というセリフが出てくる。この台詞はまさに俺の意を得たりだった。

昔は確かに「正」とか「勇」とか戦争につながりそうな名前が多かったように思う。しかし、この頃はめっきり減った。俺は先生なので、たくさんの学生の名簿を見ているが、「翔太」とか「裕樹」とか可愛い系の優しさを感じさせる男の子の名前が増えてきた。こういう名前が増えてきたことは、歓迎すべきことなのだろう。こういうと中村先生に失礼のようだが、この映画の主人公が、「優人」にしようかと迷いつつも、息子に「正」という名前をつけるのは、この主人公が純粋に正しいものを求めているけれど、その純粋さゆえに何が正しいか判断できないことを示していて、正しさを否定するということではない。それは誤解しないでほしい。

映画自体は、笑わせるコメディで、最後の

方がちょっとダサいのだが、見ていて、飽きさせない。心温まる、楽しい映画に仕上がっている。

この原稿が出る頃、俺は 53 歳になっているはずだ。「あなたもうおじいさんなんだから」と母は電話で言う。俺は阿部寛と同年代なので、27 歳くらいの子供がいて、もう孫がいても不思議ではない。昔だったら、人生 50 年。おじさんからおじいさんへの移行期である。母は、俺が女性恐怖であることはわかっているから、俺が結婚することは期待していない。ただ、「50 にもなった人がコンビニなんかで何もかも済ませるみたいな生活しているのかと思うと悲しくなる」らしい。今の俺は息子代わりの付き合いをしてくれる元教え子やもう 15 年以上の付き合いの大親友もいる。あれこれ相談に乗ってくれる人も大勢いるから、それほど惨めなわけじゃない。コンビニで買い物するのは仕事が忙しくて、他のところに行くゆとりがないからだ。

もうすぐ誕生日だ。母に誕生日のプレゼントは孫の手をくれないかと頼んだ。年取ってきて肌が乾燥してきたせいか、この頃背中が無性にかゆい。「孫の手なんか郵送料の方がかかっちゃうじゃないの」と母。でも家族の贈り物だから、大事に使うよ。家族を持つことはできない男だけども（笑）。

＃保育園落ちたの私だ

双幅龍虎図

某幼稚園や小学校みたいな肩入れはいいから、
安心できる保育園作ってよ！ 母の渾身の怒り！

三嶋あゆみ

援助職のリカバリー

《21》

～「セックスレス」に立ち向かう(2)～

袴田　洋子

朝晩の空気が冷んやりと感じられるようになった 11 月半ば、ある在宅患者の処方箋が薬局に届いた。「肺がん末期で、最期まで自宅で過ごす意向」とその主治医から聞いていた。京子たち薬剤師は、最近では、在宅で過ごす患者たちにも薬を届けるようになっている。薬局で会う患者たちと違って、自宅に行くと、当たり前だが、人それぞれの生活の営みを目の当たりにする。その人が、どういう仕事をしてきて、どういうことが好きで、どんなふうな日常を送ってきたのか、「患者」の前に「一人の人」という印象を強く持つ。在宅にいる患者を訪問するようになって、京子は自身の薬剤師という役割の深さをより一層考えるようになっていた。それは、京子にとって、薬剤師という専門職としてのやりがいに繋がっているように感じていた。

その日の夕方、処方された薬を持って、京子は、その末期がんの患者の自宅に向かった。築 40 年くらいは経っていそうな一戸建ての家の中は、妙な「間」の多さを感じた。人が住んでいるのに、住んでいないような、最近の「生活感が感じられないオシャレな部屋」というのとは違い、「家族の営み」が無いように感じられた。理由は、長男夫婦が留守で、中学生と思われる孫息子が京子の対応をしたから、ということだけではないように感じた。

「ここで、この家で、最期まで過ごす、という意向なのか」と、思わず京子は、この患者の意向を思い出していた。これまでにも何度か、医療サービスや介護サービスを受けながら、自宅で旅立ちを迎えた終末期の患者の担当をしたことがある。どこの家も状況や家族構成など、当然ながら、全く違っていた。が、不思議と共通している

ものがあった。それは、どの患者たちも「終末期に家族全員で関わる」という雰囲気であった。

超高齢社会を乗り切るためなのかどうなのか、「住み慣れた自宅で、最期まで過ごせるように」と国が言い出して、「往診」をする地域のクリニックが増えてきた。在宅医療を専門とするクリニックも少しずつだが増えている。そのようなクリニックが主治医となり、介護保険のヘルパーや訪問看護を利用して、自宅で最期まで過ごせることは、珍しいことではなくなってきた。とは言っても、人が死ぬということは、大変なことである。歩けなくなり、食べられなくなり、トイレに行けなくなり、終末期に入った人は、日常生活の様々な面で、介護が必要になってくる。そこに対処するには、家族全員で「関わる」ことで可能になる、と、京子は、在宅の患者の家に訪問するようになって、感じていた。

京子を本人の部屋の前まで案内すると、孫息子は、「自分はちょっと出けるので」と言って、家を出て行ってしまった。心配している様子を１ミリも見せない孫息子の態度に、祖父の病気のことを知らないのだろうか、とやや疑問に思いながらも、気を取り直して、「こんにちは　薬を届けに来ました」とドアの向こうに声をかけた。中から、「ああ、どうぞ、入ってください」という返事が聞こえ、ゆっくりドアを開けると、部屋の中で、克彦は、洗濯物を畳んでいた。「息子は、仕事でいないから、すみませんね」と、克彦は謝りながら、京子を見た。穏やかに微笑を浮かべる克彦の表情を見て、ようやく京子は、緊張の糸が途切れた気がした。そして、今回の病気のことや病院のこと、処方薬の中には、痛み止めが入っていること、自分がどんなふうに訪問するかなど、一連の説明と確認を済ませた。克彦は面倒くさがることなく、丁寧にひとつひとつ答えていき、京子は、「紳士的な人だな」という印象を持った。

末期ガンという状態の患者に、何人も会ったことがあるが、その様子は様々だ。自分の病気が受け入れられず、医療を恨みながら自宅で過ごしている人もいた。ある人は、末期ガンだと分かっているのに、「これを食べたら治るかもしれない」と言って、一生懸命、食事を摂っていた。

そんな過去に出会った患者たちのことを思い出しながら、京子は、家族について、克彦に尋ねた。「息子さんは、リハビリ関係のお仕事をされているそうですね」と言うと、「そう、整形外科の中にあるリハビリ室で、課長

をやっています」と、長男のことを教えてくれた。京子は、ジェノグラムで、長男の妻や孫息子たちのことを書き留めながら、克彦の家族のことをあれこれ想像した。妻は、８年前に脳卒中で亡くなっていた。

ジェノグラム面接を終え、京子は、処方薬について、もう一度説明をしようとしたが、ここで時間をかけると、克彦の疲れが増すことの方が気になり、帰ることにした。訪問診療は、２週間ごとに行われるため、京子が次に来るのも、約２週間後だ。克彦は「また、顔を出してくださいよ」と穏やかな口調で京子に言い、再び洗濯物を自分の部屋の中に干し始めようとした。が、その瞬間、よろめき、柱にぶつかりそうになった。京子は、とっさに克彦を抱きかかえて、床にすわらせた。「いやぁ、最近、体力が落ちてしまったようでね、このあいだも自転車で転んでしまったんですよ」と笑いながら言う克彦を見て、京子は、力が抜けて床に座り込んでしまった。なぜ、このような病状でありながらも、克彦は自分の洗濯物を自分の部屋に干しているのか、家族は誰も手を貸さないのか、ジェノグラムに書いた克彦家族のことを思い出しながら、京子は「危ないから、今日は手伝いますよ」と言い、洗濯物を干してやった。

薬局への帰り道、京子は「あの人が、自宅で最期まで過ごすのか。大丈夫だろうか」とぼんやりと今後のことを想像した。人が死ぬ、ということは、本当に大変なことなのだ。克彦の家族としては孫息子にしか、今日は会わなかったが、しっかり関わってくださるのだろうか、と、気がかりになった。

薬局に着くと、夕方の診察を終えた患者が数人待っていた。日が短くなってきたので、11 月にもなると午後の遅い時間は、患者が少ないように思うが、そんなことはない。仕事を終えてから、クリニックに来る患者も多く、京子たちが仕事を終えるのも 19 時近くになることもある。ばたばたと、処方箋と健康保険証を確認しながら、薬剤を取り揃える同僚の中に、京子は古川の姿を見つけた。「真面目で、シャイで、謙虚な古川さんも、二人目の子どもが生まれたということは、夫婦の営みがあるということなんだ」と、古川を見るたびに、京子は、自分たち夫婦がセックスレスであることを思い出し、何となく気分が滅入るように感じていた。

★★周旋家日記２１★★

「キャリア形成について考える⑩ ―AI（人工知能）から BI（ベーシック・インカム）へ」

乾明紀

1. 企業の将来性

大学 3 年生の春休みは、卒業後の進路を決めるための大切な時期である。2 月には実質企業説明会と化したインターンシップや業界研究会があり、3 月には正式な会社説明会が始まる。筆者も 3 年生ゼミを担当しているため、就職支援も重要な職務になっている。キャリア形成学科というところに籍を置いているため、伝統的な学部学科教員よりその責任は重いような気もする。

しかしながら、この時代の就職支援は非常に難しい。先日も 5 名程の学生を指導したが、うち 4 名が企業選択に重視する基準は「将来性」だという。その基準は決して間違ってはいないのだが、技術革新のスピードがここまで早くなると企業の「将来性」を予測することは容易ではない。また、人工知能（AI：Artificial Intelligence）の進化に伴うビジネスの変化は、労働者にとって悩ましい問題を突き付けてくる。

3 年ほど前「THE FUTURE OF EMPLOYMENT: HOW SUSCEPTIBLE ARE JOBS TO COMPUTERISATION?」[1]という論文が話題となったが、その論文によれば、次のような仕事は、10～20 年後になくなるという。

銀行の融資担当者
保険の審査担当者
給与・福利厚生担当者
レジ係
レストランの案内係
ホテルの受付係
スポーツの審判
動物のブリーダー
電話オペレーター
カジノのディーラー
ネイリスト
仕立屋（手縫い）
時計修理工
彫刻師
苦情処理・調査担当者
メガネ、コンタクトレンズの技術者
義歯制作技術者
訪問販売員
露店商人
壁紙貼り職人　など

果たしてどうだろうか。実はすでに予想どおりの方向に世の中は動いていると言える。例えば「銀行の融資担当者」と同じことを、ジャパンネット銀行が AI で行うと昨年 10 月に発表した[2]。それによると、AI で中小企業の資金取引や業績を確認・分析することで、即日融資が可能になるという。

また、「レジ係」については、すでにイオンやイトーヨカー堂でセルフレジを実現していが、Amazon がレジを無人化したコンビニ“Amazon GO”を今年の早い段階にオープンする予定であることを発表した。どのような運営イメージかは、ぜひ次の

[1] 原典はこちら。
http://www.oxfordmartin.ox.ac.uk/downloads/academic/The_Future_of_Employment.pdf
日本語での解説はこちらが詳しい。
http://www.worksight.jp/issues/609.html
http://gendai.ismedia.jp/articles/-/40925

[2] 2016 年 10 月 25 日付 日本経済新聞電子版
http://www.nikkei.com/article/DGXLZO08745070U6A021C1EE8000/

URL で確認いただきたいが、複数のカメラによる

https://www.amazon.com/b?ie=UTF8&node=16008589011）

画像認識とスマホ等との連動によって商品確認と決済がおこなわれ、顧客はレジに並ぶことなく、ストレスフリーで商品を購入することができる。

この仕組みを導入する際の設備投資額を筆者は知らないが、経営者が人件費より安いと判断すれば、スーパーやファストファッションなどの小売店の多くが、こぞってこのシステムを導入することになるだろう。そうすれば、小売店の雇用環境は劇的に変わることになる。

この他、「義歯制作技術者」や「彫刻師」などの造形関連の職種も3D プリンターの影響を受けることは確実だ。また、「スポーツの審判員」は、すでにテニスのウインブルドン選手権で、複数のカメラと映像処理システムからなる「ホークアイシステム」が審判補助システムとして導入されている。スポーツの領域は、無人性に対する抵抗感もあるだろうが、有人性より確実性という価値観が勝れば、この領域の無人化も一気に進むだろう。

このように、様々な分野の仕事が、技術革新や AI 導入によってここまで変化しているのである。

2. AI から BI へ

法則性が明確な仕事や AI が学習できる程度の複雑性しかもたない仕事は、順次機械に置き換わっていく。

もちろん、仕事内容によっては、無人化の是非が議論されることもあるだろう。例えば、歴史ある相撲の行事がロボット審判だと、さすがに興ざめする。彫刻も人間が彫るからこそ生じる価値がある。機械に勝る価値を社会に提案し、社会がそれを認めれば、その仕事は有人として今後も存続していくだろう。優れたビジネスモデルや技術を開発する仕事が機械に置き換わることもまずない。

また、機械導入費用よりも人件費の方が安価であり続けることができれば、その仕事も有人として残っていくだろう。しかし、これらの仕事の大半の報酬は決して高くはならない。

つまり、AI が一層進化した社会で報酬を得るということは、優れた価値を提供できる人になるか、安い報酬でも厭わない人になるかしかない。かつて一億総中流と言われた時代があったが、日本の未来は、大きく二極化した社会になる可能性が高い。もし、そうであれば、AI の進化より早いスピードでベーシックインカム（BI）の導入を検討する必要があるのではないだろうか。

BI とは、資産や稼働能力の有無に関わらず、公共機関から金銭が定期的に個人に給付される制度である[3]。これが適切な給付水準で実現されれば、仕事の報酬が低くなっても生活を保障することができる。また、収入を心配することなくクリエイティブな取り組みに積極的に挑戦することもできる。さらに、収入の有無や報酬の多寡に関係なく“やりたい仕事”に従事することもできる。

幸いにも現在の日本は、技術革新のスピードより少子高齢化のスピードが速いため、今すぐ失業者が増えるということはない。だからこそこの猶予の期間に BI について真剣に議論すべきではないだろうか。学生の就職指導をしていてそのようなことを考えた。

[3] 参考文献：山森亮（2010）「ベーシック・インカム入門」光文社

トランスジェンダーをいきる（２０）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

力関係を意識させられる他者（１）

医療者・医療現場とどう付き合うか

１　始めに

体・書類上の性別は女性、性自認が男性である筆者は、ときに必要以上に相手との「力関係」を意識させられる場面が多い。とりわけ、視覚に障碍のある筆者に対する他者からの直接的・間接的な支配、もしくは力の行使によって、筆者が苦痛を感じたとき、即座に「ノー」の意思を表明できなかったことへの無力感とふがいなさ・恥といった感情は、ともすれば自己の構築してきた男性性を一気に失墜させられるのでは、という危機感を覚えてしまう。

こうした力関係を意識させられる「他者」の代表的な例として、医療者、もしくは医療現場と、家族、あるいは職場の上司や同僚などが考えられるが、今回と次回の２回に渡って、筆者が最も困惑している医療者、もしくは医療現場と家族との力関係を意識させられる場面について考察してみたい。

今回は、「医療者・医療現場とどう付き合うか」がテーマである。そこで今回は、当時住んでいた自宅近くのクリニック２軒のジェンダークリニックでの医師たちが、視覚に障碍のある筆者に対してどのように関わってきたか、また、彼らの関わりに対して、筆者がどのような力関係を意識させられ、ときには困惑しながらも、どのように対処していったかについて論じる。

２　自宅近くのクリニックへの通院

「性同一性障碍」という言葉が社会に登場し始めた 1990 年代半ばより、当時付き合っていた心理カウンセラーの助言も合って、当時住んでいた自宅近くのクリニックに通院していた。そのクリニックでは、医療者特有のパターナリズムな雰囲気が希薄で、不必要な薬を処方されることも少なく、カウンセリング中心の治療であった。

通院時の主な症状は、体の性別への違和感と、体の性別と自らの性自認との不一致であった。そのため、カウンセリングででは、意思から言われる間もなく、「性同一性障碍」という用語を積極的に多用しながら、自己の性別違和感についての説明をしていた。

今にして思えば、医師に対する語り方は、強固な男性性を誇示するような語りではあったのかもしれないが、ジェンダークリニックの専門医ではなかったためか、筆者が医師に語る際には、医師に対してそんなにナーバスになる必要はなかったように思う。「スカートを嫌い、ズボンを好む」、「誰かと口論したときにすぐに手が出る」といった筆者の語りは、日常的なものであり、その語りに対する医師からの叱責や苦言はなかった。「語りたいだけ語る」、「語りたいまま語る」という筆者の語りのスタイルと、それを静かに受け止める医師とのコミュニケーションを通じて、筆者自身の心の深層部にある攻撃性や暴力性に直面させられた場面もあった。そんなとき筆者は、自然に「内省感情」と出会う機会を何度も繰り返した。そのことが、筆者にとっては功を奏したといえるかもしれない。

3　母の死をきっかけにジェンダークリニックへ

自宅近くのクリニックでは、度々ジェンダークリニックへの受信を勧められたが、なかなか踏ん切りがつかなかった。ところが、母の死をきっかけに、ついにジェンダークリニックを受診した。以下、ジェンダークリニックでの語りについて詳述する。

①A ジェンダークリニックでの語り

（1）自己の身体への違和感に関する語り

ジェンダークリニックへの通院当初は、男性ホルモン投与も手術も望んでいた筆者は、初回時、特に体への違和感を強調した。特に、せいりがあり、胸が膨らんでいる自己の身体を「間違った身体」・「自分ではない借り物の体」として位置づけた上で、医師に語っていた。その語りは、実際に感じている身体違和感より誇張した部分もあったように思われる。

（2）異性愛規範を意識した語り

しかし、筆者にとっては、前項の身体違和感への語りより、不本意な語りをしなければならなかった場面があった。

初回時の筆者の服装は、紳士用のスーツにネクタイ・革靴だった。医師は、筆者の服装について、次のように言った。

「「あなたは十分「男性」として見えるし、彼女もいそう」。

筆者の服装は、この時点で医師への男性としての印象操作は、一応成功したといえるだろう。しかし、「彼女もいそう」という医師の発言に愕然としたのは、医療現場においても、異性愛規範が自明のことのようにまかり通っていたことである。そこで筆者は、やむなく次のような語りをしてしまった。

「確かに俺も「女の人から「男らしくない」って言われるのは、男の人から「男らしくない」って言われるより身にこたえる」

「彼女もいそう」と言った医師への答え方としては、少々的外れな答え方だとは思うものの、

当時の筆者はそのように答えるのが精一杯だったのだろう。もしかすると、医師へのこのような答え方は、明らかに通常の男性と同じく、女性を性愛の対象にする、つまり、異性愛規範にのっとっていることを無意識のうちにアピールしなければ、男性として認めてもらえない、というあせりにも似た気持ちがあったのかもしれない。

その一方で、筆者は男として、女性を性愛の対象としているのか。答えは「ノー」である。筆者の性愛の対象は男性であるから、ジェンダーレベルではゲイであるが、身体レベルでは女性として男性を性愛の対象とする、いわゆる異性愛規範にのっとっている。社会は、ジェンダーの性別より、身体の性別を重視するわけであるから、社会の側からすれば、一見何の問題もないように思われる。しかし、男性ジェンダーを重視し、女性の身体を否定している筆者にとっては、女性としての異性愛規範にのっとっていること自体をタブーとして認識しているわけであるから、身体レベルでの異性愛規範にのっとっていることを容認していない。したがって、恋愛に関する語りそのもの自体に嫌悪し、回避しているというのが真実である。にも関わらず、筆者はなぜわざわざ医師に男性として女性を性愛の対象としているかのような語りをしなくてはならなかったのか。そこには、「彼女なんていません。俺、男が好きやねん」と仮にストレートに言ったとしたら、医師から、「それではあなたは女性じゃないの？」という答えが返ってきそうな雰囲気を察知したからである。つまり筆者がいくらこの場面で真実を語ったとしても、それは社会の異性愛規範にのっとり「男が好きなあなたは女性」として扱われるのではという恐れが、真実をそれ以上語らせようとしなかった、といえるだろう。

このように考えてみると、医療現場というのは、いかに「真実を語らせないか」が見て取れる。それは一見真実を語ってもよいような空間でありながら、実はその中に、「マニュアルにないことは異常であるから語ってはいけない」、「医療者側の都合の良いことしか語らせない」という暗黙のルール規定と、医療者側のご都合主義による情報操作が存在する。そのことを受けて患者側は、知らず知らずのうちに、そのような医療者側の「顔色伺い」を行いながら、真実とは異なる語りをしてしまうという構図にはまっていき、自ら患者になっていくという一端をうかがい知ることができた。

（3）不自然な語りの中に存在する「挑戦の意味」

しかし、「性同一性障碍」のマニュアルに従うような医師の顔色を伺っているだけの語りをしているわけでは決してなかった。それは、視覚に障碍はあっても、診断書の必要性をもくろんだ語りでもあった。

医師との面接を重ねたある日、たまたま医師に子ども時代の写真を見せた。たまたまその写真に写っていた筆者の服装はスカートだったようだが、嫌なことがあったのか、筆者の顔に笑顔がまったくなかったそうだ。医師は、スカート姿の筆者の写真を見ながら、「これ、スカートだけど、このときは女の子の気分だったの？」と聞いた。そこで筆者はすかさず即答した。「俺には、1度として、女の気分になったことはありません」。

筆者の周囲には、「障碍のある人たちは無性である」とか、「性別を意識させない」などという

人が多い。このことは、男性として生きようとしている筆者にとっては非常に残念であり、そうした考え方は間違いである。なぜなら、特に子どものころから障碍のある人たちの中には、学校教育や私生活において、周囲の大人たちから、障碍のない子供たちよりジェンダー化された教育やしつけがなされていることも多い。まして筆者のように、ジェンダーの性別と身体の性別が不一致な場合､必ずジェンダーの性別は否定され､身体の性別にあわせたジェンダーを強制される。それだけではなく、そのことが「善意」として行われているため、正面切って反抗したりカムアウトしたりすることが難しい場面も多かった。この現象は、医療現場においても同じことが言える。性別違和感に起因する内容の症状においても、医師によっては「障碍」によるものと関連付けて解釈する人もいる。そのような状況を回避すべく、性別違和感に伴う症状に対して、視覚に障碍があることを理由にはさせないという強い意志の下、実際より誇張した語りや､「性同一性障碍」のマニュアルを意識した語りになっていたことは事実であった。

その一方で、社会は特に視覚によって他者の性別を識別することが多いのだが、そのような社会のガイドラインを解体すべく、医師に対して、視覚による性別の識別ではなく、スピリチュアルな性別（自己の魂が男女どちらの性別に属しているか、という観点から、自らの魂が男性に属しているという語り）を重視することを語りの中に盛り込んだことによって、全体としては不自然な語りの中にも、医療現場への「挑戦の意味」を含んだ強烈な語り方になったことは事実だろう。

（4）「挑戦の意味を含んだ語り」の最後は、「真実な語り」、「診断書交付」へ

そのような挑戦の意味を含んだ語りをした後に、筆者は次のような「真実な語り」をした。「俺の体の性別違和感は、視覚障碍とはまったく関係ありません。これは俺が生まれたときから視覚障碍とたまたま一緒に持ったもんです」。医師へのこうした「挑戦を含んだ語り」の「挑戦」とは、医師への一方的な勝負師としての挑戦とは別に、医師の力量を試すための挑戦であったのかもしれない。すなわち筆者は､医師として､筆者のこのような「挑戦を含んだ語り」に誠実に向き合うかどうかを、無意識のうちにテストしていた、ともいえる。その結果、筆者の「挑戦を含んだ語り」に誠実に向き合った医師に対して合格点を与え、最後に「真実な語り」へと導き､「診断書交付」にいたったのである。

②2 軒目のジェンダークリニックでの語りによる診断書交付

正式に「性同一性障碍」の診断を下すには､2 人以上の医師の一致した見解が必要であるから、2 軒目のジェンダークリニックでも、やはり誇張した語りをせざるを得なくなった。しかし、今度は、特に身体的な違和感についての語りだけではなく、鍼灸マッサージ師としての医学的知識を根拠に､「自分の体には、こんな広い骨盤は不釣合いだ」･「テストステロンを注入することで意欲的になれる」など、男女の身体の違いを明確にした上で、明らかに女性の体を嫌悪していることを切々と訴えるようにして語った。この戦法は、視覚に障碍のある人への診断を下すのが初め

てであることで慎重になっている医師を半ば説き伏せるようにして診断書を取得するのに成功したというのが実情であろう。そして、「あなたがそこまで言うのであれば、あなたの意思は堅いようですから、診断書を書きます」という医師の言葉を引き出し、診断書が交付されたときは、「勝利感」まで味わった。

4　終わりに

筆者の感覚では、ジェンダークリニックをはじめとする性同一性障碍に関連する専門医は、それまで通院していたクリニックよりパターナリズムの様相を呈していたように思えてならない。それは、この社会がいつでもどこでも何度でも、「性別」を意識させられる場面を用意し、その度に半ば当たり前のように男女に振り分け、そのことにほとんどの人たちが何の疑問を持っていない、逆に言えば、筆者のようにいつもいつもそのことに疑問を抱き、不快感を表しながら駆け込むジェンダークリニックと言うのは、筆者からすると、言語化できない脅威的で恐意的なものを感じたのかもしれない。そのことが、医師たちへの「力関係」を意識させられ、「挑戦を含んだ語り」にもつながったのだろう。

筆者のように視覚に障碍があり、ともすれば視覚に障碍の無い医師たち中心の仕方で医療が提供されようとしたとき、もしそのようなやり方が筆者にとって不都合な場合、筆者は医師たちに対して、はっきりと「ノー」といえるだろうか。ジェンダークリニックに関わらず、この課題は依然として筆者の前に課せられているのである。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

役場の対人援助論

（１９）

岡崎　正明

（広島市）

「広島カープ×役場の対人援助（？）」

「広島人のうかれ具合もここまできたか」

テーマを見れば、そう思われても仕方ない。

たしかにうかれた。あーうかれまくったさっ。頭の中も街中も、ハロウィンの渋谷状態。まつりモードの数日だった。でも２５年に１度。渋谷は毎年のバカ騒ぎなんだから、それくらいは許してもらいたい。

メディアでは連日「広島」というワードが飛び交い、ついに「神ってる」が流行語大賞までとる始末。おまけにオバマ大統領は来ちゃうわで、昨年の広島はまさに確変モード。１００年に１度の注目され具合だった。

そこまでいくと、いち広島の小市民としてはだんだん心配になってくる。まるで実力以上に評価されてしまった一発屋芸人。「ゴールデンタイムに髭男爵が冠番組ってまず無理じゃね？」的展開で、正直不安しかない。ルネッサーンス！

それはともかく、昨年の広島カープの戦いぶりを見ていると、単純な勢いだけでなく、きちんとした理由があってうまくいっていると感じることが多かった。戦術や戦力、チームワークなど、そこには野球の世界だけにとどまらない、原理原則のようなものが垣間見えた。

そこで気づいちゃったのだ。

「広島カープ」と「役場の対人援助」。

一見なんの接地点もなさそうなこの２つの言葉が、リンクする部分があるのではないか？「これはイケる！」私の中で、確信が芽生えてしまった。

広島カープという切り口で対人援助を語る一。おそらく本誌初。いや、世界初の試み。

「すべての『世界初』に価値があるわけではない」
新年早々そんな格言が私の中で生まれた瞬間でもあったが。まあ多少でも興味を持たれた方は、しばしお付き合いいただきたい。

共通点は「システム」

広島カープと役場の対人援助（＝お役所の福祉現場）の最大の共通点。それはともに目的を持った組織だということだ。
カープの目的は、言わずと知れた「日本一」「リーグ優勝」。そして「目の前の試合の勝利」ということになるだろう。一方、お役所の福祉現場にとってのそれは「地域福祉の向上」や「住民の安心」「来談者の問題解決」といったあたりか。
スポーツと行政という違いはあれど、組織内でそれぞれが役割を担い、目的達成に向けて邁進するという点は同じだ。このような組織を考える時に、非常に役に立つのが「システム理論」という考え方である。

システム理論とは、人工物、生物、社会集団など、ミクロからマクロまで様々な現象を「システム」としてとらえる考え方で、
「システムは互いに作用している要素から成り立つ」
「システムは部分に還元できない」
「システムは目的に向かって動く」
などの特徴を定義している（以上、ウィキペディア参照）。
これ以上学術的な説明をする自信がないので、広島カープを例に具体的に話をしてみよう。早速コラボレーションの開始である。

カープという組織にはオーナー・株主・球団職員・監督・コーチ・選手などなど、実にさまざまな役割（要素）がある。そしてそれらは互いに指導、報酬、助言、報告など、関わり合いを持った関係である。一方通行ではなく、双方向に影響を与えている。これが「システムは互いに作用している要素から成り立つ」ということだ（と思う）。
次にカープという組織を分解し、各要素だけで見てみる。オーナーの役割とはこんなだ。コーチがやることはコレだ。選手は…と、それぞれを説明することは簡単だ。
しかしどの役割がカープというシステムの中心か？本質か？と言われると…ひと言では答えられない難しさがある。例え各選手の特徴を完璧に説明しても、それが広島カープのすべてかと言われれば、違うだろう。ファン層、球団設立の歴史、地域特性などなど、様々な要素をすべてひっくるめた総体が広島カープですと、言わざるを得ない。これが「システムは部分に還元できない」ということだ（と思う）。
そして「システムは目的に向かって動く」については、いわずもがな。最初に言った通り、カープもお役所も、目的をもって動いている。もちろんそれが常に達成されるわけではないけれど。

システム理論のすごいところは、この考え方をカープやお役所のような組織だけにとどまらず、コンピューターや機械、動物や人体、家族、社会など、この世のありとあらゆるものに適用させるという発想だ。
例えば人体。これを要素に分けると脳・肝臓・皮膚などの臓器や細胞というものの

集合した生体システムと捉えることができる。また例えば冷蔵庫のような機械も、様々な部品がつながり合い、冷却や照明などのシステムを作っていると理解できる。

話は少しそれるが、システムに関しての興味深い話がある。
私の尊敬する生物学者の福岡伸一さん。彼の本で紹介されていたルドルフ・シェーンハイマーというアメリカの生物学者の実験の話である。
それはネズミを使ったこんな実験。１匹のネズミに、分子レベルで目印をつけたエサを与える。これでエサがネズミの体内に入っても、ネズミ本体の分子と見分けがつくようになる。
当初の仮説では、エサは自動車でいえばガソリンのようなものなので、エネルギーとして燃焼され、そのカスが排泄物となって出される。つまりエサの分子がネズミの体内に入り、１度はネズミの分子の中に混ざり合うが、役割を終えればエサの分子だけがきれいに排出されるはず…そんな見通しだった。
ところが結果は予想を大きく裏切った。確かにエサの分子の一部は呼気や糞となって排出された。しかし、そのほとんどはネズミの体内の分子と混ざり合い、なんとネズミの体の一部となったのだ！そして、それと同じ数だけのネズミの分子が、糞となって外に出されたという。ちなみにネズミは成長の止まった大人であり、エサを食べる前と食べて糞をした後で体重は変わらなかった。

これがどういうことを意味するのか。
私たちは爪や髪・皮膚が生え変わり、新しくなることは常識として知っている。しかし脳・心臓・眼球など、体の主要な部分はずっと変わらないイメージを持っている。確かに細胞レベルで見ると、自分の細胞が分裂を繰り返し、代謝をしているように思う。
しかし先ほどの実験のように、最小単位の分子レベルでみると、私たちの体は絶えず、そして少しずつ「入れ替わっている」のである。福岡氏はこれを「しばらくぶりに会った人に『お変わりありませんね』といいますが、実はお変わりありまくりなのです」と言い、生物の体は固定したものではなく、川の“よどみ”のようなものであると解説している。鴨長明の方丈記「ゆく川の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」とは、人の世どころか、まさに私たち自身のことを表しているというのだ。
そう考えると、人も鳥も、虫や星さえも、森羅万象が分子レベルでグルグル循環している「宇宙システム」の一部という説明に行きつく。数年前の自分の体を作っていた分子は、今は海にあるかもしれないし、地中にあるかもしれない。もしかすると、好きな彼女の一部になっているかもしれないのだ！

なんだかスゴイことになってきた。システム理論がすべての事象を対象にするとはいえ、こんなに風呂敷を広げて大丈夫だろうか？自信を失いかけた私だったが、そんなピンチも広島カープを応用して考えることでとても納得し、安心することができた。（ほんとかよ）

一般に、現在の選手全体を指して「広島カープ」と世間は呼ぶ。確かに間違いではない。
でも２６年前に優勝したのも同じ「広島カープ」である。にもかかわらず、同じ選

手は誰１人としていない。衣笠も、山本浩二も、今はユニホームを脱いでいる。中身がすべて入れ替わったにも関わらず、私たちはどちらも同じ広島カープとして認識する。

昨年は黒田が引退した。その前年にはエースである前田健太がいなくなった。今年もまた誰かが去り、新たな選手が加入するのは間違いない。例えチームの顔ともいうべき選手が出ても、他球団から選手が来ても、やはり広島カープとはあのユニホームを着て、マツダスタジアムをホームに戦うチームなのだ。

そうカープもまた、長い時間をかけて入れ替わり、更新されていく“よどみ”なのである。（それなら巨人もだろ、などとツッコんではいけない）

チームの目的と多職種連携

話を戻そう。ここまでの話で、システム理論は様々な事象に応用が効く、普遍性の高い論理であることはお分かりいただけたと思う。

そのシステム理論の特徴の１つが、単純な因果論を採用しない点である。「ＡがＢの原因だ」という分かりやすい構図は、とかく私たちが普段考えがちなパターンである。科学の世界でもこれが定番のアプローチだ。

しかしシステム理論では円環的なモノの見方を重視する。

「ＡがＢの原因だが、ＡはＣがもたらした結果でもあり、Ｃの原因はＢである」

A→B→C→A に戻るという、グルグル循環するパターンである。「タマゴが先か、ニワトリが先か」というのも、これと似た類の話だ。

この考え方は、対人援助の現場でも非常に有用であり、システムズアプローチや家族療法という手法で広く利用されている。この手法の良い点は、犯人探しをしなくていいということだ。誰のせいだとか、何が悪いとか、そういう不毛な議論を避けることができる。そして客観的に今起きている事象に目を向け、「どうしてこれが維持されているのか？」「何の役に立っているのか？」と、起きているパターンに着目し、より望ましい循環になるための一手を考えていく。

今シーズンの広島カープが優勝した理由の１つとして、よくあげられるのがチームワークの良さだろう。これはただ人間関係が良いとか、仲良しであるとか、そういうことではない。チームとして互いに補い合い、支え合う、『相補性』があったということである。打者に助けられた投手が結果を残し、投手が点を与えないから打者もあきらめずに戦える。好循環の結果。まさしく円環的見方である。「黒田がいたから優勝した」「鈴木誠也が神ってたから優勝した」などという、因果論で説明がつくことではないのだ。

特に守備の場面というのは、この相補性が求められる。守備の名手であるセカンド・菊池が注目されがちだが、もちろん彼だけで勝てるなんて、そんな単純な話ではない。菊池をショート・田中やファースト・新井がしっかりサポートする。守備範囲の広いセンター・丸が松山を助け、鈴木が驚異の鉄砲肩でランナーを進めさせない。それぞれが自分の役割だけにとどまらず、チームのためを考えて、できることをしていたのだ。黒田やジョンソン・野村など、打たせて取るタイプのピッチャーが多いカープにとって、こうした守備陣の連携は必要欠かざるものだった。

役場の対人援助の現場でも、チームワークは以前から大事とされていたが、近年様々な専門機関が増え、その重要度はさらに増している印象だ。
特に現在私が関わっている高齢者福祉の分野では、「地域包括ケア」という理念が掲げられ、「多職種連携」「医療と介護の連携」といった言葉を聞かない日はないくらいで、他者との連携を模索する日々は、なんだかさっきのカープの話と被る。

チームメンバーは病院・介護事業所・包括センター・役所など。目的は「対象者の自立支援」「より良い生活」という名の『勝利』である。その１つの目的に向かい、それぞれ違った役割を持った機関が連携し、補い合う。
そんなときよく起こる問題が、守備範囲が微妙な球（＝どの機関が対応するべきかが曖昧な問題）が飛んできた時。ハマってしまいがちなのが「そのボール（問題）はそっちの守備範囲でしょ」「いやいやうちはセンターだから、ここからここまでだよ。その球はおたくが拾うべき球でしょ」などという、境界争い。野球でいう“お見合い”というやつだ。

それぞれのボーダーライン上での難しさがあるのは十分理解できるが、こんなパターンになったら思い出したい。「そもそも我々の目的はなんだった？」と。
そうだ、我々の目的はチームの勝利。この対象者の自立や福祉の向上のために、我々はチームを組んでいるのだ。けしてセンターとライトの正しい境界線を引くために、わざわざ集まったのではない。きっと野球で守備範囲の線がグランドに引かれていないのは、チームメンバーが協力して、ボールを取れる人間が取ればいいからだ。大事なのは誰が取るかよりも、チームとしてアウトを１つ取ることなのだ。

多職種連携がうまくいくコツは、ここではないだろうか。
今シーズンのカープのように、自分の守備範囲だけにとどまって満足せず、「守備範囲プラスもう一歩」を、メンバー全員が意識して行動する。そうすることで、チームに好循環が生まれ、目指す勝利につながる気がしてならない。境界の画定がどうしてもやりたきゃ、試合終了後にゆっくり落ち着いてやれば良い。

弱小市民球団という「強み」

ここまで広島カープと役場の対人援助について、システムという共通点から話しをしてきたが、他にも広島カープを考えていくことで、対人援助に役立つヒントにつながるのではないかということが、私の中でいくつかあった。
例えば「リスク（弱み）」と、「ストレングス（強み）」について。
とかく対人援助の現場では、来談者やその家族の持つ課題や問題、危険性という点に注目しがちである。福祉のいろんな分野において、リスクアセスメントシートやそれと似たような様式が用いられ、私たち支援者は対象者のダメポイントをチェックすることが日常化している（時々自分は何様なのかと思う）。近年の早期発見に重きを置く傾向が、そのチェックの「重箱の隅をつつく化」に拍車をかけているようにも思う。
その反省として最近では、対象者の「ストレングス＝強みや資源」もちゃんと見よう、ということが以前よりしっかり言われるようになってきた。アセスメントシート

にそうした項目があるのも珍しくないが、まだまだ有効活用できていないことも多い気がしている。

広島カープのリスクとストレングスに想いを馳せてみる。リスクで浮かぶのは「親会社が無い」「万年Ｂクラス」「しがない地方都市の球団」「資金力が低い」など。球団の組織的特徴や、拠点都市の規模などから、経済的脆弱性が常に課題だ。過去には何度も身売り、合併の話があったほどだ。
逆にストレングスは何か。「熱狂的ファン」「地域との結びつき」「カープ女子」「育成力」など。もっとあるとファンには怒られそうだが、ここまであげてみて気がついた。強みも弱みも、根っこは同じところから来ていないか？
巨大な「親会社がいない」からこそ、「地域との結びつき」が強いのであり、たとえ「万年Ｂクラス」と成績が振るわなくても、「熱狂的なファン」が離れない。「資金力が低い」ため、若い選手を「育成」することに力を入れ、そうして活躍する「しがない地方都市球団」の若手の健気さが、「カープ女子」ブームの要因になった…。
「判官びいき」という言葉があるが、弱点のある、ハンデのあるものだからこそ応援したくなる心理が人にはある。そう考えると、カープのリスクや弱みは、裏を返せばカープの強みを形作っているものだともいえるのだ。

対人援助の現場でも同じだろう。その人の弱みも強みもひっくるめた個性が、まさしくその人らしさを作っている。支援関係が結びにくい人は、これまで支援などなくても１人やってこられた強さを持っている人と言い換えることもできるし、身寄りが無い天涯孤独な人は、家族による無用なトラブルに巻き込まれる可能性が無い人だともいえる。リスクだけの人間も、ストレングスだけの人間もいないのだ。それは私たち支援者や支援機関もおんなじだろう。

そのほかにもカープと対人援助の組み合わせでいくと、「まずは面接のつかみとしてカープの話題から入ってジョイニング」という〝広島の対人援助あるある〟や、「カープの負けた翌日は不機嫌な人が増えるため、ＤＶや虐待・家族不和の相談が増える」という都市伝説があるとかないとか。とにかく話題はつきないのである。

今回まったくの思いつきで、この似ても似つかない双方についてアレコレ考えてみた。「なんのこっちゃ」とあきれた方も、「ふざけるな」と怒られた方も多いだろう（ごめんなさい）。でも私としてはちょっとだけ、仕事で悩むときの『自由度』が増した気がして、まんざらでもない気分なのだ。真正面からクソ真面目に悩むだけが解決への道筋ではない。ときには発想の羽を自由に伸ばして「この状況をカープに例えたら…」なんていうのも、悪くない。

そんなわけで今年もプロ野球の開幕まであとわずか。いち広島の小市民として、カープの連覇と 33 年ぶりの日本一を期待しつつ…（ただ最近ちょっと浮かれすぎなので、その他の球団ファンや、野球に興味が無い方への配慮もしながら）、おのれの現場で、カープに負けない仕事をしたいと思っている。

発達相談③　検査結果と発達特性

新版Ｋ式発達検査をめぐって　その⑱

大谷　多加志

前号で「次号は助言と支援をテーマに…」と書いたのですが、少し寄り道をして、もう少し検査を通しての発達理解という観点から、今気になっていることについて考えてみようと思います。

思い込み

医学の領域で薬や治療法の効果を測定するために用いられる方法として、「二重盲検」というものがあります。「プラセボ効果」が有名ですが、私たちは『有効な薬や治療法を受けている』と信じ込むことによって、実際には特に効用のない偽薬を飲んでいたとしても、症状が改善する場合があります。また、治療者が自らの期待から、実際より効果を高く評価してしまう「観察者バイアス」というものも存在します。医学領域の研究においてはこれらの要因を排除するため、治療者側にも患者にも治療法の性質や内容を知らせずに試験を行うことがあります。それを二重盲検というのです。

発達相談におけるバイアス

なぜこんな話をしているかというと、発達相談の場には何らかの“バイアス”があると思われるからです。

発達に関することで相談に来るケースというのは、健診や保育園、幼稚園など何らかの場での判断をくぐって、相談の場にたどり着いていることがほとんどです。そうすると、相談者は対象児に対して「何らかの発達的な課題がある」という先入観を持ちやすくなります。

研修などでよくあるリクエストの 1 つに、相談場面で出会う典型的なケースの検査結果の例を挙げてほしい、というものがあります。たとえば、「○○の面に困難を持つ人はこんな検査結果（プロフィール）になります」といった話を期待されている場合があるのですが、基本的には対象者の発達的な特徴がどうであれ、それが検査結果にどのように表れてくるかは、ケースによります。発達的な特徴が、必ずしもそのままプロフィールになって表れてくるとは限りません。場合によっては、日常生活では非常に困難につながるような特徴が、検査場面ではピタッとはまって非常に高い結果を出すことだってありますし、まったく逆に日常の中では非常に有用な力が検査場面ではうまくすくい取られないことだってあるわけです。変に予断をもつことは適当ではないという思いもあり、研修ではご期待にそえないまま、私なりに適当と思う内容に組み替えさせてもらうことがほとんどです。

さかさまになるのは何故？

K 式発達検査の課題の中に次のような課題があります。検査者が積木を使ってお手本となる物を作ってみせ、子どもにも同じものを作ってもらうという課題です。その課題において時々、「検査者が作った見本と同じ形であるが、上下が逆の形で構成しようとする」という反応に出会うことがあります。

ある時、この「上下をさかさまに構成する」という子どもの反応について議論している人たちがいました。同様の反応をみたことがある人が複数いて、共通点として、対象児が発達障害あるいはその可能性がある子どもであったことが挙げられました。その後、議論としては、「理屈はよくわからないが、発達障害に起因する何らかの認知的の歪みによるものであろう」という結論に向かっていきました。

① 一見、不自然に思える反応をする子どもがいる
② 共通点として発達障害（の可能性）を持つ子どもであることが挙げられる
③ 発達障害の特性から生じているだろうと考える

という思考の流れは、一見ごく自然なように思えますが、1 点大きな落とし穴があります。研究目的で検査を使うことがあるため経験上知っているのですが、上下さかさまに構成しようとする反応というのは、発達障害の子どもに限らず、ある時期には一定の割合でみられるということです。その子どもたちに、共通して発達障害の特徴がみられる、というようなことはありません。ですから、「さかさま構成＝発達障害の特性に起因」説は違うだろうと経験的に判断できたのですが、このような思い込みが生じるのは決して珍しくありません。“自分の検査経験は、相談に来る子どもを対象としたものだけである”というバイアスを意識しておくことが重要であると言えるでしょう。

この思い込みが厄介な点は、「繰り返し同様の反応と出会うことで、持論が強化されやすい」「相談事例以外での検査を経験する機会はほとんどなく、持論が修正されにくい」ということです。子どもの反応を、安易に自分の知識や経験によって発達特性等にむすびつけて解釈してしまうことについて、検査者は慎重であるべきでしょう（清水，2009）。

一方で、先に述べた子どもの反応については私も何度かみたことがあるのですが、なぜさかさまに構成するのか、ということはよくわからないままでいました。最近、ようやくその謎が解けたように思います。描画研究の中でも、子どもが一時期上下さかさまの絵を描く時期がある、ということを知ったのです。これは子どもが円や四角など、図形を描き始めた初期にみられるもので、その後は消失します。このことについて斎藤（2014）は「観察者中心座標軸」と「物体中心座標軸」という 2 つの系の存在によって説明しています。つまり、「観察者中心座標軸」と「物体中心座標軸」のうち「物体中心座標軸」が優先されるときが一時期だけあり、その時には形態は正しいのに上下は誤る、という描き方になるというのです。「さかさま構成」も同じメカニズムによるものだと考えると非常に納得ができました。

当たり前過ぎて意識しないところに「落とし穴」があります。「さかさま構成」をした子どもに発達障害という共通の特徴があったから、そこに起因する反応なのだろうという考えは、一見自然です。しかし、実際はそもそも相談場面で出会う子どもは、発達障害やその疑いがある場合が多いということなのです。

新版 K 式発達検査の作成者である生澤雅夫先生は、検査を使う前提として「標準的な発達について十分に知っておくように」と度々おっしゃっていたそうです。新版 K 式発達検査講習会において、保育園や保護者の方や子どもたちのご協力のもと、実習がプログラムに組み込まれているのも、この先生の考え方に沿ったものです。検査結果からの「解釈」を考えるときに、この「標準的な発達についての理解」は、実は非常に大きなウェイトを占めているのではないかと思っています。

引用文献

齋藤亜矢（2014）ヒトはなぜ絵を描くのか　芸術認知科学への招待　岩波書店

清水里美（2009）清水里美さんからの問いかけ　そだちと臨床，6，124-127.

電脳援助

浅田英輔

Share

SNSが活用されるようになってきて、テキストや画像のやりとりだけでなく、文書ファイルや画像のまとまりであるアルバムの共有などを、複数人でやりたいこともあると思う。そんなことはひと昔前は「電脳に詳しい人」の役目だったのに、今時は誰でもできなきゃダメなくらいになってきた。写真を撮る機会も多いし、みんなに見せたい機会も多い。Webにアップするのでなく、クローズドなメンバーにだけ見せたいことも多い。

今はそれが誰でもできるようになっている。電脳援助でも何度か取り上げているGoogleのサービスを使うと結構簡単にできるのだ。

Googleをおススメする理由３つ

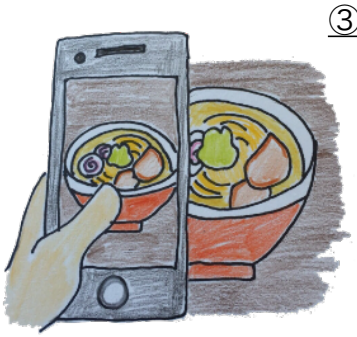
①Googleアカウント（Gmailを登録しているかどうか）を取得している人が多いこと。

Androidのスマホを使っているのなら、スマホを使うのに必要なため、確実に持っている。（Androidのスマホを使ったことがないけれど、そうだよね？）

iPhoneや格安スマホの場合でも、ほぼ必須と思う。同じサービスを使っている人とはやりとりが非常に楽チンになる。LINEを使うのに慣れると、LINEがない人と連絡とるのが面倒になるのと同じこと。

②様々なサービスのログインが一本化できること。

メール、カレンダーやGoogleフォトなどGoogleのサービスだけでなく、様々なwebサービスのログインに使えることがある。アカウントをいちいち作るのは面倒だが、Googleアカウントでいけると覚えなければならないパスワードが減る。サービス間の連携もスムーズにできる。

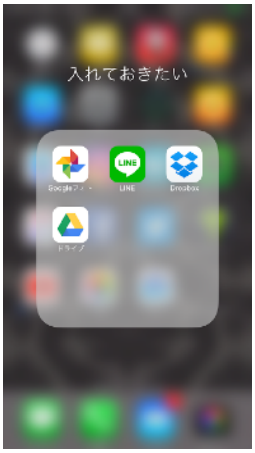


③スマホやパソコンを変えても問題ないこと。

スマホから、家のパソコンから、職場から、どこでも同じ環境を使える。連絡帳が消えるという心配もなくなる。

スマホの中で消えたら困るデータは、写真と音楽かなと思う。今回紹介するサービスをうまく使うと、機種変更なんかもだいぶ楽になる。今回は触れないが、私はAppleMusicを使っているので、スマホにほとんど音楽は入っていない。

やってみよう。



○Googleアカウントを取得しておく

自分で取得すること。

○スマホに入れておきたいアプリ

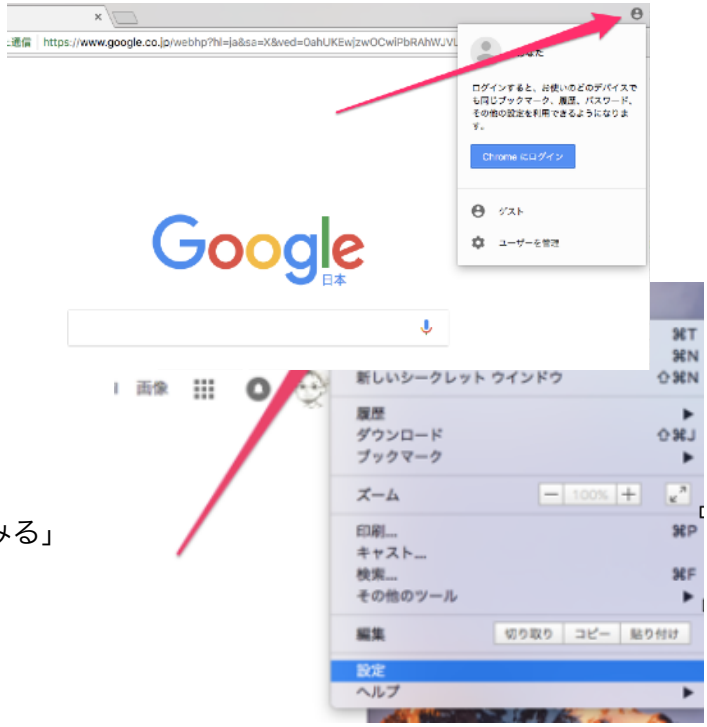
・LINE
・Dropbox
・Googleフォト

LINE以外は、Googleアカウントがあればログインできる。

Googleフォトは、スマホ内にある写真をクラウドにバックアップする。写真が大量にある場合、通信容量をかなり食うので、設定画面で「モバイルデータ通信を使用して写真（動画）をバックアップする」をオフにしておくことを推奨する。家など、wi-fi環境があるときにまとめてバックアップしてくれるようになる。通信容量は気にしないという方はオンにしておくと、写真を撮ったそばからバックアップしてくれる。

バックアップされたのが確認できたら、スマホの写真アプリに入っているものは消しちゃっても構わない。設定のところで「空き容量を増やす」ってのがあるので、そこからやるとよい。もちろん、不安なのであればパソコンにバックアップを取るのが確実ではある。でも「そのうちやろう」と先延ばしにしていて容量が満タンになってしまっている人も多いのではないだろうか。「スマホのデータで消えたら困るもの」「スマホで容量を占めているもの」で、写真は結構上位にあると思う（未調査）。普段から勝手にバックアップとってくれるだけでもかなり助かる。

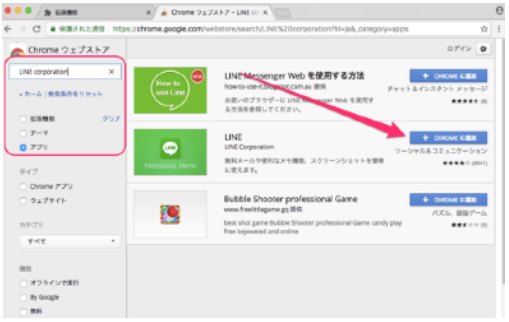
○Google Chrom+拡張機能のLINE



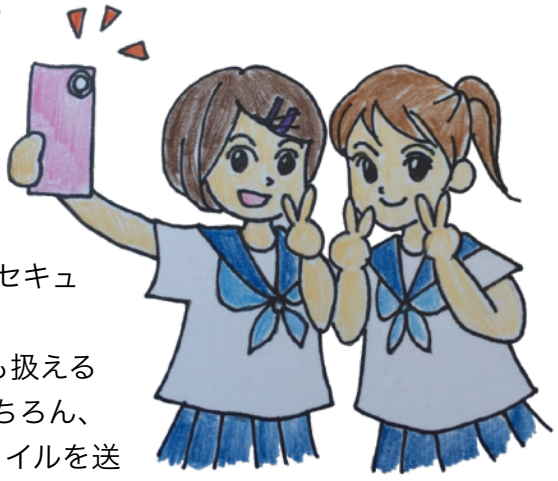
　まずはGoogle Chromをインストールしてログインしておく。

　GoogleChromは、あとからいろいろな拡張機能を入れて、自分が使いやすいような設定ができるのだ。今回はLINEの拡張機能だけ入れるが、例えば「Evernoteに簡単にクリップできないかな？」と思ったら、「Chrom 拡張機能 evernote」などと検索してみるとよいだろう。

1.右上のマークから設定→拡張機能
2.一番下までスクロールさせて「他の拡張機能をみる」
3.検索窓に「line corporation」と入れて検索
4.右側の「Chromに追加」ボタンを押す



○LINE



　知らない人も多そうだが、LINEはパソコンからも使える。

　一つのアプリケーションとしてインストールすることもできるし、GoogleChromの拡張機能としても使える。つまり、アプリケーションをインストールできない環境、人のパソコンや職場などでも使うことができるのだ。もちろん、職場でそんなことしてはいけない、パスワードを残さないようにする、最後はログアウトして履歴を消すなどセキュリティは自己責任で。

　パソコンから使えるということは、パソコンのファイルも扱えるということだ。ワードファイルをLINEに送れたりする。もちろん、グループに送ることもできるので、パソコンにあるPDFファイルを送るときなどに便利だ。また、LINEに送られたファイルをパソコンでみることもできる。また、キーボードも使えるので長文を打つのも楽々なのである。もっとも、近頃の若者はキーボードを使えないそうだが・・・。

○Googleフォト

スマホで写真を撮っていると、すぐに容量がいっぱいになってしまう。そこで、このGoogleフォトのアプリを入れておくと、勝手にクラウドに保存してくれる。画質は少し落ちるが、容量は無制限なのがうれしい。私のGoogleフォトには2000年からの写真が保存されている。やはり子どもがいると、写真が増えるのだが、何千枚かわからん。その上、保存済みの写真をスマホから削除する機能もあるので、スマホの容量も楽に空けられる。写真を全て、Googleのクラウドドライブに保存してくれるということになる。

これもパソコン用のアプリケーションがあるので、インストールしておくとよい。パソコンの写真フォルダにたくさんの写真がある場合は同期しておくと、いつでも大量の写真をスマホでみることができる。それでいてスマホの容量は食わないというのはすごい。ただし、気にならない程度ではあるが、見るたびに通信容量を食うし、電波のない状態ではみることができない。

そのGoogleフォトでアルバムを作ると、他の人に共有することができる。自分のスマホの容量を気にすることなく、他の人と写真を共有できるのだ。もちろん、相手の容量を気にする必要もない。

https://goo.gl/photos/fyAkpwqK4Hsde3FUA

例えばこんな感じ。ネットが繋がっている環境で読んでいる方はリンクをクリックすると私のアルバムをみることができる。時間が経って消えてしまうということもないので、思い出したらまたみることができる。

ついでに紹介するが、このGoogleフォトには「アシスタント」という機能がある。日付や撮影場所から推測して勝手にアルバムを作ってくれたり、似たような写真をつなげてアニメーションにしてくれたりする機能だ。例えば、２泊3日の旅行にいって写真をとると、「東京旅行」などタイトル付きでアルバムができるのだ。もちろん、何もしなければ勝手に公開されることはない。使っていて楽しいアプリである。

※容量、通信容量など

たまに混乱している人がいるので説明。

・容量

今の場合は、スマホの中に保存できる領域の大きさ。32GBとか64GBとかのやつ。「ディスク容量」と言ったりするが、もともとはハードディスクだったため。実際に円盤が入っていた。現在はSSDというものになっていて、内部に可動部分はなく、「ディスク」ではない。いっぱいになると、写真をとっても保存できない。

・通信容量

スマホでwebページをみたり、LINEをしたり、ソーシャルゲームをしたりするときに起きる通信の容量。通信会社との契約によって、月3GBとか5GBとか決まっている。動画をみたり高画質のゲームをダウンロードしたりすると大きく減る。LINEなんかは気にしなくてもいいレベル。いっぱいになると、LINEに添付された画像がゆっくり表示されるなど、回線スピードがすごい遅くなる。

○Dropbox

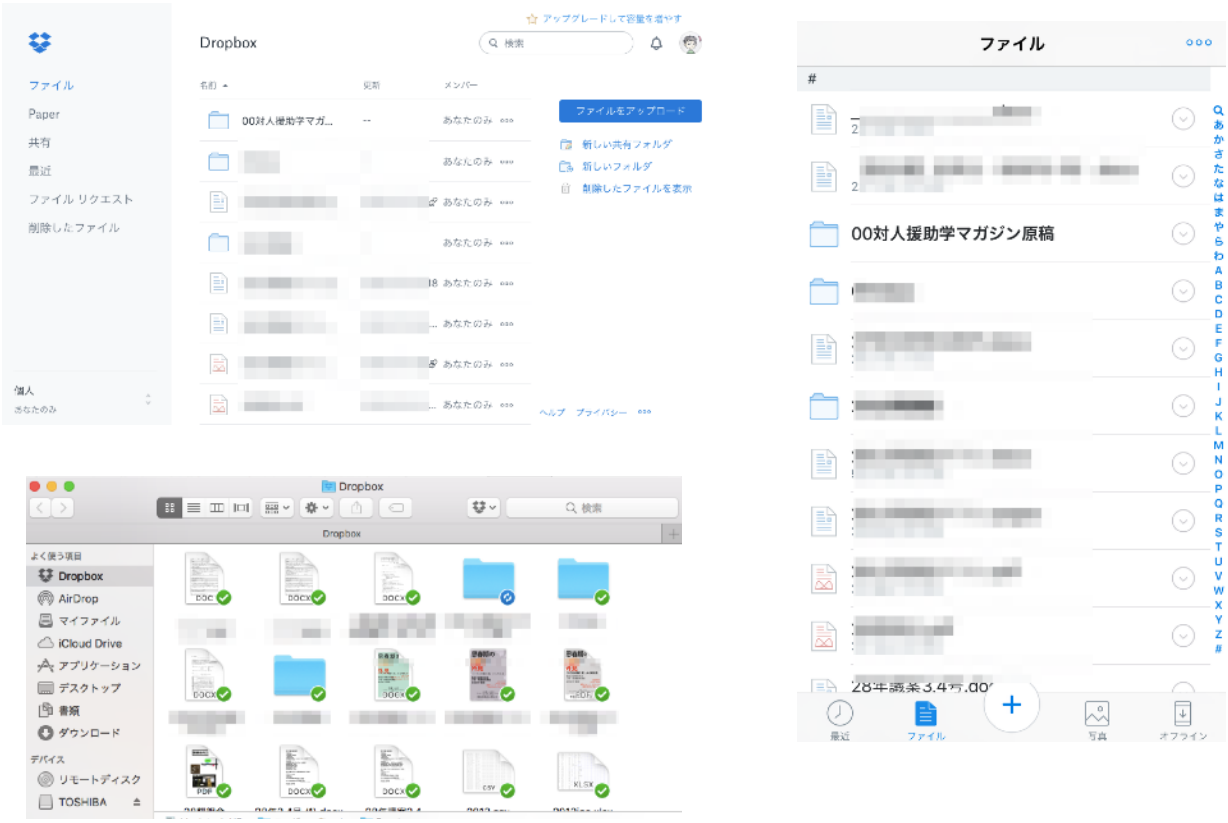
　Googleフォトは写真だけだが、こちらはなんのファイルでもOK。ワードでもエクセルでも、PDFでも画像でも動画でもいける。

　アプリケーションとしてインストールすると、普通のフォルダと同じように扱える。自分のパソコンなのであれば、インストールして使うほうが便利である。インストールして使うのであれば、任意のフォルダを同期させることで、パソコン上とweb上のファイルの中身が常に同じ状態にでき、その状態からオフラインでファイルを扱うことも可能。

　ブラウザ上から使うと、どのパソコンからでもアクセスできる。LINEやGmailと同じように、「インストールしちゃだめなパソコン」からもアクセスできるのだ。もちろん、同じようにセキュリティは自己責任で。人のパソコンに自分のアカウントやパスワードを入れることはできる限りないほうがよい。ログインした場合は必ず最後にログアウトすること、できるのであればブラウザのキャッシュクリア（一時保存ファイルの消去）もしたほうがよいだろう。

　左上：インストール版　左下：ブラウザ版　右：iPnoneアプリ版

　全て同じファイルをみることができる。この電脳援助の原稿もここに全部おいてあるため、なんならiPhoneを使って電車の中で書き、家についてからパソコンを立ち上げ修正するといったことも可能。USBメモリを使うなどの手間はいらない。そう、Dropboxならね。



　そしてこのDropboxも、ファイル単独で、フォルダにまとめて、共有ができるのだ。「共有フォルダに入れといたからみてね」というと、相手はスマホでささっとみることもできるわけだ。セキュリティは今のところ問題はない。もちろん「絶対だいじょうぶ」ってことはないので、どんなファイルを置くか、置かないべきかは各自判断が必要。

上手に共有しよう。

LINEにしろDropboxにしろ、うまく使うといろんなシェアが簡単になる。写真だけならLINEのアルバム機能が最も手軽だろう。しかし、LINEの乗っ取り騒動があったり、いろいろな理由でLINEを使わない人もいる。いわゆるガラケーの人もいる。そういうときはDropboxを使うと共有がスムーズだろう。URLを知っていればいいので、他の人にも広げやすい。

これまで電脳援助に書いてきたどのことにも当てはまるのだが、こういう知識を持っておくと、もともとやりたいことに時間を使える。今の場合は「写真を仲間たちみんなで見ること」が目的であるので、手早くシェアできればよいのだ。みんなで楽しむことが目的なのであって、シェアする手段に時間をかけたいわけではないのだ。

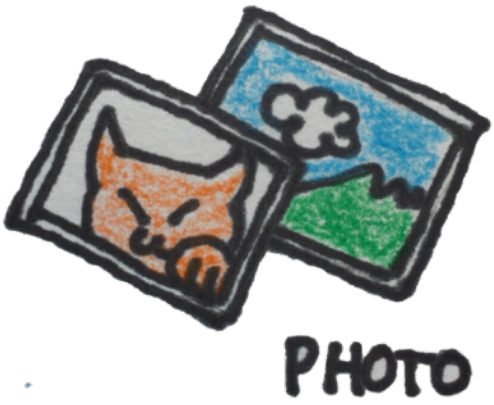
仕事でも同じで、本来やりたいことに時間をかけるべきで、手段の選択に時間をかける必要はない。その手段をとることで目的達成までの時間を減らせるのであれば、どんどん使えばいいのだ。手段選択の際に、好き嫌いが入る余地は多くない。「好きだからこの手段を取る」のではなく、「手間がかからないからこの手段を取る」のである。

ただし、手段を学ぶには一定の時間がかかる。私などはその手段を学ぶことが目的となっている節もある。でも、汎用性の高い手段を身につけると、ほかのことにも応用できるし、全体の作業速度が上がるのだ。「難しそうだから」と敬遠してしまうのは、いかにももったいない。やってみればいいのだ。

みんなで写真なんかを共有したいなら、これを使わない手はない。

やってみると、「動画を仲間うちだけで共有するにはどうしたら」とか「紙のアルバムを作る方法はないだろうか」とか「ワードファイルを同時に更新したらどうなるのだろうか」とか疑問が湧いてきたりもする。いろいろ試してみたくなる気持ちが起こることは、たぶんよいことだと思う。

Let’s SHARE！



講演会＆ライブな日々⑩

古川　秀明

「浄土真宗仏教婦人会」

京都は西本願寺の近くに、浄土真宗本願寺派教務所の「顕道会館」がある。

教務所とは、本願寺直属のいわば事務所にあたる所で、年間を通じて仏教に関する総会や研修などが開催されている。

この会館はいまから 94 年前の大正 12 年（1923 年）の建物で、その年は関東大震災のあった年でもある。

入り口に 3 つのアーチがある、とてもレトロな建物で歴史を感じる。

昨年、浄土真宗仏教婦人会さんから「仏教と心」の講演会＆ライブをこの顕道会館でして欲しいとの依頼があり、今回で 2 度目となる。

仏教とキリスト教は私の長年の研究テーマでもあり、喜んで引き受けさせてもらった。

大学では仏教と浄土真宗を学んでいたので、頭の中ではその教義を理解できたつもりでいた。

しかし、何度も何度も生きることや死ぬことの意味に悩み、人生に苦しみ、路頭に迷うような生き方しかできてない。

苦しむ度にいつも私の前に仏教やキリスト教が現れる。

私が望むから目に付くのか、必要だから目の前に現れる必然なのか、それとも偶然なのか・・・。

まさに摩訶不思議であり、ユングなら「それこそがシンクロニシティだよ」と言ってくれそうなことが次々に起こる。

今回もそんな不思議を感じた。
昨年からの連続なので、同じ話はできない。

どんな話をしようかと思案しているときに、カウンセラーとして相談を聞く中で、連続して「命」を考えざるをえない相談が続いた。

命を考えるのに仏教はとても役に立つ。

信仰はもちろん大切なのだが、仏教哲学も奥が深い。

２５００年も前に命の本質である「生老病死」を見抜いた仏の眼力が、「命」というものを考えるのに役に立たないはずがない。

よし、今回はまさしくその「命」の話をしよう！

そう思い立つとすぐに、家中の経典を引っ張り出し、今までの復習を始めた。

まずは浄土の三部教といわれている「大無量寿経」「観無量寿経」「阿弥陀経」の読み直しだ。

う〜ん、忘れていることも多いが、新たな発見もたくさん出てきた。
若い頃には見落としていた言葉が、つぎつぎに落ちてくる。

そこから派生して、「維摩経」「法華経」「般若心経」「華厳経」「観音経」・・・。

まるでネットサーフィンのように仏の言葉が降りてくる。

なんとか１時間で収まるように、しかもわかりやすくまとめた。

改めて学びだすと、まさにそのことに関連した相談が毎日次々に寄せられた。

まるでその相談が来る事を見越したように、様々な仏教経典から言葉が降りていた。

学ぶ、ひらめく、実践する。学ぶ、ひらめく、実践する・・・。

この繰り返しの中でなんと「言葉」と「曲」も降りてきた。

あっと言う間に「御仏の子」という仏教賛歌ができたのは、講演の前日だった。
急いでギターの弾き語りにアレンジして、当日に披露させてもらった。

講演も歌も、とても良かったと言ってもらえた。
前ならその感想に小踊りする気持ちになったのだが、今は違う。

褒められて嬉しくないわけではないが、この歌に「自分」がない。

全てが仏の言葉や旋律を借りているだけである。

聞いている人は、そんなことは知っているかもしれないし、知らないかもしれない。

だけど、講演や歌で本当に何かを感じてくださる人がおられたとしたら、それこそ私の「自力」ではなく仏の「他力」そのものに違いない。

仏の言葉のメッセンジャーとして、自分の命が役立ったのかもしれないという喜びは、私にとって他に勝る。

教会では神様を語り、歌う。お寺では仏様を語り、歌う。

自分が節操のない宗教乞食であることは否定しない。

だけど、自分の信じる宗教だけを守り、人を殺める信心深い人よりも、クリスマスケーキを食べた翌週に初詣に出かける寛容さが好きだ。

若い女優さんが出家したというニュースがメディアを賑わせている。

彼女に何があって出家したのかは知らない。

この国は 20 代の若者が自殺する確率が、他の国と比べて非常に高い。

出家するということは、今までの自分から生まれ変わるということ、つまり、過去の自分と決別して仏の道を歩む新しい人生を歩くということだ。

自殺という形で己の肉体を滅ぼさずに、命ある身体は今のままで、精神だけを新しく生まれ変わらせる。

芸能界というブラック企業の本質に気が付いて、そのレールから降りることはそんなに間違ったことではないと思う。

もちろん、その行為そのものが、こずるい大人達による何かの企てであるかもしれない。

だけど、これだけ若者の自殺者が多いこの国で、「自殺」ではなく「出家」を選択した彼女を応援したい気持ちになった。

「全部、言っちゃうね。」の後は「やっぱり芸能界に戻っちゃった。」になるかも知れないが、それでも生きていて欲しいと思う。

彼女の周囲に、これからも仏の教えを正しく説いてくれる優しい家族や大人がいることを祈りたい。

自分のこれからの講演会とライブの役割を今回改めて気付かせてもらえた。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

養育里親

～もうひとつの家族～

16

坂口　伊都

はじめに

前回から里親支援について、実際に里親の体験を基に気づいたことを書き始めました。里親は社会的養護の場の一つですが、実際にはかなり特有な要素が里親にはあるのではないかと感じています。その所以は、里子を家族の営みの中に迎え入れるところから発生しているからでしょう。社会的養護の場の多くは、仕事とも言い換えることができますが、里親家庭は日々生活している場で、そこを拠点に学校や仕事に出かけています。つまり、日常生活に里親としての生活がダイレクトに影響を与え、逃げることができない場所であり、そこで繰り広げられる出来事を認識し、里子や里親家庭を護るために何が出来るのかを問い直すことに意味があると感じました。里親の大変さや美談だけではない部分を言葉にして表現していきたいと思っています。

里親家庭に対しての支援は、社会的養護の場である乳児院や児童養護施設と同じようなイメージというよりも、家庭支援と考える方がしっくりくるように思います。そして、親子再統合をした家庭の支援と通じる部分があるのではないかと感じます。児童福祉法が改訂され、親子再統合に力を入れる方針になり、家庭復帰を目指す動きが始まっていますが、児童養護施設等で家庭分離の時期を過ごし、改めて家庭生活に復帰することは当事者の希望があれば上手くいくというような簡単なものではありません。家庭に戻っても、児童虐待が再発し、また家庭分離になるケースもあります。気持ちの上では、児童虐待を繰り返したいと親も思っていないで

しょうし、子どもも期待して家庭に戻りますが、それでも、悲しい出来事が繰り返されてしまうことが起こります。子育ては、どの家庭でもいい時ばかりではなく、葛藤することも多々存在します。

子どもとの関係を作っていく時、何事も起こらないように子どもの言いなりになっても、子どもを力でコントロールしようとしても、子どもは本当に安心することができないでしょう。子どもが自分の欲求を素直に出せず、可愛げのない行動を取ってしまっていたら、親子の衝突が生まれやすくなり、大人の方が子どもよりも冷静でいることが関係を築く鍵になりますが、そのために目の前にいる子どものことを理解している誰かに縋りつきたくなります。子育てで悩んでいる時は一般論ではなく、この子の行動についてどう見えるのか意見を聞きたくなります。それは、この子との日々の生活の中で困り事を感じ、今の受け答え方でいいのか、何か他にいい循環を引き起すような考え方があれば知りたいと切望しているからだと思います。言い換えれば、それぐらい逼迫しているということです。一つひとつ積み上げてきたわけではないからという思いが不安を煽り、怒ってばかりいなければならない現状に戸惑い、自分が思い描く親子に近づけない焦りを感じるのです。養育里親を実際にしてみると、いろいろな感情に囚われている自分に気づきます。それを踏まえながら里親支援に展開できればと考えています。

前回に挙げた里親支援は以下の７点です。

① 里子の生い立ち・背景を知る
② 里子の強み、弱みを知る
③ 里親自身の得意、不得意を知る
④ 里親家族のバランスを知る
⑤ 里親家族の周辺への働きかけ
⑥ 行政、地域への働きかけ
⑦ 何を目標にするか考える

前回は、①と②について書きました。ここでは、長期でも短期でも、子どもと別々に暮らす体験があると、その間の子どもが見えなくなるので、「この子」に注目して関係する大人達が語りあうことが子ども理解へとつながるのではないかと感じた部分を書いています。

今回は、③と④の項目について書きたいと思います。どうぞ、最後までおつき合いください。

里親自身の得意、不得意を知る

里親も親も子育てに関して初心者の頃が必ずあり、子どもも性格がそれぞれ違い、上手く子どもと関われる部分とそうでない部分が出てきます。私には実子が 2 人いますが、全くタイプが違います。息子の方は、家族とあまり話そうとしませんが、娘の方は、「ねぇ、聞いている？」と叱られるぐらいによく話をします。好きな食べ物も違い、兄は辛い物が好きでも娘は全くダメ。娘はクリーム系の料理が好きですが、兄は嫌いです。兄はマイペース人間ですが、妹の方は兄の叱られている姿をよく見て、賢く立ち回っているように感じます。親としては、同じように育てているつもりですが、子どもに与える影響は、兄妹としての立場でも変わってくるのでしょう。

乳児の時の育てやすさ、にくさも兄妹で違いがありました。兄は、よく夜泣きをする子でしたが、ニコニコよく笑う子で、行きかう大人達に「かわいいねぇ」とよく声をかけられていました。妹の方は、人見知りがひどくて祖父と目があっただけでも泣き出す時期がありました。今は、兄の方が他者に対して慎重派で、妹は年代がかなり年上の方でも平然と話をするタイプ

になりました。

このように兄妹でも差がありますから、里子が来たら違う部分が多くあって当然です。子どもがいない里親夫婦の方が、子育てした経験がなく、中途養育をすることに戸惑い、私に対して「子育て経験があるから何でもよくわかるでしょう」とおっしゃるのですが、里子を受けて何年も一緒に生活しているのであれば、それは立派な子育てで、子育て経験がないということに囚われなくてもいいのではないかと感じます。それを誰かが言葉にして伝え続けることも支援の一つでしょう。

そして、子育て経験が里子の養育への妨げになることもあると感じています。例えば、「それ取って」と子どもに言えば、子どもが「はーい」と渡してくれるとイメージするのですが、里子は聞こえないフリをしたり、「うーん」と言ってなかなか動こうとしません。私からすれば、イメージと全く違う反応をされ、「何で？」と怒りも含めた感情になりました。

里子の年齢にもよりますが、大人を信頼できる存在として感じていない場合、子どもに情を押しつけて上手くいかなかった経験をしました。大人に頼ることを知らずにきた子どもは、いきなり情を前面に出して近づいてくることに違和感を抱くようです。スタートラインでは、その子が物体等を通して見える形で助けてもらったという経験を積む方がわかりやすく、日常の環境から手助けするイメージを持つとわかりやすくなります。素直に甘えられるわけではないので、甘えさせてあげたいと思う里親の方が傷つきやすくなります。

里親も親も人ですから、何でも万全にできるわけではなく、小さい子どもの世話が好きな人がいたり、ある程度話し合いができるような年頃の方がいいという人もいます。また、子育ての中でも得意分野と苦手なことが必ずあり、子どもの方も言動でよくわかる子と何を考えているのかよく掴めないと感じる子もいます。

家事も同様にお菓子作りが好きな人は、手作りおやつをいろいろ工夫して作り、美味しいと食べてくれる子どもの姿を見れば嬉しく感じるでしょうが、苦手だと思っている人に手作りおやつを作ってあげるべきと言われれば、それはストレスになります。好きなことは苦になりませんが、苦手なことをするのは辛いものです。そこに罪悪感を抱く必要はないでしょう。自分自身ができるだけストレスにならないやり方にすればいいのではないでしょうか。手作りおやつが苦手なら、市販のお菓子で十分だと思います。子どもと一緒に「美味しいね」と共有できる時間を持つ方が、無理して作るより余程有意義です。

そして、里親自身にも子ども時代があり、親との経験が子育てに大きく影響を与えます。その癖や得意、不得意を知っておくことが有益に働くと感じます。

例えば、私は門限の時間を軽く見られることが苦手です。私が子どもの頃は、門限が非常に厳しい家で育ちました。おまけに母子家庭なので、母を怒らせると誰も庇ってくれない環境下にありました。門限に遅れると母の機嫌が悪くなり、その辺の物にあたることが 1 週間続きました。その間、子どもの私はできるだけ物音を立てずに母の怒りが収まるのを待ちました。何故か、決まって 1 週間怒り続けると母は落ち着くのですが、それまでの時間がたまらなく辛く、家での居場所がなくなる思いをし、母を怒らせないために先手を打ったりして、子どもながらの細心の注意を払って過ごしていました。

次は私が親の立場になると、子どもが遅い時間までなかなか家に戻ってこないと自分の気持ちが落ち着かなくなります。少しぐらい遅くなっても、大丈夫と思える人も多いでしょう。また法律で、門限時間が定められているわけでもなく、その価値観は受け手側の大人によって対

応が大きく異なってきます。私が門限を破ったことに腹を立て注意をした際、子どもが「ごめんなさい」と言えば、その場は収まりますが、反抗されると私の感情が揺れ動きます。私は子どもの時、神経をすり減らしてやってきた最大級の課題なので、それを無視した子どもに何とか言う事を聞かせようと必死になってしまいます。しかし、言えば言う程子どもがそれに乗るはずもなく、悪循環をしばらく繰り返し、苦悩する母親になるだけです。

門限の時間や破る頻度、子どもの年齢、性別等によって危険度は異なりますが、私自身がこの出来事に過敏に反応しているのか、いないのかが、今後の親子関係を左右させることに繋がります。私のこの感情は、普段は気がつかずに過ごしていますが、同じシチュエーションに遭遇し時、子ども時代の私の感情が登場します。子どもの対応に上手く立ち回れずに、子どもとの関係がギクシャクしていく時は、子どもの行動だけでなく大人側の揺れも大きな要因となると考えた方が良さそうです。自分の苦手が頭でわかっていても、感情を切り替えることは難しいと痛感しています。理性と感情は違うのでしょう。自分のザワザワする感情を無くすことはできないと思うので、「自分が苦手なこと」と意識するようにしています。そうすることで、子どもへの不適切な行動を減らすように努力しています。

今回は、私の一例を紹介しましたが、子どもの起こす行動で大人側が知らず知らずに揺れてしまう出来事は様々起こります。その他、その時の自身の体調や周りと上手くいっているかどうか、気になる問題を抱えているか否か等で、感情が揺れやすくなっていることもあります。この程度ならいつもは笑って過ごせるが、今は余裕がなくて大きな声で怒ってしまったという時もあります。その時は自己嫌悪に陥りますが、里親も人間なのですから失敗ぐらいします。要は、その後にどのように行動できるかです。子どもに振り回される感覚はありますが、大人の方が子どもよりも立場が強いことに変わりはなく、子どもに与える影響も大きいものです。子どもよりも賢く振舞うためにも自分の得意、不得意は知っておくと自分に少し余裕が生まれると思います。

里親家族のバランスを知る

里親としての生活を始めると、必ず家族関係に変化が生じます。家族成員が増えるということは、想像以上に影響力がありました。今までと違う体制で暮らすのですから、変化が起きて当たり前なのですが、私の感覚の中に今までの生活そのものの中に新たな家族が増えるイメージを抱きがちになりました。それは、まだ体験していないのでイメージが持てないこと、家族との生活基盤が出来上がっていることがそうさせるのだと思います。いろいろな心構えをしても、どのようなトラブルが発生するかは、現実の中でしかわからないことです。

家族の営みは、子どもの成長でもバランスが変わり、どこの家族であっても日々変化しています。ステップファミリーも、子どもにとってみれば、親と呼ばれる片方が違う人に変わり、

時には血の繋がりがない子どもが兄弟姉妹となるという大きな変化が起こり、混乱しやすくなります。里子として新しい家族と暮らし始めるその子自身の変化は、想像を絶するものですが、受け入れ側の家族も一端バランスを崩すものでした。その状況変化が、当事者達にはわかりにくく、無意識に元の家族のバランスを維持させようとしてしまう感覚になりますが、どんなに小さな子どもであってもその影響力は大きく、新たな家族バランスに移行していくものだと理解することが大切だと感じました。

我が家の場合、里親委託前にあまり語らなかった息子に一番大きな変化が起こったように見えました。息子は、外泊の時に積極的に里子と関わってくれました。それまで、家族と外食するのも嫌がっていたのですが、家族と行動を共にし、よき兄になろうとしてくれていたのだと思います。父が不在の時は里子と一緒に入浴をし、かけ算を教えたりしていました。ですが、だんだんと距離を置くようになり、里子の相手をすることを嫌がるようになり、今は全くタッチしていません。予測ですが、息子はよき兄になろうとして挫折したのではないかと思います。里子は、真っ直ぐな表現をせずに相手をイラっとさせる返答をすることがあります。兄の方も妹を可愛がるような記憶をなかなか思い出せないので、里子にきつめな言い方になっていたのかも知れません。里母の私も里子の表現の仕方に傷ついたので、息子が頑張って挫折した感覚を抱いたとしても不思議はないと感じます。今にしてみれば、頑張り過ぎていないかという視点で息子を支えてやればよかったと後悔しています。仮にそれをしたとしても、今の状況に変化なく、息子はわが道を歩んでいたかも知れませんが、娘のように揺れを見せなかった息子に対する認識の甘さを感じています。

どの子でも、手を差し伸べてほしいところは違いますが、手をかけることが前提という事を忘れていました。息子と他の家族の関係も希薄になっていますが、妹が話しかければそれなりに応じています。父と母に関しては、その時に話をする必要がある時、話をしてもいいと思う時に少し返事をします。その時に父と母、どちらが近くにいるかで相手を決めているような雰囲気です。里子の関係というよりは、両親との距離感を作っている印象を持っています。今息子は、里子との接点をあまり持っていませんが、里子の方は息子のことをよく見ています。「お兄ちゃんがな、部屋で大きい声で歌って、うるさいねん」等の話題が出てきます。また、兄に対して両親がどのような対応をしているのかも里子だけでなく妹である娘もよく見ているので、兄だけが特別扱いされていると思われないように伝えていくことも大事なのでしょう。

娘は、委託以前に女の子を希望していましたが、結果として弟になりました。娘自身がどう感じているかわかりませんが、女の子が来ていたら娘はもっと揺れたかもしれないと思います。同性だったら、知らず知らずに比べてしまったり、親の取り合いになって焼きもちをやいたりということが起きていたかも知れません。娘は里子に対して、どこか割り切ったところがあり、里子のイライラを誘う態度に面と向かって怒ったりする時もあるのですが、一緒にバトミントンをしたり、ゲームをしたり、私が怒っている時には上手にフォローしてくれます。その様子を見ていると自分を押し殺して無理をしているようには見えず、自然体で過ごし、里子を受け入れたことを割り切っているような印象を受けます。娘は、「里子を受け入れないなら受け入れなくても良かったが、受け入れたんだから今さら他の選択肢をいちいち考えても仕方がないでしょう。それと、急に下が出来てもどう扱ったらいいかとかわからなかったし。友達から聞いていた弟の話と同じで、本当ビックリしたわ」と話していました。娘は、自分の気持ちをスト

レートに表現してきました。里親をするかしないかの時も私に質問をして涙を流して訴えてきました。受験をしている今も情緒不安になりながら、気持ちを出しています。時には心配もしますが、気持ちを表現しながら自身の中を整理していくタイプのようです。里子は姉を見て、いつもうるさいと言いますが、姉の出し方を見ながら、そういう表現方法もあるのだと知ってくれればいいなと思います。

娘は、父母のどちらにも気持ちをぶつけているように見えます。受験生のストレスはかなり大きいようですが、学校での出来事や塾での先生との話もしてくるので、気持ちを落ち着かせる対象になっているようです。娘から「最近、扱い方が雑だよね」と叱られて、母と入浴することを拒むようになってきましたが、いろいろな話をしてくれるのは有り難いと感じます。母とのお出かけも所々にあり、娘と母の時もあれば、そこに里子が一緒の時もあります。里子が楽しめないので、3 人で出かけることは減りましたが、父も含めて 4 人になると男性と女性に分かれて散策をしています。あまり意識はしていませんでしたが、それぞれに親を独り占めする時間が出来ていたようです。

父は里子にとって特別な存在です。父の傍にいたがります。その父に対してもかわいい表現をできるわけではありません。この前も足にしもやけができて痒くて仕方がないというので、治し方をいろいろ調べて実行していたのですが、靴下を履かずにいるので、父が「靴下履きなさい。言うこと聞かずにまたしもやけになっても次は何もしないよ」と言うと、困るどころか「うーん、いいよ」と答えていました。両親揃って「・・・」と返す言葉が見つかりませんでした。悪気はないのでしょうが、予測した返答とかけ離れていることが多いです。しもやけになった時も「親の言う事を聞かないからなるんやで」と皆に言われ、「エへへ」と笑っていました。

1 年の生活を通して、里子はこの父と母はいなくならないで、何か気まずいことが起きても次の朝も機嫌悪く居続けて、この人達と仲直りしないと居心地が悪いということは、わかったようです。以前は、母から叱られると挑発するようなことをよく言っていたのですが、しまったと思った時は「アハハ」と笑ってごまかすようになりました。「はい」という返事はまだできませんが、笑って挑発を止めるという行動ができることは大きな成長だと感じています。里子も父にべったりではなく、友達と約束をして遊びに行ったり、部屋でモノ作りをする事時間も増え、家族それぞれが家の中で自分のしたいことをするようになってきました。

夫婦関係は相変わらず、私が怒っていることが多いですが、夫なりに考えを所々で表明して関係を修復しています。こうして改めて考えて見ると、家族間の関係性は、里子によって大きく揺らぎましたが、自分達のペースを取り戻してきているようです。新たな家族バランスの中で、子ども同士が競争相手になっていないことが大きいのかも知れません。里子との生活が 1 年以上経ち、新たな家族のリズムが出来てきたのではないかと感じます。今は、冷静に家族の動向を見ている私がいますが、それまでは自分自身も駄目な里母と里子に言われているような気がして、追いつめられていました。子どもを一人迎えるという事は、今までの家族のバランスが崩れることだと思います。そこからくる戸惑いが出てくることを支援者は意識をして、何が起きているのかの整理を里親と一緒にしていくことも支えに繋がると感じます。

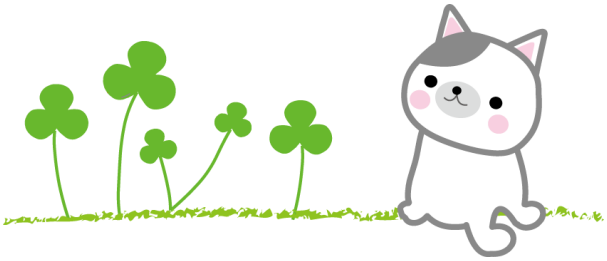
里親をしようとすると、一緒に暮らしている家族にも変化が起きますが、親戚等の周辺にも衝撃が走ります。里親自身が同居家族内の話し合いを重ねることはしやすいですが、周辺の人々に対しては、行政として児童相談所のワーカーが説明をする機会を作った方が、理解が進

むと思います。他の里親さんの話の中に葬式や法事の時は里子のショートステイをお願いすると耳にします。私達の場合も委託前に自分達で説明をすると、勝手なことをしていると言われました。違う立場の人が説明をする機会を作ることで、公の制度を担うことが伝われば、周りの人々の意識や印象が変わるのではないかと感じています。

終わりに

養育里親と支援者の両方の立場で話をして欲しいと依頼されることがありますが、支援者側の方に里親登録をしてから待っている事の辛さや実際に里親の立場になると、支援者の何気ない「その後、どうですか？何か困っていませんか？」の声掛けに評価されるという気持ちが出てくること等に驚かれます。私自身も支援者の立場も知っていますから、その方が評価しようというのではなく、困ったことがあったら言ってくださいねという気持ちを持っているのだろうと思いますが、不思議なものでほとんど反射的に言いにくくなります。「〇〇ちゃんが、夜なかなか寝ないと言っていましたが、最近はどうですか？」等、具体的な出来事から質問してもらうと、それについてはと答えやすくなります。

以前に、「できるだけ冷静に現状を見ていこうとしている坂口さんでも、気持ちが揺れるのですね」と感想を頂いたこともあります。頭の中でわかっていることでも、感情が伴うわけではないようです。「わかっちゃいるけど、できない未熟者」だと痛感しています。里親は、プライベートの中に子どもが登場するという混乱が多く起きていると感じます。知識と感情が混濁して自分の中をコントロールすることが難しくなります。感情を優先させると、子どもとの関係が上手く回らなくなる経験をしてきました。まずは、子どもを理解することからがスタートだと思います。里親をしようとする人は、それまでにかなりの葛藤を経験し、正義感が高い状態にあると思います。その人が、頑張ってしまうと子どもに情の押し付けをしてしまう結果になりやすいので、頑張りすぎないことを意識することを大事だと実感しています。支援者は、冷静にそして温かく里親家族を支える存在でいた欲しいと願っています。



周辺からの記憶 14

～2014 年度　日本コミュニティ心理学会・むつ～

村本邦子（立命館大学）

2017 年 2 月 11～12 日、熊本へ行ってきた。全国婦人相談員連絡協議会で、災害時緊急相談マニュアルを作成しようとしている。もともと熊本は私のフィールドで、十年来通ってきた場所だ。熊本地震を受けて、昨年 5 月、7 月と訪ね、5 月に行くことになっているが、時間を見つけて、間にもう一度行っておきたいと思っていたものだ。

馴染みの相談員 4 人が集まってくれた。相談現場は日常を取り戻しているが、新規受付ケースが増えている。地震の影響で住民票が移動していることも関係しているだろう。アルコールと暴力問題が増えている。夫による DV だけでなく、息子など成人した家族の暴力で、避難する場がないというケーが多い。東日本大震災 1 年後の仮設住宅で、成人した息子の暴力で警察が呼ばれても、手の施しようがないという悩みを聞いたことを思い出す。なぜか妊娠が増えているという話もあった。年齢、婚姻の有無などに関わらずということのようだが、相談現場に上がってくるという意味では、今後のフォローが必要になるケースだろう。

親子支援に関わっておられる方々の話も聞きたいと、人を介して、NPO 法人くまもとスローワーク・スクール代表の入江真之さんと、NPO 法人子育て応援おおきな木代表の木村由美子さんを益城に訪ねた。早く着いて周辺の様子を見ながらブラブラしていると、「益城四賢婦人生誕地」の看板が眼に入った。調べてみると、益城の矢嶋家は、「熊本の猛婦」「四賢婦人」と称され、近代日本における女子教育や婦人解放運動に尽力し、今日の男女共同参画社会の礎を築いた女性４人を輩出しているのだという。矢嶋楫子は、日本基督教婦人矯風会を設立し、婦人参政権、廃娼、禁酒の運動に尽力し、東京女子学院を創立した馴染みのある女性だ。記念館まで行ってみたが、被災して休館中だったが、偶然の出会いだ。入江さんと木村さんからは、被災直後の親子の様子や外部支援者の問題などについて聞くが、彼女たちは今、益城に民間の女性センターを建てるべく計画中ということで、一緒に構想を練る。四賢婦人の益城に女性センターなんてとワクワクするではないか。今後の展開が楽しみである。

日本コミュニティ心理学会

第 17 回大会シンポジウム

2014 年、日本コミュニティ心理学会第 17 回大会長を引き受けることになり、6 月 6 日～8 日、立命館大学にて大会を開催した。ちょうど十年前にも立命館で引き受け、被害者支援とコミュニティをテーマにしたが、今回は、コミュニティ・エンパワメントをテーマに、「東日本大震災後のコミュニティ・エンパワメント」のシンポジウムを企画した。シンポジストは、上山真知子さん（山形大学）、吉浜美恵子さん（ミシガン大学）、団士郎さん（立命館大学）、コメンテーターは、学会長の久田満さん（上智大学）。鞍馬山に写真を撮りに行って、ポスターも作った。

＜ソーシャル・キャピトルを活用した心理社会的支援＞

上山さんは、「ソーシャル・キャピトルを活用した心理社会的支援について」と題し、被災地に暮らし、支援される側として経験したことから考え学んできたことを語ってくれた。上山さん自身も、避難所に子どもの遊びコーナーを作り、「ケア宮城」という組織を立ち上げ、教員の支援などされている。東日本大震災発生直後から、心理の専門家が被災地に入り、いわゆる「心のケア」が開始されたが、PTSDモデルに偏りがちであることに違和感があった。被災者のほとんどすべては健康な人なのである。そんな折、プランジャパンという国際NGOとつながり、「心理社会的な支援」という考え方を知った。被災者の尊厳を守りながら、ニーズを聞き取り、地域の社会資源を活用して、被災者自らの力で困難を克服することができるように支援することを理念とする。

また、政治・社会学者である米国パデュー大学のダニエル・アルドリッチ氏との交流から、復興過程におけるSocial Capital（SC: 社会的関係資本）の有効性について学んだ。SCには、それぞれのコミュニティで維持されていた結束型、コミュニティ外からのボランティアなどによる橋渡し型、行政によるまちづくり政策にみられるような連結型があるが、SCを利用し地域を活性化することが復興の力になる。被災した直後はそれまでのコミュニティがすぐには機能できない状態にあって、結束によって乗り越えたとしても、その結束が強すぎる場合には、時として、支援を拒んだり、内部で対立が生じたりすることもある。橋渡し型は、一部欠損

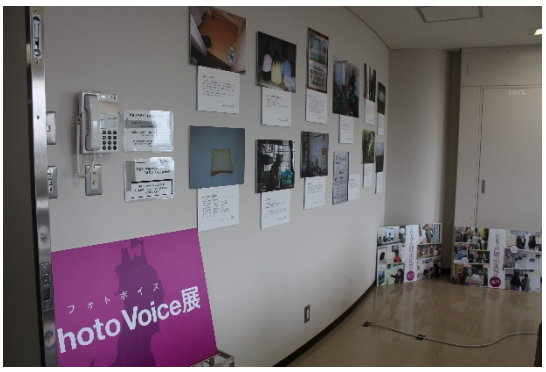
したビルに足場を組み、補修工事をしながら復旧させる働きをするようなものである。コミュニティの持ち味を生かしながら、人とコミュニティを支えるために、そこに暮らす人たちに違和感のない場や装置を持ち込んで支援することの有効性を実感したということだった。

＜女性たちのフォトボイス＞

吉浜さんは、社会福祉の立場から、「被災した女性たちのフォトボイス」というタイトルで話してくれた。フォトボイスとは、社会や地域の課題を掘り起こし、その解決のために広く用いられている参加型の手法で、とくに社会の中で脆弱な立場にある者の権利や福祉の向上をめざした調査研究や社会的アクションに多用されている。実は、学会プレ企画として、前日には、吉浜さんによるフォトボイスのワークショップをやり、これがかなり面白かった。

フォトボイス・プロジェクトは、2011年6月にスタートした。地元NGOとの協働で、郡山、仙台、宮古、福島にグループが立ち上がった。参加者を募集し、十分なオリエンテーションの後、それぞれが撮った写真をもとに語り合うことを繰り返すなかで、声（メッセージ）が浮かび上がってくる。たとえば、避難所での「偏った食事」「命をつないだ食パン」「街がごみ置き場になってしまった」「開けられない冷蔵庫」「猫の孤独」「鎮魂の浜」などなど。復興の意味について問いかける写真、復興によって作られるものや壊されるものの写真、オリンピック招致に対しての問いかけや怒りも表現された。

エコロジー・レベルを通して、フォトボイス・プロジェクトで撮られ語られた写真や声を見ると、これまで社会より大きなnature（自然）というレベルをあまり考えていなかったということに気づいたという。発足から3年がたち、フォトボイス・プロジェクトをNPO法人化したところだそうだ。学会場でフォトボイスの展示も行った。



＜家族漫画＞

団さんからは、「東日本・家族応援プロジェクト」と家族漫画展。詳細はすでに書いてきた話だから詳細は省略するが、どんなふうに家族漫画展が始まり、続いてきたかということを話した。

私達は皆、沢山の物語の束として今を生きている。多くの人々と共有する物語から、誰にも明かすことなく胸に秘めた物語まで、様々な記憶と共に人生を過ごす。ところが、余りにも大きな厄災に見舞われると、ささやかに大切にしてきた物語は吹き飛ばされてしまう。回復しがたいとも思われる深い悲劇で私達が一色に染められてしまう。

だから回復の一つは、共通の大きな物語に絡め取られた人達が、何処かに押しやら

れてしまった個人の物語を取り戻すことではないか。被災した街々もまた、被災地という一括りのカテゴリーから、固有名詞を取り戻す事なのではないか。その一助に、誰かの小さな物語が役目を果たすのではないかと考えた。

シンポでは「花嫁の父」をスライドショーにして見せ、学会会場にも、家族漫画パネルを設置した。

＜コメント＞

学会長の久田さんは、「御用聞き」として福島に出向いている自身の活動ともからめながら、それぞれの企画すべてがどこか楽しそうで持続的であること、現地の地理と歴史が大事であること、エコロジカルな視点から、時間の変化に伴って個人がどう変わるのか、家族がどう変わるのか、コミュニティがどう変わるのか、さらにそれを取り巻く文化、社会、イデオロギーがどう変わるのかということを観察し、できる範囲の小さなことをひとつひとつ付け加えながら細く長くやっていくところに何か新しい価値が見出せるのではないか。

漫画展は、コミュニカティブ・アクション（対話というアクション）であり、来場した人が漫画を見ても見なくても、そこにコミュニカティブ・スペース（対話する場）を作り出している。漫画と来場者、来場者同志に対話が生まれ、そこから何かが生まれるのだろうとコメントしてくれた。

＜星野命先生の遺言＞

懇親会において、名誉会員だった故星野命先生が挨拶のなかで、このシンポジウムについて言及し、期待を語ってくださった。

三人の話題提供者がそれぞれユニークで、また蘊蓄を傾けた内容を語ってくださったことに、大会長の「人選の妙」を感じとりました。・・・

・・・これからの第二世代、第三世代にあたる会員の方々に私が期待し、お願いしたいことは、現代心理学、社会福祉学、教育学等の分野に所属しておられるとしても、「コミュニティ・アプローチ」と「エコロジカル・アプローチ」の重要性と実効性を活かして、大自然をバックにしつつ、個人・家族・組織・地域社会のすべてを包括した実践と

研究を推進して頂きたいことです。

本大会のシンポジウム、ワークショップでは、新らしく創造的な研究法がいくつも紹介され、「フォトボイス」、「ソーシャル・キャピトル、とくに橋渡し法」、「物語始める人の発見と聴き取り」、「家族漫画パネル」など、私にとって活用をはかることは、ゾクゾクする体験になりそうですが、残念なことに「時間」がありません。不可能なこととして「あきら」目ています。

星野命先生からは、後日、この時の挨拶原稿メモを手書きで清書したものを送って頂いた。学会には金沢から駆けつけ、老体で弱っているのだとソファーに横になって休みながらも、熱心に参加してくださった。高齢になって頭は冴えて仕方がないのだが体がついてこず、飲み込むことが難しいとおっしゃっていた。翌年の学会にはもう姿を見せることなく 2015 年 11 月 7 日肺炎のため 88 歳でご逝去された。これを星野先生の遺言として、私たちの方向が違っていないことを確認しつつ、精進したいと思う。

星野命先生と　2014.6.7

4 年目のむつ

＜準備＞

早 4 年目のプロジェクトである。昨年、弘前に移動になってしまった杉浦裕子さんが、4 月 1 日付で、むつ児童相談所の課長として戻ってきたと知らされた。公民館長が図書館長になり、新しい公民館長はむつ市長とも親しいということで、地元のプロジェクト理解者が着実に増えている。5 月には第 1 回プロジェクト実行委員会が開催され、初回は渋々参加していた人たちも、継続されて 4 回目になることから 10 年企画の意味を理解し、「今から次年度のことも踏まえたＰＲせねば」「内容が良いのはアンケートの結果から明らかで、こんな良いものを殆どの市民が知らないことを何とかせねば」との声が挙がっていたと知らせてもらった。

第 2 回実行委員会は 6 月ということで、立命館の方でも M1 に向けてプレゼンし、説明会を含めた準備のための第 1 回研究会を 6 月に設定した。5 月 20 日、事前準備の

ため、むつ市の HP を覗いていたら、前日、むつ市長が急逝したというニュースが目に飛び込んできた。驚いて HP を繰ってみたが、その前の市長も若くに急逝していた。合わせて、市長らの苦闘と重圧をうかがわせるむつの歴史を知った。何とも言葉が出ない。

杉浦さんからは、「むつ市長が５月１９日、会合中に倒れて逝去。６２歳でした。そんなこんなで、市長選でもめています。元気であれば、今年はプロジェクトに顔を出していただける予定でしたが」とメールがあった。残念だ。結果として、宮下順一郎前市長の息子である宮下宗一郎氏が市長を引き継いだ。当時、宗一郎氏は外務省へ出向、在ニューヨーク日本国総領事館で政務部・経済部領事をされていた。このことがまた後のご縁へとつながることになる。

＜フィールドワーク＞

院生たちは陸路で下北へ。教員 3 名はいつものように夏休みを利用して、前乗りで青森巡り。昨年出会った感動の「嶽きみ」（トウモロコシ）を求めて岩木山へ。立て続けに何本も食べすぎて、お腹をこわした人もいた。

南八甲田山麓に広がる蔦の森で蔦沼巡りをして、開湯 400 年を誇る日本三秘湯「谷地温泉」へ。古びた木造の山の中の一軒宿。

温泉はもちろん豊かなフィールドワークの場だ。谷内温泉にて一緒になった青森市の年配女性とあれこれ話す。この女性、2011年から先月まで、毎月、岩手の避難所に慰問に行っていたとのこと。婦人会とか町内会とか組織立った慰問のようだったが、はっきりとはわからず。瓶や紙パックで花器を作って持って行ったり、作り方を教えたりしたらしい。

高齢者対象で、顔なじみになると、行くたびにとても喜んでくれた。花器にあまりにたくさんの花を入れるので、「入れすぎでしょう」と言うと、一本ずつこれは誰々の花・・と名前を言っていく。亡くなった方なのか。

弘前医大の先生も一緒に行ったことがあった。健康教室を開いて、「薬飲んでいる人？」と尋ね、手を挙げた男性に詳細を聞き、「どうせ薬飲んでも血圧高いんだし、80年生きたらもうけもんだと思って、そんなに一所懸命薬飲まなくてもいいよ」と言ったそうだ。ナイスな先生だ。

彼女は、下風呂温泉の話題になると、「下北には核燃料貯蔵があるからね」と声を潜めたが、翌日は大間まで足を延ばした後、下風呂に向かう。内湯もあるが、せっかくなので、公衆浴場、大湯と新湯に行く。大湯の方は、ぬるいお湯と熱いお湯の二つの湯船がある。ぬるい方もかなり熱いが、こちらは水を入れていいのだと地元の方が気遣ってくれる。

湯船からふと眼を上げると、30 代くらいの女性の背中に大きく見事な龍の刺青があった。こんなのを見るのは、映画を除けば生まれて初めてだ。このあたりの浴場では禁じられていないのだろうか。刺青の女性が連れらしき女性の背中を流していたが、何だかごく自然な光景に見えた。

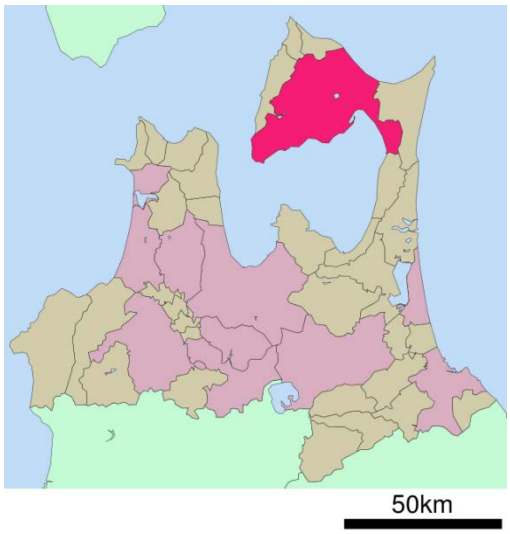
後で聞いた話では、このあたりには大間原発労働者用の宿があり、やくざ関係の人が増えたのだそうだ。『ヤクザと原発』(鈴木智彦著、文春文庫) は興味深かったが、同じ地平の話なのだろう。

<9 月 4 日レセプション>

例年通り恐山で身を清め、レセプションに向かう。むつグランドホテルのレセプションでは、児童相談所所長を筆頭にスタッフの皆さん、青森県 PTA 連合会会長やむつ市中央公民館館長なども来てくださっていた。今年はどういうわけか (下風呂の話をしたからか？)、原発関連の話がはずんだ。

名刺にある下北半島の地図を見ながら、むつ市でないところ、つまり下北郡が飛び地になっている理由を教えてもらう。右から東通村、風間浦村 (下風呂温泉のあるとこ

ろ)、大間町（おおままち)、佐井村。ちなみに、下の方（上北郡）には、野辺地町（のへじまち）、七戸町（しちのへまち）、六戸町（ろくのへまち)、横浜町(よこはままち)、東北町（とうほくまち）、六ヶ所村（ろっかしょむら）、おいらせ町（おいらせちょう）がある。むつ市に統合されなかったところというのは、原発関連のお金が入るところである。郡として残すために、下風呂はじめ原発関連労働の宿を作ってお金を落とすということのようだ。



子どもの頃に見聞きした六ヶ所村の話も出る。「私たちみんなの問題ですよね・・」と言うと、「心の中でいろいろ思っていても言えないし、結局はしょうがない。若い人たちは何も考えていないかもしれない」「うちの息子、考えてんのかな？」という声も上がっていた。タクシーの運転手さんも、「暮らしていると、考えても仕方ないし、考えてられない」と言っていたが、それをテーマの中心に置くことは困難なのだろう。

その後、むつ新市長とむちゅらんの話で盛り上がる。まだ若い市長は希望の星のようだ。地熱発電にも力を入れると言っていた。ＰＴＡ連合会会長とも話すが、ワークショップ形式のものは珍しいので、皆に経験して欲しい。このあたりでは、都会と違って、ＰＴＡと言えば男の会で、母親会というのが別にある。男たちが一緒にお酒を飲む。男尊女卑というのか、男女分離の傾向がまだ強く残っているという話だった。なるほど。

＜9月5日　支援者支援セミナー・お父さん応援セミナー＞

今年の支援者支援セミナーは市役所で。天気が良く、移動の際に釜臥山のレーダーがよく見えた。市役所は想像を絶する大きな平屋で、駐車場一角には僻地医療のヘリポートがある。それまで地震で壊れた３階を取り壊した役所を使ってきたが、老朽化で建て替えができず、東北電力が買い取ったダイエー跡なのだそうだ。

中には、ジオパーク構想や下北の自然を推し出すパンフレットとともに、「原子力の安定確保に向けた現場力向上のための人材育成（青森原燃テクノロジーセンター)」、「原子力発電施設等研修（青森原燃テクノロジーセンター)」といったポスターや「原子力文化」「ひろば」といった原子力に関する雑誌が置いてあった。

いつものように、中村さんと一緒に、ワークショップ形式で事例検討を行った。60 名の参加者を小グループに分け、むつの方々から提供してもらった事例をもとに、家族の強みに着目した支援、専門家に頼るだけでなく地域の力を活かす支援を考えてみた。

最初は事例のあら捜しをしていた参加者も、グループで話し合うなかで、視野が広がり、全体で知恵を共有するとさらに大きな力になっていった。また、「虐待は児相や専門家の仕事」と言っていた人たちも、地域でできることがたくさんあるということに眼を向けることができたように思う。

毎年、セミナー参加者の半分は民生委員なので、その人たちがエンパワーされたら地域はもっとパワフルになるはずである。

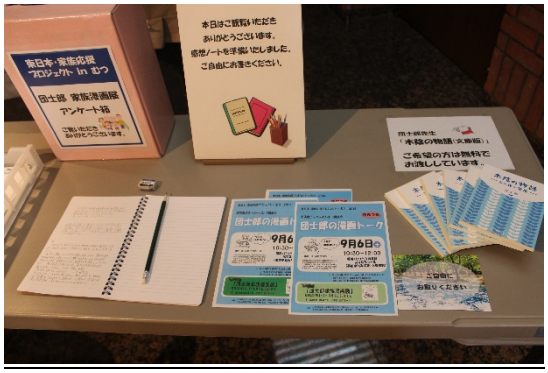
夜は、中央公民館に移動して、中村さんによる「お父さん応援セミナー」。「女人禁制」なので、私たちは中に入れないが、どんな様子か気になってガラス越しに覗いてみる。30 名の参加者で、そのうち 10 名がリピーターだったとのこと、少しずつ定着してきたかなと思う。

今回は、『臨地の対人援助学』出版企画のために、プロジェクトについて地元の方々の声を聴くということもやってみたが、むつのみなさんが、忙しい日常のなかで、少しでも多くの人たちに届けるにはどうしたらいいのかと知恵を絞りながら、１年かけて準備をしてくださっていることが具体的によくわかり、大変ありがたく、大きな力をもらった。

＜9月6日　漫画展・マンガトーク＞

最終日はむつ市立図書館で、漫画トーク。きのうは漫画展に大間の議員を名乗る人がやってきて、大々的に原発 PR をして、「明日もまた来る」と言って帰ったという報告を受けていたので、少し緊張するが、結局、その人は現れなかった。どんなことをしているか見に来たのだろうか。原発のことは考えるが、反対運動や賛成運動を目的にしているわけではない。

漫画展の感想ノートやアンケートを見ると、4 年かけて蓄積してきた力を感じる。今年初めて出会ったという人もいれば、3 回目、4 回目という人もいる。「今年も来てくれたと思いながら足を運びました。10 年のプロジェクトですが、毎年自分の 1 年と思いながら漫画展を見ています」という声もあれば、「はじめて参加し、色々な意見を聞き合えたことは大変勉強になりました。私が先生のご本と出会ったのは、2011 年初冬に岩手県遠野市にあるボランティアセンターに何度か足を運んだ時、『木陰の物語－3.11 への記憶―』でした。そこから避難所を訪ねていた折に冊子の中のことばがジワジワと染み込んできて少しずつ、そこからあったかいものが広がっていく不思議な状況を体感したのを覚えています」という声もあった。いろんな形で漫画展や冊子の力が拡がっているのだ。



むつ市長も駆けつけ、反省会にまで参加してくれた。これからの展開が楽しみである。

続く

病児保育奮闘記

(13)

子どもサポート H&K
大石　仁美

世代交代はむつかしい

ジイジイはどこへ～

ひさしぶりにやってきたＳくん。「ねぇ、おばあちゃん、なぜジイジイはこないの？どうしてなの？」と、神妙な顔で訊いてきます。

「ジイジイはね、年をとって疲れたから、ここの仕事はお休みして、今は他のお仕事をしているのよ。」

「ふう～ん。なんでかなぁ」

「会いたいの？」

「うん、会いたい。」

「じゃ、今日は家にいると思うから、電話してみようね。」

ジイジイとＳくんは、なにやら長話。そして満足した様子で電話を切りました。

なんども利用しているうちに、すっかり馴染んで、実のおじいちゃん、おばあちゃんのように思ってくれている子がけっこういて、私たちのほうも、滅多に来ない孫よりよく来てくれるこの子達の方がずっと可愛いと思えるのです。

実をいうとジイジイこと小川ですが、８０歳になるのを目前にして、保育の世界から、大好きな歌の世界へシフトしてもらったのです。

創設時からともに働き、喜びも苦労も共にしてきた仲なので、私も悩み、彼の方も思い入れが強いぶん、こころ残りが大きかったのですが、やはり決断が必要でした。

人にあとを譲るときには、淋しさと同時に様々な葛藤が伴います。息子をスタッフに入れた時から、引き際を模索しながらも、想像以上にトラブルが表出し、二人のやり取りを見聞きしながら間に入って調整役をするのも痛みを伴う仕事でした。

老化現象がつぎつぎと

年を重ねるたびに、心身共に若い時と同じようにはいかないもどかしさを感じます。

私個人でいうと、同時進行での複数の仕事が出来なくなりました。なにも難しい仕事ではありません。例えば、台所で煮物をしながら、掃除をす

るとか、　料理も、焼き物と、揚げ物や、蒸し物を同時にするとか、単純なことですが、失敗をすることが多くなりました。パソコンなどをいじりだしたらもうダメです。タイマーをかけてベルの音に助けてもらわないと、焦がしてしまい、すべてやりなおし。子ども達の食事も、年齢や病状にあわせて、あるいは嗜好にも合わせて、何品か用意する必要があるのですが、焦らず、ひとつひとつ片づけていく方法に切り替えざるを得ませんでした。それで以前より時間がかかるようになりました。食事作りは大事な仕事。これ無しでは、この仕事は立ち行きません。「私がやらねば誰がやる」まぁそんな感じで頑張っているのです。

もうひとつ、老化を意識するのは、目の前にあるものが見えなくなったということです。探してもみつからない。でも後で探して、同じ場所から見つかるのですから情けない話です。目が悪くなったわけでも視野が狭くなったからでもなく、脳がそこにあるということを認識しないのです。ああ、こわっ。

さらに物忘れは、まるで水がちょろちょろと排水管に流れるごとく消えていきます。消えないうちにサッとメモを取る。そうしないと前に進みません。

そして悪いことに、やらなければいけないことが面白いくらい頭の中を駆け巡るのに、やろうとすると億劫になるのです。

なんとこれが加齢の成せる業なのか！

子どもたちが可愛いから続けてこられたし、使命感もある。でもしんどいなあと思うことも多々ある昨今です。それでも、舞台から降りることはできない！誰かに助けてほしいと思うことはあっても、誰かに丸投げしてもいいと頭をかすめることがあっても、どこかで、死ぬまで続けねばと思っている私がいます。息子が跡を継いだことで逃げられない宿命を背負ってしまったことも一つですが、いくら考えても、零細企業にとってこれは私にしか出来ない仕事なのです。さらに、高齢になっても趣味だけで生きるなんて、そんなことは怖くて出来ません。確固たる自分の居場所がここにあるからです。

ジイジイもきっとおなじように思っていたでしょう。

ジイジイが保育の世界を引退する際は、気持ちの整理にかなり時間が必要でした。淋しさが体中から染み出ていて、気の毒なくらいでした。

それでもスーッと受け入れていけたのは、もともと素直な人柄だったことと、新しい居場所が見つかったことが大きいと思います。

主に看護と飯炊き婆さんの私と違って、保育は体力仕事。むずかる子を抱っこするのはかなりしんどい仕事です。しかも保育室は二階にあるので、受け入れ時は、狭くて急な階段を抱きかかえて上って行かなければなりません。

おむつ替えも大変な仕事。嫌がる子の、気を上手くそらしながら、きれいに替えてやらなければなりません。ウンチがポトリとオムツから落ちたでは困ります。おしりも綺麗に拭いておかないとかぶれます。「よく見えなかった」では保育士はもう限界です。それでも、そうした部分は若い人にしてもらい、ジイジイには得意なことをしてもらうことでそれなりに上手くまわっておりました。

乳児の手遊びや、幼児と一緒にお歌をうたったり、紙芝居を楽しんだり。さすが年季が入っているだけあって、聞き惚れるほどでした。ジイジイも子どもとの触れ合いに、生きがいを感じ、癒されていたと思います。

息子がスタッフに加わって、大いに喜んでいたのですが、ジェネレーションギャップはやはり大きく、頭では理解しても、なかなか素直に許容できないことが多く、双方にストレスがたまっていることが傍目にもよくわかるようになりました。

例えば保育に関する考え方の違いです。

息子はただ今子育て真っ最中。家庭では甘いパパさんです。食事の時、なかなか食べようとしない子に「いいよ、いいよ。好きなのだけお食べ。無理に食べなくていいよ」と言うのを聞いて、「さあ、美味しいよ。食べてごらん。というのが本当だろう。なんだ、あの言葉づかいは！」と陰でぶつぶつ。

だっこ！だっこ！と泣きわめく子がいたら、ずっと抱っこして一日いることもあります。子どもは連鎖反応をおこすので、放っておくと次々泣き出して大変なことになるのです。また、眠っている子を起こさないような気遣いも必要です。ところがジイジイは「泣くからと言って一人の子をずっと抱っこしていたら他の子はどうなるんだい。気に入らないね。」とまあこんな具合。

見ていないようでじっと見ているのですね。それも監視に近い見方です。

いいの、いいの。ここは教育機関じゃないのよ。病気の子なの。その子の要求に応じて甘やかしてやって。このように私はどうしても息子の味方をしてしまいます。
子どもは抱っこされていると安心するのです。月齢によってはずーと抱っこも仕方がありません。そのことはジイジイも分かっているはずなのに、なぜかプラス評価ができないのです。

食事の前、午睡の前等におもちゃの片付けができてない！　（少々散らかっていてもいいのに）
業務日誌の記入が不十分！（ジイジイがやるからでしょ。任せたらやらなきゃいいのよ）

こんな感じで、自分の保育能力が落ちていることを自覚しながらも、若者のすることがいちいち気に入らない。これ、年寄根性ですよね。
実をいうと、息子は息子で、ジイジイの仕事を取ってしまってはいけないと気を遣っていたのです。すべてやらないで残しておく。ところが、几帳面すぎるジイジイはそれを「いい加減さ」と受け止めてしまったのです。自分たちが築いて来たものを、大事にしてきた理念をきちんと引き継いでほしいという強い思いと、自分の居場所が取られてしまうという淋しさとやっかみが同時に共存していて「いい加減さ」が許せないジイジイなのでした。

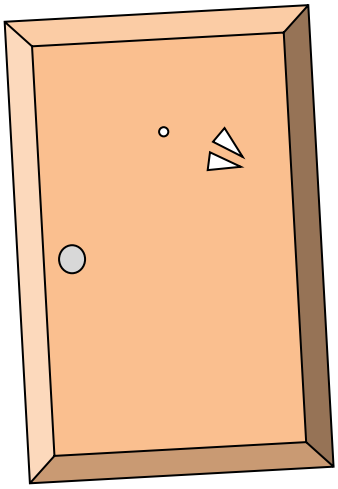
ある日、お客さんの前で大声で怒鳴りつけるという事態が発生！あっ、これはもう限界だ。そう感じた私は、どうしたものか、この硬直状態をほぐすには、なんとか流れを変えなくてはという思いに至りました。

居場所が大事！

「そうだ、ジイジイには居場所があるじゃないか！」ジイジイは週二回、施設などに歌の出前ボランティアに行っていました。歌が大好きなのですから、そちらの方にもっと力を入れてもらえばいいのではないか。そのことを提案すると、「えっ？いいの？そんな我儘させてもらっても」と意外な表情。「NPO 法人はお金がないから、実は事務局も大変らしい。」

そうして事務局のお手伝いも始めたところ、大変重宝されて、居心地がいいらしく、喜々として通っています。自らを隙間ちゃんと命名。折込作業やら封筒貼り、イベントの椅子並べから受付まで、スタッフの仕事の隙間を埋めてあげるから、隙間ちゃん！！隙間ちゃんは全くの好々爺になりました。そして嬉しいことに、「外ばかりじゃなく、家でも隙間ちゃんしなくてはね。」と茶碗洗い、ゴミだし、生協の搬入、食品の整理、等々、雑用を喜んでしてくれるようになりました。

一方、息子は朝７時過ぎから最終の１９時まで保育をしながら、室内の掃除、各種書類の整理、関係機関への報告、会計など一人頑張ってくれています。頼もしい限りの仕事ぶりです。



おじゃまします

～精神科訪問看護日記～

（2）

高垣愉佳

統合失調症といえば

精神科の訪問看護を受けている患者さんは、双極性障害やいわゆる大うつ病の方、強迫性障害の患者さんもおられますが､圧倒的に統合失調症の方が多いです。昔は分裂病と呼ばれていた病名が統合失調症に変わったのが 2002 年､この 15 年で新しい病名は周知されたように感じます。ですが、病名が変わっても、その病気の人自体に対するイメージの変化は少し遅れているように感じます｡そうです。精神医学と名のつくような授業で習う内容は、統合失調症といえば、陽性症状と陰性症状があり、誰でも知っていそうな最も代表的な陽性症状は幻聴や妄想で、陰性症状の代表は無関心・活動低下・感情鈍磨といったところでしょうか。これまで積み重ねられて来た臨床での観察や研究から、このような症状が特徴として挙げられるということが分かり、整理されて知識として伝えられているのはすごい事だと思います。一方で、こうした知識をもっているが為に、時にはそれがバイアス（色眼鏡）になってしまい、事実を見落としてしまうということも時には起こり得ます。今回はそんなお話しをしたいと思います。

妄想ではありません

訪問看護に出ていないときには、事務所内で記録を書いたり､計画を作ったり、他機関との連絡を取ったりという事務作業をします。事務所にはひっきりなしに利用者さんから電話がかかってくるけれど、基本的には事務員さんが対応してくれます。そうでないと、あまりにも電話が多くておちおち記録も書いていられない状態になるからです。その日も立て続けに事務所の電話が鳴り、事務員さん達が対応してくれていました。事務員さんが「大丈夫ですよ。揺れてないですよ。体感妄想かなぁ？」と言っているのが聞こえてきました。また別の事務員さんも「揺れてないですよ｡」と言っていいます。

ん？ちょっと待てよ。ということは、何人もの利用者さんから「揺れた。恐い。」というような内容の電話がかかってきているのだな。と思い、ネットでヤフーニュースを見てみました。揺れていました。震度一ですが。確かに揺れていたようです。「今ネットのニュースで確認したんですけど、揺れてたみたいですね。震度一ですけど。」と事務員さんに伝えると、「え～！そうなんや。感じひんかったよね～。体感妄想とか言っちゃった。」と一同びっくり。確かに私も揺れを感じなかったのだけど、利用者さん達は感じてたのですね。震度一の揺れで電話をしてくるほど不安にならなくてもいいような気はしますが、自分達が感じなかったからと言って何でも妄想で片付けてはいけないなと肝に銘じる出来事でした。

陰性症状ではありません

統合失調症の松山正樹さんは 50 代。一人暮らしをされています。担当のナース曰く、陰性症状がひどくて、何もしたがらない、音楽鑑賞が趣味でオーディオセットなどには凝っておられるので、訪問時に図書館などに一緒に外出して CD レンタル等を促してみたけれども、「趣味が合わない」とかうまく言い訳をして次からは行きたがらないので、一度見に行って見て欲しい。ということで、同行訪問することになった。インテーク時の情報によると、松山正樹さんは両親共に医者の家庭で生まれ育ち、統合失調症を発病するまでは勉強も良く出来たようでした。

訪問すると、細い身体にかなり大き目のお洋服を着た正樹さんが玄関で出迎えてくれました。まるでハンガーにお洋服が吊るしてあるような感じを受けました。まずは、灯油を買いたいということで、灯油を入れるプラスチックボトルと持って、一緒に灯油を買いに行きました。重いものを運ぶのもやる気が無いのか、自分では運ばないという情報を得ていたので、いつもしてもらっているように「これ持って」と言わんばかりに、無言で灯油でいっぱいになったボトルを私の方に差し出した正樹さんに言ってみました。「え？私が持つんですか？私、見てもらったら分かると思うんですけど、松山さんより更に細いし小さいし、これ運ぶのはちょっと難しいなぁ～。松山さん、自分で運ぶの無理そうですか？」と。「無理ではないかもしれんけど、普段は持ってないんで。。。」と持ちたくないなぁ～、持って欲しいな～という顔をしながら言われます。「う～ん、どうしましょうね。」とこちらもちょっと困った顔をすると、「まぁ、何とか持ってみますわ。」と灯油の入ったボトルを持って 2 階の自室まで無事に運ばれました。

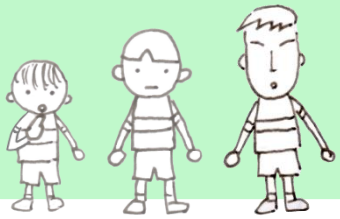
お部屋は訪問を受けている方の中では比較的綺麗に片付いているお部屋で、机とテレビとオーディオセットと大量の CD しか無いという雰囲気でした。「立派なオーディオセットですね～。音楽お好きなんですか？」と尋ねると、気力なく「はい。まあ。」という返事が返ってきました。担当のナースが「こないだ図書館に CD 借りに言ったんですよね。今日はどうします？また言ってみますか？」と外出を促しましたが、「今日は、いいです。」

とまた気力の無い返事です。「しかし、CD いっぱいありますよね～。図書館ではどんなのを借りられたのですか？聞いてみてどうでした。」と尋ねると、「××とΔΔを借りたんですけど、趣味が合いませんでした。」と。「はぁ～、趣味が合わなかったんですか。松山さんはどんな音楽がお好きなんですか？せっかく寄せていただいたんですし、どれかお勧めの CD 聞かせてくださいよ。」と厚かましく頼んでみました。「ああ、いいですよ。そうやな。これかな？こっちの方がいいかな？」といくつかの CD の中から２枚を選んできかせてくださいました。しばらく一緒に音楽を聞いて、「間違ってたらごめんなさいね。もしかして、８０年代のヨーロピアン系がお好きですか？しかもちょっとジャズとかフュージョンとかでアレンジされてる系の？」と、洋楽好きにしか分からないような質問をしてみました。その瞬間、正樹さんの瞳が輝き始めて、「洋楽分かるんですね。いや、こんな訪問看護師さん始めてです。実はねこれとこれもすごくいいんですよ。」と訪問時間いっぱいまで、次から次へとお勧め曲をかけて聞かせてくださって、帰り際にはアパートの下まで来て笑顔で手を振って見送ってくださいました。

帰りの車の中で担当ナースと話しました。「あれは陰性症状じゃないと思います。ご本人がおっしゃる通り、本当に趣味が合わないだけだと思いますよ。図書館とかに置いてあるような万人受けしそうな音楽は本当にお好きじゃないしつまらないんだと思います、話し通じるって思った瞬間からすごく積極的にあれこれ聞かせてくれたり教えてくださってたでしょう。本当に陰性症状だったら、あんないい笑顔にならないし、てきぱき CD 選んではかけて説明してとか出来ないとおもうんですよね。」と。

何もしない為の言い訳や口実を使う人も確かにいるので、患者さんのいう事を百パーセント鵜呑みにすることはもちろん出来ないのですが、こちらの思い込みでラベリングしてしまうと間違うこともあります。患者さんが何かを言ったら、興味を持って具体的にお話を伺ってみることで、こちらの思い込みだったということが分かることもあるという例でした。今はもう無くなってしまいましたが、ヴァージンレコードのような輸入 CD メインのお店が近くにあれば、多分正樹さんは喜んで、あししげく通って外出されるのではないかなぁ？とおもいます。

知的発達障害の家族の日々10



大谷　多加志

内と外

ある施設でのやりとり　その①

母　　親『この頃、家に帰ってからすごく不機嫌で…。下手に声をかけると余計に荒れるのでそっとしておくようにしているのですが、そちらの様子で何かお気づきのことはありませんか？』

施設職員『施設の方では、いつも通り真面目に仕事をしていて、休み時間も友達としゃべったり、ゲームをしたりで、特に機嫌が悪い様子はないですけど…。』

ある施設でのやりとり　その②

施設職員『この頃何かずっとイライラした様子で、友達に怒鳴ったり、手を出しそうになったりするので、周りの子も怖がってしまって。今は別室で作業してもらうようにしているのですが、何かお家の方で最近変わったこととか、お気づきのことはないでしょうか？』

母　　親『家ではいつも通り落ち着いています。ただ〇〇くんが邪魔をするとか、〇〇先生に怒られた、というようなことを言っていることがあるので、施設の方で何かあったのかなとは思っていたのですけど…』

同じようなやりとりの経験がある方も少なくないのではないでしょうか。

このような場合、落ち着いている姿しか見ていない立場の人は、別の場で起こっていることに対しての緊迫感を持ちにくく、協働して事態に対処するという関係を構築することが難しくなりやすいように思います。

このように場面によって見せる姿が違うというのは誰しもにあることですが、障害をもつ人の場合、それがやや無自覚的に行われる場合があるかもしれません。

弟は、昔から学校では優等生でした（遅刻は常習犯なので、登校するまでは別ですが）。家での横柄な姿を知っている家族としては、中学校では先生に対して「はい！」と背筋を伸ばして返事をしている姿を、やや違和感を持ってみていました。先生は、決して厳しいとか、怖そうとかいうタイプの方ではなく、非常に温和な方でした。

基本的に、小学校の頃の方が、学校での適応はよくなかったように思います。学校に行きたがらなかったり、途中で帰ろうとしたり、先生の手を焼かせていました。一方で、家と学校とで、それほど姿に差を感じませんでした。

中学校や支援学校の高等部にいたころは、学校での適応は格段によくなっていましたが、家では今一つ抑制が効かないというか、自分の思いを通すことが多くなっていました。そんな弟に対して、両親は『まあ、学校で頑張ってるから…』という理由で、なんとなく合わせるようにしていたように思います。

このように内と外とで振る舞いが違うことに、自覚があったかどうかという点は、実は非常に重要なことだったのではないかと思います。『愚痴』もそうですが、自分の思ったことを思ったように話すことは、感情安定化の作用を持ちます。それは、単に“発散”という意味もありますが、自分でしゃべっているうちに自分の考えや感情が再確認される“自己明確化”という部分もあります。相手に対して怒って愚痴っていたつもりが、しゃべっているうちに自分の至らなさに腹が立っていることに気づいたり、相手が取った行動や態度の背景にも気がついて仕方ないなぁと気持ちを収めたり、というように、

意識的なプロセスの中で、外でのストレスが消化されていくこともあります。ストレスとそれに対する反応が無自覚的に生じている場合、それは単なる“発散”にとどまり、“自己明確化”のレベルでは作用しにくいのではないかと思うのです。

弟は、家での不適応状態がひどくなったことで、家で暮らせなくなっていました。そして、家での不適応の根っこには、家が単なる“発散”の場になってしまったことがあるように思うのです。障害を持つ家族がいる家庭で、時々聞こえてくる『外では頑張ってるから・・・』という言葉。我が家の個別的な事情に引っ張られ過ぎているのかもしれませんが、“仕方ない”では済まされないものを含んでいるように思えてしまうのです。

10 回に渡って連載してきましたが、今回でいったん区切りにすることにしました。ひとまず連載開始時点で書きたいと思っていたことは一通り書けたというのが、理由の１つです。また、一時期は落ち着きかけていた弟の生活が、再び不安定になってきたことも、影響しているかもしれません。

連載の中で、様々なエピソードについて書いているうちに、思いがけずその時の出来事の細部を思い出すことがありました。これまでを振り返り、これからを考える１つの機会になっていたように思います。連載後ももちろん続く、彼との家族としてのこれからを、また１つずつ考えていきたいと思っています。

対人支援点描（９）

「このごろの幼稚園の風景①」

小林　茂（臨床心理士/牧師）

1. はじめに

2013 年に幼稚園の園長を引き受けてから 4 年が過ぎた。4 年といっても最初の 3 年間は、仕事の業務の中心が福祉事業所ということもあり、週 1 ～ 2 日程度の名ばかり責任者の状態であった。運駅会議を行い、日誌、出納管理といった業務が中心で直接保育にかかわる機会がなく過ぎた。しかし、昨年度より福祉事業所の業務をリストラして、ほぼ毎日浦河町からえりも町に車を走らせて顔を出すようになった。

幼稚園のことは、わかっていたようで、やはり毎日顔を出すようになると、個々の子どもたちとのかかわりの密度が変わってくる。それぞれの育ちの変化が見て取れる。いわゆる定型発達の子どもたちの集団を観ることから多くを教えられる。また、小さくても、そこは人であるので、一人ひとりの交流が楽しい。

あまり正常異常、健常障害といった言葉に振り回されたくない気持ちがあるが、これまで児童養護施設や障害福祉の現場、精神科医療に近いところでの活動が中心であっただけに、これまでとは違った風景が見えるようになってきた。

不定期であるが、そんな幼稚園の風景から思索を深めたい。

2. 私の勤める幼稚園

私の勤める幼稚園は、光の園幼稚園という名前の幼稚園です。その始まりは、賀川豊彦(1880～1960)というキリスト教の伝道者で社会活動家であった人が、えりも町を回った際に、この地域の保育活動のためにお金を置いて行ったことに始まります。賀川豊彦が北海道の各地に同様に資金を付与し、そのことがきっかけとなり保育活動を始めた幼稚園が幾つかあったそうです。ですが、現在も残っているのは、私たちの幼稚園のみとなっています。そういうことでは、歴史ある幼稚園といえます。

また、人口 5000 人ほどのえりも町という小さな町にある唯一の幼稚園です（＊他に町立の保育所が 3 カ所ある）。幼稚園児の人数は、現在、25 名ほどです。例年は、各学年に 10 名ほどの子どもたちがいるのですが、今の年中さんたちが 4 人であったこともあり、この 1～2 年は２５名前後の推移となっています。二人の幼稚園教諭とともに 2 クラスで保育活動を行っています。最盛期には、100 名近くの子どもたちが幼稚園に通っていたそうですが、北海道の中

での地方の現状と類が漏れず少子高齢化とともに、現在の状態になりました。

3. 全道一出生率が高いえりも町

光の園幼稚園のあるえりも町は、実は北海道で出生率が 1.90 と一番高い。幼稚園に登園してくる子どもたちの様子を見ていると、実際にひとりっ子の子どもが少ない。

私が北海道に来て、日高地方の浦河に住み始めたときに感じたことは、女性の喫煙率が高い（実際に、女性の喫煙率は全国一だそうです）のと、若い夫婦が多いこと、元職場での話であるが離婚されている方が多い（実際に、全国で一番か二番目に離婚率が高いそうです。）という印象でした。

なぜ、このような話題を出すかというと、えりも町の出生率が高い理由の一つに若い夫婦が多いという点に関係しています。

えりも町は主に漁業と牧畜業が中心の町ですが、その中でも漁業（昆布漁が中心）で、昆布漁は家族総出でする仕事です。量のシーズンになると、祖父母、父母、幼稚園児くらいの子ども、親類まで一家総出で早朝から仕事をします。こうした若い人も働ける環境（地場産業）があり、子育てができる収入があり、子どもをみる祖父母の応援がある、というのが強みであるといえます。

けれども、昆布漁をしているということでは、北海道内のほかの地域でも同様な地域や町がたくさんあります。やはり、どこかえりも町ならではの背景があるように思います。

若い人が働ける仕事があるといっても、相対的には北海道内の都市部の人の収入と比べようがありません。日高地方は、全道内でも平均所得が低い地域です。ですから、特別、えりも町が恵まれているということでもないわけです。

また、祖父母の子育ての応援が得られるという指摘も、どうも当てはまりません。というのは、えりも町には自衛隊の基地があり、そこで働いている隊員家族も、子どもの数に関しては同じような状況だからです。多くは核家族の転勤族です。こうなってくると、何が良い結果を生み出しているのだろうと考えさせられます。

また、えりも町が子育ての政策に力を入れているかというと、それほど特別なことをしていないように感じます（こういうことを書くと、役場の担当者から叱られてしまうかもしれない）。

そこで、まったくの私の印象論となりますが、えりも町には、どこか若くして家庭を持つのはいいもんだ、子どもは二人くらいは育てたい、という雰囲気があるように感じます。これはかなり主観的な物言いで、主観以外に根拠がないので私の感想ぐらいのものです。

けれども、お互いが見えるような小さな町で若い家族が頑張っている、子育てに仲睦まじく奮闘している様子がわかる。生活が大変でもやっていけるという雰囲気は大切な気がいたします。

これを別の表現でいえば、「つながり」や「見とおしを持つことができる」というようにいえるかもしれません。

特別に楽にならなくても、何とかなる、という全体の雰囲気は、ある種の安心感につながるものだと感じています。

4. でも課題が…

えりも町の出生率が高いのは、幸いに良いことであるのですが、課題を抱えています。

それは、若者の流出が避けられないということです。

北海道の人口の三分の一強が札幌市に集中しています。今もその傾向は変わりません。大学が札幌に集中していることや、卒後の仕事の場があることなどが主たる理由です。しかし、もう少しマクロにみると、さらに札幌市から東京などに仕事を求め、人口が流出している現状があります。（最近、東京都近郊からふるさと納税批判が出始めています。理由は税収が低下しているためというのです。しかし、北海道の現状を思うと、都市部に一極集中していく社会構造自体がいびつで、地方の町を疲弊させていっています。えりも町では、ふるさと納税で教育や福祉に予算がさけるようになっています。ぜひ、えりも町に、地方の町村に、ふるさと納税をしてください。）

そのため、就労や進学する年齢になると地元から離れていきます。昔は、漁師の子どもは漁師になれば一生食べていけるということで、あえて進学や他の職業を進めることが少なかったそうです。しかし、今の子供たちの父母の世代時分には、都会の学校に進学する、一度外の仕事をしてから地元へ戻ってくるという経験者が増えているため、自分の子どもにはあえて地元にいることを求めなくなっています。

こうしたことから、ますます地元にいる若い世代が定着しなくなってきています。U ターン組もいますが、やはり流出組の方が多い現状です。

それに、自衛隊に勤めているところの子どもは、転勤族ですから大人になってから戻ってくることがほぼない現状です。

5. 幼稚園の子どもたち

幼稚園の子どもたちの姿を伝えたい気持ちもありましたが、今回は、子どもたちの生活の背景みたいなものの紹介となってしまいました。

けれども、子どもたちが親や環境の影響を背負って育っていることも事実です。子どもたちの普遍的で変わらない姿と、個別の姿を重なり合わせながら、続く幼稚園の風景を伝えていけたらよいなと思います。

「あ！萌え」の構造

(8)

総合心理学部　齋藤清二

さて、前回の最後に予告したように（え、覚えてない？ いやそれならそれで好都合ですが…）、今回からはタイトルの「序論」という言葉を外すことにしたい。その理由は、序論というのは「本論」あってのものであるが、この論考はずーっとグダグダ続いているし、これからもグダグダ続くことは必至なので、そもそも、序論と本論を区別する意味がないという結論に達したからである。よって、今回からは、序論抜きの「『あ！萌え』の構造」をお届けすることにする。

20. あらためて、「萌え」の対象とその下位分類

本論考のかなり最初のほうに、「萌え」の認識論的構造は、萌えの主体（萌えを感じている、あるいは萌えが生起する場としての、「当人」あるいは「私」）、萌えの対象（主体に認識されることによって主体に萌えを惹起させる（ように見える）「もの」あるいは「こと」）、現象としての萌えそれ自体（色々論じてきたがこれまでのところ正体不明というか、不立文字というか…）からなる、というようなことを書いた覚えがあ

る（記憶がはっきりしないが…）。さらに、ここまでは主として、萌え現象が主体に与える影響、言葉を変えれば、萌えの機能（どう役に立つのか、どんな害があるのか）について述べてきた。

ここまで敢えて萌えの対象について正面から論じてこなかったのには、いくつか理由がある。その一つは、「萌えの対象」は通常の言葉で最も語り易いものであり、それゆえに萌えの本質への接近から容易に考察を逸らしてしまう可能性が高いと思ったからである。つまり、萌えの対象について安易に論じることは、容易にそれを物象化（objectification）してしまいやすいのである。しかし、だからといって萌えの対象は一般には極めて具体的なもの（とみなされるもの）なので、それを抽象化した形式で論じるだけでは、実際の萌え体験とは遠いものと感じられてしまうとことが避けられない。しかもそれに加えて、萌えについて具体的に論じる時に生じる「恥ずかしさ」がブレーキをかけるので、益々うまく論じることができない。

そこで今回は、前回も述べたある大学院生の修士論文の中に出てくる、萌えの対象の下位分類を参照枠とした上で、少し具体例を挙げながら論じてみたい。その下位分類とは、とりあえず、「キャラクター萌え」「関係性萌え」「ストーリー萌え」の三種類である。もちろんこの三種類だけで、幅広く多様な「萌えの対象」の全てを網羅するとは考えられないし、そもそも、萌えの対象は主体や現象そのものから独立しているわけではない（このことについては何度も論じてきた）ので、論を進めているうちに、またもや必ず不十分な部分が生じてくるだろう。しかしそれは覚悟の上で、とにかく論を初めてみたいと思う。

21. キャラクター萌え（キャラ萌え）

「キャラクター萌え」とは、文字通りある特定のキャラクター（人格：キャラ）を対象として萌えが生起することである。ここでいう特定のキャラとは、架空のものでも実在のものでもよいが、多くの場合それ自身の名前をもち、他のキャラとは区別される個別性を持つものである。なおこの場合も、「萌えの生起」とは、主体の視点から描写するならば、「強く魅せられること」と同義である。萌え現象を生起させる「対象」として最も一般的なものは「二次元画像」であるということは既に述べた。その典型例は、マンガやアニメーションや小説や映画などの主人公や登場人物、魅力的なアイドル、スポーツ選手や俳優などの写真、イラストなどである。

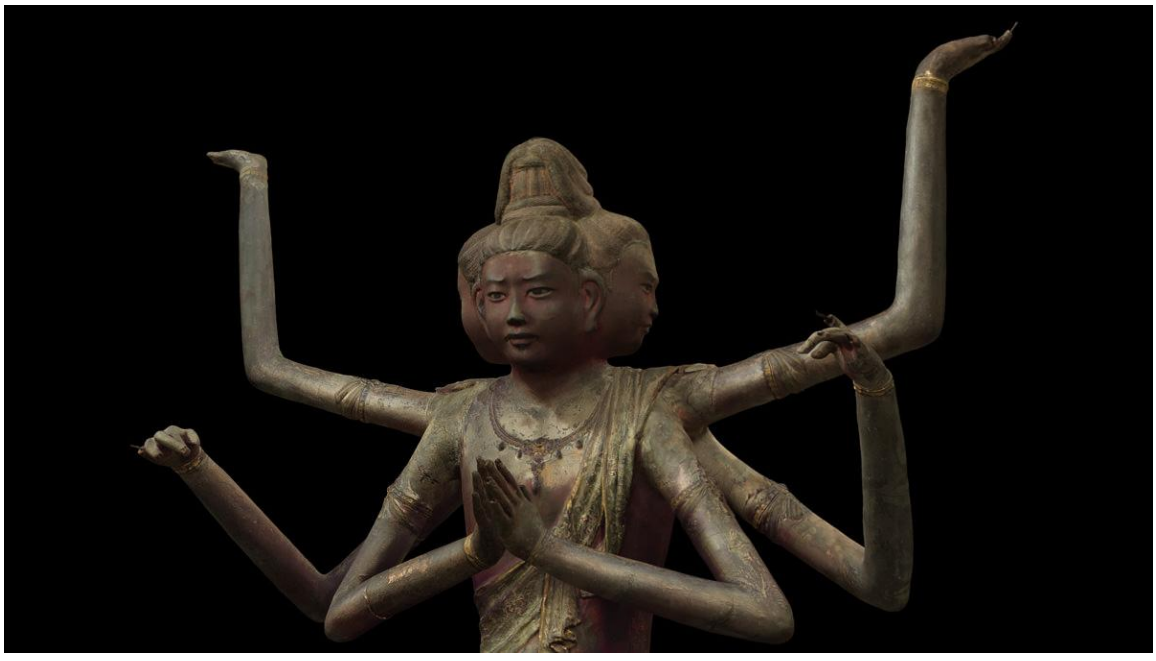
もちろん、キャラの画像であれば何でも良いというわけでは全く無い。ある特定の主体に萌えを生じさせるキャラは多くの場合、その人の一生におけるある特定の時点においてはひとつか、多くとも数個に限定される。もちろん時間を追っていけば、対象のキャラが変化したり入れ替わったりすることはよく見られるが、時にはある人の一生涯を通じて一つのキャラのみがその人にとっての萌えの対象であるという場合もある。さらに、どのようなキャラの画像が、“その特定の主体”に萌えを生じさせるかは、当然のことであるが、その主体の個別性に依存している。よって、キャラ萌えは

極めて個別的・個人的なものであると同時に、多様なものでもある。

ところがである。萌えの対象であるキャラは明らかに個別的であるにも関わらず、そこにはある程度の一般性、普遍性がある。つまり、多くの人に萌えを生じさせるような特定のキャラ（萌えキャラ）というものは明らかに存在しており、それはおそらく調査やアンケートや投票などの多数の人を対象とした実証的なアプローチによって定量化することが可能である。この、ある特定のものが個別的であると同時に一般的でもあるというのは、考えてみれば、萌えキャラに限らず、ひろく一般的にみられる現象である（そうでなければ○○コンテストなどというものは成立しえない）のだが、通常それはあまりにも当たり前のことなので、そのこと自体は意識されない。

あまりにも抽象的な議論が続いているので、ここからはいくつかの具体的な例を挙げつつ論じてみたい。なお、以下に提示する画像は全て、インターネットからのいわゆる「拾い画像」である。本来は引用の URL を明記すべきなのであるが、ほとんどが複数のサイト（検索サイトを含む）に掲載されている画像であり、容易に検索可能であること、本論考が営利を目的としたものではない学術的な引用（本当か？本当にそうなのか？）であることから、ここではいちいち出典を引用しない（もちろん問題が生ずればすぐに削除する）。まず以下の図をみていただきたい。

この像を知らない人はおそらくいないだろう。奈良興福寺の阿修羅像（阿修羅王）の画像である。さて、この阿修羅に「萌え」を感じる人はどのくらいいるだろうか。最初に、正直に自己開示しておくが、この阿修羅像は少なくとも私にとっては、物心ついた時から一貫して、非常に魅力的な存在であり、今もそうである。これを「私は阿修羅王に『萌えている』」と表現するのは何とも居心地の悪い恥ずかしさを感じるのであるが、この論考では「強い魅惑を感じる



こと＝萌え」と定義しているので、ここでは正直にそう述べておく。

もちろん、仏像キャラクターとしての阿修羅王に萌えを感じない人もたくさんいるだろうが、そのこと自体には何の問題もない。しかしここで、阿修羅王というキャラは、“一般的に”萌えを主体に生起させるキャラなのか（つまり「萌えキャラ」の一種と言えるのか）という問いを立てると、これについてはある程度実証的な検討は可能であろう。一つのデータとして、第二次大戦後、日本の仏像のブロマイドの売れ行きランキングというのがあるらしいのだが、そこでは一貫して阿修羅像の売れ行きが一位なのだそうである。ちなみに第二次大戦より前は、売れ行き第一位は「弥勒菩薩」だったとのことなので、時代によって、「何が代表的な萌えキャラであるのか」はある程度変化するのだろう。

さて、次の画像は、知っている人は知っていると思うが（若い人は知らないだろう）、光瀬龍原作、萩尾望都画の『百億の昼と千億の夜』（少年チャンピオン 1977-78 連載）に登場する阿修羅王である。この作品に出会った時、私はすでに大学を卒業して医師になっていた。高校生時代に光瀬の原作 SF を読んで登場人物の一人としての阿修羅王に注目してはいたものの、この萩尾の描く阿修羅王のキャラクターには正直のところ度肝を抜かれた。まさに典型的な「萌え」が生起したとしか言いようがなかった。

この作品における阿修羅王は、はっきりと明記されているわけではないが、少女として描かれているようである。ちなみに、光瀬の原作に登場する阿修羅王は性別不明であり、作品の前半では伝説上の存在として描かれているが、後半では正体不明の組織によって改造されたサイボーグであるということになっている。

さて、ここで、阿修羅王というキャラとは一体何であるのか、ということが問題になる。本論考のはじめのほうでも論じたが、ある特定のキャラに対して「萌え」が生じた時に、そのキャラはもちろん物語やマンガやイラストや映像やフィギュアであったりするが、阿修羅王とは、もちろんインクでもなければ液晶でもなければ、粘土でもプラスチックでもない。キャラというものは、そういった物質的なものではないが、だからといって全く抽象的で実体をもたないものでもなく、少なくとも「イメージ」と「名前」をもつ、個別であると同時に一般性をもつ「何か」である。それを最も適切に具現しているのが、上記の二つの画像

であると言えるだろう。

ここで「阿修羅王」というキャラクターが、私（あるいは他の誰か）にとって、一つの萌えキャラであるかどうかはどうやって分かるかというと、それは、この画像に接した時（あるいは思い浮かべた時）に、私が被る「影響」によって分かる。このことは何度も述べてきたことであるが、その影響は「魅惑」と呼ばれ、その別の表現が「萌え」である。この影響は、主体である私や当事者には、「有無を言わせずに分かる」ものである。私は私の萌え体験がなぜ生じたのかは分からないが、萌え体験が生じているかどうかについては、「説明抜きで分かる」。このように「キャラ萌え」という現象はひとつの有無を言わせぬ「体験」であり、その「体験」はそれ自体で完結するものであるのだが、多くの場合「体験」は何故か「説明」を呼び起こすのである。

おそらく、この「何故、阿修羅王というキャラは私に萌えを生じさせるのか？」という問いは、不毛な問いなのだろうと思う。普通私達は、萌えという「結果」から、思考を逆に辿り、萌えの「原因」を推定しようとする。ところがそれを説明する時には、自動的にそれを逆転し、「原因」→「結果」の順序でプロセスが起こったかのように説明しようとする。これは、医師がある病気の患者さんを診察した結果から診断を探す時と同じ推論のパターンである。ここで、阿修羅王というキャラのどの部分が「萌え感情」を誘発しているのかという問いを立て、阿修羅王を要素に分けて、それぞれを調べたとしても、おそらくほとんど意味のある結果は出てこないだろう。例えば、阿修羅像の手が 6 本あることは阿修羅王の魅力の一部を構成しているが、手が 6 本であるということで阿修羅王というキャラの魅力を説明することはできない（実際に萩尾の描く阿修羅王には手は 2 本しかない）。あるいは、阿修羅像の目の形、鼻の形などをパターン化したり、目と目の間の距離等を客観的に測定したりしても、おそらく他の「萌えないキャラ」との違いは明確にはできないだろう。ある程度の傾向は掴めるかもしれないが、ばらつきの大きさ、再現性のなさなどから、客観的に「阿修羅王の魅力」を解明できないことは、幾多の同様の研究が示していることでもある。しかし、こういったやり方に、私達は慣れてしまっているので、ほとんど無意識的にこのようなアプローチをとってしまう。これはおそらく、医者や科学者と称する人種の悪い癖なのだろうと思う。阿修羅王というキャラの「魅力」は総合的にしか了解（comprehension）しえないし、そうされるべきものである。

22. キャラ萌えと「美」の関係

ではこの阿修羅王というキャラの魅力は、「美」という概念で説明できないのだろうか。結論から言うと、私は「萌え」と「美」の両者に大きな違いはないと思う。美的魅力（aesthetic charm）とは何かという問いへの答えは、これはこれで難しいということが容易に想像される。世の中には「美学（aesthetics）」という学問があり、これがどのような学問であるのかは、私は不勉強なので良く分からないのだが、「美とは何であるのか？」「どのようなものを美と呼ぶの

か？」「美にはどのような作用があるのか？」といったことを探究する学問ではないかと思われる。うーん、「美」を「萌え」と入れ替えると、どうもこれまでずっと似たようなことをしてきたのかな、と今さらながら思う。

ここからは、多分に個人的な考えであるが、美とは少なくとも分析的に説明されるものではなく、また要素に分解されたり、要素に還元されたりするものでもないと思う。美学が扱う対象は、必ずしも一般的にいう、美しい/醜い、のような二分法的な性質のものではないのではないか。美とは複数の要素がある秩序の元に組み合わされた複合体であり、それぞれの要素は互いに結びついており、総合的にのみ了解されるものである。

それは「対象」の中に孤立して内在しているものではなく、美は、あきらかに主体側の関与があって初めて生じるものであり、美を認識する主体側の作業でもある。またそれは同時に、美を感じ取る主体/観察者と対象との「関係」を自動的に生じせしめるものである。主体の中に生起する美的感覚とその影響ー言い換えると「萌え」ーが生じる時、そこには対象と主体とそれらを繋ぐものの三者を総合する全体性が顕現する。美的総合（aesthetic comprehension）、これこそが、「萌え」の中心に存在するプロセスなのではないだろうか。

実際のところ、本稿で示したような「対象としてのキャラ画像」に対して、「美の感覚」が生じるか、「萌え」が生起するか、ということは、主体がどのような態度でその「対象」に接するか、それをどれほどの集中力をもって観察するか、どれほど丁寧かつ緻密に自分の中に吸収しようとするか、といったことに大きく依存するだろう。主体が対象にかかわる態度と無関係に、「美」や「萌え」が存在するわけではない。

次回は、ここまでの考察を踏まえて、必ずしもキャラクターの性質に限定されない萌えのあり方としての「関係性萌え」について考察したい。

＜続く＞

清武システムズ

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

～シーズン２「清シス・アピール」

エピソード　１：シェアハウス住人と喫茶店で

しすてむ❤きよたけ

今回のシーズンは、僕が他者からどのように思われているのか、現在近くに居る人に尋ねてみた。清武システムズをアピールするといっても、ただでさえ何屋かわからないのに、自分で言うと胡散臭い。見た目も胡散臭いようなので、さらに胡散臭さに拍車をかけてしまう。今、僕がアピールできることは、「どうやら、胡散臭いらしいです」と言うことだけだ。そんなわけで、今住んでいる「シェアハウス」（＝僕は「アジト」と呼んでいる）の住人２名に僕について話してもらうことにした。

話してもらって、わかったのは、会話の微調整をしている様相があった。そこが、何より面白かった。人って、集うとそれなりに微調整をする。コミュニケーションの面白さだと思った。そして何より、色々いってくれる人がいること、それより、胡散臭い見栄えで、しかも、「明日、暇？」と聞き「あ、うん」とすぐさま協力してくれる人がいることは励みになる出来事だったと思う。

悪いニュースが多い中、不安に駆られる人もいるかもしれない。だけど、そう悪い日常生活ばかりではないような気がする。

今回のラインアップは、「1. 不安とチャンス」、「2. リサーチし始める人たち」、「3. 安心感はキャラ立ち」、「4. ふらつける軸」、「5. 結構意地悪」、「6. 見映えと会話」、「7. いじりいじられ」「8. 趣味嗜好の塊」、「9. 分かり合えないけど違う道へ」、「10. 胡散臭いこと肯定」です！最後に後日談もあり。

1．不安とチャンス

僕は、自分が思っている自分と他者が思う自分が違うらしい。大学院に入った2012年の後期、団先生に「ギャップがある」と言われたことがあった。確かに、そう思った。と言うのも、自分がしっくりくる場がなく、どこにも所属している気がしなかった。例えば、男の中にいても同類と感じず、かといって、女の中にいても同類と感じなかった。女の中にいて、男を感じること、意識することはあった。他にも、学校で真面目と思われることもあれば、不良と思われたり。時間通りに行くのに、「遅刻しないように」、「一人でどっかに行かないように」と言われることもあった。僕はといえば、「うん。そのように思っていますが・・・」と思うのだった。

これって、「生きづらいんじゃないか？」と思うこともあったし、「社会で生きて行く上で、生きにくい選択をしている。」「もっと賢く生きた方がいい」「一般会社員には絶対にならない方がいい」と言われた大学時代もあった。方や「清武らしくていい」と言われることもあった。

一体、僕は何なんだろうか・・・この意味不明だったり、画一されてない自分を社会に活かすことはできないのだろうか、と考えていた。でも僕は、決して生き上手ではない。人になかなか伝わらないことも多くある。自分が思う自分と他者が思う自分に隙間があれば、それはそうだろうと最近思うようになった。社会の何に位置づいている者なのか、不明だとすれば、それはそうだと思う。でも、僕はこれをチャンスだと思っている。

しかし、残念ながら、画一されていないから、具体的にどのようなチャンスなのか、自分で気づいていない。いや、これは言い訳なだけ。社会と人間がどのように生活を営み、役割や所属によって他者を認識しているのかをしっかりとわかろうとしなかったのだと思う。なんとなくわかっているけど、そこに入ることができなかった自分がいるのだろう。

2016年4月（だったと思う）。金沢に住んでいた僕に東京の仕事が舞い込み、月の半分を東京で過ごす計画が立った。その

前はホテル暮らしをしながら上京し、部屋が欲しいと思っていた。しかし、一部屋借りるのは金銭的に勿体無い気がした。そんなことを東京の仕事に誘ってくれた人に話していたら、シェアハウスに空きがあると教えてもらった。「ラッキー！もうそこに住めばええぇわ！！」。ここが、僕が「アジト」に住む経緯だ。チャンスだと思った。

空きを教えてくれた人から連絡先を聞き、電話をした。間取りを聞きたかったのだが、住んでいる人と様子について話してくれた。「腐女子」と「割と部屋に居るけど、文字起こしとかしてる人」が居る。「腐女子」が「料理」をするから、ご飯を一緒に食べたりもする。

そこで「あの～間取りは？」と聞いた。古い家で、1 階がカラオケスナックでうるさく、そこといい関係ではない、住む部屋は 6 畳くらいかな～といった具合だった。もう、住むと決めていたし、行ってから過ごし方は考えようと思ったし、なんだか面白そうだな、と思った。

さてさて、ここから、トークセッション。他人に清シスの装置（＝僕）をアピールをしていただきましょう。

It’s Show Time!!!

2. リサーチし始める人たち

清武：俺のイメージ言って～？

サバヲ：怪しい。何してるかわかんない。何で収益を得ているかわからない。未だに、お試しで使ってみて（清武システムズは、何か変化を求めているが手立てがわからないと言う方は使ってみて！って言ってます）って入って、お金もらえるのかわかんない。順当なサイクルじゃない、わしは納品して（サバヲ氏は、服を作る職人さんです！）お金になるけど、それは、愛流くんにはないから、謎。けど、ちゃんとお仕事をしているようだし。けど、どう仕事をしているのかわからない。

清武：最初・・会う前は～？

サバヲ：この人まじで見ないで決めたの？

帆波：まじで、来るって本当に？！

サバヲ：住む部屋見ない。間取り聞いて、築 40 年って言って・・・住んでる人の情報もほとんど聞いてなくって、まじかよって。家は、寝る風呂とかあればいいけど、人ってさ～まじ合わないこともあるから、その時どうするんだろうって思った。そう言うリサーチって要らない人なんだと思った。

こう言う人ってダメってないの？わしは、あの CM に出て来るスパゲティのお姉さんはダメ。CM 覚えてないけどあの人はダメ。って感じで、「無理無理やってけない」って

人

清武：え～～～～～難しいな。

サバヲ：わし明確にあるんだけど。でも、めんどくさいこは好き。

清武：あ！パリピは無理かも

帆波：ニドさん（以前住んでいたフランス人が、外国人向けサイトに掲載し、帰国し、日本人の僕らがあたふたしていた中、やってきた人）が最初にいたら？

清武：いたらいたで、れそなりにやるかも・・・

サバヲ：ってことでこの人はどんな人なんだろうね。気になんないんだろうね。

清武：ってことはさ、俺さ人に興味ないのかな？！

帆波：なるようになるんだろうって思ってるんじゃない？人に興味なくはないと思う。下の人の話（うるさいスナック）をゆうさんが話して、サバヲさんが聞いてその話聞いた時・・・あるところに入って行って、楽しんで入っていける人なのかな～と思った。

サバヲ：なんかの研究やってるって聞いたから調べたけど、いくつか出て来たんだけど、なんか難しいからわかんない！わかんない！ってなった。

帆波：参与観察かな？と思ってた。何も知らずに ok で来るなら、参与観察かと思った。

清武：あ～俺、なんも考えてなかった。

サバヲ：なんもしなくなって、ポンといなくなるのは困るから、それは電話で言った気がする。って言うかそれ覚えてない。最初のメール思い出してごらんよ。あ、覚えてないなこのコ（＝清武）。メール長くなる嫌だから、電話してこいって言った。電話するときにどんなテンションで話したらいいかわかんない感じだった。この話、最初の１週間くらいでなんか言ってた気がする。

　自分の立ち位置を構築して行こうとしている。だいたい、この時間に電話出られるって言ったらその通りに電話してきたし。ちゃんと、書いたメールを読んで電話してきている。物事はちゃんと理解している人だと思った。研究している人って話が通じるか、通じないかのどっちかだと思う。

3. 安心感はキャラ立ち

サバヲ：ただ、見た目が・・・

帆波：ひげにロン毛でさ～。不思議なキャラクターが立ってる。二人（サバヲ・清武）ともキャラ感が立ってる。

サバヲ：ぬぐいきれない何かがある。それ

で、わしは好きになりました～。だって、この感じで世にいるサラリーマンみたいな人だったらさ～。大概的にメーカー勤めみたいな人だったら、どこに重きを置いているのかわかんない。かき分けてもかき分けても同じ顔が出て来る。不審。最初は、こうありたいってのはわかったから安心。

清武：？？こうありたい？？？がしっくりこうへんわ～

サバヲ：完全にキャラ感があるじゃん。世の中には世に埋没したいって人がいる。目立ってはいけないと言う人。ではないじゃん！ヒゲメガネ、持ってるものにはこだわりがあって～みたいな。だから、キャラがつかめた。埋没しようとしていない。ここはわしが、人と関係作るポイント。プライベートと仕事の違う顔でもいい。

清武：ない人いるね～。会話、どうしていいかわかんないかも。

4. ふらつける軸

帆波：今でもつかめないからな～。でも、ちゃんと軸のある人だと思う。

清武：結構ふらつけいてるのにね～

サバヲ：結構ふらつくって軸があるじゃん。ふらつこうて軸がないとできないはずだよ。

清武：これ、絶対周りに恵まれてる、って言われると思うわ～!!俺、周りに恵まれてると思うんだよ～

サバヲ：いい人徳だと思うよ～

巻き込まれるの嫌いだけど、人を巻き込むよね。それ巻き込まれるしやめとけし、と思う。

5. 結構意地悪

サバヲ：怒ると怖い。すげ～怒ってる～怖～い、って思うときあるしね。多分この人のことこう思ってるって察していたり、雑談とかを愛流くんは覚えてる。

帆波：ちゃんと聞いてないけど、ちゃんと聞いてるんだって。愛流くん。

サバヲ：雑談のちょっとしたことを覚えてるんだよね～。あと、結構意地悪とかね。

清武：どの辺が？

サバヲ：自分ですくい取った案件を、投げて帰って来るとかね！おまえ～～もっと答え出してから帰ってこいや～～！「俺、もう聞いたしok」ってさぁ～。

帆波：仕事フルの上手。散らかすし渡すし。

サバヲ：人のことをすごく観てるし、察するのも上手なのに、「後はお前で考えろやっ」てほおるって言うね。とか言って、「そういえば、あれどうなったん？」って聞かれて「ドキ～～ッ」みたいなね。んで、近況報告をする、って言うね。

清武：聞いてて俺が面白いわ～

サバヲ：聞いてて耳を塞ぎたくなることある。ほんとすみませ～んって

6. 見映えと会話

サバヲ：こだわりの塊　タバコも巻いてるし

帆波：癖が強いのは確かだね～

サバヲ：選べるアイコンが多い。アイコン？見える、選べるツールが多い。人は外見ではなく内面って言うけど、そうってわけじゃないと思う。

清武：俺は、それは思うね～

帆波：持ち物にしても表情にしても、その人じゃないって人いるもんね～

サバヲ：出会って 30 分くらいで「俺、ヒモ」って言ってたよね。最初家に来て、お茶出して・・「ヒモで・・・エロ話」をバーンって突き出されて、この人安心した。一瞬でこの人、相手に話していいって思ったんだ、と思って安心。

帆波：あの日 ARIO まで行ったんだっけ？

清武：商店街まっすぐ行って、夕飯買うの付き合って、そんな感じだったかな～

サバヲ：その間に話す、話さないか・・・帆波ちゃんいる時に・・。それで、風俗嬢の彼氏って言うから、何！？それってなって、俺こう言う人です～てわかった。

清武：普通に喋ってたんだけどね～

サバヲ：５月９日に来たんだよね～。

帆波：良く覚えてるね～

サバヲ：その前までだったら忙しかったし、「黙っとれ！」になってた。人が去って（僕が入居できたのは、人が出て行き部屋が空いたからだった）寂しいね～って言ってる間もなしだった。それでガリガリ棒（サバヲ氏がいつもご飯を作ってくれる。ササミの唐揚げで身と衣の間にカレー味。絶品）食って・・・

清武：あれ？俺、こんな日に生まれたんだよって言われてるみたいだね～

7. いじりいじられ

清武：帆波からも言われたいよね～～。愛の告白でもいいけど!!

帆波：え～～～～。

清武：俺の嫌いなところは？

帆波：動きが気持ち悪い。

サバヲ：ずーと言われてる

帆波：スタンプも。でも、フレンチブルのは可愛かった。使ってもらった～？

サバヲ：あ～あれは可愛い

帆波：メガネとか持ち物とか「あ～いいね」って思うのに、スタンプはなんでこんなに気持ち悪いんだろうって思う。不思議なのは、小物のこだわりとは対照的に音楽にこだわりがないのは、愛流くんを表している気がする。

清武：どう言うこと？？

帆波：日常を大事にする。「日常」ってよく話聞いてて、「キーワド」だなって思うんだけど。音楽を BGM に聞いてる・・・うまくいえないね・・・「これって入っていくよりは、広く聞いていて、その中で pick　up」していて。何か聴こうって時は、愛流くんはラジオだから、この曲聴こうってより、「出たとこ勝負」って感じ。

　後、ちゃんとゴッフマンをちゃんと読んだ方がいいよ！ゴッフマン参照しているのに、どんな人だっけ？って聞いてもわからんっていうし。あと、全体を見るのが得意じゃん。生徒会だったら副会長とか、全体見てないと、できないようなポジションにいると輝くんだろうな～って思う。

　「マージナルま～～～ん」って愛流くんのこと思う時がある。壁の上に立ってるから、俯瞰の視点。例えば、左にいる人は壁があることに気づかなかったり、別のところに属していることに気づかなかったりする。う～～ん、ある団体の外にいたら、おかめ八目。愛流くんは、よく俯瞰してるなって思う。だから、上にいる、位置づかないから見えている感じ。

清武：俺は、上にいる感じで上からめせんには見えないの？

帆波：パット見た感じが、全面に出てるから上からには、見えない

サバヲ：話してて怖い感じがない。わ～って言われる人って怖いじゃ

ん

帆波：目は、上にあるけど、身は対・人って感じ

サバヲ：潜水艦みたいな感じ。「俺は潜伏しているけど、見えているぞ」って感じ

帆波：上からと俯瞰は違うもんね。気をつけておかないと、「どこから喋ってるの？」ってなるかもしれないけど

8. 分かり合えないけど違う道へ

清武：二人ともいい人だね～

サバヲ：ダメなとこ～～？以外に粘着質。「覚えてるんだ～～そこ～～」って。悪いとこじゃないけど。

帆波：確かに。「今それ言う？！」ってことは、確かにあるかもしれない。

サバヲ：あんまり嫌なことされたことないからわかんない。

清武：やなとこ

帆波：しつこいところ。同じだね。

清武：どこがしつこいの？

サバヲ：夜のラーメンとか焼肉食いたいとか叫ぶところ

帆波：食欲がね～

サバヲ：でもちゃんと、本当に嫌がる一歩手前でやめてくれるじゃん。

清武：そうなんだ～～

サバヲ：「本当に忙しいからやめて」って言うとやめてくれる。

清武：すごいよこの話(笑)

帆波：「ダイエットしてるの？してないの？」って思う。その気持ちを抱え続けてる・・私が考えることじゃないんだけどさぁ～～

サバヲ：本当に青虫みたいな生活する？一旦、インスタントラーメン食って、やる？

帆波：買ってくるも～～ン

サバヲ：愛流くんの経済を取らないと・・・。でも、超我慢してると思うよ～インスタントラーメン。本当にジプシーだよね。

帆波：会社員だとイメージつかない人だけど、学生団体だったらイメージつくかも。お金を稼ぐための組織にいると想像つかない。能力とか担当とか、会社の場合ははっきり分かれているじゃない？そう言うのがバラバラな組織だと、全体を見ている人の役割って大事に持って、どこからどんな球が出てくるかわかんないし～。だから、全体を見ることの強みって生かされるんだろうなって思ったんだよね～。けど、他の部

分で上から見ている人っているのは立ち位置があるし、イメージがつく。清シスって、一定の仕事をするってわけじゃないもんね～ずっとジプシー

清武：俺が来てよかったことある？自分で聞くのもなんだけど。

帆波：絶対あると思うけど～。

サバヲ：面白い。馬鹿話ができる人材って大事。俗な会話ができて嬉しいよ。さらっと俗な話ができるって嬉しい。

帆波：あるんだけど、出てこない。・・・お仕事をくれた～！人を巻き込むのが上手だよね～。あと、お題いっぱい出してくれる。

清武：そのことは、帆波にとってどんな意味があるの？！

帆波：最初に仕事をくれた時に、こんなに丁寧に仕事もらったことないと思って驚いたのね。やるにしてもやりやすい感じで、断るにしても断りやすい感じでくれたな、と思って。すごい助かるなと思ったのね。・・・意味・・・・？

清武：これまでとの違い？

帆波：なんだろ・・・お題出してってこんなに頼んだこともないし・・でも、一緒に謎かけをするって方法もあるじゃん。人との関わり方として。けど、お題を出すってことで、飽きずにお題出してくれるから、私に合わせてやってくれてるな～と思って、ありがたいな～と思って。

サバヲ：でも、人の知識量によって伸び縮みするよね～。視野にしても。バーババパパ。液状、半ゲル状な気がする。ブルースリーの格言にもあるじゃないですか～

帆波：「ウチョー」「アチョー」しか思いつかない。

みんな：ははははははっは

清武：俺もわからへんけど、それ、俺も出してくると思うわ

サバヲ：物事を対話するのにね・・・そのモノに順応するように、自分の中にその許容を持つことが大切だよって言ってるんだよね。「ジークンドー」ってのを画ーした人で。武術なんだけど、人を人を負かすためのものじゃなくて、伝えようとする思い、そのためのコミュニケーションツール。そのための武術なのね。これには、ぶっ殺してやるもその人が伝えようとするけど、その思いも入ってるの。人の思いはそう言う部分もあるから、わしは、好き。

帆波：愛流くんのその変わり方を見て思い出したのね？

サバヲ：うん。でもバーババパパなの。愛流

くんって人と話しても分かり合えないけど、違う道が見つかるんじゃないかと思って話している感じ。最初の持ち出してくる企画はちゃんとしてるから。「〜〜〜〜ってしようと思うけど。で、どうだと思う？」って話すから、別の回避面があるか感じて人と話してんなって思う。

9. 失敗を笑える住人たち

清武：あの〜不満はないの？

サバヲ：だから〜〜〜

帆波：もっと聞く？

清武：これ直した方がいいんじゃない？みたいな。生活面でもいいよ。

帆波：勘が働いて、その勘当たって、動くけど、立場が悪い。だから、そういう立場をしないとか、勘で動いていいとかそういうところにいないと。あ、歯磨きした後に食べちゃう。

清武：試着しないとかあるやろ？

サバヲ：それはそれで面白いからなぁ〜

帆波：それはサバヲさんがいるからできて、ミラクルが起きる。巻いた種がいい感じになってるよね。

サバヲ：はぐるま回ってる感あるけど、試着はした方がいいかもね〜。無駄金払うかもしれないじゃん。

帆波：サバヲさんいなかったらどうするのって感じじゃ〜ん。

サバヲ：知らん間にピンチがチャンスに変わってるとこはすごいよね〜

清武：それはあんまり思わへんねんな〜

帆波：そのポイントは？

清武：チャンスになってるって思ってない。

帆波：買ったパンツが入んないって結構ピンチじゃん

清武：あれ面白かったよね〜

サバヲ：うん。まじでって思ったよね

帆波：全然入ってなかったじゃん、全然はけてもなかったじゃん。なんで買ったのかもわかんないじゃん。なんで買ったのって感じじゃん。

サバヲ：そういう感じも愛流くん感を体現してるじゃん

10. 胡散臭いこと肯定

サバヲ：愛流くんって自分をどんな人だと思ってるの？

清武：まずわかんないよね～。あ～すごくいい人だと思ってる～～！

サバヲ：どういい人だと思ってるの？色々種類あるじゃん

帆波：自分をいい人だと思うのも胡散臭いよね～口に出しちゃうのが

サバヲ：以外に真面目もうちょっとちゃらんぽらんなんかなって思ったけど、最初の足がかりは作る。

清武：不器用だな～と思ってる。いい人につては・・・さっきの話じゃないけど、割に打ち切りするけど、完全に見放すわけじゃないんだよね～

サバヲ：だから怖いの～！ピクって。子供のいたずらを見つけられた気がする。

清武：あとは～、悪いことするときちゃんというもん。あと、結構無責任に言うとこもいい人だと思ってる～。でも、不器用だよね～あんまりいい基盤に乗ってない気がする。いい基盤が何かってわかってないけど。

帆波：そうかな？器用だな～とは思わないけど。不器用だな～とか言うけど、（出会い系の）サクラできてたり、対・人は器用なんだよね～。器用なところが伸びるといいよね～

清武：これ、どこで終わったらいいかな。・・・

後日・・・

この日は、近所で謎めいたアンティーク感ある小さなレストランに行った。4~5時間過ごしていた。僕らは、ほぼほぼ毎日顔を合わせ、夕飯を食べ・・・そんな日常を過ごしているにもかかわらず。それ以上に、ず～～っと一緒に過ごしていた。こんなに人と過ごすことって近年少ない。僕のこれまでの生活の中にもなかった。帰って来てからも、夜の 3 時くらいまで居間に居た。この会話の流れのように、微調整がありながら、役割も変わっていく。それをそれなりの負荷も含めて自然に過ごしているのだろうと思った。

後日、帆波とリビングで二人になった。清シスについて話してくれた。「教育や福祉、居場所においてあるといいのかも。」僕は「でも、ここは制度や政策により給与が支払われる既存のシステムだから、そことは分けて考えた方が機能しそうだ。」、「通常の会社でも機能しそうだとも思う」。帆波は色々な社会の場面を出してくれた。

僕は思った。社会にある通貨システムの中に僕を当てはめて考えると、すごく悩みきってしまう、と。それは、帆波が、「愛流くんは、依然として何とはいえないけど、何かを入れたら、ほらこんなに他の細胞がこんな動きになり始めました～」そこで、「なるほど～～」って思う感じ。「マニュアルや前例があるのではなくて・・・だから、その、頭がいたいからロキソニン飲んで治りましたじゃないけど、人間関係だから、それはそうなんだけど、意識されないうちにそこはかとなく変わっている感じはするんだよね～。」と。

結局、やっぱりわからない。だけど、こんなに何をしているのか分からない人に対して、真剣に考えてくれる人たちはいるだろうか。僕が、今はっきり言えること。「僕、人との出会い方と出会う人たちに恵まれてます！」

綴り人/しすてむ・きよたけ

清武システムズという看板を引っさげ、活動中。さ～めんどくさいことも起きるけど、そっから面白く展開していこうじゃないか！という、通りすがりの旅人です。

「何か変化を求めているが、手立てがわからない。」そんな時にぜひ導入を！違う息吹ここにあり！

【連絡先】

info@kiyotakesystems.net

S・V 羅針盤のない航海

川﨑　二三彦

【4】ケース進行管理

有給休暇

ところで、新たな赴任地で驚かされたのが、A 児童福祉司の勤務態様だ。虐待への対応に追われる現在ならば、到底間尺に合わないように感じられるが、児童虐待防止法も制定されていなかった頃の小さな職場のことだ。「ここでは多少大目に見てもらっていたのかな」と、今さらながら考えたりもしたが、もちろん、当時もそんなに大らかな状況だったわけではなく、日誌には、他職員の声も拾いつつ、自らの福祉司経験と比較しながら、課長として途方に暮れる姿があった。書きにくいことではあるが、すでに 20 年近く前のこと、時効だと割り切って、日誌を引用しよう。

> 7 月 2 日。赴任して 2 か月目が始まった。と、A 福祉司から年休の連絡が入った。彼は昨日も午後から休暇を取得していたのだが、今日も休むという。この日、午前中は月例の職員会議と相談判定課の週 1 回のミーティングが予定されていて、午後からは定例のケース会議だった。彼も会議に上程しているのだが、「年休は権利だからやむを得ないか……」と思っていたところへ、〇〇養護学校[*1] の教師から A 福祉司宛てに電話がある。
>
> 「養護学校の先生が『今日そちらに行く予定の子どものことでお伝えしたいことがある』とおっしゃってますが……」
>
> 電話を受けた職員が、こんな報告をしてくる。
>
> 「えっ、面接？　だって彼、年休でしょ」
>
> 慌てて再度確認してもらうと、どうやら確定的なことではなくて“行くかもしれない”というレベルの約束だったらしい。とにかく、もしも来所したら私が対応することに決めたのだが、結局この日は保護者が現れず、胸をなで下ろした。他方、電話対応した職員は慣れた様子で受け答えしていたから、一番慌てたのは私だったかも知れない。
>
> 考えてみると、いわゆる「夏休み」が取得できる期間が 7 月 1 日から始まっていた。A 福祉司は、それを待っていたかのように、1 日、2 日と連続して夏季休暇を申請しているのであった。

彼の勤務状況に驚かされたのか、日誌には、その後もいろいろエピソードが書かれている。

翌日の 3 日は金曜日だったが、次のような記載があった。

> この日 A 福祉司は、自宅から直接出張先に向かった。帰庁してしばらく所内業務をしていたが、2 時半頃になると、「午後は夏休みにする」と言って退庁する。
>
> ところがその後、彼への電話がたくさんかかってくる。他の福祉司が対応するのだが、昨日の〇〇養護学校からは、次のような内容が……。
>
> 「昨日も連絡をした子どもさんのことです。本日 A さんが出勤したら、連絡がほしいと伝言していたんですが、週明けではちょっと間に合わないと思うので、

*1 現在の特別支援学校

できれば……」

「スミマセン、今は A と連絡ができないのですが、明日の土曜にでも学校へ連絡するよう伝えます」

電話に出た福祉司の応答である。A 福祉司がこんな形で職場を空けてしまい、電話応対など、他の職員が何かとカバーしていることは明らかだが、かといって A 福祉司に土曜日まで仕事をさせるのは、私としては気が引ける。

その電話が終わってしばらくすると、今度は当の母親が電話してきた。

「子どもが家を飛び出して何度も警察に探してもらっています。これ以上は限界で、学校の寄宿舎を利用したいと考えていたのですが……」

本ケースについては、過日、当該児童を診察した医師からも電話が入っていたことがわかった。

母は、今日来所するつもりだったようで、慌てて A 福祉司の不在を説明し、今後の対応について了解を得た。

一段落し、あらためて彼が記載している児童記録票を見ると、とても十分とは言えない内容だった。少々嫌みかなと思いつつ、本日の出来事を、私ならこう書くという、いわばお手本のつもりで児童記録票に記載し、彼の机の上に置いておく。

文化？

ここで、本事例のその後の経過を見ておこう。

母親は、知的障害児施設（当時の名称）への短期入所[*1] を希望したというのだが、この相談について、A 福祉司は母に「(候補となる）知的障害児施設が OK と言ってくれるなら可能です」と回答した上で、そのためには実際に子どもを見てもらう必要があるからと、施設に電話して母子の訪問日程を決めたというのである。

A 福祉司もその場に同席するつもりだとはいうものの、彼にとっても、その場が母子と初対面になるというのだ。

「まずは児童福祉司が母親から十分話を聞き、家族の事情や本人の状態をきちんと把握した上で、その必要性を認めるなら、緊急性なども判断して施設側にきちんと依頼するなど、児童相談所として責任を持って対処すべきではないのか」

インテーク面接も所内会議も飛ばし、施設と保護者任せのような形で話が進んで行くことに疑問や不安が高じ、「心臓が高鳴ってしまう」と私は日誌に書いていた。

同時に、次のような疑問も湧いてきた。

「彼によらず、ここの児童相談所では、こういうやり方が当たり前になっているのだろうか？」

というのは、前号で書いた緊急の養護相談のことが脳裏に残っていたからだ。あの事例では、相談の電話が入った段階で、担当児童福祉司が保護者との面接を経ないまま施設に打診しており、「私のセオリーでは、保護者から直接話も聞かないうちに施設の打診はしない」と述べたはずだ。A 福祉司は、自身も同席するとはいえ、いきなり母子を施設に行かせようとしているのだが、先の事例とどこか似ているような気がして、こうしたやり方が、当児童相談所の文化なのかと疑ったのであった。

ケース進行管理会議

それはともかく、A 児童福祉司のこうした動きを見るにつけ、課長たる私の任務として、ケースの進行管理が重要であることを否応なく認識させられた。

さて、あらためて日誌を見ると、赴任した 6 月には、すでにケース進行管理会議が行われていた。受付相談員が、各児童福祉司ごとに担当ケース一覧表を作成し、施設入所ケース、在宅ケースに分類し、在宅ケ

*1 この当時は、障害児施設への短期入所（ショートステイ）は、児童相談所が相談窓口になっていた。

ースは、「継続指導」や「児童福祉司指導」等すでに援助方針が決まっているものと、受理はしたものの、まだ方針が決まっていない「調査継続（未処理）」ケースに分けて示してくれている。最初の進行管理会議の様子を、日誌で振り返ってみよう。

> 確かに一覧表があると全体を俯瞰するのに便利。今手元に資料がないので正確には言えないが、いくつか疑問があった。たとえば、A 福祉司が「実質的には 1 年前にすでに終わっているが、処理上はまだ残っている」と報告するケースが目立つのだ。また、主訴と相談種別が一致していないように思われるケースもあった。種別などは統計上の単なる事務的なことと考えているのかも知れないが、実はそうではないはずだが……。

ここでも A 福祉司の名前が登場している。担当者として「相談終結している」と判断しているのであれば、速やかに援助方針会議に提出し、所全体でそれを確認の上、児童記録票に記載して決裁に回さなければならない。会議に上程すれば、場合によっては、「終結する前に再度保護者と連絡すること」とか、「関係機関からの情報を確認すること」などが求められることもあろう。児童相談所運営指針にも「児童相談所の職員が受け付けた相談は、すべて児童相談所の責任において対応すべき相談である。そのため、巡回相談、電話相談等において 1 回限りで終了した相談についても、児童相談所全体でその妥当性について確認する」「援助方針会議は、原則として受理会議後、児童相談所が相談援助活動を行うこととしたすべての事例の援助について検討を行う」などと述べられており、彼が受けている相談も、決して彼個人の相談ではない。組織としての判断が 1 年間もなされず放置されているのであれば、たとえ相手との関係で特段の問題が生じていなくとも、ある意味ではケースの私物化と言わざるを得ない。と、今さらこんなことを書いても、課長であった当時の私が、それにどう対処したかが問われるだけであって、まさに天に唾する類いのことと言わざるを得ない。

私のケース管理

恐縮だが、ここで私の児童福祉司時代のケース管理の方法について、記憶をたどりながら記してみよう。

9 年あまりの児童福祉司時代のうち、8 年間は行政職から来た T 課長の下で働いていたこと、他方、私にはすでに心理職として 10 数年の児童相談所経験があったこと、そのせいもあって T 課長が臨床的な問題にほとんどタッチしなかったことは、すでに「連載【１】前史」で記載した。そのため、担当ケースの進行管理は、自ら行うしかなかったというほかない。

では、どのようにしていたのか。前任者から、担当ケース一覧表とともに児童記録票を受け取り、引き継ぎが終わると、緊急対応を求められるものや、定期的な面接を続けるケースなど、順次面接や訪問などを始めたが、中には、相談が停滞していたり、施設入所ケース、特に長期にわたって障害児施設に入所しているケースなど、大きな動きもなく施設に対応を任せて時間だけが経過するようなケースもあった。

とはいえ、これら全てが私の担当なのである。日々の対応に追われつつも、全ケースが適切に援助されるよう個々の事例についてケースワークデザインを描くこと、また全ケースを俯瞰して自らのスケジュールを調整する、いわば児童福祉司活動のマネージメントが必要であることを自覚するのに、時間はかからなかった。

そこで私は、いつのまにか、2 か月に 1 回程度の割合で、小会議室にこもるようになった。そこには、担当ケース一覧表とあ

わせて全ての児童記録票を持ち込み、1 例ずつ、現状と当面の方針を確認していくのである。こうしていると、重症心身障害児施設（当時の名称）に長期で入所している成人など、担当者は次々に代わっていくのに大きな動きもなく、表紙カバーだけが赤茶けていくようなケースがあることにも気づかされる。

「こちらも十分なことができていないからなあ」

そういう時は、せめてもの罪滅ぼしに、カバーを新しくして心機一転しようとしたこともあった。それはともかく、このように全ケースをチェックして、ペアを組む心理職と打ち合わせをしたり、しばらく連絡が取れていないケースに電話を入れ、面接や訪問の段取りを立てていく。こうして、個々の事例の進行管理と合わせて、自らの動きについても自らマネージメントするよう努力していたのである。

では、他の児童福祉司はどうであったのか。本来ならば、相談係長を兼務していた私が、課長に成り代わってケース進行管理を担わなければならなかったはずだが、私自身が地域を担当していたこともあり、十分なことができない。結局、彼らも私と同様、自分なりのやり方で自らのケースを管理していたものと思われる。換言すれば、前任地の児童相談所では、組織的なケース進行管理が不十分だったと言っていいだろう。

とはいえ、記憶にある限り、このような進行管理でケースに漏れが生じることは一度もなかったはずだ。というのも、職場には受付相談員がいて統計関係のチェックをしており、動きが止まっていたり書類が回ってこないなど、気になるケースについては適宜児童福祉司に声を掛けていたし、時にはこちらから確認、照合して、漏れを防いでいたからだ。

「この地域を担当する児童福祉司は、日本全国どこを探しても､私以外にはいない」

こういう自覚があったので、一度受けた相談を、それが順調に進むかどうかは別として､少なくとも忘れるなどということは、あり得ないのであった。

問題その１－ＭＳ-ＤＯＳ

さて、話を元に戻そう。課長としてケース進行管理会議に出てみると、日誌にも書いたように、受付相談員が管理している各福祉司ごとの担当ケース一覧表は、大変便利であることがわかった。

ところが、数か月後……。

> パソコンによるケース進行管理がうまく使えない。何故かというと、データ管理が Windows 上のシステムではないからだ。困って操作を前任の課長である S 氏に尋ねたら､「月曜日が空いているので、その時そちらに行く」という。それはそれでありがたいのだが……。

実はこのシステム、すでに異動して他の児童相談所で相談判定課長をしていた S 氏が、今はもう忘れ去られ、販売もされていないようなデータ管理ソフト「The CARD」を使って設計し、導入したものなのだ。ただし、Windows が登場する前の MS-DOS 時代に設計されていたため、この時にはすでに不都合が生じていた。簡単に言えば、当時の全ての児童相談所の統計システムのメンテナンスや技術指導が彼にしかできないという問題だ[*1]、加えて、彼も

*1 その後、日々強まる要望をふまえ、S 課長は膨大な時間を割いて、データベースを MS-DOS から Windows に移行させている。まさに驚嘆すべき作業だが、だからといってメンテナンスを彼が一手に引き受けるしくみは変わらず、その後（私の退職後）、京都府は予算を組んでデータ管理システムを再構築したのではなかっただろうか。

公務員であり、いつ児童相談所から異動するかわからないという危惧もあった。

「そこまでしてもらうのは申し訳ない」と返答したものの、本来業務を縫って、彼が来てくれた。私にすれば、MS-DOS を使うのは、オートマチック車にしか乗れないドライバーが、マニュアル車を運転するようなもの。ケース進行管理システムがうまく使いこなせないといろいろ支障があるので、助かるのは事実であった。

パソコンの前に座る S 課長の作業をしげしげ見ていると、このシステムに対して彼が深い愛着を持っていることがよくわかる。ただし、私の MS-DOS 理解は何ら進歩していないので、依然としてこのシステムを縦横に使うことができない。

さまざまな形でケース進行管理を行う必要を痛感していた私にとって、問題は依然として未解決のままなのであった。

問題その２－欠席

ケース進行管理を行うにあたっては、もう一つ問題があった。たとえば 8 月の進行管理会議を記録した日誌。

> 今日は午前中が課会議。まずはケース進行管理だが、みんなが指摘する肝心の A 福祉司がお休みで、他のメンバーは若干不満気味。

また 10 月も……、

> 課会議。A 福祉司が年休で、他の福祉司から不足が出る。「ケース進行管理は彼のためにこそ必要なのに……」と。
>
> 昨日、新しくプリントした進行管理表を全員に配布しておいたので、これをいやがっていた彼には、プレッシャーだったのかも知れない。
>
> 「進行管理は明後日のミーティングの時に行います。今日は所用で休みます」
>
> こんな伝言が、受付相談員に残されていた。彼も進行管理を気にはしているのだろう。それはさておき、彼の年休の残りは、これで 2 日のみとなった。

そして 11 月には……

> ケース進行管理について。課会議が飛んでしまったので、この日実施することにしていたのだが、ケース関連であれこれ動きがあって全員から報告を受けることができない。そのため、（結果的には）A 福祉司の分だけを行うことになったのだが、調査継続（未処理）になっているケースのうち 2 件を、「思い当たらない」という。

「思い当たらない」という事例がどのようなもので、実際に彼が失念していたかどうかは、今となっては不明だが、仮に忘れていたとしたら、それこそケース進行管理の必要性はいや増すと言えよう。

ただし、A 福祉司の場合、進行管理会議が重荷になって、貴重な年休を、この日に当てて使っている可能性もあろう。いくら会議を開いても、欠席されるのでは管理が不十分とならざるを得ないではないか。

私には、MS-DOS で作成された進行管理一覧表を手の内に入れることができない焦りと、せっかくの進行管理会議からするりと抜け落ちていく福祉司への対応という 2 つの問題に対する解決策が求められているのであった。　（つづく）

本稿は、「児童虐待防止法」制定、施行の前後、筆者が児童相談所の相談判定課長時代に書き付けていた個人的業務日誌を改めて繙（ひもと）き、現時点で振り返ろうとするものである。

＊題名を click すると本文へジャンプします。

これまでの連載
序
(1) 前史
(2) 最初の 1 か月
(3) ソーシャルワークの手順

精神科医の思うこと④

－私の旅のスタイルと“ポーランド”－

松村　奈奈子

この冬、夫婦で３回目のポーランドを巡ってきたので、今回のテーマは海外旅行とポーランド。

★これまでの私の海外の旅のスタイル

好奇心旺盛なので、独身時代はよく旅に出かけました。

大学卒業旅行でドイツをユーレイルパスで友達とバックパックで巡ったのが、初めてのヨーロッパでした。“なんて熟した文化なのだろう”と魅かれました。

その後しばらくは研修医生活で“旅”どころではなかったのですが、研修医生活を終えても仕事に夢中になっていた頃、“先生、ちゃんと遊ばんとあかんで”と看護師さんが強引に韓国旅行に連れだしてくれました。就職後、数年間仕事ばかりしていた私は、余裕がなく何か欠けていたんだと思います。あかすり、焼肉など定番の女子旅でしたが、ゆっくり自分の時間を過ごせた時、“ちゃんと遊ばんとあかんな”と気づかされました。この時、そんな凝り固まっていた私に気づき、連れ出してくれた看護師さんには、今でも感謝しています。

これをきっかけに、時間を見つけてはまた海外旅行に出かけるようになりました。

ある時、オランダを訪ねたら、なんだか肌にあって虜になってしまってしまい、その後結婚するまでよく訪ねました。オランダは実に旅行しやすい国で、誰もが英語を話し、鉄道網もしっかりしており移動も楽です。テクセル島という北海に面したオランダの島を訪ねたり、小さな町の温泉にいったり、ファームステイといって農家に泊まったり…名所を訪ねるというよりは、生活スタイルを覗いたり、体験型の旅を楽しんでいました。

オランダの地元のスパ施設ではサウナは男女一緒の裸スタイル。ドキドキして友達とトライしましたが、異性の裸に対する概念の違いを受け止めると、何だか抵抗はなくなり面白かったです。最後はどうどうと裸でかっぽしていました。

一人旅の時は、ネットで申し込むファー

ムステイを数回利用しました。“アジアからくるお客は初めてだわ”と、どこでもかわいがってくれました。家族の一員みたいに一緒に食事をしたり、ドライブに連れてもらったり、夜は暖炉の周りに座って、家族の写真を見ながら、空軍に勤務する息子の自慢話を聞かせてもらったりと、楽しい時間でした。農家も世襲制ではなく日本との違いを感じる一方で、ちょっぴり保守的で親切な田舎の雰囲気は日本と同じだなって感じたりしました。

また、私は仕事柄、医療と教育に興味津々。もちろん、医療と教育はその国の大切な基盤だと考えています。旅先でもチャンスがあれば病院や学校を覗くことにしています。しかし、病院も学校も“ただの旅人”には欧州ではなかなかハードルは高く、お話を聞いたり、外から覗くのがせいいっぱいという感じでした。

ただ、十数年前にバリ島に行った時は別でした。たまたま地図で精神科病院を見つけたので、ホテルでガイドとタクシーをチャーターした時はおもしろい体験ができました。ダメもとでガイドの女性に学校と病院を見たいと告げると“ＯＫ”と軽い返事。まずは総合病院、ガードマンに小銭を渡し病棟の中まで見学できました。精神科の外来はやはり建物の端の方で、ぽつりと座って待っていた男性の姿が印象的でした。次に本命のバリ島唯一の精神科病院に。タクシー運転手が“行きたくない”ごねている様子で、ガイドが説得してくれている様子がおもしろかったです。病院に着くと、これまた門番にガイドが小銭を渡すと中まで全て見せてくれました。見学中に開放病棟の患者さんが、わなわなと出てきて話しかけてきます。日本とかわらないなぁと嬉しくなってしまいました。

次はガイドの女性の子どもの通う小学校に連れていってくれて、これまた授業中なのにぐいぐい教室の後ろに。学校では日本語を勉強しているらしく、わなわなと子どもがよってきて、みんなで“いち、にー、さん”と日本語勉強の成果を披露。子ども達と即席日本語授業みたいになって、なんだかとっても楽しい体験でした。

さらに“島民の普通の生活が見たい”というとこれまた“ＯＫ”と軽い返事。連れて行ってくれたのは自宅を公開する事で収入を得ているという家。またまた、ガイドが小銭を渡して家の門をくぐります。欧米系のリクエストでこうゆう家の存在があるのでしょう、見学者は欧米系の旅行者ばかりでした。庭の中心に祭壇があって、本で見たバリ島の家の典型的な作りでした。台所で炊きあがったお米にアリがごま塩の様にいたのが印象的でした。その後、ガイドの女性は自分の自宅にも招待してくれ、学校から帰った子供たちと一緒にお茶を楽しみました。

最後はタクシーの運転手さん、ガイドの女性と子供と一緒に屋台に出かけ、みんなで地元ごはんを食べ宴会状態に。“変な客”に不機嫌だった運転手さんも、最後は笑って許してくれました。

もちろん、屋台のナシゴレン（焼きめし）には炒めたアリがごま塩のようについていましたが、とっても美味しかったです。

数年前まで病院勤務の合間に病院付属の看護学校で授業をしていました。上記の体

験記をちょこちょこ授業の初めにしていたところ、授業後のアンケートで旅行話は結構好評でした。

私は学生に、多様性を受け止めるおもしろい社会人になって欲しいと思って、毎年この体験記を話していました。

★そして、今なぜにポーランド？

夫はフランスを中心にラテンの国が好き、私はオランダ・ドイツを中心にゲルマンの国が好き…。

当然、結婚後二人で旅の計画を立てはじめるとまとまりません。その時、一致した旅先が“一度、アウシュビッツを訪ねてみよう”でした。

ベルリンから国際列車で初めて訪ねたポーランドは、魅力的な国でした。

アウシュビッツ訪問のため宿泊した都市クラクフは、ナチス司令部があったので戦争被害を逃れたため街並みは美しく、人々は暖かく治安も良かったです。

情報過多の西ヨーロッパと違って、東ヨーロッパは新たな発見の連続でした。西ヨーロッパではどこにでもある中華レストランがほとんどなく、寿司屋も多くはポーランド人が握っています。共産圏であった歴史が、いろんなところで影響しているのが感じられました。逆にいうと、西ヨーロッパよりもヨーロッパらしさが、色濃く残っている印象を受けました。

物価もドイツの２／３ほどで旅人には助かりました。しかし、当然賃金も低く、英語やドイツ語のできる若者が西ヨーロッパに出稼ぎに行ってしまうというのもうなずけます。ちょうどクリスマス休暇にベルリンからの国際列車に乗ったのですが、ドイツから帰省するポーランド人で満員でした。

そんな感じで、夫婦してポーランドにハマってしまったので、昨年はポーランド北部から中部の大都市（グダンスク・ポズナニ・ブロツワフ）を、今年は南東部の小さな街（ルブリン・ザモシチ・ジェシェフ・プジェミシル）を鉄道で巡りました。鉄道網[※1)]はしっかりしており、旅はしやすいです。夫婦して感じたのは、大都市よりも小さな街を旅した今年が楽しかったです。素朴な人のやさしさや時間の流れのゆったりさが、熟年夫婦にはあっていたのかもしれません。

ポーランドでは、小さい街を訪ねても、ナチスの爪痕を必ず目にします。

ルブリンのマイダネク強制収容所。アウシュビッツ・ビルケナウに次ぐ規模の収容所です。ドイツ国内の収容所も訪ねましたが、収容所の多くはポーランド、特にウクライナなど南東部の国境付近に多く点在することも、訪ねていくうちに理解しました。

世界遺産の街ザモシチ、それはルネサンス建築の残るきれいな街です。しかし、歩いてすぐそばにあるロトンダという１９世紀の要塞は、ナチスにより処刑場として使用され、美しい円形の要塞の周囲には数えきれないほどの十字架が立っていました。

今回の旅では、私は小さな街のこの風景が一番心に残りました。

ポーランドの街を訪れる度に、私はナチスが行った事をまだまだ理解できていなかったんだと痛感させられます。

そして、ナチスの爪痕を扱った映画をいくつも見てきましたが、その本当の背景を理解していなかったんだとも感じさせられ

ました。

アウシュビッツ・ビルケナウ収容所では専任の日本人ガイド※2)を申し込みました。彼のガイドは我々に問うように、考えさせられるように、淡々と語られます。見学しながら、これまで見てきた映画がいくつも思い出されました。

ワルシャワのワルシャワ蜂起博物館。唯一日本語オーディオガイドがあった博物館でした。

丁寧なガイドを聞いていると、あっという間に半日が過ぎていました。映画“戦場のピアニスト”の背景がワルシャワ蜂起である事はしっていましたが、博物館を訪ねて初めて、主人公をとりまく本当の状況を理解できた気がしました。映画監督アンジェイ・ワイダの好きな夫は、その作品を思い出していたと言います。さらに、ワルシャワ蜂起（１９４４年）の実情を、ポーランド国内では社会主義政権崩壊の１９８９年以後に、ひろく国民が知る事ができるようになったと知り驚きました。それゆえ、博物館は２００４年の創立です。ソビエト（ロシア）の影響下では歴史さえも統制されていたのです。

歴史に翻弄され、国土が戦場になったというのはどんなことか？を、ポーランドでは訪れた小さな街の爪痕を見つめながら、いつも考えさせられます。

もちろん、戦後美しく再建された街並みやお城をみたり、美味しいものを食べ歩いたりも、ポーランド訪問の楽しみではあります。

私たち夫婦は、ポーランドから学ぶことがまだまだあるように思えて、またポーランドを訪ねたいねと話しています。
よかったら、いつか、みなさんもどうぞ。

★注

1）鉄道網はしっかりしています。しかし、実はユーレイルパスを販売しているのに、現場の乗務員さんがいまひとつパスの存在をしらないので、英語で書かれたパスをみてとまどう乗務員さんが多いです。ワルシャワ駅でさえ同様の対応です。ただ、みんな優しいので、希望をとにかく伝えると何とかなります。

2）“地球の歩き方”にもアウシュビッツで・ビルケナウ専属ガイドとして載っている、有名な日本人ガイドさん。見学の際には“地球の歩き方”をみて、メールでぜひ事前に申し込んでください

おくのほそみち

～‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に～
三歩目；‘あなた－私’という関係 によって変わる‘場’

4

理学療法士
奥野　景子

ある授業で「私は、クライエントのことをクライエントとしてしか見られないような気がするんです。なんてゆうか、尊敬とかそうゆう対象として見るイメージがわかないんですけど……」と、女の子が言った。このことについて先生が何か言っていたような気がするが、あまり覚えていない。‘クライエントをクライエントとしてだけしか見られないってどーゆーことなんやろう…？？’と、頭の中がぐるぐるしていた。

～前々回、前回のおさらいと今回のこと～

前々回のマガジンでは、「リハビリテーションが行なわれる場」について書こうと思っていました。ただ、いざ書き進めてみると‘場’そのものについて疑問が浮かび（誰にとってのホームグラウンド？アウェイ？‘家’ってそもそもなんなんだ？など）、「‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に」というテーマで、それに関する自分の中にあるもやもやを書きました。

そして、前回のマガジンでは、‘場’に着目するのではなく、‘あなた－私’といった目の前にいる人と自分自身との‘関係性’が大切なのではないかという考えについてエピソードを交えながら書きました。

今回のマガジンでは、「‘あなた－私’という関係 によって変わる‘場’」というテーマで、‘関係性’の変化に伴いその‘場’の意味、あり方、ありようも変わるのではないか？、またその反対もあり得るのではないか？ということについて書いてみたいと思います。

1. **冒頭のエピソードでの ぐるぐるについて**
2. **「呼応する‘関係性’」と「呼応する‘場’」**
3. **リハビリテーションが行なわれる場**

1. 冒頭のエピソードでの ぐるぐるについて

「自分は、一緒にリハビリをしている人たちのことを何て思ってるんやろ…？？」これこそが、私の頭の中のぐるぐるの正体だった。そして、そのぐるぐるに対する私なりの答えは、前回のマガジンそのものである。私にとって一緒にリハビリをしている人たちは、クライエントでも患者でも当事者でも利用者でもない、ただの「○○さ

ん」である。だから、私には目の前の「あなた」と向き合うことしかできないと思っている。そして、その「あなた」は、色々な疾患を抱えているかもしれないし、日常生活で悩みごとを抱えているかもしれないし、私の知らないことをたくさん知っているかもしれないし、私にとってどうでも良いことをとても大切にしているかもしれないし、誰にも言いたくない秘密を持っているかもしれないし、どーしようもなく最低だと思われてしまうような部分を持っているかもしれない。その全部を知りたいとは思わないし、その全部を知れるとも、理解できるとも、共感できるとも思わない。それでも、私が向き合わなければいけないのは、目の前の「あなた」でしかないと思っている。

2. 「呼応する‘関係性’」と「呼応する‘場’」

ここからは、エピソードを通して‘私’によって‘あなた’が変わり、‘あなた’によって‘私’が変わり、‘関係性’によって‘場’が変わり、‘場’によって‘関係性’が変わるということを書いてみたいと思う。

●ガウチョパンツ●

その日の訪問直後から私は彼女が履くガウチョパンツが羨ましくて仕方なかった。と言うのも、その時期、ガウチョパンツがとても流行っていて、自分も履きたいと思っていたものの、おしゃれに着こなす自信もなく、背の低い私にはただの少し長めの半ズボンみたいになるんじゃないかという不安もあって、店頭で気になっても試着する気にもならない、けど、気になって目についてしまう、というような日々を過ごしていたからだった。

立ち上がり訓練の休憩中に『今日はおしゃれなの履いてますね～。今、流行のガウチョパンツじゃないですかぁ～』と言うと、彼女は上品にうふふと笑いながら「娘が買ってきてくれたの」と言った。『私も良いなって思うんですけど、履きこなす勇気がなくて買えないんですよね～…』「えっ、なんで？ただ履くだけやのに？」『そりゃ背が高くてスッとした人が履いたらおしゃれですけど、小さい幼児体型が履いたら、ただのちょっと長めの半ズボンになりますもん…』「そうかなぁ～？そんなことないと思うけど…ほら、Sサイズとか買えば良いやんッ」『…あぁ～、出た出た！知らないでしょ？世の中 Sサイズは、ほんまに小さい人にはおっきいんですよ！子どもの 150 が入る人にはSサイズはおっきいんですッ！全然 S じゃないんですからね！！』この後、立ち上がり訓練をしながらも立った時の裾の長さがあーだこーだ、そこから出てる足首の細さが肝心なんだ、ちょっとチビを馬鹿にしてるでしょ！？などなど、なんだか楽しい時間を過ごした。その時ばかりは、体幹が曲がったままの立位姿勢になっていることや回数を重ねるごとに徐々に膝が伸びにくくなっていることはどうでも良かった。でも、そんなところを気にしながら会話をして、彼女のガウチョパンツを見て、彼女の両手を支えながら立ち上がり訓練をしている自分のことが不思議で仕方なかった。

●重たいふすま●

「そのふすま、重たいやろ～？ごめんやでぇ～」私は、いつも通りそのおばあちゃんが待つ部屋に入っていったのだが、今日の開口一番はこれだった。『ん？大丈夫でしたよ、ありがとうござ…』と言い終わらないうちにそのおばあちゃんは立ち上がり「んなぁこたないわぁ～、ほら！！ここで引っ掛かるやろ？？」と、ふすまの引っ掛かりを実演しながら説明してくれた。そして「こーゆーのは、ロウを塗ったら軽くなるんやけど、私の体じゃできひんしなぁ…すぐに出来るんやけどなぁ～」と続けた。いつも以上に腰を曲げ、大袈裟に悲しそうな声を出しているのがわかるくらいに大根役者な感じだった。だけど、もしかしたら本当に悲しいのかもしれないし、おばあちゃんの実演では確かにふすまは重たそうで、おばあちゃんの力では開けにくそうだった。だから、荷物を部屋の隅に置きながら『ロウソクってあるんですか？』と聞いてみた。すると、いつも以上に背を伸ばし、聞いたこともないような弾んだ声で「そりゃあるよ、あるに決まってるやんっ！！」と返された。‘こりゃ、確信犯やな’と思うと、不覚にも私の顔はニマニマしてしまった。おばあちゃんは「こんなこと頼んだらあかんのになぁ～、また変なあばぁが面倒なこと言ってきたわ、むなくそ悪いって思ってるんやろぉ～？」と言いながら仏壇に向かい、引き出しからビニール袋の中に丁寧にしまわれたロウソクの箱を取り出して私に渡した。言っていることとやっていることが全く違う、完璧な大根役者だった。だけど、その人らしい、京都の女らしい感じがどうにもこうにも憎めない。私は、言われるがままそのふすまの敷居の溝にロウをこすりつけた。仏壇用のロウソク一本がなくなるくらいだったから、結構頑張って塗ったと思う。「あぁー、これで大丈夫やわ、ありがとーなぁー」と、ふすまを行ったり来たりさせながら嬉しそうにしてくれた。そんな顔を見ると私も調子に乗ってしまう。『この際、全部やってまいましょか！？』「えっ、そんなん悪いやん。何しに来てもらってるかわからんやん。怒られてまうわぁ」と言いながらも、おばあちゃんはあははと笑っていた。私は、新しいロウソクを出して、おばあちゃんの生活動線にある全部のふすまの敷居の溝にロウソクを塗ってまわった。と言っても、二か所くらいだが。

たまに、そのおばあちゃんちのふすまを開ける時に‘次に引っ掛かりが出来た時は、もっと上手にロウソクを塗れる気がする’と思ってしまう自分がなんだか面白い。

●畳の部屋●

その部屋は、たまに大きな窓から庭を見る時に入る程度の部屋だった。仏壇があり、床の間には綺麗な掛け軸が、和箪笥の上には日本人形が飾られていて、そこから眺める小さな日本庭園はとても美しかった。そこにあるおじいちゃんご自慢の南天の木を見るのが好きだった。ほっこりする、どこか懐かしい感じがするその部屋で、なぜか乱雑な我が家の和室の面影を感じることもあった。

その日は、お庭を楽しむ為ではなく、

最近の検査でわかった病状を踏まえて、今後の方針を検討するサービス担当者会議が開かれる為にその部屋に入った。関係者がぞくぞくと集まってきた。そして、会議が始まった。各担当者から色々な話があった。私からは‘リハビリでは、本人さんの意向に応じてお話を伺いながらやっています’と話した。そりゃそうだろとなるのだが、それが一番大切で、それが一番難しいと思っている。会議が進むにつれて、いつもとは違う、その場の空気の色がわかるんじゃないかというくらい重たいものが部屋に充満する。最後に、おじいちゃんが自分のことを話した。上手く言えないが、とても強い人だなと改めて思った。その瞬間、部屋の重たい空気が切り開かれ、真空状態のように何もなくなるような、空気が張りつめた、本当の透明になったような気がした。

その後もその部屋には、何度か入った。お庭を見に行ったり、亡くなったおばあちゃんに手を合わせさせていただいたり、おばあちゃんと一緒に寝ていた寝室ではなくその部屋でリハビリをしたり。どの場面を思い出しても、同じ部屋なのに違う色が滲み出てくる感じがしてくる。

●西陣織●

玄関を開けるといつもと違う雰囲気を感じた。いつもは節約のためと電気をつけていないのに電気がついているし、大音量のテレビの音が聞こえない。何事かと思って部屋に入ると、おばあちゃんだけでなく娘さんとお孫さんもいた。今日は、お孫さんが風邪で保育園をお休みし、お仕事を休んだものの仕上げないといけない仕事があり、家でやっていると言う。娘さんは、西陣織の着物や帯に刺繍をする仕事をしている。私は、初めての光景にわくわくしたものの、横に座っているおばあちゃんとリハビリをしないといけないし、風邪ではあるが元気に走り回るお孫さんの相手もしないといけなかった。いつも通りに始めたものの、気になって仕方がない。ちらちら見ているとそれを感じたおばあちゃんと娘さんが西陣織の仕事、刺繍のこと、京都の織物業の歴史、最近の動向などについて教えてくれた。おばあちゃん自身は、自宅で西陣織の織物屋さんを旦那さんと一緒にしていた。手先が器用でしっかり者だからと、中学卒業時に声を掛けてもらって刺繍の世界に飛び込んだ娘さんのことを何度も自慢されていた。「女でも手に職があるってゆうのは大事なんやでぇ。あんたもやけど、それがあったら仕事があるんやからなぁ」と。その娘さんの仕事を間近で見られることが嬉しかった。その仕事のことを娘さん自身から教えてもらえたのが嬉しかったし、楽しかった。

その日のリハビリの時間は、私の社会科見学のようだった。知らないことに触れられることも私がこの仕事を好きな理由の一つだと思う。

さて、いかがだったでしょうか？どのエピソードがどの視点から書かれているのか、どのことを言っているのかは、私にもよくわからない。それは、たぶん重なり合っている部分もあれば、角度によって見え方が変わる部分もあるような気がしている。上手く言えないが、関係性も場も、そこにい

る人や空気、そこで起きた出来事に呼応するように変化し続けながら流れているように思う。

3.　リハビリテーションが行なわれる場

ついに、このテーマについて書きたいと思う。今回のマガジンの副題も「‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に」としていたものの、考え続けた結果、たどり着けたような気がしている。(と言うより、今となっては、今までもこのテーマについて書いていたと思っている)

関係性が変われば、場も変わる。関係性が変わるのは、各々の役割が変わるから。その変化は、とても微細かつ繊細で、瞬時に起きる。常に起きている、と言った方が良いのかもしれない。どの場面を切り取っても何か一役だけを担っている訳ではなく、そこには濃淡があり、捻じれたり、絡んだり、歪んだり、緩んだり、離れたり、近づいたり、後ろに隠れたり、隠したり、前に出してみたり、出ちゃっていたり…。これは、おそらく関係性にも場の現れ方にも言えることだと思う。

つまり、「リハビリテーションが行なわれる場」について考えるにあたっては、そこで誰が、何を、どのように行なっているのか、営んでいるのか、創造しているのかを考えなければいけないと思う。やはり「リハビリテーションって何なんだ？」に行きついてしまう。マガジンを通して、私の中のリハビリテーションの輪郭が浮き上がってこれば良いなと思っている。そして、それが「リハビリテーションが行なわれる場」にも、それ以外の周辺にある様々なことにもつながっているのだと思う。

～　終わりに　～

なんだかんだで、「‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に」、「リハビリテーションが行なわれる場」シリーズを今回で完結したいと思います！！上手くまとまっていないし、明確な何かが見つかった訳ではありませんが、自分なりに得られたものはあったように思います。このテーマについては、また今後のマガジンの中でちょろちょろと顔を出すかもしれませんが、何を書いても結局色々なことにつながっていると思うので、色々な視点から、色々なことが想起され、浮き上がってくるようなマガジンになればと思います。

次回から何を書くかは、まだ決めていません。でも、「リハビリテーションって何なんだ？」につながる何かにはなるはずです。引き続き、よろしくお願いします！！

👣　おくのほそみちのこれまで　👣

第 24 号
新連載決意表明（「執筆者@短信」にて）
第 25 号
リハビリテーションのこと
第 26 号
‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に
第 27 号
‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に
二歩目；〇〇〇と私

多文化共生と心理臨床

④性別と「らしさ」について

ガヴィニオ　重利子

３月８日は国際女性デー。

男女平等とか、女性への機会均等とか、色々と叫ばれて久しいけれど。実際にそのような理念や考え方が生活に浸透していくのにはものすごく長い時間が必要なのだろうと感じる。

わが家の息子達は皆、幼い頃から保育園に通っている。上の子ども達は日本でその時期を過ごしたが、末っ子は生まれてすぐに欧州に渡ってきたため、保育園も現地で通い始めた。給食の影響か、食べ物の好みも違っていて「何が食べたい？」ときかれると、「お寿司！」とか「うどん！」と兄達が盛り上がる 中、彼だけは「パスタ～！」と譲らない。食べ物の好みも、三つ子の魂の一つなんだな～と興味深い。

そんな末っ子が“アナと雪の女王”にハマった。園で仮装をしている子がいたり、主題歌を歌っているお友達がいたりして感化されたようだった。おもちゃ屋さんでドレス姿のキャラクター人形を見つけて「ほしい」と抱きしめ、ねだり出した息子に、いっときの流行りでそう言っているのだろうと「クリスマスまで待とうね」という約束にした。しかし結局彼の思いが消えることはなく、淡いブルーのドレスを着た金髪のエルザ姫が今も 、彼の一番のお気に入りとしてお昼寝のお供を務めている。

そう言えば、これまで一度もお姫様の人形といった「女の子用のおもちゃ」を息子達からねだられたことがなかったことにふと気づいた。その後も末っ子は、アナ雪のグッズを見ると欲しがり、仮装（着る用）のドレスも欲しいと言い出した。さすがにどこに着ていけるかなと考えてしまった私は、少しスパンコールのついたアナ雪パジャマを買ってあげることにした。これもまた大のお気に入りで、同じく大好きな自動車柄やヒーロー系のものと交代で毎日愛用している。

そんな中、先日保育園で粗相をしてしまった息子。洗濯物の袋を開きながら代わりの下着を園に置いていなかったことを思い出し、「今、何を履いてるの？」と息子に尋ねると「これ！」と自慢げに見せてくれた下着は、ピンクのキティーちゃん柄だった。息子はキティーちゃんというキャラクターはおそらく知らないので、先生がそこにあった貸出用をあてがってくださったのだろうと思うが。日本だったら男の子にコレを着さすことにはきっと抵抗（後で親から文句が出るのではないかといった心配も含め）があったのではないだろうかと想像するほど、大変可愛らしい柄だった。その時 にふと、そういう環境だからこそ息子はアナ雪が好き！と思えるようになったのかもしれないと考えさせられた。

この出来事 は、「男の子は、女の子は、こうあるべき」という感覚が実は自分にもあったのだということに改めて気づかせてくれた。「男の子なんだから泣くな」とか「女の子なんだから優しく」などといった露骨な性差別を子どもに向けて放つ大人は、私自身も含め日本でも減ってきているようには思う（あるいはそう望む）のだけれど。実際にはやはり、大人の側にそれぞれの性に対して期待していることや勝手に思い描いている「らしさ」が確実に存在することを自身の中に痛感した。

こういうことは、意識的に慎むことのなかなか難しい「感覚」であって、そうではない感覚（男児に普通にキティーちゃんのパンティーをあてがう先生）と出逢うことによって初めて気づかされるものなのかもしれない 。

そんな欧州でも日本と変わらないのが子ども服売り場。洋服の仕様は男女ではっきりと分かれていることに気づかされる。その傾向を大雑把に言えば、女の子用は男子用に比べて体にぴったり沿うようなデザインが多く、体の曲線を強調するようなカットのものが多いように思う。男の子用はどちらかというとダボっとしていて、種類も少ない。

このような差により、女性は幼い頃から「体の曲線」を意識させられているのかもしれないし、男性は「洋服（見かけ）なんて興味を持つな」と教えられているのかもしれない。そして、そういったことの延長線上に例えば日本では、パンツよりもスカート姿が求められる女性の就活（リクルートスーツ）があったり、汚女は非難されても汚男という言葉は生まれることなくスルーされたりという事態が起こるのかもしれない 。

ちょっと飛躍するようだけれど、それが最終的には身なりや家を整える家事には女性の方が向いていて、男性にとって家事は育メンと呼ばれるようなスーパーヒー

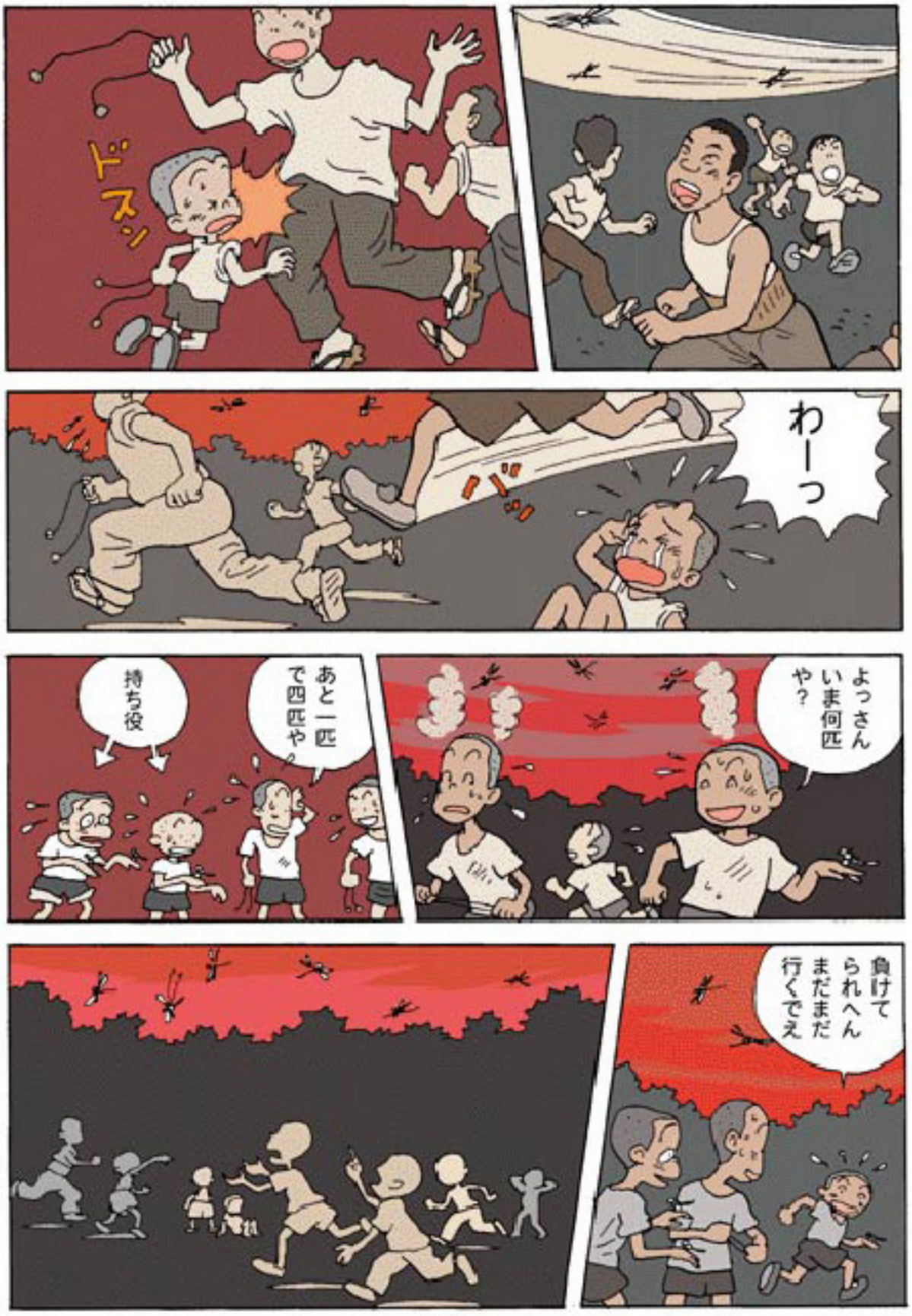
ローにしかなし得ない特殊技能となってしまうこともまた、あるのではないだろうか。

少子化などとも合わせて話題にされる「働く女性」についても、法的整備や保育園増設といった環境整備もさることながら、そもそも根っこにある「男性が生計の主を担わなければならない」「女性は育児を担当した上で働くべき」という価値観自体が見直されていくことも、とても大切な気がしている。

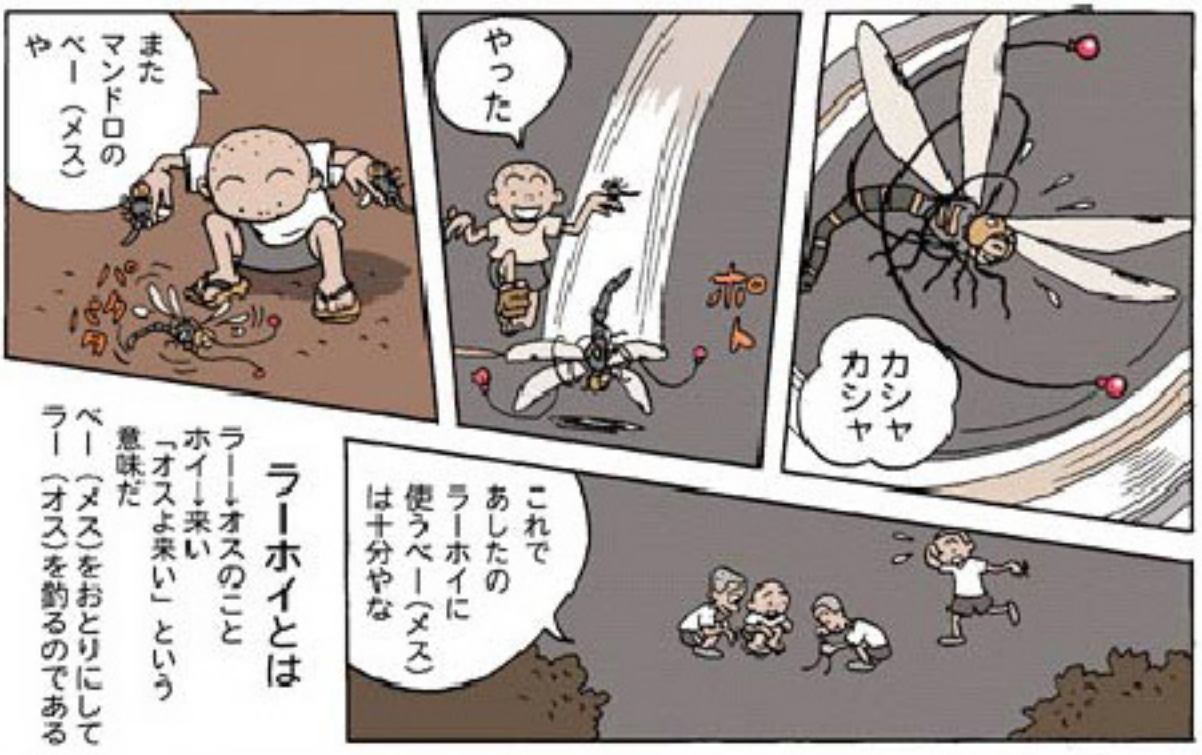
何が男性らしさであり、女性らしさなのか。その定義自体がその社会に生きる人たちの価値観の集合体であり、それらが変化していくには、そこに暮らす私たち一人一人が自身の持つ価値観への気づきを得て思考していくことが不可欠なのだろう。たとえそれに長い時間がかかったとしても。

女性について考えるということは同時に、男性について考えるということでもある。国際女性デーが男女ともに「らしさ」について今一度考えることのできる日として、日本でも話題に上がってくれるといいなと思う。

東成区の昭和ホイラン
昔遊び
ホイたかお 作
来たでだいぶ低い
そりゃ
わーっ
シュルルル
ヒュッ


ドスン
わーっ
よっさん いま何匹や？
あと一匹で四匹やで
持ち役
負けてられへん まだまだ行くでえ

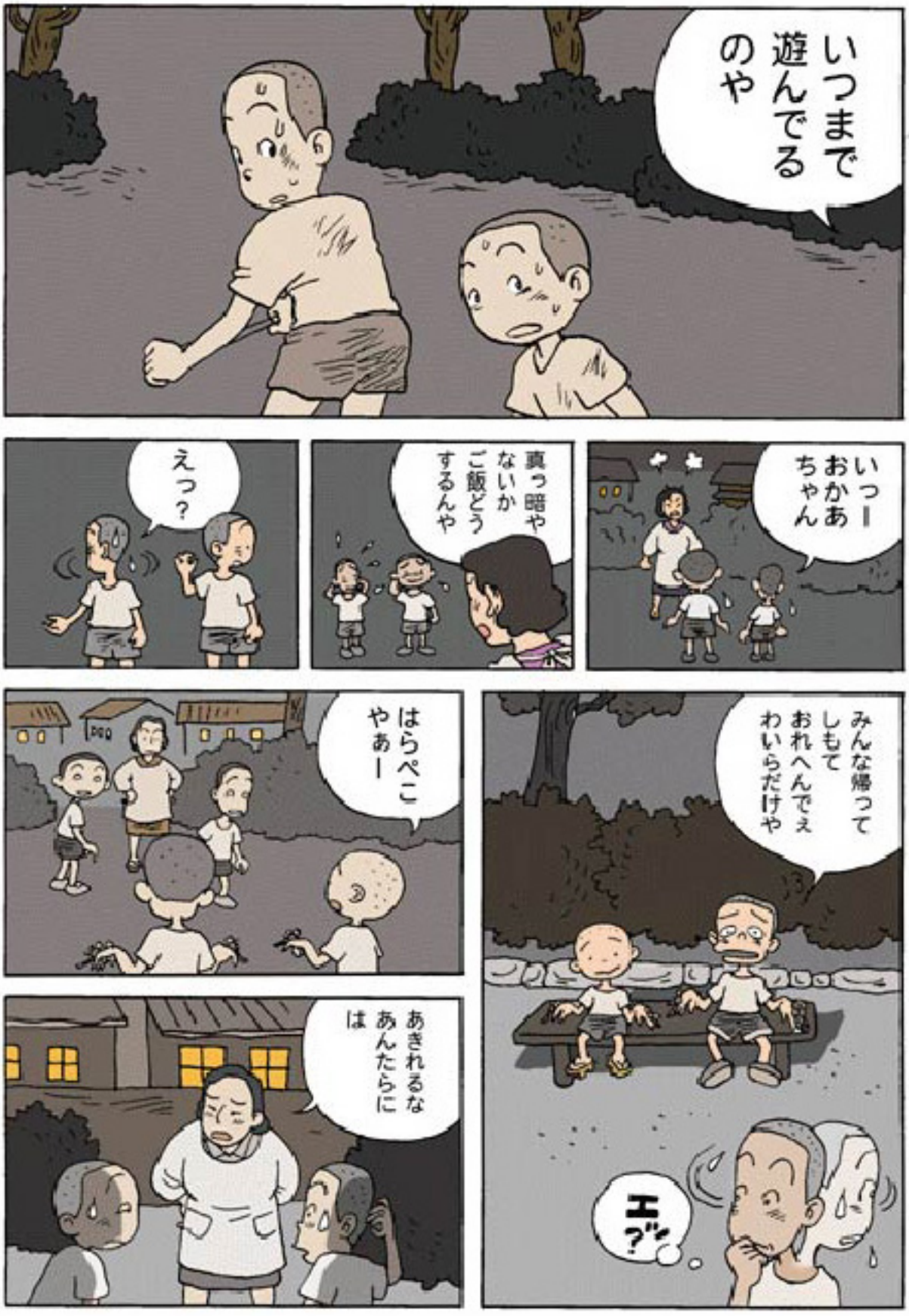
せんやん
ちょっと
投げて
みるか
ヤンマは
暗くなると
全速力で
低空を
飛ぶんや
早いから
姿が見えて
から投げ
たんでは
遅いで
キョロ
キョロ
影を見た
瞬間に
投げるんや
キョロ
キョロ
あかん
遅い！
ヒュッ
わっ
こう
やるん
や
ビュン

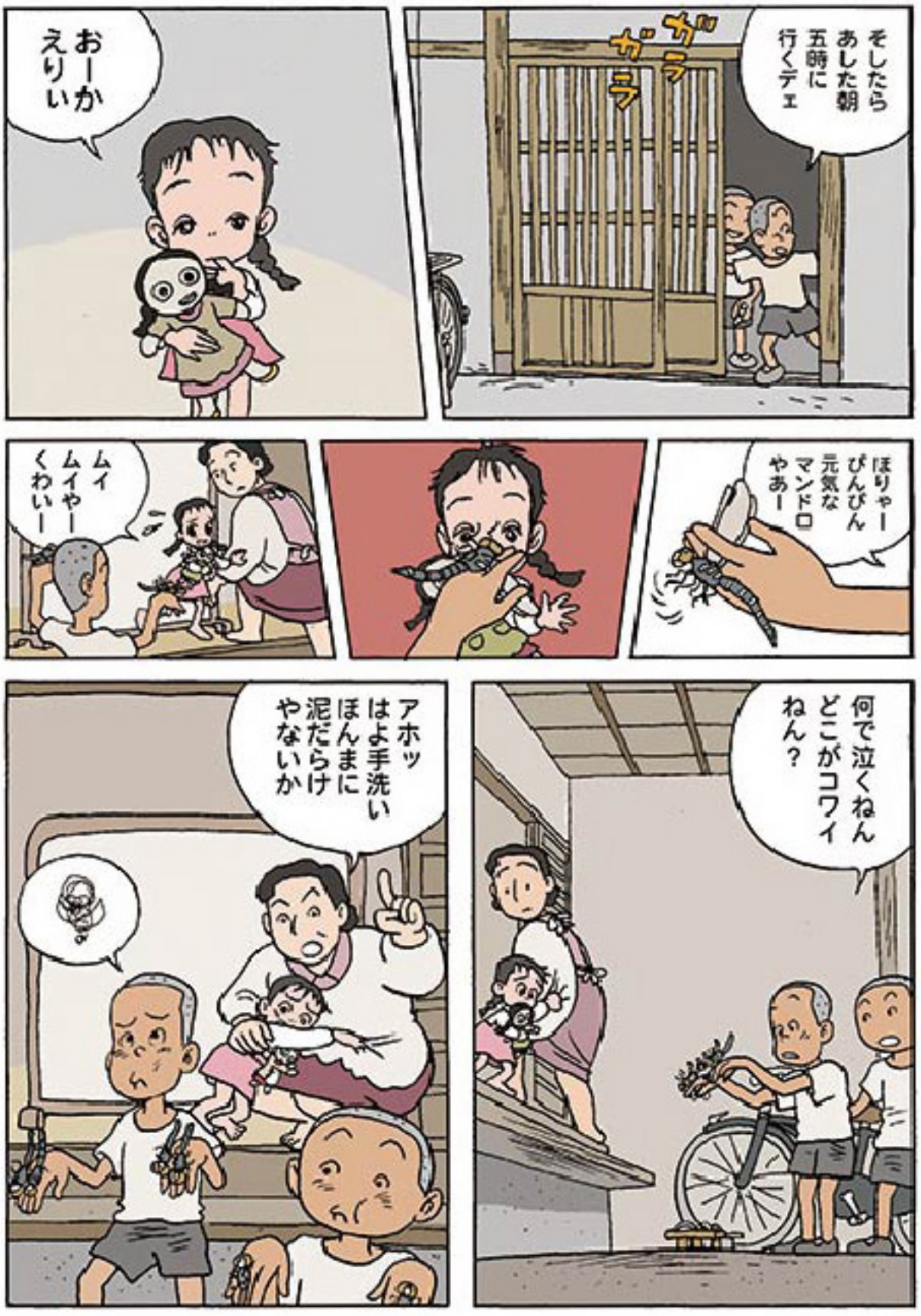


ラーホイとは

ラー→オスのこと
ホイ→来い
「オスよ来い」という意味だ
ベー（メス）をおとりにしてラー（オス）を釣るのである

これであしたのラーホイに使うベー（メス）は十分やな


いつまで遊んでるのや
いっー おかあちゃん
真っ暗やないかご飯どうするんや
えっ？
みんな帰ってしもておれへんでぇわいらだけや
エッ？
はらぺこやぁー
あきれるなあんたらには


そしたらあした朝五時に行くデェ
ガラガラ
おーかえりぃ
ほりゃーぴんぴん元気なマンドロやあー
ムイムイやーくわいー
何で泣くねんどこがコワイねん？
アホッはよ手洗いほんまに泥だらけやないか

ぞうきんに
トンボ
はさんどく
から歩くとき
気つけてや
じーっ
ムイムイや
ムイムイやない
ムイムイや
ムイムイや
くわい
くわい！
あのなあ
泣かしたら
あかんでぇ
トン
トン
トン

本日の営業は終了おー
サバ料理したばっかりですさかい流し匂いまっせ
超満員やなあ
おとうちゃんこのぞうきん踏まんといてや
なんやそれ？
マンドロのベーや朝まで生かしとこ思て
あしたの朝ラーホイレに行くんや
ほーっ立派なメスヤンマじゃ

書簡型連載　３　忘れる　忘れられない

お坊さんとケアマネさん

竹中　尚文　様

差出人　木村　晃子

竹中　尚文　様

寒い北海道からお便りします。立春が過ぎたにも関わらず、寒いのは言うまでもありません。そして、私たちの暮らす北海道で春を実感できるのは、当分先の話です。けれども、私の暮らす町は、いつもの年より、雪がとても少ないのです。ラクをしている冬です。秋頃から苦しんでいる５０肩にとって、雪かきは大変つらい仕事なので、助かります。雪が少ないと言っても、降雪量は例年なみのようです。気温が高い日もあって、降っても解けるのです。（私の町の平均降雪量は、降雪深６００センチ、積雪深１４０センチが平均値のようです。今年の積雪は、１００センチないような印象です。）

さて、少ないと言っても外の景色は真っ白です。この世に映る様々なものが、真っ白な雪に覆われているのは、きれいなものです。雪の下には、春が待ち受けているのでしょう。そんなことを考えながら、町外れを仕事の用事のため、車で走っていました。久しぶりの地域への訪問でした。そこは、１０年来担当していた方が住んでいた地域だったので、懐かしくも感じていました。既にその方は他界されていて、私もその地域へはしばらく足を運んでいませんでした。以前によく訪問していたその家の辺りで、何かいつもとは違う感覚になりました。あれ？と思ったのです。車を一旦停めてみました。辺りは、一帯畑です。はて？〇〇さん（以前担当していた方）の家は、ここにあったと思ったけれ

ど・・・無いのです。何度、目を凝らしても、辺りを見渡しても、その方の家が無いのです。家だけではありません。家の前にあった大きな、大きな木もないのです。その木は、樹齢１００年は超えていたはずです。あったはずのものが無いという不思議な感覚に包まれながら、目的の場所へ向いました。目的地に着いた時に、その家の話しを尋ねてみました。すると、誰もいなくなった空家は、地域の農家の方の農地となったことがわかりました。特別に珍しいことではありません。

用事を済ませた帰り道、もう一度その家があった場所を眺めました。その方との１０年来の思い出が蘇るのです。頑固親父だったその方は、私に様々なことを教えてくれました。凄まじい戦争体験もありました。語り口調も内容もよく覚えています。けれども、その方と一体となって馴染んでいた家も木も無いのです。かろうじて記憶が、そこに家があったことを思い出せてくれましたが、来年になって、一面が麦畑となっている中で、再びその方の家のあった場所だと、私は気が付くことができるのでしょうか。一面に広がる麦畑の中に、記憶を想起する自信がありません。そう考えると、ふとしたさみしさがこみ上げてきます。

人は二度死ぬ、と聞いたことがあります。一度目は、肉体の死。二度目は、その人のことを覚えている人が一人もいなくなった時、と聞きました。人が死を恐れる理由の一つには、自分の存在が、残る人たちの中の記憶から消えていくことにあるような気がします。自分の存在が、肉体としても、生きていた事実としても消えていく・・・これほどさみしいことはないように思います。

『対人援助学マガジン』の２７号の竹中さんの「七日参り」の中で、法身仏のことが書かれてありました。とても納得のいく仏様の存在です。私も父を亡くして一年以上が過ぎましたが、父の言葉は私の中にいつもでも残っています。そして、その言葉は、迷った時に私の支えになっているのです。父の肉体は亡くなっても、私は父のことは忘れることはないと思います。父のことだけではありません。両親の祖父母のことや、それにまつわる人たちのことが、時々思い出として、家族の歴史として語られます。人は二度、死なないように思うの

です。誰かの心の中に生き続けるように思えるのです。そういう意味では、先に記した、私が担当していた方のことも、住んでいた家の場所を思い出すことができなくても、その方が私に教えてくれた数々の事柄が私の中に残っている以上、さみしいと感じることはないのかもしれません。

では、生きている間、私たちは、どのように人と人との関係について記憶を持ち続けているのでしょう。関係についての記憶とは、存在についてと、関係の中の細かな出来事に対する記憶をどのように扱うのか、ということです。

生きている間の人と人との関係では、円滑な関係だけとは限りません。そこには時として、利害やしがらみなどがあります。そのようなマイナスな煩わしさから、人は、人の存在を無いもののようにして扱うことがあるのです。ここに、確かに存在しているにも関わらず、透明人間のように扱われることは、人が人として在ることを否定されているようにさえ感じられます。それは、世の中に起きている差別的な問題から、個人間で起こる存在否定まで・・・。中々辛いものです。記憶という範疇の問題ではないように思います。

また、関係の中の細かな出来事もあります。辛さや悲しみの記憶は忘れてしまいたいものです。けれども、それらは、意思に反して記憶が強化されることがあります。嫌なことほどよく覚えている、というのは、一種の防御反応なのかもしれません。痛い記憶を持続させることで、似たような痛い記憶を引き起こさない・・・などと考えてみましたが、やはり、痛い記憶は痛いものです。過去に捕らわれすぎていると、前進を妨げてしまいます。過去がどんなに辛くても、それはどうにかなることではありません。だとすれば、未来に向けた一歩を作り出すことが賢明です。今、という時間はやがて未来になります。つまり、今の中に未来に向けた希望が見いだせれば、過去の捕らわれから開放されるのかもしれません。逆を言うと、未来への希望が見つけられない時には、中々、過去から脱することは難しいものです。では、未来に希望を持つにはどうしたら良いのでしょう。

あの世とこの世における、忘れる、忘れられない。この世の中で起こる、忘れる、忘れられないことについて、考えてみました。

季節の話題に戻ります。毎年、冬はやってきます。冬の厳しさには多少の差はあるものの、やはり雪国に暮らす私たちは、冬の訪れと共に春を待ちます。どんな厳しい冬だったとしても、春が来るとそれらは忘れます。１年の半分位は、雪との暮らしで活動も制限されますが、残りの半分はそんなことは忘れて活動します。めぐる季節の中で、期待を忘れずに生きていたいと思います。

春を待ちわびながら。

木村　晃子

2017年2月20日

木村　晃子　様

竹中尚文

拝復

雪が覆った真っ白の景色は、雪のない生活を送る者のあこがれです。私は雪かきの苦労もまったく知らずに、茶色い冬景色を眺めながら暮らしています。兵庫県でも寒さの厳しかった今年の冬がようやく峠を越えようとしています。私が住むところは、兵庫県南西部で、関西圏と瀬戸内圏の間のようなところです。早春の瀬戸内海もいいですよ。まったりとした気候で、もう淡路島の水仙も終わりの頃ですし、瀬戸内海西部の島々の柑橘類の美味しさは秀逸です。魚も種類が多くいろんな味を堪能できます。私は2月と3月の牡蠣が美味しいと思います。広島だけでなく赤穂も秀逸です。3月は播磨灘のイカナゴ漁です。この頃のしらす丼も美味です。焼き穴子も捨てがたく美味しいです。

大切な人を送っての旅は悲しいものです。島々の間に沈む夕日に涙するかもしれません。涙する日もあればこそ、笑う日もあるでしょう。大切な人を思いながら笑って生きるのは、少しばかり人生の味が違うのかもしれません。

木村さんのお手紙を拝読しながら、映画『フェノミナ』を思い出しました。私の好きなエリック・クラプトンの音楽がとても効果的に使われていて、いいテイストの映画だったと思っています。死を前にした主人公が、心を通わせた少年に語ります。自分が死んでいくことに、悲しみを覚えるでしょう。しかし、出合いによって少年の心に自分が残っていくことはとても嬉しいことだと話します。往く者は、送る者の記憶に残ることに安堵感を感じるのかもしれません。

最近の巷では、終活と言って、自分の葬儀はどうするなどと言っているようです。葬儀の規模や葬儀社はどこにするということのようです。墓の要不要も言っているそうです。中には、生前に葬儀社を回って、予約をして、それをメ

モに残したりする人もいるそうです。そんなことは、残った人たちに任せておけばいいと思います。愚かな行動だと思いますが、こんなことをする人の多くは死んだら終わりだと思っているように感じます。死を前にして、どうしていいか分からず、オタオタと愚行をしているように思います。

数日前に、あるお爺さんが亡くなりました。彼には、奥さんと娘さんがあります。十年程前のことですが、お参りの折りにこんな話がありました。娘さんの大学卒業の頃でした。娘さんは、生家を離れて都会で大学生活を送りました。奥さんが、

「あの娘は、都会が好きやねん。この田舎には帰ってこない」と。

「おまえ、あの娘が帰ってこなくてもいいじゃないか。あの娘は都会が好きだったらそれでいい。娘が幸せだったら、それでいい。わしらはこの田舎でそっと死ねたら本望や」

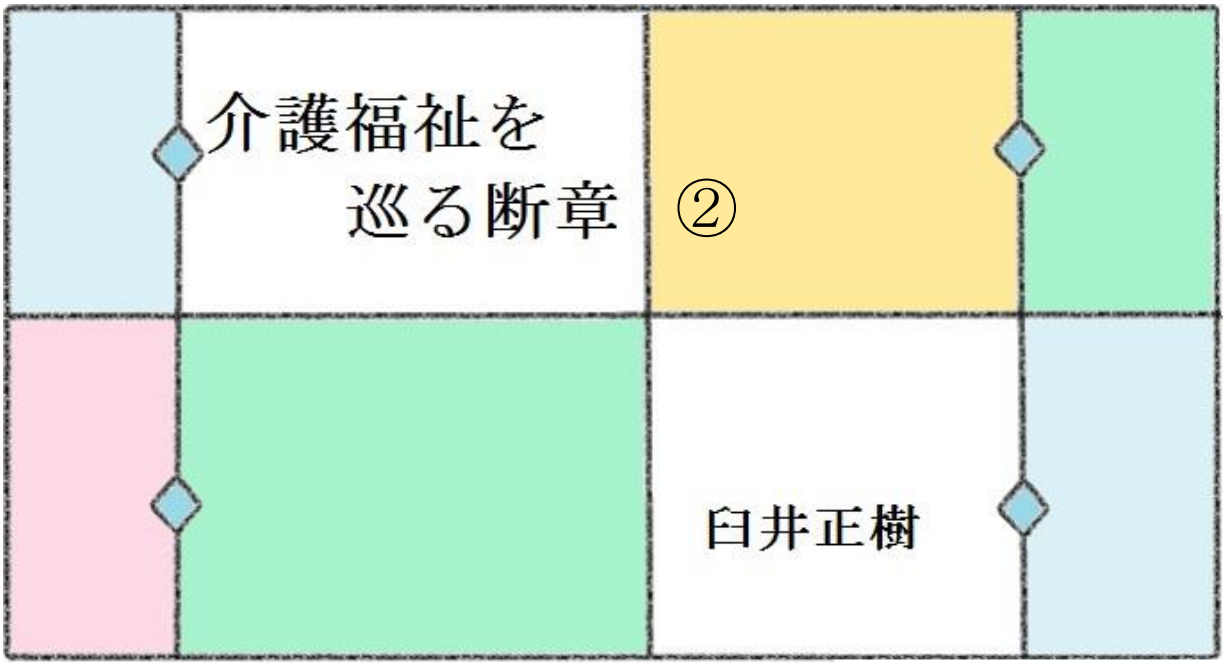
「それは、そうや」

忘れがたい会話でした。そして、先日にこのお爺さんが亡くなりました。昨日、ご近所の方に、このお爺さんは最近、夜が眠れないと言っていたと聞きました。少し年の離れた奥さんのことを思うと心配で眠れないと言うのです。一人残していく奥さんのことを案じていたそうです。

人生の末期にあたって、後に残していく人たちの幸せを願い、心配をしている、というのが、終活であるのでしょう。そこには、葬儀社をどこにするかというような明確な形がありません。しかし、思いを残していくことができます。その思いを受け止めることが残された人々のなすべきことです。それは、死んだら終わりというのではなく、死から始まることだと思います。

もうすぐ春です。

合掌



「情」は、日本の演歌等でいう「情」とほぼ同じと考えてよいと思われる。しかし、日本語で「情を交わす」という時、多くの場合男女間の性的関係を指すように思うが、韓国文化で言う「情」は親しい人間関係にある状態を形成しているもの指す言葉である。男女間だけに限らず、人と人との近い関係性、繋がりを形成しているものを「情」と呼ぶ。

これに対し、「ウリ」は極めて説明しにくい。韓国・金海市にある仁済大学を訪ね、社会福祉学科の教員と意見交換をしたことがある。その際、「ウリ」「ウリナラ」という韓国語を何回か聞き、通訳をしてくれていた朴貞蘭副教授に尋ねた。「ウリ」は「私たち」、「ウリナラ」は「我が国」ということだと答えが返ってきた。直訳すればどうやら「ウリ」は「私たち」ということを意味すると考えられる。しかし、実はもっと深い意味が隠れている。

「ウリ」は様々なところで用いられる。日本語に訳して説明すると、同じ学校の卒業生、同じ地域の出身者、同じ教会に通う信者であること、同じ会社に努めていること、さらには同じ本貫（祖先が同じ一族）であることなど、すべて「ウリ」の関係である。簡単に言ってしまうとある種の共同体的集団を「ウリ」という。そして「ウリ」の関係性を形成する繋がりが「情」ということになる。「ウリ」の最も強い関係が、家族や親戚である。この「ウリ」の関係は亡くなった人までをも含むことから、親戚関係の中で祭祀が極めて大切なことになる。このため、本家の長男とその嫁には祭祀に関してとても大きな負荷がかかる。このことが理解できると、韓国の歴史ドラマ、ホームドラマを理解することが容易になる。

どうやら私は、朴ソンヘ及びその家族から、「ウリ」の関係にある先生として認知されたらしい。だから空港まで家族の誰かが出迎え、帰りには見送ってくれるのであろう。日韓関係が難しく、多くの人の反日意識が高かった時、釜山を訪れた私たちを心

配して、朴ソンへの家族・親戚が晩御飯に合流したことがある。私たち一行が、反日感情の高ぶった韓国人に巻き込まれて嫌な思いをすることがないようにという配慮である。また、私とほぼ同年輩のソンへの母親からは、私の健康のためといって漢方薬や韓国伝統茶を送っていただいたり、自ら漬けたキムチをいただいたりする。まったくの親戚付き合いである。

キムジャンが世界文化遺産に登録されているが、これには二つの文化的な意味がある。一つは、地域の女性たちが集まって共同作業としてキムチを漬けること、もう一つは出来たキムチを近所の単身高齢者等に配ることである。キムチを一緒に漬けるという行為が、参加した女性たちに対して情の形成を促し、ウリの関係が成立していく。さらに漬けたキムチをおすそ分けすることで、一人暮らしの高齢者に対しあなたは私たちとウリの関係ですよというメッセージを発信する。キムチそのものが世界文化遺産なのではなく、こうしたキムチを通した地域における人びとのつながりが文化遺産なのである。

このことが理解できるとその延長線で、韓国の高齢者施設で見た花札という遊びは、情の交換をするためのものであり、花札を通しておばあさんたちはウリの関係を維持、強化していると考えることができる。そしてまたさらにその先で分かることは、人間同士の距離感、パーソナルスペースは、その地域の文化に大きく影響を受けるということである。

20 年以上前にこんなことがあった。神奈川県内のある町で高齢者福祉のセミナーが開かれた。ゲストとして基調講演をした A 新聞社の論説委員は、町長との対談の中で 4 人部屋の老人ホームを利用したいかと尋ねた。町長は少し考えてから、4 人部屋でよいと答えたのだが、論説委員はその答えに疑問を呈した。多分、論説委員の持っているパーソナルスペースはかなり大きく、そのパーソナルスペースに他者が入ってきうるのは鬱陶しいことから、個室での生活が望ましいと考えていたのであろう。しかし、それもその人の持つ文化的価値である。極めて当たり前のことだが、文化的価値は誰かに強制されるものではない。とすれば、その人、その地域の価値がどのようなものかによって、老人ホームの居室は個室がよいのか、多床室がよいのかの答えは異なってくる。ちなみに中国山西省から筆者の所属する大学の大学院留学生である楊夏麗は、一人で生活するのは寂しくて耐えられないといって、友人と共同生活をしている。

レイニンガー（Madeline M.Leininger）は、『レイニンガー　看護論　文化ケアの多様性と普遍性』（1995 年：医学書院）を著わした。看護における文化的価値観への配慮の必要性を説いたものだが、これは介護福祉にも当てはまる。生活する人々の持つ価値観を抜きにして、特別養護老人ホームの居室は個室がいいのか多床室がいいのかを議論しても意味のないことであると考えるのが合理的であろう。そういう意味では、先の A 新聞社の論説委員は、自らの価値が普遍的な価値であると考え、それを町長に対し押しつけていたということができる。

ここまで論じたうえで、改めて慶州ナザレ園で日本人のおばあさん達が花札をしている意味を考えてみると、面白いことが分かる。私が日本で施設内を拝見した特別養

護老人ホームは４０を上回る。その中には何回も訪問していて、とても親近感のある施設もいくつか含まれている。結果的に、特別養護老人ホームを訪問した回数は、延べ数百回になるであろう。だが、日本の老人ホームで花札をしている場面に出合ったことは一度もない。日本では、少なくとも私が見てきた多くの神奈川県内の施設では、高齢者の日常のアクティビティとして、花札は行われていなかった。

韓国では、慶州ナザレ園以外でも、花札をしているおおばあさん達を見かけた。最初にお会いしたのは、日本の老人福祉センターのような役割の「敬老堂」だった。おばあさん達は、小さめのポジャギ（韓国風パッチワーク）の座布団を囲んで、今では使われることのほとんどない５ウォン、１０ウォンの小銭をかけて花札をしていた。2回目と 3 回目は、介護を提供する老人ホームだった。敬老堂のときと同じように、床の上の座布団を囲んで 3～４人のおばあさん達が花札を楽しんでいた。

おばあさん達がしている花札は、昔、私たちが大学生の頃によくやっていた麻雀のような意味があると考えられる。集まったメンバーでわいわいがやがや言いながら、卓を囲む。麻雀というゲームそのものよりも、わいわいがやがやの方に言意味があったように思う。韓国の高齢者福祉施設のおばあさん達の花札も同じではないだろうか。そしてそれは、文化論的にいえば花札を通してメンバー間で情の交換を行い、ウリの関係を維持、発展させるものだということになる。このように考えると、慶州ナザレ園のおばあさん達は、日本人ではあっても韓国の文化に深く馴染んだ方々であるということができる。

クレオールという言葉があるが、一般的にこれは、宗主国が植民地を支配する際に、宗主国から現地へ移民として移り住んだ人々とその子孫を示す言葉だが、一般化していえば、異なる文化が混ざり合って新しい形で定着することを指して用いることをいう。後者の考え方にしたがえば、日本人のおばあさん達が朝鮮半島で苦労しながら長く暮らしていくなかで、朝鮮半島の文化的活動を日常生活の中に取り入れた例として、慶州ナザレ園でのおばあさん達の花札を位置づけることができるのである。

朴ソンヘや朴貞蘭に助けられながら韓国に 10 年近く通い、韓国の文化について考える中で「情」と「ウリ」から多くのことを教えられた。慶州ナザレ園に暮らす日本人のおおばあさん達からは、「介護」は単に食事や入浴、排泄のケアをすることだけではなく、生活する人の文化的な価値を基盤とした支援でなければならないということに気付かされた。

私たちは、「介護」という時、多くの場合、食事や入浴、排泄のケアを思い浮かべる。しかし、入浴に関していえば、韓国の一般家庭ではバスタブにつかるという生活習慣がなかった。ヨーロッパにしても同じである。一般化して言えば、寒い国々では、湯をためてお風呂に入るということは、一般の庶民の生活習慣にはない。ということは、家庭ではシャワー浴が普通ということになる。シャワーを浴びながら汚れたところを洗い流すということである。となれば、入浴の介護は、その国の入浴に関する文化に強く影響を受ける。

同じことは、集団での生活、社会の在り方の議論につながっていく。

集団における親密性、親密圏のあり方は、国々によって異なるわけだが、日本、韓国、中国の東アジア 3 カ国では、人間関係における親密性がヨーロッパやアメリカに比べて強いのではないかと思われる。ヨーロッパでは、長い時間をかけて社会と個人との関係を構築してきた。その際、ダブルスタンダードに当たるものとして、教会を核としたコミュニティがある。中世後半、社会の概念が形成されていくのに従い、社会と相対する存在として個人の概念が浮かび上がる。欧米における自立した個人という考え方は、その延長にある。しかしながらもう一方でキリスト教会における信仰は、同じ教会の信者の間に信仰上の兄弟姉妹の関係をもたらす。このバランスの上に、欧米では社会と個人の関係が成立してきた。しかし東アジア 3 国の特に中国、韓国では、欧米や日本に比べ社会と個人の関係が成熟してきていない。そのため、自らの属する親密圏、集団への帰属意識が、国家への帰属意識に勝っているのではないかと考えられる。そのような中では、社会的規範が機能しない。身近な親密圏の利益を優先して人々は行動することになる。中国社会の運営の難しさ、韓国社会の課題はここにある。一方で、日本では、もともとは中国、韓国のような親密圏、集団への帰属意識の強かった国だが、次第にそれが揺らいでいき、個人主義だけが肥大化してきている。そして宗教がそれを補完する役割を果たし切れていないという特徴がある。

このような社会の中で暮しているわたし達にとって、「介護福祉」には、社会とわたしたちを繋ぐこと、支援対象者が有している個人と社会の関わりの文化や価値観をベースに支援することが、その役割の本質的な部分として有るということができそうである。

ここまでくると一つの方向性が浮かび上がってくる。「介護福祉」は、単に食事や入浴、排泄の介護を指すものであると考えるのは、適当ではない。いや、食事や入浴、排泄という生活の基本となる部分の介護を基礎としながら、その先の本人の持っている文化や価値観を支える行為なのではないか。その際、基礎的な生活の在り方だけではなく、他者との関係性といった部分まで、援助対象者の持っている文化や価値観に基づき支えることが「介護福祉」の本質的なあり方なのではないだろうか。

このように考えることが適当だとしたら、現在、介護福祉に関して議論されている様々な事柄についての立ち位置は、これまでの議論とは異なったものになる可能性が高い。

例えば EPA（経済連携協定）に伴う介護人材のフィリピンやマレーシアからの受け入れの問題、あるいは技能実習生として海外からの介護職員の受け入れをどう考えるのか。高齢者福祉の多くの現場では、介護福祉の人材確保が難しいことから海外からの人の受け入れに積極的になっているところもあるし、マスコミもそうした論調を後押ししている状況にある。しかし、介護福祉が援助対象者の持っている文化や価値観をベースとした上で支援する専門性であるとするなら、文化や価値観が共有出来ていない外国人に介護を全面的に頼ることは難しいということになる。

また、介護福祉の専門性をどのように考えるのかということに関し、幾つかの方法論が模索されている。一つは、認定介護福祉士と呼ばれるものであり、もう一つは段位制度と呼ばれている。いずれも介護福祉の具体的な技術の向上に専門性の意義を求めた取り組みとして位置付けることが適当であろう。しかしそれは、食事や入浴、排泄の介護の技術を高めるという方向ではないのか。あるいは医療的ケアへの対応は、医療依存度の高い援助対象者が高齢者施設や在宅に増加してきている現状が求めているニーズであっても、介護福祉の専門性とは、本質的にマッチしないと考えたほうがよいのではないか。

以下、章を改めて考えることにする。

（以下、次回へ）

町家合宿 in 京都　10年前の夏の陣
～大学見学とまちなか観光～

山下桂永子

京都の町家に泊まるのは初めてだったので、到着するまで、どんな所だろうと思っていました。町家は広くて、思っていたよりキレいで泊まっている間も居心地が良く、ベリーナイスでした。

1日目のスケジュールを決める時、京都のパンフを見ていて、千手観音像がならんでいる三十三間堂を見て「めっちゃ行ってみたい」とか思っていたら行くことになって、まあラッキーでした。夕食の手巻き寿司はとてもおいしくて、色々な具の組み合わせをためしてみたりして、意外なおいしさを発見したり…。

銭湯は人生で初めてでした。いい湯で銭湯もいいもんだな、とか思ったり。

2日目は北野天満宮へ行って、お参りをしたり店を見てまわったりして。　学問の神様、たのみます。

立命館大学はケタちがいの広さで、多分1人で歩いてたら迷うだろうなとか思いました。うちの高校の何百倍ですか？みたいな感じで。学食はかなり安いねだんで、けっこうボリュームのあるものが食べられるのがうれしいところ。すごくおいしかったー

古着屋の服選びは、目的の服をさがすのが大変で、予算以内におさまる服がなかなか無くて、2件目でみつけました。服選びで疲れはてていた。

京都駅で服チェンジ（？）で集まったときは、自分がけっこう普通の感じの服だったから逆に目立ってるんじゃないかと思いました。不思議な集団だったんだろうな。京都の夜景はとてもきれいでした！

3日目はまず三十三間堂に行っておどろき。ひとつひとつの千手観音像が神々しく、本当に「神様」って感じで、感動でした。こういう美しいものこそ日本の宝だと思いました。

次に清水寺へ行き、胎内めぐり。真っ暗で何も見えなくて、変に不安な気分になった。すずしかったのはちょっとうれしかったかもしれない。

清水寺のすぐよこにある地主神社は、一回行ったことがあって、10 ヵ月後くらいになんかあったんで、また10ヵ月後になにかあるかもしれませんよ？

昼食のオムライスはオリジナルな味がおいしかったです！

今回、京都の色々な所を見ることができて、とてもいい思い出になりました。ほとんどの方が初対面だというのに優しくしてくれて、3日間楽しくすごせました。ありがとうございました！！

これは、約10年ほど前、高校1年生Bくんが参加した第1回町家合宿の感想文である。

☆なぜ町家で合宿？

町家合宿とは、（元）不登校であったり、（元）ひきこもりであったりする 10 代後半から 20 代前半の参加者とともに、京都市内の町家に泊まり、観光や大学見学などを行っているものである。

京都の町家とは、京都独特の格子窓、虫籠窓（むしこまど）や土間、坪庭などの造りを備えた伝統の家屋である。木と土で組まれたその空間は「うなぎの寝床」と呼ばれ、奥に長い。暑さをしのぐ工夫はされているものの、快適さを追求した現代の家屋とは違い、家の中にふすまはあっても扉もなければ鍵もない。テレビ、パソコン、エアコンもない（電気とガスは通っている）。今や常識の「チン」とか「ピッ」など指先だけでは何も動かない世界である。（あ、電子レンジは確か 10 年前はなかったけど今あります）そういったちょっと不便な世界は、現代の都市に生きる人たちにとってもはや「非日常」であるのかもしれない。そんなちょっと非日常の空間の中で、普段家で過ごすことの多い（元）不登校や（元）ひきこもりのみんなで食事を作り、みんなで食べ、風呂に入り、おしゃべりなんかしたりしなかったりして、寝たり寝なかったりするという、いつも家でやっているような日常を体験する、それがいいんじゃないかと思ったわけである。これが思いっきり非日常の海やら山やらだと、感動や気付きもわかりやすいかもしれないが、それだと不登校やひきこもりであったりする人が、参加するのに心理的なハードルが高そうだし、（私もそんなの得意じゃないし）そんな大自然じゃなくても地域や場所の資源を生かして、ちょっとだけ「非日常」を設定して、ちょっとだけ新しいことをしてみれば、なんかふんわりした気付きやじんわりした感動があったりするんじゃないだろうかと。

今回はそんな私の目論見と仕掛けを、実際には町家合宿の参加者がどう感じていたのか、B くんの感想文に沿いながら紹介していきたい。

☆B くんについて

B くんと私の出会いは、B くんが中学校 1 年生のころである。B くんは小学校高学年から不登校になっていて、中学校 1 年生の冬から筆者が勤務する A 市の適応指導教室に通うようになった。その後、中 2、中 3 とほぼ皆勤で適応指導教室に通ってきて、高校は通信制高校（通学は週に 2 回程度）に進学した。

B くんの性格は、とてもまじめでおとなしい。と、当初は思っていた。適応指導教室に通い始めたころは、スタッフや他の子がおしゃべりしているのをニコニコしながら聞いているものの、B くん自身は話をすることはほとんどなく、とても静かに過ごしていて、1 日に 1 回、B くんの声が聞けるか聞けないかぐらいだったと記憶している。B くんはカードゲーム（UNO やトランプ）が得意なのであるが、当初は「パス」と言葉で言わずに、手で机をなでるように場を流す仕草をしていた。しかし徐々に話もできるようになり、おとなしい雰囲気は変わらないが、時折ボソッと冗談を言ってみたり、ひょうきんな動作で、周囲を笑わせるようになっていった。どこか飄々としていて、時折言うシュールな突っ込みは、私にとってはたまらなくおもしろかったし、B くんが他の子の言動に、笑いをこらえて口を

手で押さえる仕草も印象に残っている。時には適応指導教室にゲーム機とカセットをリュックサックに背負って家から持ってきてくれて、みんなで遊んだりもした（B くんは対戦ゲームがめちゃめちゃ強かった）。勉強にも熱心で、適応指導教室ではコツコツとドリルやワークブックに取り組み、特に数学は得意で、それまでの遅れを一気に取り戻すかのように、1 学期間で 1 年分のドリルを仕上げていたこともあったので、数学の苦手な私は感心しきりであった。

町家合宿の参加について、お母さんからの話では、その時期の B くんは、進学したばかりの高校にはほぼ休まずに登校しているようだったが、不安は感じていて、町家合宿後に数年ぶりの運動会が控えており、プレッシャーを感じていた。そんなころに私からの町家合宿の案内を受け取って、B くんはかなり悩んだらしい。それでも B くんが町家合宿に参加した理由は、「大学がみたい」ということだった。

☆町家の生活体験

B くんは、感想文で「町家に行くまではどんな所だろうと思って」いて、町家の生活を「ベリーナイス」と言っている。テレビがなくてもパソコンがなくても、ゲームがなくても夏の猛暑の中でエアコンがなくても「ベリーナイス」なのである。まったくその通りだと私も思う。今でこそ、参加者のほとんどがスマホを持っていたりするわけだが、10 年以上前は、まだ携帯を持つ中高生はほとんどいなかった時代である。それでも思ったよりも快適だった（苦痛ではなかった）のだろう。それには、案内チラシに「クーラーはなく、扇風機でがんばりましょう！」などという、私からの少々猛暑（当時、日中は 35 度ぐらい）への脅しが入っていたせいもあるのかもしれない。B くんが初めての銭湯にも挑戦し、見知らぬ地元の方々と肩を並べて身体を洗い、大きな湯船につかることに気持ちよさを感じてくれたことは、「緊張するだろうなあ、嫌がるかなあ」なんて思っていた私の心配を吹き飛ばしてくれた。町家には普段あるものがいろいろない。普段あるものがないと不安だけれど、実際には、あれば便利だけれど、なくてもそれほど困らなかった、ということかもしれない。

修学旅行も行っていない（ことの多い）町家合宿の参加者にとって、どんな所に泊まるのか、どんな人たちと泊まるのか、何があって、何がないのか、不安だらけでしかないのかもしれない。しかも案内チラシには「宿にはバスタオル、シャンプー、歯ブラシ、寝巻きはありません。その他必要と思うものを持参してください」とあるだけである。そこには、「自分のことは自分で決める」という、町家合宿で一貫して私が参加者に求め続ける援助的かつ過酷な要求が、もう参加する前から始まっているからなのであるが、B くんにとっても町家合宿参加への不安は強いものだったようである。リピーターも多い町家合宿であるが、初回参加者と二回目以降の参加者の荷物量の差は歴然である。旅行の荷物の多さは、不安の強さに比例するのかもしれないと思う今日この頃である。

町家概観と坪庭

☆合宿スケジュールを決めるためにやっていること

町家合宿 1 日目にはやることがいくつかある。まず駅の改札についたら、①今日の夕飯は何にするか決める。町家についたら、②どこの部屋で寝たいか決める。（と言っても好きなところに自分のカバンを置いて来てと指示を出すだけ。リピーターだけが知っている、比較的涼しいところ、蚊の襲来に合いにくいところ、お気に入りの風景など。それぞれ吟味しながら荷物を置いてくるがもめたことはない）その後、お互いの自己紹介として、③名刺を作り交換する。そして、これが一番大事な④明日以降のスケジュール決定である。

町家合宿では、スケジュールを事前に決めていない。どこに行きたいか（京都市内は 1 日バス乗り放題 500 円）、何を食べたいか（一食 500 円程度で）を自分で決めなければ、何も始まらない。そしてスケジュールが決まったら何時に寝ようが起きようが自由である。

1 日目夕方（寝る前まで決めかねている子もいるが）に行う、スケジュール決定では、用意していた京都のガイドブックやパンフレット（最近ではスマホ検索も）などを参考に、自分が行きたい場所を提案してもらい、行程を決めていく。

10 年前は、あまり参加者から積極的な意見が出なかった中、B くんは、パンフレットから見つけた写真を、唯一見知っている私にそっと見せることで、自分の行きたい場所を表明してくれた。最近の町家合宿ではそういった、意見が出にくい状況を踏まえ、「いってみたい、やってみたいことランキング in 京都」という用紙を作って参加者に渡して、みんなの中で意見が言えなくても、紙に自分のやってみたいこと、行って見たいところを第 3 位までを決めてもらい、（行きたいところがなければ白紙でも可）私に提出してもらうという形式を取っている。

そんなわけで B くんは三十三間堂の千手観音の写真を見て、行って見たいと思っていたら「行けてラッキー」なんて書いてくれているわけだが、他の参加者の意見があまり出なかったので、B くんが写真を見せてくれたのは私のほうこそラッキーだったわけである。参

加者の意見が一つも出なかったら、結局スタッフ主導のスタッフが見せたい場所を見せるだけになってしまい、「参加者が自分で決める」という私の目論見は、初の町家合宿の初日から大はずれになってしまっていただろう。

1 日目の夕方、名刺交換の後はスケジュールを決め、その裏側ではスタッフが夕食作り

☆大学見学について

B くんが町家合宿に参加したのは「大学をみたい」という理由があった。どこに行くかは特に希望がなかったようで、それならば、2 日目に北野天満宮（その日は蚤の市が月に 1 度開かれる日）に行く予定を入れて、そこから行きやすい立命館大学に見学しようということになった。というのは建前で。立命館大学は私が当時在学中のもっとも案内しやすい場所である。いかにいきあたりばったりのスケジュールでも、右も左もわからない大学にいきなり中高生連れで忍び込むことには、私自身に不安がありすぎたため、この年は仕込みであったことを 10 年越しに告白させていただく。ボランティアで大学 4 回生の女性が案内をしてくれたこともあり、いろいろな教室や研究室に入った（忍び込んだ）り、図書館に入らせてもらったり、入試広報課でボールペンをもらったりした。

B くんはとても熱心に見学をしたり、ボランティアの方のお話を聞いていて、受け取った大学案内もかなりの分量であったが、嫌がることもなく、家まで持って帰っていた。感想文からは、学食で安く（B くんが食べたのはおかずバイキングにデザートをつけて 500 円以内）おなかいっぱい食べられるということや、教室、大学の敷地の大きさに圧倒されていたようである。頭だけでなく、身体いっぱい使って、大学という場を感じてくれていたのだなあと思う。

大学見学は進学を考えている子にも考えていない子にも、比較的好評な企画である。学食を体験してみたり、教室を見学してみたりする中で、ちょっと未来の自分や、この道に

進んでいたかもしれない自分に触れるような体験になっているのではないだろうか。この年は結局大学はひとつしか見学できなかったのだが、B くんがリピーターとして参加したときの希望により、その後は、できるだけ 2 日目と 3 日目に、ひとつずつ大学を見学できるようにしている。

☆B くんの服チェンジ（古着交換）

古着交換については、また別の機会に詳しく書かせていただこうと思っているが、町家合宿のある意味（裏の）メインイベントである。古着屋で、ペアになった相手の服を制限時間と制限金額内で買うというもので、毎年かなり盛り上がる。B くんは普段はモノトーン系の T シャツにジーパンなどのシンプルなスタイルであったが、そのときは、ボランティア学生の方に、柄がエッフェル塔に大きなリボンというかなり派手目な薄紫の T シャツを選んでもらっていた。それでも自分がむしろ地味で逆に目立ってしまうぐらいに感じていたとは驚きだが、その分、私も含めた周囲が醸し出していた、ど派手で不思議な集団の雰囲気を感じ取っていただければ幸いである。そして、自分が派手かどうかよりも、集団になじんでいるかどうかを気にしていた B くんの繊細さを、私は 10 年前に一ミリも気づいていなかったことには反省である。

☆B くんの行きたかった場所

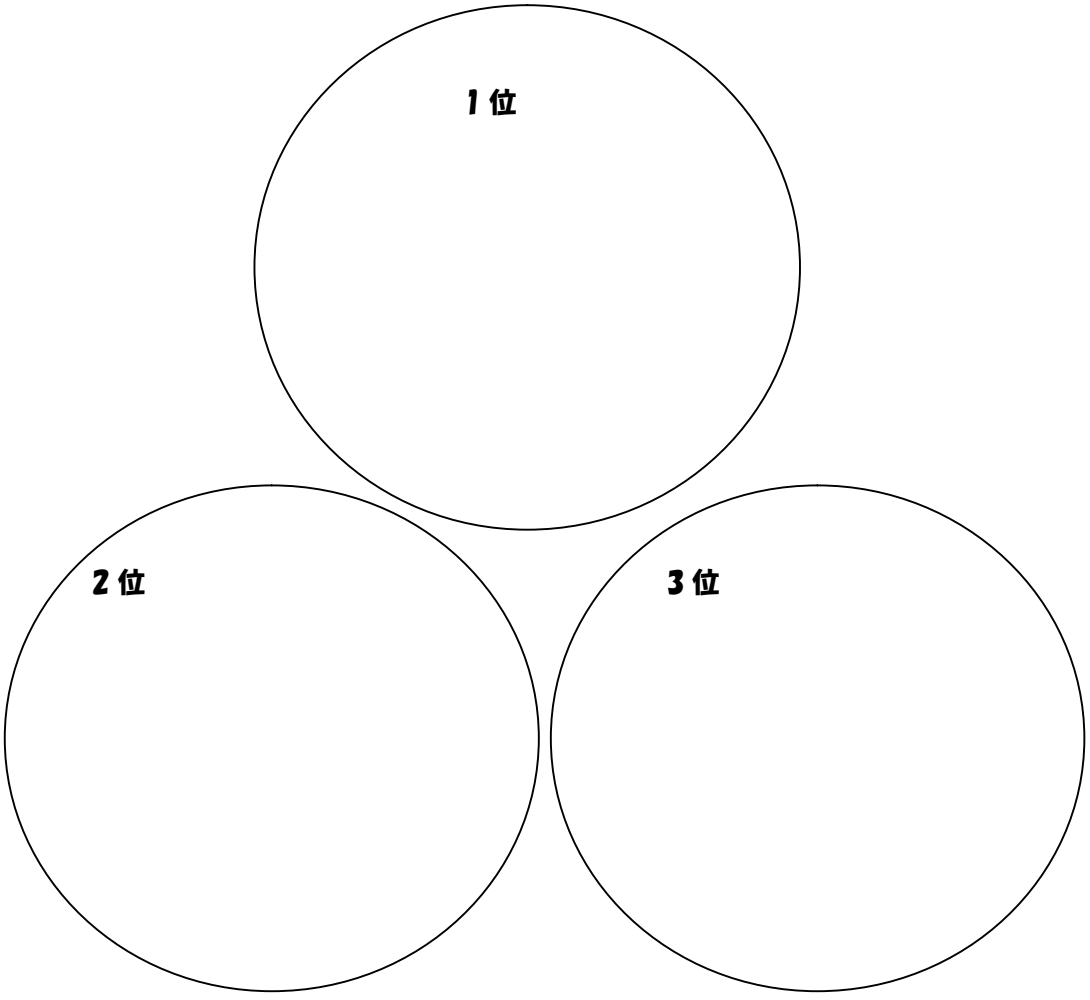
B くんが、そっと写真を指差して、私に「ここにいきたい」と伝えてくれた場所は、三十三間堂である。お堂の中に 1000 体の千手観音が並んでいるのは壮観である。私も初めて行ったときは、絶句したことを覚えている。おしゃべりな私が絶句したのであるから、普段から物静かな B くんはどうなるか、、、？実は残念ながら私にはあまり記憶がない。女子同士で、「あの観音さんは、和田アキ〇に似ている」だの、「こっちは石原〇純に似ている」だので盛り上がっていたことしかあまり覚えていない。B くんの感想文はたった二行ではあるけれど、B くんが本当にびっくりして「神様」って感じて、日本の宝だとまで感じていたということが、じわじわと、でも力強く伝わってきて、記憶にはないけれど、あのときの B くんの姿を想像しながら私もじわじわと感動してしまう。行きたいところに行った B くんの感動は、10 年越しにも私に感動を届けてくれている。

☆B くんの町家合宿と私の町家合宿　10 年前の夏の陣

B くんの感想文には、慣れない場所や人に対してすごく緊張してしまう B くんが、初対面の人たちだらけの中、緊張しながらも楽しんでくれていた様子が書かれている。ちょっとだけ「非日常」の世界で、慣れない人たちの中で、初めてのことをたくさんして、そこで得た参加者のおどろきや感動が、私にも多くのおどろきや感動を与えてくれている。それが 10 年間町家合宿を続けてこられた原動力なのかもしれないと、今回 10 年前を振り返りながらこの文章を書いてみて、しみじみ思う機会となった。

初期の反省を生かして、最近スケジュール決めで使っている用紙

いってみたいやってみたいことランキング in 京都



当時の案内チラシ（当時は町家合宿ではなく「京都にホームステイ」と言っていました）

京都にホームステイ２泊３日

～大学見学と京都まちなか観光～

日時：平成 18 年○月○日（○）～平成○年○月○日（○）
参加費：○○○円（宿泊費、食費、交通費、観光費、保険費用を含みます）
宿泊先：○○○

☆京町家を改修して宿として利用している建物です☆
冬は寒く、夏は暑い京都ですが、町家の中は夏を涼しく過ごす工夫がされています。
というわけでクーラーはなく、扇風機でがんばりましょう！

スケジュール

1 日目
14:00 阪急大宮駅改札集合。徒歩で宿へ移動。
14:20 宿泊地「胡乱座」到着。
14:30 オリエンテーション
15:00 宿チェックイン
15:30 自己紹介と今後の予定を決めるお話。
17:00 夕食の買出しと調理開始
18:30 夕食
20:00 入浴（宿にお風呂はないので徒歩 5 分の銭湯へ。シャワールームはあります。）

2 日目
起床～ みんなで決めたスケジュールで大学見学と京都観光
17:00 夕食の買出しと調理開始
18:30 夕食
20:00 入浴

3 日目
起床～ みんなで決めたスケジュールで大学見学と京都観光
14:00 解散

持ち物：宿にバスタオル、シャンプー、歯ブラシ、寝間着はありません。（小さなタオルは用意してくださっているそうです）
必要と思うものを持参してください。

大学見学と京都観光のプランは

☆立命館大学…北区にある衣笠キャンパス。入り組んだたくさんの建物の名前は全部漢字です。初めて行く人は標識がないとあるけないかも…。

☆同志社大学…京都市中心部のキャンパス内にある 5 つの建物は国の重要文化財にしていされているそうです。

☆金閣寺…立命館大学から徒歩 10 分。自然豊かな場所に金色の建物というコントラストが素敵です。

☆京都御苑…同志社大学目の前。京都御所を包むように広がる国民公園です。

☆北野天満宮…学問の神様をまつる通称「天神さん」。毎月 25 日には「天神市」というのみの市が開かれます。

☆鴨川…京都市内を縦断する鴨川。「かもっとく？」「かもる？」と言って京都の学生は鴨川の水辺を散策したり、座ってぼーっとしたり、本を読んだりするんです。

☆雑貨屋・古着屋・カフェ…学生の町だからか、意外に京都は多いんです。雰囲気も値段も様々。掘り出し物がみつかるかも…。

などいろんなプランを出しあいながら、みんなで話し合って決めます。希望があればどんどん出してくださいね。

申込書

「京都にホームステイ 2 泊 3 日」に申し込みします。

〒　　－

住所 _____

電話番号 _____

緊急連絡先電話番号 _____

参加者氏名 _____ **印**

保護者氏名 _____ **印**

のらねこ対馬に行く

2016 年 12 月 10 日に博多で開催された「第 3 回大学猫シンポジウム」に参加することにした。
せっかく九州へ行くなら、かねてから行きたいと思っていた島がある。
それは「ツシマヤマネコ」が生息する「対馬だ」。

日本に生息する野生の猫は、西表島のイリオモテヤマネコと、対馬のツシマヤマネコのみだ。
普段みかける色とりどりの飼い猫やノラ猫たちは、血統書があろうがなかろうが、皆「イエネコ」という外来種で、法律上は野性動物ではなく「愛護動物」に分類される。

私がツシマヤマネコに初めて関心を持ったのは、
石田卓夫著「猫のエイズ」。
本の冒頭から、1996 年にツシマヤマネコに猫エイズ（FIV）が発見された一連の騒動が記録されている。

本によれば、
“ツシマヤマネコには本来、固有のエイズはなく、対馬内に持ち込まれた飼い猫か、飼育放棄されたノラ猫から感染したのではないか。”

という仮説が浮上し、当時環境省が飼い猫とノラ猫 50 頭の血液検査を実施したところ、11 頭（22%）という非常に高い感染率であったことが分かっている。

猫エイズは、種を全滅させることはないらしいが（宿り主を全滅させてしまえば、ウイルス自身も全滅してしまうから）、生息数が 100 頭程度と言われているツシマヤマネコにとって、

大きな脅威であることに変わりはないだろう。

数年前、この本を読んだ時の関心は、しばらく忘れてしまっていたが、昨年「ツシマヤマネコを守る会」が Facebook ページで、購入するとツシマヤマネコの保全に役立てられる「ツシマヤマネコ米」の記事を投稿していたものを知人がシェアしていたのを見たことがきっかけで、対馬への興味は再燃した。

本の記事から約 20 年。
ヤマネコの島のノラ猫事情が知りたかった。

いざ対馬へ

対馬へは、深夜 0 時発翌日の早朝に対馬到着のフェリーに乗ることにした。シンポジウム後、近所の銭湯でお風呂に入る。昔ながら？の落ち着く銭湯だった。銭湯のおばちゃんに「携帯充電してもいいですか？」と聞くと「そういうボランティアはしてない」とピシャリ。そうですよね・・・。

日の出前の足湯

朝 7 時、対馬着。フェリーを降りる。ひとまず、自転車を組み立てる。お店は開いている気配はないし、どこへ行こうかと案内板を見ると、無料の足湯がある。10 分ほど山道を登ると、途中で第 1 のらねこに出会った。

それからしばらくして、足湯にたどり着いた。が、なんと足湯は空っぽ。柱には『4 月～11 月のみ』との張り紙が…。「えええええええー。冬季にやらないんだー・・・」と声に出してしまった。

第 1 のらねこ発見

足湯はお休みでした

のら猫さんのフミフミちゅーちゅー

足湯が空振りだったので、しばらくうろうろしていると、可愛い白い猫が。第２ノラ猫発見だ。どれくらいの距離感まで許してくれるか不明なので、まずは遠くからパシャリ、少しずつ近づいてみる。ふむふむ。

第２のらねこ発見

すると、近くの茂みから「ニャー」と第３ノラ猫が出てきた。続いて、わらわらと３匹。ここは５匹のネコロニーのようだ。奥には猫ハウスらしき、段ボールと発砲スチロールが。発砲スチロールは軽くて持ち運びが便利だし、温かいから猫ハウスにはもってこいだ。ここの子たちは、誰かにお世話してもらっているんだなと、安心した。耳カットはされていないが、お尻をみてもタマタマがついている気配はない。５頭全てオスとは考えにくいので、不妊去勢手術を受けているのかもしれないな。（※のちに地元の方が不妊手術をしていたことが判明）

第３、第４、第５、第６のらねこ発見　５匹のネコロニーでした

初めはみんな近づいてきてくれたが、餌をもっていないことがバレると私に興味を失い各々自由行動を始める。座ってそれを観察していると、恰幅の良い猫さんが私のおなかでフミフミちゅーちゅーし始めた。これは、子猫が母親のミルクを飲む時に、母猫のおなかを揉

んでミルクを出やすくする時のしぐさだ。大人の猫でも甘える時などにこの行動をする子は少なくない。トレーナーの一部を噛んでちゅーちゅーしながら、フミフミ。たぶん、この子は気づいたのだ、私の下腹部にホッカイロが貼られていることを。しばらく、フミフミちゅーちゅーをして満足したのか、こんどは膝の上（ホッカイロに密着する形）で丸くなって落ち着いた。トレーナーは茶色くなって小さな穴が開いた。でも、人より体温の高い猫が膝の上でまるくなってくれると私も暖をとることができる。

人懐っこいねこさん

ふみふみちゅーちゅー

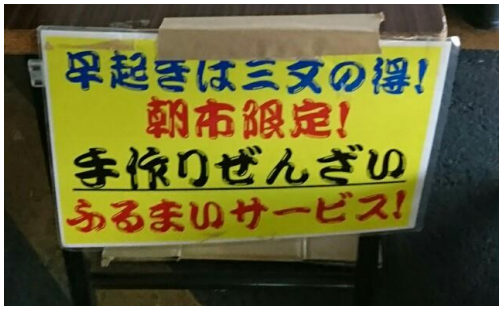
猫お母さん登場

「Win-Win の関係だね」なんて膝でまるくなっている猫さんに話しかけていると、「ブーーンッ」と車がやってきた。すると、猫たちは一斉に車に近寄っていた。絶対に猫おばさん（ノラ猫に餌をあげている女性の総称）だ！と確信。車から、女性が降りてきて、猫たちのごはんを乗せた紙皿を置く。やはり。

「可愛いですね。いつもこの子たちにご飯あげてるんですか？」と聞くと「韓国から来たの？」と聞かれた。寒かったからカタコトの日本語になっていたのか？と思いながら「兵庫から来ました」というと「そうかね。ここは韓国から観光にくる人が多くてね、そこのホテルは特に韓国の方が多いんよ」という。なるほど。「それと今日、埼玉から牧師さんがくるんよ、元々ヤクザで薬物依存症だったのに、神様にであって牧師さんになられた方なの。一緒に講演聞きに行かない？」と。意味が分からない。いきなり、対馬で埼玉の牧師さんの話を聞く？牧師さんというからプロテスタントだろうか？あれこれ疑問は浮かんだが、この寒空の中行く場所も無いしひとまずついていくことにした。以後、この方を「猫お母さん」と呼ぶことにしよう。

スーパーのお汁粉サービス

「朝ごはん食べた？」とスーパーに連れて行ってくれた。なんとお汁粉を無料で配っているらしい。何も買わなくてもいいそうだ。無くなり次第終了。もし、家の近くにあったら食べに行くだろうな。そのついでに買い物もするかも。お汁粉のために早起きもするし、いいシステムだなーと思った。そして、最高においしかった。



ミサと牧師さんのお話

教会はやはりプロテスタントの教会だった。対馬は、創価学会とエホバが多いかなぁ、無宗教の人も多いけどね、と猫お母さん。猫お母さん調べの統計なので、実際のところは分からない。「私、カトリックですけど、いいですか？」と聞くと「そんなのいいよ」と。まぁ来るもの拒まずのスタンスだろうなと思ったので、私も隠さずに伝えておいた。正直に言えば、一瞬だけ、プロテスタントのミサに参加していいものか、とためらった。だが、知りもしないものを拒否するのは、どうなんだろうと思い、参加することにした。神様だってそんなに懐が狭いわけがない。教会の見た目は普通の民家で、１階にミサをする部屋があり、２階に牧師さん夫婦が住んでいるそうだ。お祈りをして、聖書を朗読して、牧師さんのお説教のタイミングで、埼玉から来られたという井上牧師が自分の経験を語った。ヤクザとなって、薬物に依存し、自分の腕をナイフで傷つける毎日の中で、今の奥さんに出会い、聖書をもらい、聖書を通して神様に出会って立ち直ったのだそうだ。信じる力の強さと、見えない力が働いているとしか思えないような巡り合わせの不思議さを改めて感じた。

ミサのあとは、皆が持ち寄ってお昼ご飯を食べるそうだ。ちゃっかり混ぜてもらった。今日は、ゲストがいるのでいつもより豪華だそうだ。なんていいタイミングに来たんだろう。

お昼の間、私は猫の話しかしていないけれど、興味深く聞いてくれた。

「猫は宗教も超える」なんて考えていた。

第７、第８、第９のらねこ発見

第７ノラ猫さん、第８ノラ猫さんに会った。鼻水ずぴずぴ。体調はあまりよくなさそうだ。でも大事にしてくれている人が多いのか、とても人懐っこかった。

少し離れた所では、たばこ屋さんの前に猫さんが。
第９のら(?)ねこ発見だ。

対馬学フォーラム

対馬学フォーラムに参加した。ポスターセッションでは、色んな分野の研究発表や、活動報告がなされていた。動物が係わるものでは、ツシマヤマネコの生態調査について、外来種のスズメ蜂の影響について、イノシシとシカの食害の深刻さや駆除の方法についてなどがあった。ノラ猫については無かった。イノシシは、江戸時代にいちど大規模な駆除を行い、対馬のイノシシは一度絶滅しているそうだ。だが、誰かが持ち込みあっとゆう間に繁殖して、畑を荒らすといった害に困っているらしい。シカは対馬に昔から生息する貴重な種らしいが、一時期取りすぎて数が減少してしまい、狩猟が禁止され、天然記念物に指定された。しかし、その後数が増えすぎて天然

記念物は解除され、今は駆除対象となったそうだ。
私は、イノシシやシカのことは詳しくない。ポスター発表ではいかにイノシシとシカの被害があるかと、どんな駆除方法が功を奏しているかという報告はあったが、イノシシやシカが山でどんな意味を成しているかが分からなかったので、ある発表者に聞いてみた。その解答は「イノシシやシカで迷惑している話は聞いたことがあるが、何か役割りがあるとか、メリットがあるなんて話は聞いたことがない」と言われた。それは、見方があまりにも一面的すぎないだろうかと思った。そりゃ迷惑している人にだけインタビューしていたらそうなるだろう。しかし、人間にとってマイナスでも、環境（生態系）にとってマイナスの影響しか与えていない生き物なんているのだろうか。バランスが崩れているにしろ、何か違う一面があるはずだ。そこを見ずに、駆除の効率化だけ考えるのは危険な気がした。駆除が可哀そうとか、情的な話をしたいのではなく、課題に向かう姿勢として違和感を持った。ただ、全員に質問したわけではないので、もっと問題を立体的に捉えている人もいるかもしれない。

ノラ猫が絡む問題もそうだが、撒き餌をする人や、文句言いの人を“問題がある人”と認識を固定させてしまうと、それらの人を何とかすることに意識が持っていかれてしまい、餌やりさんには、餌をやることは悪いことだと説得を試みたり、苦情言いの方には動物愛護法を説明してみたりと、当初の“猫の苦情をなんとかする”から、取り組みがどんどんズレていってしまう。そしてたいがい、そういう説得はうまくいかず、やれることは全部やったが無理でした。という残念な結論に至ってしまう。

違う、そうじゃない。餌やりさんは、ノラ猫に TNR する際の捕獲隊キーパーソンとして、苦情言いの人は、情報提供者として、別の角度からとらえなおすことができれば、地域の猫問題は、解決に向けて動き出す。

グラホ　カラオケ忘年会

猫お母さんに誘っていただいて、夜はグランドホテルで開催されるカラオケ忘年会に参加した。70 名以上の方が集まって、おいしい食事を食べながらカラオケをする。

詳しく聞くと、各地域でカラオケサークルがあるそうだ。娯楽が少ないので、公民館的なところにカラオケを設置し、地域の人は 200 円～2000 円（200 円の公民館もあれば、しっかりお金を取るところもあるらしい）で利用できるそうだ。

そういった各グループが一堂に会して忘年会をするのが、今回のイベントらしい。主催は、対馬グランドホテル。

時間の関係上歌えるのは抽選で 35 名ほど。参加者は 60～85

歳くらいの方々。
　皆さん自分が当たったら歌う歌に合わせ、ばちっと衣装を決めてきている。結構な盛り上がりを見せ、歌っている人の友人が勝手にステージに上がって踊りだす。なんとも自由で面白い空間だった。結局私が知っている曲は一つもなかった(笑)。

帰りには参加賞として日用品をいただいた。

そして、対馬初日の夜は猫お母さんのお家に泊めてもらうことになった。

座敷童？

対馬２日目。
昨日声をかけてくれた猫お母さんのお家で目覚める。

目覚めたのは朝ではなく深夜だった。
「カッカッカッカ…」
天井の片隅から音が聞こえる。
少しすると、また違う場所の天井から
「カッカッカッカ…」
外からじゃない…。小さな子どもが下駄を履いて走っているような音がする。
『座敷童だ…。猫お母さんは優しい人だった。良い家に現れるっていうし、きっと座敷童だ…』悪いお化けじゃないと理解しつつも、冷や汗をじわっとかいた。
正直言って怖かった。

わんちゃん

朝、再びめざめると、猫お母さんがわんこと一緒に二階から降りてきた。
わんこは、ちょっと皮膚がかゆいらしいが、肥満気味のため上手く掻くことができないようだ。
短い後ろ足を思い切って振り上げ、目的の体をひっ掻く。勢い余った足は床に着地し爪が音を立てる。
すると体を掻くたびに、
「カッカッカッカ…」
ちょっと移動しては
「カッカッカッカ…」
・・・・。

対馬市役所

ヤマネコの島のノラ猫事情を知るために、事前に対馬市役所観光交流商工部文化交流・自然共生課の担当職員さんにアポを取っていた。

忙しい中、時間を取って丁寧に対応してくださった担当者の方に大変感謝しています。
会話を簡単に文字お越ししたら軽く A4 で 10 ページを超えてしまったので、いくつか要所だけピックアップしたいと思う。

対馬の猫問題は、大きく分けて３つある。
・猫の飼い方に関する認識の問題
・増えたノラ猫の苦情（糞尿や鳴き声、特定の餌やリによる密集繁殖）問題
・ツシマヤマネコと生息域が被ることによる、感染症やケガ問題

問題に対する取り組みは大きく分けて２つある。
・飼い猫登録、適正飼育の普及啓発
・ノラ猫不妊化事業

猫の飼い方の特徴　―未だに残る“まびき”―

対馬の猫問題について、どんな感じなのかざっくりとした質問すると、猫の飼育感覚の特徴を説明してくれた。以下、会話風に記述する。

市：「対馬は田舎での猫の飼い方で、いわゆる都会のペットとは違って、家の近くのネズミを捕るために餌をあげているというケースが多い。家の周りに猫が一、二匹いてほしいけれど、あまり増えすぎるとそれはそれで困るので、適当に間引きをしたりとか、生まれすぎたら、１匹だけのこしてあとは海にとか、川にとか、山にとか。」
私：「保健所に持ってくるというよりは、それぞれが処理するんですか？」
市：「そうですね。保健所に連れていくとお金がかかったりしますし、そもそも引き取りも今ほど厳しくはなかったにしても安易な引き取りは元々していなかったので。」
私：「遺棄のような間引きは動愛法的にアウトということは理解されているんでしょうか？」
市：「どうでしょう。分かっているけどという人もいるし、濁す人もいる。基本的な概念としては、あるていど理解しているのではないかとは思う。」

間引きを行う話は、最近でも田舎や島ではよく耳にする。一昔前ではさほど田舎でなくとも、自分で間引きをしていた経験を語るお年寄りも多い。

間引きで思いだすのは、

坂東眞砂子さんの著書
「子猫殺し」を語る――生き物の生と死を幻想から現実へ

双風社 HP より引用
2006 年 8 月 18 日付の日本経済新聞夕刊コラム「プロムナード」に、坂東眞砂子による衝撃的なコラムが掲載された。タイトルは「子猫殺し」。このコラムをめぐり、おもにネット上では、猫好きの人々による坂東バッシングが一斉に起こった。

「熱しやすく冷めやすい」というネットの特徴を体現するように、その後、あれだけ加熱した「子猫殺し」に関する議論は終息。けっきょく、坂東による問題提起は中途半端な状態で、世の中に受け入れられてしまった。

本書は、「子猫殺し」の議論を中途半端な状態で終わらせてはならない、という著者と出版社の意向でつくられた。人も獣も含めて、この世に生を受けた生き物が「生きる」こと、そして「死ぬ」こととは、どういうことか。また、「子猫殺し」バッシングとはいったい何だったのか。このふたつの問題について、2006 年の騒動を検証することによりあきらかにする。
引用終わり http://sofusha.moe-nifty.com/books/2009/02/post-293d.html

ただし、上記の著者は外国で生活しており、ベースとなる法律が違う。
子猫殺しを肯定するつもりは一切ないが、猫の間引き問題だけにとどまらず、命に対する責任の取り方、向き合い方について考えさせられる点が多い本だったと思う。著者の考えが細かく書いてあるので、読んでみて著者は私と全く違う価値観を持っている人ではなく、共感する部分もありながら、決定的に違う考え方の分岐点がいくつかあることも分かり、自分の考えをより深く理解する上で参考になった。とはいえ、読むうえでとても精神力を削られた感覚が残っているのであまり読み返したくはないが…。

話がそれたので、元軸に戻したい。

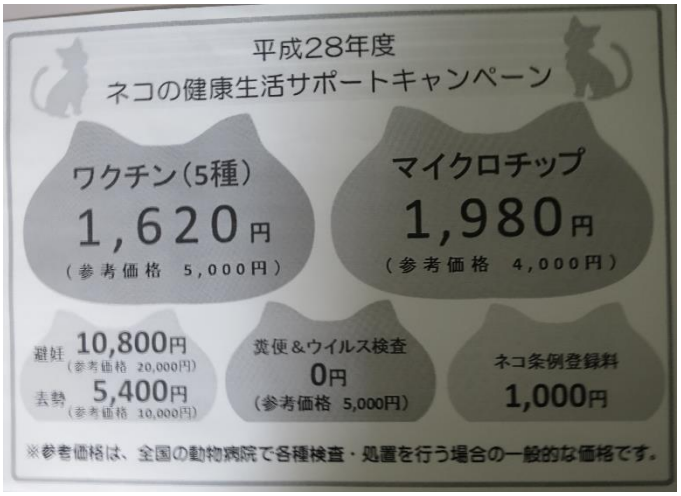
対馬保健所の猫引き取り数

実際保健所に持ち込まれるより、それぞれが間引きをしているケースが多いのか対馬保健所に問い合わせをしてみた。
昨年度の県内の犬猫に関する統計は市の HP に掲載されている。

昨年度のデータを見ると、対馬の猫の引き取り数は 22 頭、うち殺処分 22 頭、壱岐島は引

き取り数 61 頭、うち殺処分 60 頭となっており、確かに対馬より人口が少ない壱岐島よりも対馬の方が引き取り数が少ない。対馬の引き取り数の内訳を問い合わせたところ、成猫の 4 頭飼い主からの引き取りで、子猫 18 頭は飼い主不明だそうだ。

市：「そういったわけで、飼い方も大きな差があったわけです。そういうところで、条例を作って適正飼養といってもなかなか広まりにくい。なので、最初は猫は本来、ペットですから愛玩動物としてちゃんと飼う必要があるんですよという啓発活動と同時に、それをサポートする支援体制もつくりました。初めの数年間は無料サポートキャンペーンを始めました。今のうちなら無料でできるので、飼い猫登録と避妊去勢手術、ワクチン接種をやってみませんか、と伝えて。適正飼養を理解してもらうためにまず価値観の部分を変えていかなければならなかった。



条例を始めてから、22 年から 24 年は、無料キャンペーンで飼い主が動物病院に連れて行ったら、マイクロチップも不妊去勢手術、ワクチンも飼い猫登録も無料で受けられる。25 年から現在は、移行期間ということで半額です。」

ノラ猫に対する取り組み

私：「野良猫の場合は、避妊手術のサポートあるんですか？」

市：「法条上はすべての猫に飼い主がいるはずだが、実質上飼い主のいない猫（不明な猫）がいることは事実なので、そういった猫を「ノラ猫」として扱っていて、市の方で、ノラ猫不妊化事業というものを H25 年からやっている。年間 60 頭程度の予算。

捕獲からリターンまで市と NPO 法人どうぶつたちの病院で実施するが、条件がある。

・苦情や希望があるごとに持ち込まれても、隣の家の周りで生まれてしまっていては、解決しない。なので、個別にやらずに、“地区”単位で実施する。対馬は、海岸線沿いに家があり、180 以上の地区（集落）がある。なので、その地区（集落）単位で行うことにしていて、区長さんはじめ、その地区のなかで、猫の適正飼育の合意がとられている場合にノラ猫の不妊手術を市が担うようにしている。

猫の適正飼育の中には、前述した飼い猫の登録や飼い猫ではない猫に餌を与えないということが含まれている。

・飼い猫はしっかり飼います。(条例に基づいて登録やなるべく室内飼いで不妊化します。)

・ノラ猫には餌をあげません。という 2 点を地区単位で約束してもらう。

地区からのノラ猫問題の苦情を受けて、「地区の方で、猫の適正飼育に取り組むなら、市が不妊化しています」と伝える。すると、「じゃあ皆で（地区で）やろうか（適正飼育を）」というところもあれば、「あー、うちは地区としてのまとまりがない」とか「うちの地区には、ノラ猫への悪質な餌やりおじさんやおばさんがいるから難しい」といった声もある。そういう中で、できるって地区にじゃああありましょう。となる。」

私：「１頭あたりの医療費やケア内容は？」
市：「病院には１頭あたり、雄雌３万円、ワクチン、餌代、入院費用込み。ほかの自治体では、ノラ猫なので、翌日離すところが多いが、不妊去勢してすぐに話すのではなく、予後も見てもらう。メスであれば、１週間、オスであれば数日、予後をきちんと確認してから捕獲地点に離すようにしている。その入院費や餌代も込み。」

私：「一つのコロニーでどれくらい猫がいる？」
市：「一つのコロニーで 30 頭くらいが多い。昨年実施した A 地区も 30 頭くらいで、今年フォローアップに 2 頭実施した。」

コロニーを完全に実施していくやりかたはとても評価できる。例えば 30 頭くらい猫がいる地域 A、地域 B、地域 C と 3 か所あったとして、予算的に今年は 60 頭が限界だからと、それぞれの地域で 20 頭ずつだけ手術をするやり方を取ったとし場合、来年に 10 頭ずつ残りの手術をすれば終わるという展開にはもちろんならず、1 年の間に 10 頭が出産するので来年も各地区手術が必要な猫が 2，30 頭いることになり永遠に解決しなくなってしまう。だからこそ、ABC と 3 地区から相談があったとしても確実にできるところを選抜し、解決事例を年々積み上げていく方法が成果を出しやすいだろう。

私：「苦情はどんな内容がありますか？」
市：「一番多いのは、糞尿被害。あと鳴き声。で、その猫たちに餌をやっている人がいるというのがセットになっている。」
私：「餌やりさんは多い？」
市：「多い。」
私：「市が実施する上では、餌やりをやらないことを約束させるわけですよね？その後はどうなっていますか？私の経験上、餌やりの時間帯を人目につかない深夜帯に変えたり、怒られないように餌をまき散らして逃げるケースとか、餌やりマナーが悪化するだけで、パタリとやめるケースって少ないのではと思うのですが。」
市：「そこは、餌やりは厳禁というところではあるが、色んなケースがあり、苦情が入って、餌やりさんに話に行って、地区でみんなこまっているので、不妊化やりましょうというケースもあれば、逆に餌やりしている人が、増えすぎちゃって困っているケースもある。

餌さんから市の方で不妊化をしていると聞いたと問い合わせてくることもある。そういう場合だと、その人が餌をやり続けたから猫が増えてしまった。その人が悪いんですよということは、伝え理解してもらう。はじめは、可哀そうだと思って餌をあげたことは、愛護的にはいいかもしれないが、それは無責任な餌やりというものだと理解してもらう。ただ、それを理解したうえで、今後は気を付けますという場合は、これから先が守られればよしということで、手術をした猫に関しては、継続して餌を与えることを認めるかわりに、今後新しく手術していない猫がはいってきた場合は速やかに市に連絡してくださいという約束にしている。」

餌やり禁止を大きく打ち出しているところは少し心配になったが、実施の中で手術をした猫への餌やりを限定的に認めるなど柔軟な対応をされているので、安心した。毎日猫をみている餌やりさんが未手術の猫を見つけ次第連絡するシステムができたのならば、フォローアップは最小限の頭数で最大限の効果を得ることができるだろう。
条例などのルールを徹底して守ることに気を奪われてしまうと、“ルールを守らせること”が目的にすり替わってしまい、そもそも“何のためにルールを作ったのか”を見失ってしまう。そして残念なことに、課題解決を課題解決のために作ったルールが阻んでしまうことがある。

私：「課題はありますか？」
市：「これまでに実施した地区は、わりとほかの地区から距離があり、孤立していた。だからその地域で合意形成ができ、手術を完全に実施できれば成果があげやすかった。だが、厳原のように人も多く地区も広いところや、隣接している地区がある所だと、そこで実施しても隣接している地区から流入してしまいやすい。まとめて実施できたらいいが、そうすると範囲がとても広くなってしまう。そのあたりが今後の課題。実際年間の予算は 60 頭が限度。対馬全体のノラ猫は何千頭という推定もあるので、それに対して年間 60 頭では焼け石に水でしかないと数字だけでは見える。だからこそ、60 頭を無駄にしないため、確実にコロニーごとに有効に実施していきたい。啓発もかねて、ノラ猫対策を実施してもらった地域は解決しているらしいという話が広まるように努めている。」

今までのノラ猫不妊化事業実施状況

実施年	実施カ所
25 年	1 か所
26 年	2 か所
27 年	2 か所

今年は、調整中
大体 1 地区 30 頭くらい。

ツシマヤマネコと FIV（猫エイズウイルス）

私：「1996 年にツシマヤマネコから FIV（猫エイズウイルス）が発見されてから、どんな状況ですか？」

市：「これまでに、3 頭 FIV が出て、とどまっている。ここ最近は発祥したヤマネコは確認されていない。ノラ猫は陽性が多い。地区によっては 50～60％くらい FIV と FeV の感染がある。飼い猫はマイクロチップを入れているので、それで識別して対象地区でマイクロチップが入っていない場合は、すべてノラ猫として扱い、避妊去勢手術、マイクロチップ、耳先カットを実施する。」

環境省のヤマネコ保護増殖事業予算から、長崎県に一部委託され、県から市に「猫の適正飼養事業」として 250 万円が降りてきているそうだ。

日本にある大多数の行政窓口の猫を扱う課は、衛生課や市民生活課の中にあり、苦情対策をメインに担っているケースが多い。一方で、対馬の場合は、ヤマネコ保護増殖事業の一環であることは、大きな特徴といえるだろう。

したがって、苦情対策志向に、ノラ猫のへの餌やりのルール化やトイレの設置、地域住民主体の活動をメインとした地域猫活動ではなく、課題解決志向の TNR をメインに実施している背景には、事業の根本的な目的に特徴があった。

自転車のパンク

対馬は縦に 80km ほどもある大きな島なので、車が必須だ。だが、車の運転には自信がないので、自転車を持っていった。市役所に行く道中で、「パン！」と何か鋭利なものを轢いてしまった音がした。案の定、市役所の駐輪場に到着した頃には、後輪がペコペコに。

困ったなと、市役所の方に最寄りの自転車屋さんを教えてもらい訪ねてみたが、すでに廃業していた。

さて、困ったな。一応パンクした時ようにと変えのチューブとミニ空気入れを持ってきている。ただし、自分ひとりで取り換えたことはない。

仕方がないので、ネットで変え方を検索しながらやってみていると、通りすがりのおじさんが

「どうした？」

と声をかけてくれた。事情を説明すると、

「どれどれ」と手伝ってくれた。

おじさんによって、タイヤチューブは簡単にとりはずされた。

次の課題は、空気入れの使い方だった。

なぜか、うまく空気がはいらない。
困っていると、猫お母さんが助っ人を連れてきてくれた。
島のおじさんとお兄さんたちが、空気入れの使いかたを調べて試行錯誤。
何やらパーツを分解して、向きを変える必要があることが判明し、見事自転車のタイヤは完治した。
穴の開いたチューブは一人のお兄さんが捨てとくよと持って行ってくれた。
そういうわけで、危機を脱することができた。

専門家がいないからこそ、皆の守備範囲が広い。これは、ひとつの豊かさだと思った。都会では、分業化、専門家が進み、なんでも専門家に頼ることで、仕事は生まれるのかもしれないが、できないことが増えていく。
困っている人を助けてあげられる事が減っていく。それは、ある意味、豊ではないのかもしれない。そんなことを思った。

動物好き家族のお家と猫好きのお店

初日に泊めてくれた猫お母さんの息子さんご夫婦の家に２日目は泊めてもらえることになった！なんてラッキーな。
晩御飯には、“猫好き”だという友人の方も来てくれ、４人で手作りごはんを楽しむ。
そして、猫好きのオーナーがやっているお店があるからと晩御飯後に飲み屋さんへ連れて行ってくれた。

お店の人によると、対馬でノラ猫の里親探しをする団体、NYAT(にゃっと:N ねこ Y よろしくね A ありがと T 対馬)を最近立ち上げたそうだ。動物病院事情、島の動物観など市役所の方とは違った目線を色々情報が面白くて話込む。

ふと、タイヤがパンクした時の話から、対馬は困っている人に親切な人がなんでこんなに多いのか聞いてみた。
すると、「対馬はあまり娯楽がないから、誰かの小さなハプニングはちょっとしたイベントなの。工夫して助けるのも楽しいし、助けてあげたって話してしばらく楽しめる。だからそんなに恐縮せずに助けてもらえばいいよ。」と。
ものすごく面白くて納得できる説明だった。そういう重たくない感覚で回る親切の循環システムってとっても重要なことなんじゃないかと感じた。

ツシマヤマネコを守る会とヤマネコ米

対馬３日目。
この日は、ツシマヤマネコを守る会の方にアポを取っていた。
ご自宅におじゃまし、ツシマヤマネコの生態や会の活動など教えてもらった。
ツシマヤマネコはイエネコ（普通の猫）に比べて、耳先がまるく、短い脚、太いしっぽが特徴だ。模様はキジトラの猫に似ている。

昔は下半島にも生息していたが、今は上半島に生息域が狭まってしまっている。
警戒心が強く、島の人でさえ、野生のツシマヤマネコを見たことがある人は少ないそうだ。

ツシマヤマネコを守るツシマヤマネコ米の記事を見た時、なぜ、お米を作ることが野生動物を守ることにつながるのか疑問だったが、ツシマヤマネコは里山が盛んな時期に多く生息していたという。それは、田畑に生息するカエルやネズミがヤマネコの主な餌となっていたからだ。
今回は、日程の関係で直接お会いすることができなかったが、
「ツシマヤマネコ米」を作成販売している「佐護ヤマネコ稲作研究会」HP には下記のように書いてある。

ツシマヤマネコは、田んぼの周辺でよくみかけられることから、
「田ねこ」とも呼ばれています。
ヤマネコといっても山奥にいる訳でなく、

実は私たちのすぐ近くで生活しています。
はるか昔からずっと続く人の営みが、
ツシマヤマネコを支えてきました。
ツシマヤマネコは、そんな対馬の
人と自然の調和の象徴なのです。

HP より引用 http://www.yamanekomai.com/

というわけで、田畑が放置され荒れてしまったのも、ツシマヤマネコ現象の一要因ではないかと考え、動物と共生できる伝統的な里山を残そうと活動している。
そのために、佐護ツシマヤマネコ米の栽培基準必須事項として、化学肥料や化学農薬の削減、努力事項として、無農薬栽培や、水田の一部に生きものの避難用の溝を造成することなどを定めている。
何かを保護したい時に、直接捕獲隔離するのではなく保護対象を取り巻く生態系を保護し

ようとする考え方はとても共感する。当たり前のように感じるかもしれないが、結構見失ってしまいがちなことだと思った。次回対馬に行った際はぜひ、研究会にもアポを取ってみたい。

上半島の民宿とお財布

夜、猫お母さんがこの日も泊まっていいと言ってくれたが、上半島もゆっくり見てみたかったので、比田勝という上半島の港の近くに宿をとった。
この選択が後に悲惨な事態を招くことになるとは、この時はまだ知る由もなかった…。

宿について、宿泊費と朝ごはん代を含めた 5000 円を支払って気づいたことがある。
対馬に来て 3 日目の夕方、この宿代を支払うまで私は缶コーヒー130 円しかお金を使っていなかった。
島の人の優しさに驚いた。

第 10 ノラ猫さん発見

民宿の近くのもの置き場で猫さんを発見。近所の方がご飯をあげていた。話を聞くと、元々お年寄りに飼われていた飼い猫だったが、飼い主さんが亡くなってしまったそうだ。それで、餌だけでも近所の人があげているらしい。飼い猫とノラ猫の堺はとても曖昧だ。

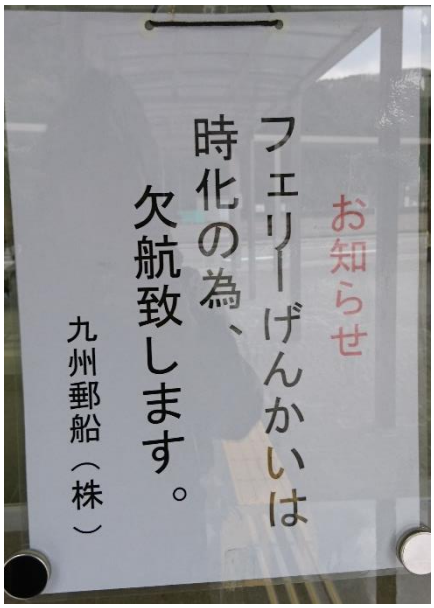
第１０ノラ猫さんはモモちゃんというそうだ

ノラ猫さん発見

対馬 4 日目
15 時のフェリーに乗る予定だったので、朝は宿の周りを散策。
人懐っこいノラ猫さんたちに出会った。
なんだか足の短いねこさんたち。ヤマネコの遺伝子は入っていないと思うけど…。

第 11、第 12、第 13 のらねこ発見

フェリーの欠航



のんびり猫さんたちと遊んでフェリー乗場へ。
あれ、人がいない？と思ったらまさかの張り紙が。

やばい。帰りの新幹線の切符は 21 時 50 分の指定席（5 日以上前に予約すると 7600 円で博多から新大阪まで乗れる格安切符だか、時間の変更は一切できない)。
7600 円が水の泡になるだけじゃなく、もう一泊の宿代もかかるし、明日フェリーがでる保証もないし、なんなら明日の夕方に京都で予定が入っている・・・・。

とりあえず、困難は言語化するに限る。
対馬で出会った人たちに「フェリー欠航になりました…」と LINE。
すると、一人の方が「飛行機ならまだ間に合う！」と。その手があったか！
でも、空港までチャリを飛ばしても 4 時間はかかる、間に合わない…
するとさらに、別の方が「仕事で大きい車で島の半ばまで来ているから、自転車ごと迎えにいってあげる！」と！なんと！！

昨日もお世話になった方に迎えに来ていただき、車だと飛行機の時間までだいぶあるのでついでに観光名所に連れて行ってもらいました。

1500 歳の銀杏

1500 歳のイチョウ！大きい！かっこいい！

近くに猫さん。長毛さん。飼い猫かな？

第１４のら(?)ねこさん発見

対馬名物たい焼き

対馬名物のたい焼き。モチモチなんだけど、周りがカリカリで、白あんと普通あんとある。外カリでなかもちっとしっとり、めちゃくちゃ美味しい！そして形が丸い。

「なぜ丸くしたんですか？」と聞くと
「一般的な形だと、真ん中にあんこを入れるのが難しいし、しっぽに入らなかったりするから。」と。
なるほど、そこは技術を磨かないのか、、今川焼との違いは、、、！？と一瞬思ったが、もし、あんこを真ん中に入れたりしっぽまできれいに入れる技術を習得するのに３年かかるとして、そこんところは形を変えるという発想の転換でカバーし、生地の調合や餡の作り方にそ

の３年をかけることができるとしたら、それは有意義な３年で、他との差をつける 3 年になったのかもしれないなぁ。。。そういう時間の使い方、自分はできているだろうか。
なんて思いながら、お土産にもたい焼きを購入。

ハチの巣箱

山の側面や民家の裏にかわいらしい感じの置物があちらこちらにあった。何なのか聞いてみると、ハチの巣だそうだ。日本ミツバチが生息している対馬ではこうやってはちみつを取っているらしい。
でも最近は外来種のスズメ蜂によって、日本ミツバチはかなりのダメージを受けているらしい・・・。

飛行機へ

車で送ってくれた方と、昨晩泊めてくださった家族に見送られ飛行機に無事乗り込むことができました。
島外在住の場合飛行機代は 17000 円。高い。が、もう一泊したら 7600 円のチケットは紙切れになるし、明日新幹線を取り直したら、新幹線代だけでも 14000 円かかってしまう。

そして、無事飛行に乗り、博多についた。
新幹線まで時間があるなと、ゆっくり珈琲を飲んでいてふと新幹線の切符を見て寒気が走った。
21：50 発だと思い込んでいたその切符には 20：50 発と書かれている。
珈琲片手に博多駅前でのんびりしている今の時刻は 20：55。
そしてそれは最終の新幹線だった。

泊まる所はない。明日の夕方には京都で用事がある。
スマホで夜行バスをしらべ、30 分後に小倉駅から出る最終バスをギリギリセーフで予約。
本当は自転車は積んでもらえないが、頼み込んで積んでもらう。

今回の旅は５万円の予算にしていた。
３日目の夕方の時点では３万円くらいお金が浮いたとふわふわに浮かれていた。

４日目の深夜。予算ピッタリ使い切って（29,600 円の余計な出費）、体力も使い切って、夜行バスに乗り、８時間の道のりで１回も起きることなく、５日目早朝に帰宅することができた。

「猫」というキーワードだけで、縁をつないでいった今回の旅。
とてもとても思い出深く、楽しい旅でした。
また、対馬に行こうと思います。

次回の連載時にはどこで何をしているのか。
楽しみにしてもらえたら嬉しいです♪

おわり

小池英梨子
立命館大学院応用人間科学研究科対人援助額領域 2015 年修了
猫を切り口に、共生と共存社会のリアリティについて研究
公益財団法人どうぶつ基金に 2 年間勤務し、犬猫の殺処分ゼロを目指す取り組みに従事。
現在は、「ねこから目線。」としてフリーで活動中。

先人の知恵から
15

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

諺を使うようにすればするほど、諺に興味が湧く。普段から使う諺だけを紹介しているが、世界中にその国独特の諺がある。先人の知恵からでもいくつか英語で同じ意味でつかわれるものを紹介しているが、言語は違っても、言い伝えられてきたことは時代が変わっても真であると感じている。

今回は、か行から次の８つを挙げてみた。

- 影を畏れ迹を悪む
- 風が吹けば桶屋が儲かる
- 語り下手の聞き上手
- 火中の栗を拾う
- 河童の川流れ
- 勝てば官軍負ければ賊軍

＜影を畏れ迹を悪む＞

自分自身を見失って苦悩を作り上げ、心の休まるときがないことのたとえ。影や足跡が自分の後ろから迫ってくるのを嫌う意から。（荘子）

この諺の元となる故事がある。「ある人が自分の影におびえ、影から逃れようと走ったり、足跡を心配して足を上げたりし続けて結局力尽きて死んでしまった。日陰に入れば影は消え、休めば足跡などつかないが、そこに気づかなかった」という話である。

気にしだすと色々なことが気になり始める。例えば普段ずっとカチカチなっている柱時計の音も、気にしだすと気になって眠れなくなるのも同じである。不安障害の方々はこのような状態にあるのだが、子て中もこういうことは度々起こる。

発達障害の話がテレビやネットで流れれば不安になって、ちょっとした子どもの様子の中でそれに当てはまるものを探し、さらに不安を自らあおる。誘拐事件が報道されれば、外は怖いからと部屋に閉じこもる。或いは、夫のちょっとした行動にも性的虐待を疑って、一切触らせなくなり、夫婦関係が劣悪になったケースもあった。最近では食べ物の問題に過敏な母親も増えていて、

子どもが栄養失調になったこともある。

そんな子育て中の親に、この諺を伝えることがある。心配し過ぎたらきりがないし、不安は不安を呼び、増大していく。それは決して良い結果を招かないことを伝える例としてわかりやすいのではと思う。

＜風が吹けば桶屋が儲かる＞

あることが原因となって、意外な結果が生じたり、思いがけないところに影響があったりすることのたとえ。また、あてにならないことを期待する例えにも言う。

風が吹く→砂埃が立つ→砂が目に入り失明する人が増える→失明した人は三味線を習う→三味線をたくさん作らなければならない→三味線に貼る猫の皮が大量に必要となる→猫が減る→ネズミが増える→ネズミが食べ物を入れてある桶（樽）をかじる→桶屋が儲かる　という因果関係の昔話からできた言葉。

この諺は、同じ失敗を繰り返している親に使うことがある。今までと違うことをやってみようと伝えても、その勇気が湧かない人もいる。人はいつもと同じことについてはその結果が変わらなくても、どんな結果が出るかわからない行動よりも、安心して行動をとれるものだ。

しかし、それでは変化はない。小さくても変化をおこさせるためには、いつもと違うことをする必要がある。そんな時にこの諺を使って説明すると、なんとなくわかってくれる。もちろん、その結果がどうなるか、この諺ほど飛躍した結果になることは少ないと言うことも付け加える。

高校生くらいの子どもにも使える。最初にこの諺を知っているか聞くと、知っている子は少ないので、こういうことだよと説明する。そうすると「風桶かぁ」などという。なるほどそういう言い方をすればよいのかと納得する。そして、何かにつけ、行動を起こすことに消極的な子どもには、このような話もあって、物事の因果関係というのはわからないものだと伝えると、結構面白がってくれる。結果的に笑ってしまい、不安が払しょくされたりする。何が良い結果を招くか本当にわからない。

英語では・・・

It is an ill wind that blows no man good.

（誰にも利益を与えない風は悪い風である）

＜語り下手の聞き上手＞

自分で話すのはあまりうまくないが、人から話を聞き出すのは上手であると言うこと。

人と話すことが苦手な人は多い。メールでのやり取りは嫌がらないが、人と話すときにどのタイミングで、どんな話をしたらよいのかわからないと言う子にも出会う。話し上手な人を羨み、自分もあんな風に話し上手になりたいと言う。しかし、そう簡単に、話し上手になれるものではない。だからと言って最初からあきらめなさいと言う話でもない。

そこで、この諺を出して、話し上手になるための一歩として聞き上手になってみようと伝える。話し手は聞き手がいないとつまらないし盛り上がらない。良い聞き手になって、話し手の話し方、内容、様子をし

っかり観察しようと伝えるのである。そうして、少しずつ真似てみようと。一歩ずつではあるが、上手になっていく様子が見える子もいる。また、一方で聞き上手の自分が好きになる子もいる。話し手だけでも聞き手だけでも世の中は成り立たない。双方が程よく存在することが大切なのだ。

＜火中の栗を拾う＞

そそのかされて、他人の利益のために無理をして危険をおかすこと。又敢えて困難な事柄に身を乗り出すことのたとえ。

この諺は、対人援助職にも使うことがあるし、子育て中の親に使うこともある。

人は出来ることに限りがある。自分の力量を超えてやろうとしても、滅多に上手くいくことはなく、かえって周りに迷惑をかけることにもなりかねない。難しいこと、困難なことにチャレンジする気持ちや勇気は否定すべきではないが、だからと言って何でもかんでも手を出せばけがをする。この諺はそんなことへの戒めになるのではないかと思う。

英語では・・・
Take the chestnuts out of the fire with the cat's paw.（猫の足で火の中の栗をかき出せ）

＜河童の川流れ＞

どんな名人・達人でも、時には失敗する事もあると言うたとえ。泳ぎが達者な河童でも、時には水の勢いに流される意から。

最近、子どもたちでも親であっても、失敗を恐れる風潮が感じられる。失敗を恐れれば、どうしても消極的になるし、過度に慎重になる。石橋を叩いて渡るならともかく、叩き壊して、渡れないと言う。或いは「やっぱり橋は壊れた、渡らなくてよかった」と言う。そんなことでは永遠に向こう岸には渡れない。

河童だって流される、猿も木から落ちる、弘法も筆の誤り、そんな諺を並べて、失敗を恐れないようにと説明してみる。そして、失敗することで学ぶことも一杯あると伝える。或いは、親には、子どもが小さいうちに失敗や挫折を味あわせておくことの大切さを伝える。大人になってから初めて挫折を味わうと、その落ち込みは尋常ではなく立ち直れなくなることもあるが、子どものうちに味わっていると、立ち直れると知っているのでさほど大きな落ち込みにならない。そう伝えるとなるほどと納得されることも多い。

前述のように似たような諺がいくつかあるが、この河童の川流れは好きだ。川に流される河童の様子を想像すると、なんだか気持ちよさそうで楽しそうに感じるからである。ごつごつした岩場を想像したら痛そうだが、何故かそういう場面は想像しないのだ。筆者が伝えた人たちも、痛い場面ではなく、気持ちよさそうなイメージを持ってくれることが多い。

＜勝てば官軍負ければ賊軍＞

道理に合っても合わなくても、戦いに勝ったものが正義となり、負けたものは不正となると言うたとえ。勝敗によって正邪善悪が決まると言う意。略して「勝てば官軍」だけで用いられる事もある。明治維新のと

きに生まれた言葉。

「無理が通れば道理が引っ込む」や「長いものには巻かれろ」という諺もある。多数決の論理も似ている。勝った方の意見が通る。しかし、少数意見や負けた方の考え方は必ず間違っているのだろうか？時には少数決と言うやり方があっても良いのではと思うほど、なんでも多数決で決めているように思う。それが民主主義と言われればそうだが・・・。

子どもたちが親に話すときに「みんな・・・している」と言う言い方をする。そうすると母親は子どもが仲間外れになるのを畏れて、子どもの希望を叶える。ゲームを買うのがそのよい例である。

そして誰もがパソコンやスマホを持つようになった現代では、インターネットの活用が当然で、それが教育の場でも必要だとなり、小学校３年生からプログラミングの授業を入れるなどと言う話も出ている。ソフトが充実してきている現代になぜプログラミングの授業が必要になるのか。何か業者やパソコンが重要だと騒いでいる人間たちの声に引っ張られ過ぎていないだろうかと心配になる。

パソコンの知識やプログラミング技法などについて、筆者は大学に入ってから学んだ。大学生はまだ頭脳も柔らかい。知識の吸収も十分できる。なんでも早くという考え方は安易すぎないか。こうした授業など高校に入ってからでも十分間に合うだろうし、百歩譲って中学校でも良い話ではないかと思う。しかし文科省がそれを推進し、教育現場はそれに従っているうちに、それが当たり前で、必然となってしまう。正に勝てば官軍である。

パソコンやスマホの普及に伴い、ネット情報との戦いが始まっている。何が正しくて何が間違っているのか、最近ではよくわからないことも多い。ネット情報も然りである。それでもネットでいっぱい流れている情報に、人々は大きく影響されている。真偽のほどはどうでもよく、一度流れた情報を信じ込み、訂正することが難しい場合も度々ある。我々支援者としては、正しい情報を入れることに汲々する。

先日もこんな話があった。医師や保健師等が、ある母親に赤ちゃんの育て方についてアドバイスをするのだが入らない。パンフレットや育児書の類を持ってきて見せても入らない。ところがネット情報をスマホで見せたら一気に入った。ネット情報は、多くの人が納得している情報であると勘違いしているようであった。その考え方の修正は言わずもがなで、出来なかったそうだ。

今の時代スマホでこちらに都合の良い情報を探し、それを見せるという手法も支援方法の一つに入れなければならないようだ。正義と悪も時代によって異なるところもある。何が正しいか間違っているかも同様だ。官軍に逆らって賊軍として排除されるより、官軍に従う振で、うまく使うようにしていかねばならないのだろう。

悪い例として、この諺を提示し、自分たちを戒めるようにしている。

英語では・・・
Might is right.（力は正義である）
Successful sin passes for virtue.（罪も成功すると徳として通る）

私の出会った人たち

(1)

関谷啓子

「山脈」というサークルがある。戦後雨後の筍のように立ち上がったサークル運動で現在でも続いている唯一のサークルではないだろうか。わたしは７回目の「加波山集会」が初めての参加で２４歳だった。あれからもう４５年も経ってしまった。
隔年に周り持ちで日本のどこかで「山脈全国集会」が開かれる。
会員もその時集会に参加した人、規則も何もないとても緩い集まりである。決まりはないのだが創設メンバーである白鳥邦夫はいつも「君は君の足元を掘れ。僕は僕の足元を掘る」と言い続け「継続は力だ。自分の日々の生活を記録する事が歴史になる」とも言った。
柔らかくしなやかな話しぶりの底にブレない視点があり、信頼に足る大人だと思った。夏になると「集会時期と会場」が私の夏休暇のベースになっていた。
その仲間の Y さんが「地面の底が抜けたんです」というハンセン病患者の手記を一人芝居にするにあたり言った言葉が忘れられない。
「言葉を聞かずに響きを聴け。言葉の意味を無理に捉えようとしなくても良いからとにかく聴け」と言ったのだ。伝えたいという強い思いがあればそれだけで良いのだとも言った。

公務員として３０数年を過ごしたが、仕事の殆どは「聞くこと」に終始していたと思う。若い頃は「まず聞く」ということに耐えられず「でも･･･」とか「ちょっと待って」などと口を挟む事ばかりだった。

４０代後半から５０代前半を「婦人相談所」という機関で働いた。夫や恋人からの暴力、サラ金の執拗な取立てなどから逃れて、着の身着のままで駆け込んでくる女性たち、気がつくとどこにも行き場がないと深夜ブザーを押す女性たちなど実に様々な事情を抱えた女性が最後に来てくれるのが「婦人相談所」であったと思う。

泣いたり笑ったり悔しさに歯ぎしりしたりしながら、それでも私はそこで出会った人達に多くを教えられ育ててもらった。

Ｓさんは私が相談所で初めて担当した人である。近畿管内の女子刑務所を出てきたばかりだという女性を身近にするのは初めてで「あなたが担当です」と言われて足がすくんだのを今でも覚えている。眼光鋭く骨太な女性であった。そして開口一番「もう一度、刑務所に戻してください。そして一生あそこに居られるようにしてください」と言った。聞くと何回も刑務所を出入りしている間に母はそれを苦に病死。他の家族は関わりあいを恐れて転居し、行方が分からないとの事。

とにかく１時間ほどの初回面接で聞き出せた事はほんの僅かでどうしていけばいいのか見当もつかなかった。

聞けば収監された内容は食パン１袋、石鹸 1 個の万引きである。度重なる回数ゆえに実刑になったのだろうと推測した。打つべきもち札のなかった私はとにかく一緒にいる事から始めた。

何かを聞きだすというのではなく、草むしりしたり散歩したり内職をしたり、、、を続けた。

ある日「どうしていつも一緒にいるのか。仕事はしなくて良いのか」

と聞かれた。「一緒にいるのに理由はない。一緒にいたいからいるので、今はこれが仕事」と答えると信じられないという表情を見せたが困ったように「もう一度刑務所に戻れないか」と聞く。「戻れない。だからここで暮らすことから始めよう。もし一人で暮らして刑務所に入るようなことになったら、出てからまた相談所にいらっしゃい。でも一日でも長くこっちの世界で暮らしてみようか。そのための手伝いをしたい」と言うと黙り込んだ。

半年程相談所にいて、障害者手帳や生活保護など福祉の援助を受けながらの出発ではあったが、良い仕事先と仲間たち、それに情のあつい大家さんに出会い元気に独り暮らしを始めた。

私はといえば、その後、仕事で行き詰まるたびにＳさんのアパートを訪ね、近くの河原を散歩したり、四方山話をしながら彼女に元気をもらった。担当ケースに手ひどく裏切られて落ち込んでも彼女の事を思い出すと、もう一度信じてみようと思えた。彼女が元気で生き生きと働いてくれている事が私を励ました。

かなりハードなケースばかりの相談所での８年間をずっと支えてくれたのはＳさんだ。彼女のその後にも様々なことがあって今日を迎えているが、後日談はまた改めて。

Ｍ市郊外の路上でうずくまっているのを保護したが、一言も喋らないのでなんとかしてほしい･･･と警察から連れてこられた若い女性がいた。聞こえるし、こちらの話は理解しているようだが全く声を発しない。質問には頷くか首を振るかで意思を伝える。

一週間一緒に暮らしていると、障害ではなく彼女自身の強い意思で声を出さないのだと判ってきたが、それ以上どうしようもない。

仕方がないので代わりにこちらが喋った。来る日も来る日も朝から晩まで一方的に話し続けた。嬉しかった事、悔しかった事、今読んでいる本の事、好きな唄い手の事、通勤の

途中でいつも見かける老人と犬の事などなど。
「手仕事は好き?」と尋ねると頷くので二人で小さな刺繍や指ぬきを作ったり編み物をしながら私はまるで消し忘れたラジオのように語りかけ続けた。
　１ヶ月後、彼女の僅かな表情の変化を便りになんとか家族を捜し出し迎えに来てもらったが、それでも彼女は声を出さず一緒に帰るのを嫌がった。「鳥が鳴くような高い声なんですがね。聞かれませんか」と呟く母親に、今度は逆に「もう少し相談所に居させてください。彼女が自分から帰る気持ちになるまで、、」と頼んで帰ってもらった。

　彼女は中国残留孤児だった母親が日本に帰国する時、家族揃って中国からやって来た娘さんだった。その時１０歳だったという。家族中で一番日本語が上手で通訳になるのが夢だったという。工場で働きながら B 大学で学んでいた。北海道の小さな町に住む両親は、家を離れて働いていた娘が１ヶ月以上も部屋を空けていた事を知るはずもなかった。
　身元がわかっても、彼女は相変わらず声を出さなかったが、生まれ故郷や北海道の話をすると笑う事が多くなった。更に１ヶ月経ったある日、だるまストーブの上に置いて焼けたところからフーフー言いながら剥いで食べるというジャガイモの話。極寒の朝光り輝くダイヤモンドダストの話。
　「一度で良いからみてみたいなあ。輝く霧なんて凄いね」とため息をついた時、突然「見においでよ。一緒に見よう」と鳥のような声が聞こえた。
　あっけにとられる私にかまわず堰を切ったように故郷の話を続ける彼女の声を聴いた。黙り続けた時間の長さを思いながら聴いた。何が彼女の封印を解いたのだろうと思いながら聴いた。話してくれることを心底ありがたいと思いながら聴いた。

　私に「聴く」ということを教えてくれた葛忠雲さん あなたに感謝しています。

うたとかたりの対人援助学

第１回「食わず女房」の魅力

鵜野　祐介

はじめまして。立命館大学応用人間科学研究科で「人間形成学特論」という授業を担当しています。専門は教育人間学で、子どもたちが創造し享受し伝承してきた歌や物語や遊びや年中行事など「子ども期の伝承文化」と呼ばれるものが、彼らのパーソナリティの生成や変容にとってどのような意味を持つのかについて研究しています。

このたび、団士郎編集長からのお声がけにより、本誌に寄稿させていただくことになりました。うたうことやかたることが、人と人の関わりの中で果たす役割や機能について、具体的な歌やお話を例に取りながら考えていきたいと思っています。どこまで続けられるか分かりませんが、肩ひじ張らずに綴っていこうと思いますので、気軽にお読みいただけるとうれしいです。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

紙芝居「くわず女房」を演じる

先日（2017 年 2 月 17 日）、大阪府内のとある幼稚園で年長組の約 20 名を対象に、紙芝居を演じる機会を持った。今回選んだのは「くわず女房」（松谷みよ子脚本、長野ヒデ子絵、童心社）。働き者で何も食べない女房がほしいと望むケチな男の所に、「おら、めしくわねで　はたらく」という、「そりゃあいとしげな娘」がやってきて女房になるが、実は頭のてっぺんに大きな口を持つ山姥で、正体を知った男は山姥に食われそうになるが、すんでのところでヨモギと菖蒲の呪力によって助かるという話である。

この年長組さんに紙芝居を演じるのは 1 年振りだったが、私のことを憶えてくれている子もいて、「紙芝居の人や」と声を掛けてくれた。週 1 回、彼らと絵本の読み合いをしている文庫のスタッフによると、今年の年長クラスは特にこわい話への関心が強いとのことで、私にも「こわいお話にしてください」とのご要望があったため、この話を選んだ。

「全然こわくなかった！」

はじめに、「今日はこわいお話をします」

と言うと、子どもたちは「全然平気だよ」とむきになって答えた。そして「食わず女房」と題名をよみ上げると、「知ってる」「よんだことある」「おっきな口の化け物の話なんだよ」などとてんでに声を挙げた。「こわくなったら、隣のお友だちに体をギュッとくっつけたら平気だからね」と言うと、さっそく隣り同士、体を寄せ合う子もいた。

男がいなくなったのを見計らって女が大釜に飯を炊き、お握りをいっぱい作る場面あたりから、しだいに空気が張りつめてくる。固唾を呑んで紙芝居の画面を見つめる子どもたちの表情は真剣そのものだ。

そして、「なんと　たまげた。かみ　ふりほどくと、そこに　でっかい　くちが　ぱくりと　あらわれた」――この画面になると、ホォーッという、どよめきともため息ともつかない声が漏れた。「よめこは　りょうてに、にぎりめしを　もって、あいた　くちの　なかへ　ぽいぽい、ほうりこんでいく。おてだま　とるみていに　してよ。『にぎりめしゃ　ぺーろぺろ　もひとつ　ぺーろぺろ』……」。ギュッと肩を寄せ合って聞き入る子どもたちの表情をうかがいながら、たたみかけるように一気呵成に語る。

「おしまい」、そう言った途端、子どもたちは一斉に叫んだ。「全然こわくなかった！」「えっ、ホントにこわくなかった？　大丈夫だった？」「全然、平気だったよ」「ああ、そうか。もうすぐ小学生だからね。みんな大きくなったね」、子どもたちは満足そうに肯く。こわい話を最後まで聞き遂げられた達成感に浸っているようだった。

語り手にとっての快感

後日、幼稚園でのこのエピソードを、長年子どもたちに昔語りをしている女性Mさんにしたら、彼女もやはり、こわい話を子どもたちにする時に快感を覚えると口にされた。愉快な話を聞く時と、子どもたちの表情が全然違う。もちろん楽しそうに聞いてくれるのを見るのも嬉しい。けれどこわい話を聞いている時の、子どもたちの真剣なまなざしを見ていると、「よおし、もっとこわがらせてやろうって思うのよねえ」、Mさんはそうおっしゃった。

そう言えば、先年（2015 年）亡くなられた元同僚で臨床心理学者の杉岡津岐子さんが、ご自身のふたごの息子さんたちと、絵本版の「食わず女房」をよく読んだと話しておられた。女房の長い髪がほどけて大きな口がパカッと開いて見える場面になると、杉岡さんはこう言ったそうだ。「実はね、お母さんの頭にもあるのよ」。そして、長い髪をザッと垂らして頭をかがめると、息子さんたちは大喜びしたという。それからは毎回この絵本を読むたびに、この「やまんばごっこ」をせがんだそうだ。

こうして、（もっとこわがりたい、そしてそのこわさを乗り越える達成感を味わいたい）と思う聞き手の子どもたちと、（こわがって喜ぶ子どもたちの顔が見たい）と思う

語り手や演じ手、双方の気持が相まって、「食わず女房」のようなこわい話は長い間語り継がれてきたのだろう。

語りの場における信頼感

それでは無条件に、子どもたちにこわい話をして構わないのだろうか。以前、国際アンデルセン賞受賞作家の上橋菜穂子さんが講演の中で、幼い頃お祖母ちゃんからこわい話をいっぱい聞かせてもらったが、お祖母ちゃんの膝の上だったから安心して聞いていられたと話しておられた。

同じ話でも、見ず知らずの人から聞くのと、家族や先生や顔なじみの人から聞くのとでは、話の受けとめ方が全然違ってくる。主人公の身の危険を我が事のように受けとめて、物語の世界を冒険する子どもたちには、安心できる現実世界とどこかでつながっていることが必要だ。それには信頼感を寄せる語り手や演じ手の表情を見られることや、膝や手のぬくもりを感じられることが重要になってくる。

それからまた、その話を一緒に聞く友だちやきょうだいの肌の温もりや息づかいを感じられるかどうかも大きい。いわば、そうした信頼できる存在とつないだ命綱があればこそ、こわさに満ち溢れた物語の世界を冒険することができるのだ。そして最後にその冒険を無事やり遂げて、命綱をたよりに現実世界へと帰還することができるのだろう。

だから、幼い子どもにこわい話を語ったり読み合ったりする時には、ぜひ膝の上に乗せたり体をくっつけたり手を握ったりしてあげてほしい。それからお話が終わった後は、じっくり感想を聞いたり、体をぎゅっと抱きしめたりして、安心できる現実世界に戻ったことを子どもたちに実感させてあげてほしい。語りの場における信頼感の有無はとても大きな意味を持っているように思う。

「食わず女房」が語り継がれてきた理由

この話が長い間語り継がれてきた理由について、さらに考えてみたい。まず歴史的な背景として、近世から近代にかけての農村社会における貧困や飢饉による食糧不足の問題や、家庭における女性、特に嫁の立場の弱さが挙げられる。そこから生まれた、少食で働き者であることを理想とする嫁のイメージに対する異議申し立てとして、女性たちによって好んで語り継がれてきたと見ることもできる。

一方、深層心理学的に解釈すれば、美しい女性には毒があるという「女の魔性」に対する男性の恐怖心や警戒心、あるいはユング心理学の元型理論でいう「太母神＝グレートマザー」に呑み込まれ、死の世界へと引きずり込まれることへの根源的な不安感を読みとることも可能だろう。

洋の東西を問わず、＜食べる－食べられる＞モチーフを含む昔話や伝説は殊の外多い。それはおそらく、人類がたどってきた食をめぐる過酷な歴史の記憶をとどめておこうとする意志と、他のいのちをいけにえとして自分のいのちがあることに対する罪悪感や感謝の念が込められているからに違いない。そして、人びとのこうした想いは、こわさの感覚と結びつくことによって、よりしっかりと心に刻みこまれることになったのではないか。そんな気がする。

あぁ、結婚！

黒田長宏

発端

私は2017年2月19日現在で49歳。6月で50歳になります。結婚は一昨年の11月、47歳の時でした。ところが、妻が婚姻届けを出した後すぐの小旅行から帰って3日後の朝、実家に帰ってしまいました。

前日の晩、なにやら言い出している様子があったのですが翌朝、私が勤めに出かける前、「ありがとう」と握手をしたら、「お世話になりました」と言うので嫌な予感も少ししたのですが、戻りませんでした。

一旦実家に戻って出直す事になっていたのですが、その後メールで調子が悪いと書いて来て、心配だから実家に向かうとメールすると、「来るな」と書いて来て、警察に飛び込んでしまいました。私が実家に行って暴力を振るうと思ってしまったのでした。

その後、妻の実家近くのファミレスで、世話人と3人で話し合いを持ちましたが、途中で怒りだして、離婚調停、離婚裁判と、どんどん進ませて行ってしまいました。私はカウンセリングなどを利用して、妻の気持ちを緩和したかったのですが、妻の司法手続きのほうが早くて、調停は2回ほどで終えてしまい、裁判になりました。

1審は離婚理由なしで私の主張が通ったのですが、すぐ妻は控訴しました。ネット情報によると75%は1審通りだろうと書かれていて、私もまさか覆されないだろうと思っていたら、逆転判決を受けてしまいました。

しつこすぎると思われるかも知れませんが、私としては離婚はしないと伝え続けてきたので、最高裁に上告しました。0．3%ほど再逆転の可能性があるように書いてあるサイトがありました。担当の弁護士さんが昨日、届けを出してくれた所です。

婚活

やがては元妻と言うべきなのか、妻と出会ったのは、いばらき出会いサポートセンターというところです。茨城県と社団法人茨城県労働者福祉協議会が共同設立したのが平成18年との事ですが、私は今から23年前には既に婚活をそこでしていました。それが創世記に近い時期だったのか、随分熱心な女性の担当者がいました。

婚活のパイオニアに近い状況だったのかも知れません。婚活というより、グループ交際のようで、婚活という言葉もその後だったかも知れません。茨城県は婚活を先駆けて行った県だと言っても良いのかも知れません。

まだ25，6歳だったか、当時は言葉としては無かったかも知れない「婚活」を始めました。その頃は余裕があったというよりも、危機感は無かったです。その後、仕事でいろいろあり転々と職業を変えたりする間は、婚活を疎かにしてしまい、10年近くブランクにしてしまいました。これが人生の作戦ミスで、仕事よりも配偶者選びを重視すべきだっと、もう戻らない時の流れを思います。 婚活だけではなくて、20代から30代はじめの頃には、親戚がいく

つか見合い話も持ってきてくれました。やはり、ライフサイクルに適齢期というのはあるのです。

やがてなるであろう「元」妻の小旅行先と、25歳頃に人生で最初に見合いした人とのデート場所に選んだのが、同じ千葉県銚子市というのも調子が悪いお話ですが、最初に見合いした人には、デートが終わる頃には、「私、帰る」と途中で歩いて帰られてしまいました。やがてなるであろう「元」妻にも、ひどい目に遭わされましたが、婚姻まではしてくれたのです・・・。

最初に茨城出会いサポートセンター経由で会ってくれた人も、30分の面会途中で、文句をいい出して、席を立ってしまいました。私のどこがいけないか教えてくれと尋ねたら、そう尋ねるところよと回答を受けました。その女性は私の写真を撮影した頃と比べて実物が痩せていて違うと言っていました。痩せても太ってもダメなんでしょうか。こういう事があるから、批判調になっても仕方がないと思うのですが。男性ばかり悪いということは経験上ありません。婚活中もいろいろな女性がいます。それは職場でも同じですが。

茨城出会いサポートセンターでも、何人、何十人に、応募しても返事がきません。却下されてしまうわけです。ですから、好みの容姿や趣味などの人にどんどん応募してもどんどん却下されるので、容姿も趣味もかなりいいなと言う人で無い人も、目を細めてみながら応募しますが、それでもダメです。茨城出会いサポートセンターの他にも当時はかなり広告を出している結婚相談所にも加入しました。数十万単位の入会金だったでしょうか。そこでもダメです。一人も会ってもらえませんでした。会ってくれたのは、茨城出会いサポートセンターからは数人いてくれましたが、幾つかやったネットで検索するような大手の企業からは一人だけでした。

こうして書いていく間に思い出して行くのが不思議ですが、茨城出会いサポートセンターとまた違う所だったのか、少し似たような婚活の組織があったのですが、そこでは年収が一定以上でないと無理だから受付ないとけんもほろろに言われたりしました。このように婚活というのは、一定の
年収などの立場で区別されてしまったりします。年齢だって、恋愛ならば、40歳の人と25歳の人が交際している事例も幾つもあるのに、マッチングの段階から、男性は40代で女性は30代とか決められてしまいます。はみ出した所に可能性があったかも知れない可能性を区分して消してしまうところがあるのです。

社会的にも結婚難が言われ始め、相手を選り好みし過ぎるから見つからないのだと言われてもいますが、まさにその通りもあると思いますが、誰でも良いというわけでもなく、男性なら色気を感じる女性のほうがスムースに感じる面は実際にあります。ただそこら辺の容姿を超えたところに、憐憫のような、慈しみのような気持ちを感じる面が大人なのかも知れません。社会が大人で無くなったのかも知れません。やがての元妻は、「ストライク？」と聞いてきましたが言えませんでした。でも、最高裁まで離婚したくないと言い張れるような事が出来たのですから。

30代で既に難しかった婚活をまた50歳でやらねばならないかと思うと、相当根性があるか、平均的事象を気にしないかしかありませ

ん。今日は「新婚さんいらっしゃい」で、幼馴染だったのが高校で離れて、どちらも離婚経験者で、同窓会で35年ぶりに再会して、再婚したという51歳の夫婦が出ていました。こういう再婚の例もあるようですが、私はまだ実子を諦めておらず、同級生だと難しいかなという思いです。

農家生まれの長男、後継ぎというのもあります。さらに、かなり後になって知りましたが、男女の双子で授かったのに、私が大きく育ってしまって姉か妹かわかりませんが、死産だった事や、3つ違いの妹が小学4年頃だったか、風邪が心臓にまわってしまい急死してしまったりと、兄弟姉妹からして悲惨なスタートをしました。それなのに後継ぎを出せないというのはプレッシャーになるのに、3日で出ていった妻を粘って2年以上費やして、さらに最高裁まで延長してしまうという、普通ではありません。

多様性を尊重すると言いながら、こういう場合は早くやめろと言われるのが世の中です。本当は、調停から裁判に至るまで、離婚するほうが優位になるような仕組みになってしまっているような所を一番書きたい気分ですが、自己紹介も兼ねて、私の婚活周辺について書いてみました。

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

今号の編集では、議論すべきことがあった。マガジンへの連載は基本的に、学会員である方の希望によっている。学術誌ではないので、査読したり、内容について編集部が口出ししたりすることは原則的にない。自由に書いてもらえたらと思っている。 しかしそのことと、何でもそのまま掲載しますというのとは当然違う。もしそうなら編集者は要らない。

執筆者の見解の多様性は尊重したい。対人援助を限られた立場や角度からしか見ない、扱わないのは世界を狭く想定してしまうことになると思う。対人援助には、援助する側もあれば、される側、その狭間にいる側が存在して当然だ。それぞれが抱える考え方も経験も様々だろう。

だから客観的事実の記述という基本スタンス以外にも、体験という主観に基づく記述も、マガジン執筆の範疇に含まれていて良いと思う。

基本のところで大切にしたいのは、記述されたものが読者に伝わること、著者の見解が読者に届く（内容の賛同ではなく、別の見解として了解可能）ように書かれていることである。

七年目28号を終えようとする継続発行のマガジンにおいて、結果的にではあったが、ここまでの執筆者の九割を編集長自身が個人的に存じ上げていた。編集員二名が知っている人を併せると100%になる。そういう方針だったわけではなく、小さな学会であるから、ある意味必然だった。

だからといって、知り合い同士で作っているマガジンの意識はさらさらなく、執筆者が行っている仕事や実践について、編集者が関心を持ち、承知していることを表していた。

だがそれは一方で、やはり閉ざしているところも含まれていることを否定できない。今回、縁あって、全く未知の会員からの投稿を掲載することになった。掲載されているものがすべてなので、経過について特に書かねばならない事はない。

ただ、連載決定までには、内容ではなく、記述の形式について、編集者の意見を色々と申し上げ、やりとりすることになった。

対人援助学マガジンは、個人のホームページやブログ、Twitter、Facebookとは異なる。ウェブ版ではあるが、学会ニュースレター位置付けの「連載専門誌」という学会員が執筆する定期刊行物である。読者は学会員のみに制限していないことなど、当初からデザインしてきたことを共有するために、編集者として再考するのに良い機会になった。

編集会議でも議論したり、編集長としてもいろいろ思うことが多かった。読者の方々にも、考えていただく良い機会ではないかと思う。

こういう刊行物は生き物である。常に変化をしながら発展し、時には形を変えていく。マガジン（雑誌）なのでそれほど四角四面に考えていただく必要はなく、知的好奇心の展開として、いろいろ思うところを投げ掛けていただけるとありがたい。

編集員（チバ　アキオ）

★「農地解放のおかげで地主様のいうことならどんなことでもご無理ごもっともと承わらなくては次の年から小作ができぬということもなくなった。地主様と同じような立派な婚礼も出せるようになった。農地解放によって農村は確かに『民主化』された。だがその一方、農地解放は農村に新しい困乱を巻き起こした。（中略）大地主から水飲み百姓までに至るまでの社会的、経済的序列があった。（中略）その序列が急に変わった、しかも外部の力によって変えられたのである。（中略）耕地の大小よりも何俵供出できるか、供出能力が富の尺度である。（中略）農地解放によって、ともかく富の公平化に進んだ農村は、その後十年再び大農と零細農の差が大きくなる様相を見せている」

★農地解放はGHQの農地改革によって戦後行われた。上記はその10年後の秋田県の小友村（現大曲市）の一年の風俗を収めた『村の一年　―秋田―1956』（岩波写真文庫）の記述である。封建的な古い農村の解放が日本の過去のよくない状況から脱却できると、ある立場から判断され、農地改革は実施された。既存の社会構造への変化を求めたのである。そ

れまでも、この封建的な構造に対して、それが行き過ぎることがないように選挙活動や社会運動などが行われてきた。そんな動きとも『対人援助学マガジン』を重ねている。

★学歴、脳のスペック、経済力、人生のめぐりあわせ等様々な条件が整った人だけが学会やこのような発信の機会に恵まれ続ける。そんな社会構造が維持されることは、また以前の農村と同じような序列や役割の固定化を引き起こす。条件を問いすぎることなく、入会、活動、執筆ができるこの対人援助学会、特に『対人援助学マガジン』は時代の社会構造へのチャレンジともいえる。

★一介の福祉施設の職員が、こうして多くの人が見たり読んだりできるところで発信し続けること自体が、よく考えるとそれまで社会にそうあったことではない。障害者福祉の領域に殺傷事件や虐待事件でしか触れることがないことはあまりにも偏っている。日常があることを見てほしい。非日常を伝えるのがニュースであるならば、日常を伝えるのも『対人援助学マガジン』の機能の一つである。

編集員（オオタニ　タカシ）

お笑い芸人キングコングの西野氏が著者の絵本「えんとつ町のプペル」が、全編無料で Web に公開されたことが話題になった。西野氏が述べていた「お金は幸せになるための道具なのに、それに制約されることの矛盾」と「それから独立するための無料公開」には多いに共感するところがあった。

一方で、本人がこう述べていても、「ほかの絵本作家の迷惑」「却って本が売れる、うまい販売戦略」などの声が飛び交い、世の中の認識とか度量とかが乏しくなってきていることがひしひしと感じられて気がめいるような思いにもなった。

同じ時期に、防衛省の研究費が増額され、科学研究の意義と研究費の枯渇という現実の間で、葛藤する研究者の姿もみた。苦肉の策、と言いながら、研究費に応募した研究者、その判断は本当に正しいのだろうか。クラウドファンディングでの資金調達から、じわじわと広がりを見せ、従来の映画とは違う形でヒット作となり話題になった「この世界の片隅に」。

今の社会にとって本当に必要なことであるのならば、「お金」に制約されなくてもきっと何か成す術はある。小さくとも、そんなことを１つでも重ねていくことができればと思う。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８

ランブラス二条御幸町４０２　仕事場Ｄ・Ａ・Ｎ

対人援助学マガジン

通巻28号

第7巻　第四号

２０１７年０３月１５日発行

http://humanservices.jp/

第28号は2017年06月15日
発刊の予定です。
原稿締切2017年5月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今日記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数（ずっと・・・というのもありです。多くの方達が連載 7 年目を迎えています）を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない、対人援助領域からの積極的参加を求めます。

対人援助学会事務局

〒603-5877　京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021　大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

意図があって描くこともももちろんある。でも、いつもいつもそんな思いで描いているわけでもない。何だかチョット描いてみたかったとか、こういう色合いにしたら、良いかなとおもったので･･･なんて仕上げもある。

三月中旬に開催する「ぼむ」マンガ展の制作と、マガジンの編集作業が同時並行だった。だから描くこと、作品に仕上げることについて、あれこれ考えた。普段、あまりそんなことを考えない質なので良い機会だった。

そして、五〇年近くもヒトコマ漫画を描いてきて、今頃になって、結局ヒトコママンガには力がなかったから寂れてしまったのかもしれないと思うようになった。

ここで、自分が未熟なだけかもしれないとか、私が下手なことを棚に上げて書くのも僭越だが・・・等と、行儀の良さそうなことは書かない。そういう言い方で現実を見つめないまま、亡んでゆくものが、この世界には沢山ある気がする。

ヒトコママンガを自分が描いていて時に思うのは、それほど面白いわけではないなぁということだ。何だか、おきまりの技を繰り返しているだけのような気がして仕方がない。

もう十五年以上、「木陰の物語」の新作を毎月一本仕上げなければならないのだが、そっちは相変わらず面白いのである。

だからといって、いつもいつも傑作が出来るはずもなく、打席に向かって、よし！と意気込むのだが、打率はせいぜいプロ野球選手越えの五割くらいだろうか。でも、「今度こそ！」と思える度合いは、結構なものなのだ。

今回のマンガ展では、アイデアではなく、描いた絵への愛着を基準にパネル制作をした。小サイズの原画を作って、それをＢ全版に制作して貰ったのだが、仕上がりは未だ知らない。搬入当日、ギャラリーに届く。それを考えると、チョットうきうきするのは、アイデアではなく、絵がどんな風に出来上がっているかなぁというところ。

ちょうど、写真を現像に出していた頃の楽しみに近い感覚だ。

マガジンの表紙のイラストを選ぶときは、意味、意図の表示されたものを選ぶ場合と、この絵が好きだからこれに！と思う時の両者がある。そのバランスは微妙だ。7 年も繰り返していると、なにか現れている事があるかもしれないが、私には分からない。

2017/03/06　団士郎